

第五十八回

魏相 秦伯を説得し景公に秦医を迎え
養叔 神技で王の恨みの魏綺に報復

晋景公はぼさぼさ髪の大鬼に銅錘で打たれて口から鮮血を吐きその場に悶絶した。内侍が助け起こし寢室に寝かせ、しばらくたつてやっと気がついた。群臣は宴を楽しめず散会した。

景公はとうとう病に罹り床を離れる事ができなくなった。

「桑門大巫は昼間鬼を見る事ができるというから彼を呼んでくれな
いか」

桑門大巫は晋侯に呼び出され寢室に入るとすぐ叫んだ。

「鬼がいます」

「そなたが見ているのはどんな鬼だ」

「ぼさぼさに髪を振り乱した一丈余りもある大鬼で、手で胸を打ち大
変怒っている様子です」

「それはわしが見たのと同じ鬼だ。わしがその子孫を殺したと言うの
だが、この鬼は何と言う鬼かね」

「前世で功があった臣で、その子孫が非常に惨めな事になった者です」

「それは趙氏の祖先じやないのか」

景公は驚いて言った。屠岸賈が傍にいて景公に、

「その祈禱師は趙盾の食客です。だから言いがかりをつけて趙氏が
冤罪だと言っているのです。彼の言う事などお信じになつてはなりませ
ん」

と言うと、景公はしばらく黙っていたが更に質問した。

「お祓いで鬼を退治できようか」

「鬼は非常に怒っています。お祓いは無益です」

「しかし、わしの寿命はどうなんだ」

「死を恐れずに直言いたします。恐れながら殿のご病氣は、新麦をお
召し上がりになることは、ございますまい」

「麦が熟するのは今月中じやないか。殿はご病氣ではあるがまだお元氣
でいらつしやる。どうしてそんな事がいえるのだ。もし殿が新麦をお上
がりになつたらそちは死罪だぞ」

屠岸賈は景公の指示を待たず叱つて追い出した。大巫が出て行つた後
景公の病状は益々悪化し医師に見立てさせたが見たことのない病氣で薬
の処方がわからない。

大夫魏綺の子魏相がみんなに言つた。

「秦の高和、高緩という二人の医師は、医術を扁鵲から伝授され陰
陽の理論まで究めていて内科外科いずれをも善くし秦国の太医であると
聞きますが、殿のご病氣を治すには彼らに診てもらうのが一番でしょう。
お願いしてみたら如何でしょう」

「仇敵の秦が我が君のために良医をよこしてくれるだろうか」

「災いを助け合うのが隣国のよしみではないでしょうか。不才ではあ
りますがお許しただければ三寸の舌で名医を連れて参りたいと思いま
す」

「そういう事なら是非お願い致しますよう」

魏相は即日装束を調え夜を徹して馬車を走らせ秦に向つた。秦に着く
と魏相は桓公に願ひ出た。

「わが主君が不幸にも精神病に罹つてしまいました。貴国には高和、

高緩という起死回生の術のある良医がいるとお聞きしておりますが、その医師を「差遣いだき我が主君をお救い願えませんか」

「晋国がわしにそんな事を頼めるわけが無いだろう、何度もわが国を叩いておいて。たとえわが国に良医がいようとそなたの主君を助けさせるわけにはいかなん」

「名君のお言葉とも思えません。そもそも貴国とわが国は隣国であり、わが献公と貴国の穆公は婚姻により友好関係を結び代々親しくして参りました。しかし貴国の穆公が我が恵公の復国にご協力下さったのに韓原の戦いを起されましたし、つぎの文公の復国にも協力いただきましたのに汜南で盟約違反をなしました。友好が続かなかつたのは貴国に問題がございます。わが文公が亡くなった時、穆公は孟明殿の進言にご判断を誤られ、我が襄公の幼少に付けこんで崤山に兵を出し、我が属国を掠奪なさいました。我が軍は結局貴軍に勝ち、三元帥を捕え殺さずに放免いたしました。しかし彼はその後誓約に反し我が王官城を奪取しました。霊公、康公の時、我が軍が崇に出兵するとそれに乗じて貴軍はすぐわが国に攻めて来ました。わが景公が斉に問責軍を出した時も、君侯は杜回を出して斉を援けようとししました。負けても懲りず勝つても止まることを知らず、友好より敵にまわられたのは貴国の方ではないでしょうか。晋が秦を犯したのでしょうか、秦が晋を犯したのでしょうか。我が主君はこの事を悩み床についてしまったのです。貴国に良医をお借りしたいと思いましたが、わたし方の群臣は絶対に許可しないだろうと申します。臣は秦君は不当な事を何度もなさる事はないはずだから、名医をお借りして先君時代の友好関係を取戻して来ると申して参った次第であります。君侯のお許しが得られなければ彼等の言う事が正しかつ

た事になります。隣国は互いに困った時には助け合ういい関係を否定され、或いは医が人を生かすものであるという考えを否定されるお考えは、君侯はお持ちではないと存じます」

秦桓公は魏相の話に慷慨があり、話の筋道もはつきりしているので尊敬の念を抱き、

「大夫の話は正論であり説得力がある。わかりました」

と言つて直ちに太医高緩に晋へ行くよう命じた。魏相は感謝して、高緩と共に雍州を出て夜を徹して新絳へ帰つて来た。

昔婚姻の誼も今は仇敵 事の成否はこれ計の良否による
魏相の弁舌なかりせば どうして名医を晋に呼びえよう

晋景公は危篤状態で晋の医師が来るのを今は遅しと待つていた。ふと夢の中に、自分の鼻から二人の童子が飛び出し、一人が言う。

「秦の高緩は当世の名医だ。彼が来たら薬でわれ等はやられてしまふぞ、何処へ逃げよう」

もう一人の童子がいった。

「首の上、膏の下に逃げ込めばどうという事はないさ」

すると急に心臓の辺りに痛みが走り大声を出して寝ても起きてもじつとしていられなくなった。

間もなく魏相が高緩を連れて帰国し、高緩がすぐに診療にあたつたが、

「これは手の施しようがありません」

「病膏肩に入るの語源の故事 膏肩は心臓の下部 横隔膜の上 内臓奥深く治療の難しい所 病気が深く体内に侵入し治療の支が無事と言う（『春秋左氏伝 成公十年』なお、病膏肩（うもう）に入るは膏肩（こう）の誤用

と言つ。景公はその理由を聞いた。

「この病氣はすでに膏の下に入つております。もう灸も針も届きません。薬の力も及びません。天命と思われます」

「わしが見た夢と同じことを言われる。なるほど本当に名医だ」と感心し篤い御礼をして秦国へ返した。

小内侍で江忠というものがいた。景公が苦しんでいる枕辺で侍つていたが、早朝になつてふと居眠りをして、景公を背負つて天上に飛んで上がった夢を見た。目が覚めて周りの者にその話をしている時、ちょうど屠岸賈が見舞いにやつてきてそれを聞き、

「天は陽明、病は陰暗です。天上に上るということは暗から明へ変わる事で、殿のご病氣は次第によくなつてまいります」

と景公にお祝いを言つた。

景公もその日は胸の辺りが少し楽になつていたのでそれを聞いて非常に喜んだ。そんな時新妻が献上されてきた。景公はそれを食べようと料理人にその半分を搗いて粉を粥にさせた。屠岸賈は桑門大巫が趙氏の冤罪をあげつらつた事を憎んで景公に言つた。

「以前、祈禱師が殿は新妻を召し上がる事はできないなどと申しましたが、その話は偽りでした。呼びつけて示しをつければなりません」

景公は彼の意見に従つて桑門大巫を呼び出し、

「新妻はここにゐる。それでも召し上がる事ができないと申すか」と屠岸賈に詰問させた。

「未だわかりません」

と答えると景公は顔色を変えた。屠岸賈は、

「貴様呪つたな、斬れ」

部下に外へ引つ張り出すよう命じた。

「わたしは自分の手法で明らかにした事を正直に申し上げたのにこんな事になるとは情けない」

と大巫は嘆いた。部下たちが大巫の首を届けて来た時ちょうど料理人が麦粥を持ってきた。その時はすでに真昼だった。景公が取つて食べようとすると腹が張つて排泄しなくなった。

「わしを負つて厠に連れて行つてくれ」

と江忠を呼んだ。厠に下ろすと急に心臓に痛みが走り立つていられなくなり厠の中に落ち込んでしまつた。江忠は汚いのも顧みず助け出したが既に息が無かつた。とうとう新妻は食べられなかつた。無実の罪で桑門大巫を殺したのは全く屠岸賈の過失である。

上卿欒書は百官を指揮して、世子州蒲に葬儀を主宰させ新君に擁立した。即ち晋厲公である。衆議の結果江忠の景公を背負つて天に昇つた夢は後に公を負つて厠へ行つた事と符合するので江忠を殉葬する事にした。もしあの時夢の話などしなければこんな禍に遭う事は無かつたのである。口は禍の元、十分留意しなければならない。

景公が悪鬼に襲われて死んだので、人々は趙一族の冤罪の恨みだと言う者が多かつた。しかし欒、卻両氏は屠岸賈とぐるであり、韓厥一人だけでは何もできず彼も無理をして趙家の冤罪を晴らそうとはしなかつた。

さて、宋の共公は晋へ弔慰と祝賀のため上卿の華元を派遣した。華元は欒書に、晋楚両国を講和に持つて行き、南北の戦争を終わらせて民衆を塗炭の苦しみから救いたいと相談を持ち掛けた。

「楚は容易には信じないんじゃないか」

「子重しこう（公子嬰齊こうしえいせい）と親しいので、彼に任せる事ができると思っています」

嬰齊えんせいは了解して若い息子の嬰鍼えんしんを華元に同行させた。華元たちは楚へ着くと先ず公子嬰齊こうしえいせいに会った。嬰齊は嬰鍼の若いがいがしつかりとした顔つきを見て華元から晋中軍元帥の息子だと聞かされ、その才を試したくなつた。

「貴国の用兵はどんなのですか」

「整です」

「特徴は何でしょうか」

「暇です」

「人乱我整、人忙我暇。これならば如何なる戦いも負けることはあるまい。この二字は簡潔にして言い尽くしている」

嬰齊はそう言つて嬰鍼えんしんを益々敬意をもつて丁寧に扱い、さつそく楚王に引き合わせた。そして両国の友好、境界の保全、民の安全を互いに約し、みだりに兵を動かす者は鬼神の祟りを受けるとの誓約を交わして盟約の日取りを決めた。期日に晋は士燮しせつ、楚は公子罷こうしひが宋国の西門外に集まり互いに犠牲の血をすすつて和平の盟約を交わした（西門外の盟約・盟約）。楚国の司馬公子側そくは事前に知らされず事後にこれを知つて非常に怒つた。

「南北が不通となつて久しい。子重が勝手に取り決めた和平協定など現実的でない。こんな協定きつと壊してやる」

彼は楚から晋へ出奔した巫臣ふしんが、鐘離しやうりで呉王寿夢じゆぼうと晋、魯、宋、齊、

晋楚第一次不戦協約BC569年これは四年後鄢陵の戦が起り失効このあと約三十年後BC546年宋向戌きやうしやうにより晋楚第二次不戦協約弭兵みへいの会が成立した。こちらは約四十年、両国間の戦争はなかつた。（第66回注③参照）

衛、鄭の各大夫を集めている事を探り当てたので、すぐ楚王を挑発して言つた。

「晋は呉とよしみを通じています、これは我国を討とうと言う魂胆に違いありません。宋も鄭も晋に臣従していますが我国に付いている国はほとんどありません」

「わしも本当は鄭を討ちたいが、西門の盟約（第一次不戦条約）があるので如何ともならん」

「宋も鄭も元は我国と同盟を結んでいたのにすぐに盟約を破つて晋に寝返つたじゃありませんか。昨今では全て自国の利益優先です。盟約など気にする必要はありません」

そこで楚共王は公子側こうしそくに命じて鄭国を攻めさせ、鄭は仕方なく又晋に背いて楚に臣従した。これは周簡王十年（紀元前五七六年）の事である。

晋の厲公れいこうはこれを聞いて大変怒り、大臣を集め鄭国討伐を協議した。この頃、晋は嬰齊えんせいが表面政權を担当していたが実質的には三郤が權力をほしいままにしていた。三郤とは即ち、郤錡けきき、郤犇けきしゆう、郤至けきし、錡は上軍の元帥、犇は上軍の副將、至は新軍の副將である。さらに犇の子郤穀けきこく、至の弟郤乞けききつも大夫になり權力を持っていた。

伯宗はくそうは正直で直言できる人柄だからしばしば厲公に公言していた。

「郤氏一族の力が大きくなり過ぎています。よく賢愚を一覧になり少しその権限を抑えられ、功臣の後裔の事もお考えになる必要がございませす」

しかし厲公はそれには耳を貸さなかつた。三郤は伯宗を憎み、彼が朝政を誹謗していると厲公に誣告し厲公はそれを信じて逆に伯宗を殺してしまつた。伯宗の子伯州犁は楚へ亡命し、楚は彼を太宰に登用して晋対

策を謀った。厲公は驕慢かつ贅沢な性格で、男妾、女妾どちらも好み、男妾としては胥童、夷羊五、長魚矯、匠麗等の少年たちでみな大夫にし、女の方は美姫愛妾数知れない。毎日淫楽に耽り阿諛迎合を喜び、直言を嫌って国政には全く関与しなかったので群臣は次第に離れていった。

士燮は朝政が日増しに腐敗していたので鄭出兵には反対であった。

「裏切り者の鄭を討たずしては諸侯にもの言えないではないか」

卻至が言うと欒書も、

「鄭を失うと魯、宋も離心するだろう温季（卻至）の言う事はもっともだ」

と後押しをする。楚の降将苗贄皇も鄭討伐を勧めるので厲公は、荀偃だけを留守居役として残し、自ら大将の欒書、士燮、卻錡、荀偃、韓厥、卻至、魏錡、欒鍼等を率いて六百乗の戦車を擁し長蛇の列で鄭に向かった。同時に卻犇を魯と衛に派遣し援軍を依頼した。

鄭成公は晋軍が強大な兵力で攻めて来ていると聞き慌てて、また投降しようと考えたが、

「鄭は晋楚両大国に挟まれている小国ですから、今日は晋、明日は楚という態度では毎年攻撃を受ける事になります。この際頼るべき国を強国一國に決めるべきです」

と大臣の姚句耳が進言した。

「それじゃどちらにすればいいのだ」

「やはり楚に救援を頼んだほうがいいでしょう。楚軍が来て内外から挟撃すれば晋軍を大破し、数年は平和を保てるでしょう」

成公もそれが筋だと判断し彼を楚へ派遣したが、楚共王はどうしても

西門の盟約が気になって出兵には気が進まず、公子嬰斉に相談した。

「晋軍と戦うのは信義に悖ります。鄭を庇って戦っても勝てるかどうか分かりません、ここは様子を見たほうがいいのではないのでしょうか」

というのが嬰斉の意見である。すると公子側が進言した。

「鄭は楚に背かずしに救援を要請してきたのです。前回斉を援ける事ができず、今回もまた鄭を見殺しにしたのでは楚に帰順する者に望みが絶たれてしまいます。臣不才ではありますが一軍を率いて殿のお車をお守りいたし是非とも再度鄭の微功を挙げたく存じます」

共王は大変喜び、司馬の公子側を中軍の元帥に任命し、令尹の嬰斉を左軍の将に、右尹の公子壬夫を右軍の将とし、自らは両広の軍を率いて北に向け鄭救援に進発した。一日に百里という疾風迅雷の進撃だった。

その情報も早くも斥候が報告して来た。士燮は密かに欒書を説得した。「主君は若いから国事をあまり存じない。ここは楚軍の力を避けるふりをして撤退した方がいいと思います。そうしないと若い殿は怖いもの知らずになられ警戒心をなくしてしまわれるのが心配です」

「敵を畏れて避けるふりをするなんて事はわしにはできません」
と、欒書は反対した。士燮は退つて、

「今回の戦いはむしろ負けたほうがいいんだ。万一勝ちでもしたら外向きはいいが、大きな内患を持ち込む事になってしまう。それが心配だ」と密かに嘆いた。

楚軍は既に鄢陵を過ぎていた。晋軍は前進できず彭岡に駐屯し、両軍陣営を設営し対峙した。翌日は六月の晦日である。晦日は軍事は行わない慣わしで、晋軍は準備をしていなかった。しかし夜明け前に突然塞外に大きな喊声が上がった。守衛の兵士が慌てて報告に来た。

「楚軍が本営のすぐ傍まで来て布陣が出来上がっています」

「敵にすでにこんなに迫って来られて布陣されたのではこっちの布陣の余地がない。戦うのは不利だ。塞を堅守しこれを打ち破る対策を考えるしかない」

樂書は驚いて堅守態勢をとり、諸將と対策を協議したが、突撃、退却と議論は紛々として決まらない。

このとき士燮の子十六歳の士伋が、衆議が容易に決まらないようだと言うのを聞きつけ中軍に入って行つて樂書に進言した。

「元帥殿は布陣の場所が無くてお困りなんでしょう。それは簡単な事です」

「そなたに何か案があるのか」

「営門を堅く守らせておいて、密かに陣内のかまどを全て平らにさせ、井戸は板でふたをします。全軍が布陣するのに半時（二時間）もあれば布陣の場所ができます。布陣が終わった所で柵を取外せば、戦えます」

「井戸とかまどは軍の重要な設備だ、それを塞いだら食事の時どうする」

「先に各軍に干し飯と浄水を準備させておきます。一日二日支えている間に老弱兵士達を集め陣の後方に井戸と竈を作らせて軍需に備えます」

士燮は本来戦いに反対だったので、息子の進言を聞き大変怒った。

「勝ち負けは天命によるものだ、子供に何がわかる。えらそうに思いつきで物を言うな」

と叱って剣を抜いて斬ろうとした。幸い左右の者に引止められ士伋はやつと逃げる事ができた。

「あの子の智恵は范孟殿（士燮）にも劣らないじゃないですか、どうしてそんなに怒るのですか」

と樂書は笑いながら言つて、士伋の案を採用した。直ちに多量の干し飯を作らせた後、かまどを埋め井戸に蓋をするよう伝令を出し、そこに陣列を整え翌日の交戦を待った。胡曾先生は詩に言う。

軍中の布陣は本来奇謀なりと 士燮抜刀し子を叱る事仇敵の如く
是吾子に慎みを教えたため 老臣に憂国の深慮あり

さて、楚王は晋の本陣のすぐ傍に迫って布陣をし相手の虚を突いた積りだったから、晋の軍中はきつと慌てて乱れるだろうと思つていたところ、静かで動揺が見られない。変に思つて太宰の伯州犁に訊ねた。

「晋軍は営門を堅く守つて動かないが、そなたは元晋の人だが何かその事情がわからないかね」

「大王、物見車にお登りになり晋軍をご覧になって下さい」

楚王は登つて横に州犁を立たせた。王は次々代わる様子を見ながら州犁に彼等の行動の解説を求めた。

「晋兵の中に右や左に走りまわっているのは何者かね」

「軍吏が招集の連絡をしているのです」

「いま皆が中軍に集まったようだが」

「作戦会議のようです」

「突然幕を張り出したぞ、どういう訳だ」

「先君に報告しているのでしょうか」

「また幕をはずしたぞ」

「これから軍令が発せられます」

「陣中が騒がしくなって随分砂塵が舞い上がっているが」

「恐らく、陣立てができないので戦闘場所を作るため井戸やかまどを塞いでいるのでしょう」

「車に馬をつけ将士がみな車に乗ったぞ」

「陣立てが始まるのです」

「乗った者がまた下りたがどうしたんだろう」

「戦いを前にして神へのお祈りです」

「中軍が非常に勢いがあるようだが、君主はいるのかな」

「欒氏と范氏が君主を両方から挟んで陣を組んでいます。とにかくにも敵を甘く見てはいけません」

楚王は晋軍の情況が十分にわかったので軍中に訓戒を出し翌日の対戦の準備をさせた。

一方楚の降将苗賁皇も晋侯の傍にいて、

「令尹孫叔殿が亡くなられてから軍制は朝令暮改で、両広の精兵は長く入れ替えがなく年をとって戦えない兵も多くなっています。しかも左右の両元帥も仲がよくありません。この一戦はきつと勝ちでしょう」と進言した。髡翁は言う。

楚は晋の良将州犁を用い、晋は楚将賁皇を用う

その何れも得がたき才 謀臣を他国に出す勿れ

この日両軍は塞を堅く守って対峙し戦いはなかった。楚将潘党は陣營の後方で的当ての練習を行っていて、三連射し全ての紅い中心に命中し諸將が歓声を上げていた。この時養由基が通り掛かったので諸將は手を叩いて

「弓の神様が来たぞ」

と呼びかけた。潘党は面白くなく養由基に食ってかかった。

「わしの箭は養叔なんぞに負けんぞ」

「あなたは的の中心を射ただけでしょう、そんなの珍しくもなんともありませんよ。私は『百步穿楊』ができます」

と養由基が言った。諸將は百步穿楊とは聞いた事がないので口々にそれは何だと言う。

「以前、柳の葉の一枚に色を塗って印をつけてもらい、百歩さがってその葉の中心を射当てました。だから百步穿楊と言っているのです」

「じゃ、ここにも柳がありますがやってみますか」

「やりましょう」

「今日は養叔の神箭を見ることができそうです」

諸將は大喜びで墨を取り出し柳の枝の一枚の葉を黒く塗った。由基は百歩退ってサツと矢を放った。矢が柳から落ちてこないで前へ行って確かめて見ると矢は枝に掛かっている、そのやじりは果たして墨を塗った葉の中心を貫いていた。

「一本の矢だけなら偶然ということだってある。三枚の葉に印をつけて続けて三枚の葉を射抜けてこそ名手というものであろう」

潘党は苦々しそくに言った。由基が、

「できるかどうかわかりませんがやってみましょう」

と言うと、潘党は高さが違う三枚の葉に墨を塗り、一、二、三と番号を書いた。由基は先ず三枚の葉の数字を確認し、百歩下がって三本の矢にも一、二、三と番号をつけ順番に三本の矢を連射した。調べてみるとみな寸毫のばずれも無い。諸將はみな拱手して、

「養由基殿はやつぱり弓の神様だ」

と舌を巻いた。潘党は内心非常に驚いたがそれでも負けを認めず、

「養叔殿の弓術は素晴らしい。だが実戦で敵を倒す力を比べてみようじやないか。わしは何重もの堅い鎧よろいを射抜くことができる。諸君にやつてみせてやろう」

諸将は皆大喜びである。潘党は部下の鎧を脱がせた。彼等が五領重ねると更に二領増やして全部で七重にした。

「鎧を七領も重ねると厚さは一尺近くになるぞ、本当に射抜けるのだろうか」

と諸将たちはざわめいた。潘党はそれをしつかり的に縛り付け、百歩退つて狼牙の矢を番え黒漆の弓を引いた。左手は泰山を支えるが如く右手は赤子を抱くが如く射をしっかりと見据えてサツと矢が放たれた。みな矢の飛んだ方向を見たが的には矢が見えない。諸将は前に集まつてよくよく見てワーツと一斉に喝采を上げた。

「すごい、すごい」

矢の力が強く矢竹の端まで七層の鎧を釘を打つたように突き透してぐらりともしなかつたのである。潘党は得意になり、兵に七層の鎧と矢を取つて来させて陣内各所へ持ち回り自慢する積りだつた。

「動かさないで下さい。どうなるかわかりませんが、わたしにもちょっとやらせて下さい」

と養由基が叫び、弓を取つて射ようとしたが、突然手を下ろした。諸将は怯んだのかと思つた。

「どうしてやらないんです」

「今と同じようにやつたのでは何も珍しくありません。『送箭の法』

というのをやつてみましょう」

と言つて弓を構えサツと一矢を放つた。なんとそれは上でも下でも右でも左でもない、実にピッタリと潘党の矢を的の奥のほうへ押出して自分の矢竹の尻は鎧の中に残つていた。諸将は舌を巻いて言葉も無かつた。

「養叔殿はやはり妙手だ、わしはとてもかなわん」

潘党も感心して今回こそは心服した。

史書に次のようなことが載っている。

ある時楚王が荊山で巻き狩りをしていたら、山上に矢を受け止めるのが上手な通臂猿つうひぐさがいた。王はこれを何重にも囲んで家来たちに射させたがみんな猿に取られてしまつた。そこで養由基を呼んだ。猿は養由基の名を聞くと急に鳴き声をあげたという。由基は一発で猿の心臓をえぐつた。正にその名に違わない春秋時代随一の射手である。

潜淵は詩中でうたっている。

落鳥の風貫く神箭 百歩穿楊というのは稀代の技なり

穿札將軍驚くに足らず 強中に更に強き名手あり

(穿札將軍 札は鎧の鉄片 即ち鎧を射貫いた楚將潘党)

「晋楚対峙している時だから、王は今こそ人材を用いる時だ。こんな美玉をしまつて置くことはない、両將軍のこの神箭の事を申し上げておくべきだ」

諸將は兵に命じて七重の鎧を射抜いたものを担がせて養由基、潘党と一緒に共王の前へ行つた。將たちは先ほどの二人が弓術の力量を賭けた一連の事を縷々報告し、

。通臂猿 腕を自由に伸縮できるという伝説の猿

「わが楚にはこのような弓の名手がいいます。晋軍百万といえど、心配には及びません」

と言ったところ、楚王はその話を聞いて喜ぶどころか大変怒って、

「将は矢一本の僥倖に頼るのではなく、策略を用いて勝つべきなのだ。そんな事を自慢していると何時かその技のために命を落とす事になるぞ」と叱りつけ、養由基の矢を全て取上げ以後弓の使用を禁止した。養由基は満面恥入り罪を認めて下がって行った。

翌日の五更に両軍は太鼓を打ち鳴らし兵を進めた。晋上軍の元帥卻鞮は楚の左軍公子嬰と、下軍元帥韓厥は楚の右軍公子壬夫と、欒書、士燮は各自の部隊を率いて中軍の晋君を守りながら楚共王と公子側の軍に対し、晋厲公は卻鞮を御者欒鍼を車右將軍にし、卻至等とともに新軍を率いて後話した。

楚共王も出陣してきた。王は午前は本来右広にいるはずであったが右広は養由基が大将なので、彼が神箭に拘るのを嫌って左広で彭名を御者、屈蕩を車右將軍に命じた。鄭成公も自国軍を率いて後話に当った。

晋厲公は頭には鳳凰の羽をあしらった兜をかぶり、身には龍の模様の真っ赤な錦の軍服を着、腰には宝剑を下げ手には大戟を持っている。金張りの車に乗り、右軍に欒書、左軍に士燮を配し軍門を開き楚軍に突入して行った。ところが夜はまだ明けておらず見通しが悪い。陣前にぬかるみのくぼみがあるのに気が付かず御者の卻鞮は猛烈に突っ込んで車輪がぬかるみにはまり込み馬が動けなくなってしまった。楚王の子熊茷は少年だが非常に勇猛であり晋侯の車がくぼみに入ったのを見て先鋒隊を率いて急いで駆けつけて来た。晋のほうでは欒鍼が車から飛び降りてぬかるみに入り懸命に持ち上げ、やっと車は浮き上がり馬も動き出して少

しづつぬかるみから出てきたところである。楚の熊茷がやってきた時には欒書の軍もやって来て、

「若い、無礼は許さん」

と大声で呼ばわった。熊茷が旗を見上げると、『中軍元帥』と書いてある。大軍だとわかって驚き引返したが欒書に追いつけられ生け捕られてしまった。楚軍は熊茷が捕まったのを見て一斉に助けに来た。しかし士燮の軍が遮り、後話の卻至も駆けつけたので楚軍は伏兵を心配して引揚げ、晋軍も追撃はしないで帰陣した。諜報の探索で楚の左軍に主力が置かれているとわかったので、上軍は慎重を期して交戦はしなかった。下軍は激しく戦い互いに死傷者が出たが勝負はつかず、翌日再戦ということになった。

欒書は熊茷を晋侯に献上した。晋侯は斬ろうとしたが、苗賁皇が諫め、

「楚王は子が捕えられたと聞くと、明日きつと自ら出てくると考えられます。熊茷を陣前に出して図にして誘うのは如何でしょう」

と進言すると晋侯は承知した。

夜明けになって欒書は開戦を命じた。大将の魏錡がやって来て欒書に昨夜の夢の事を話した。

「わたしは昨夜の夢の中で名月を射る夢を見ました。矢は月の真ん中に当たり月の中から黄金の輝きが出てきて下界に降り注いできました。慌てて逃げる時不覚にもつまずいて陣前のぬかるみに落ちて目が覚めたのですが、これは何の兆候でしょうか」

「周の同姓は日、異姓は月です。月を射当てたというのはきっと楚君の事です。しかしぬかるみは黄泉の国を表しますから逃げてぬかるみ

に入るというのはいい兆候ではないですね、將軍、十分気をつけてくださいよ」

樂書は吉兆だと言いつつ注意も忘れなかった。

「楚を打ち破る事さえできましたら、命など惜しくはありません」

魏錡がそういうので樂書は彼の出陣を許可した。これに對し楚將工伊襄じょういが出てきた。二將が火花を散らし始めた時、晋兵が突然檻車かんしやを陣前に押出してきた。楚王はそれがわが子だと解つて烈火の如く怒り、彭名ほうめいを叱咤し陣營から跳び出し奪回に來た。魏錡はそれを見て伊襄との戦いを放棄して楚王を追ひ、弓を構えサツと放つと楚王の左目に命中した。潘党は楚王を守つて力戦し車を返した。楚王は痛みを堪え矢を抜き、目玉もついて出てきた矢を投げ捨てた。兵が大切な竜眼轆々にはお捨てにならないで下さいと言つて急いで拾つて返したので楚王は矢袋の中にほり込んだ。晋軍は魏錡が王を射当て有利に立つたので一斉に攻め上げた。公子側は兵を叱咤し必死になつて敵を阻み楚王をやつと危地から脱出させた。卻至けきしも鄭成公を包囲したが御者の機転で君主の旗を下ろし弓袋に隠して逃げたので成公も脱出できた。

楚王は非常に頭に来て急いで神箭將軍の養由基を救援のために呼出した。すぐさまやつてきたが彼は身に矢を一本も帯びていない。楚王は二本の矢を取り出し厳しく命じた。

「わしをやつた奴は、緑色の上着を着た、顔中髻ひげだらけの男だ。將軍の神箭でわしの仇を討つてくれ。將軍の技量を持つてすれば矢は多くは要るまい」

由基は矢を拝領し車を飛ばして晋軍陣營へ突つ込んで行つた。折りよく緑の上着のひげ面に出くわした。これが魏錡だと判り大声で叫び、

「匹夫め、わが主君に矢傷を負わせるとは一体どんな弓の技量があるというんだ」

魏錡はそれに答える間もなく養由基の矢が飛んできて首に命中し即死した。樂書が軍を率いて急いで駆けつけ遺体を奪回した。由基は余つた一本の矢を楚王に返し、

「大王のご威光によりまして、緑の上着のひげ男をうち取りましてございます」

楚王は大喜びでその場で着ていた錦の上着を脱いで由基に与え更に百本の狼牙箭を褒美に与えた。楚軍では彼を『養一箭』と呼んだ。二本目が不要という意味である。

詩がある。

馬に鞭打ち戦車を飛ばし虎將山を下り 晋兵の心胆寒からしむ

万兵環視の中名將を討つ 一矢功成り凱歌奏して帰る

さて晋軍は楚軍を追撃して迫つた。だが養由基が矢を構えて陣前に立ち、追つてくる者を狙ひ撃ちするので晋の兵もそれ以上迫ることができない。楚將嬰齊、壬夫は楚王が敵の矢を受けたと聞いて、それぞれ救援に駆けつけ混戦になりやつと晋軍は兵を引いた。樂鍼は令尹の旗を見つこうしえいせいけ公子嬰齊の軍だと判り晋侯に願ひ出た。

「臣は以前楚に使ひいたしました時、楚の令尹れいゐんから晋国の用兵の法を聞かれました。その時臣は『整・暇』の二字で答えました。今混戦の中でまだ、その『整』は見えませんが、両軍が引いてもまだその『暇』が見えませんが、臣は使者を出して酒を献上し、あの時に申した事を実行いたしました、お許し下さいますようお願い申し上げます」

第五十九回

厲公 胥重を寵愛し晋国大乱となり
悼公 屠岸賈を誅し趙氏を復興

晋侯の許可が得られたので、欒鍼は使者に酒と酒器を持たせて嬰齊の軍へ派遣し、次のように言わせた。

「当方人材不足で我が主君は鍼を車右に命じられました。そのため鍼自ら参る事ができませんので代理を遣わし一献差上げたく存じます」

嬰齊は以前欒鍼が言った『整・暇』を思い出して感心した。

「あの若將軍、覚えていたんだな」

そう言つてその杯を受けて使者に言つた。

「明日戦場でお会いして直接礼を申しましょう」

使者は帰つてその通り報告した。

「楚君が矢を受け大怪我をしたというのに楚の軍はまだ撤退する気はないようですね。どうしたらいいのでしょうか」
と苗賁皇に言つと、事もなげに答えた。

「軍の備を檢閲し兵の規律を正し、きちんと陣立てをし、黎明までに食事を済ませて決戦に臨めば、楚軍を恐れる事は何もありません」

その時魯、衛に援兵を頼みに行った卻犖と欒黶が帰つてきて、両国の援軍は二十里付近まで来ていると報告した。

楚の諜報もその事を探知し楚王に報告した。王は驚いて、

「晋軍は今でも大軍なのに魯、衛軍が加わるとなれば一体どうすればいいんだ」

すぐに中軍の元帥公子側を呼びにやつた。

さてこの後は如何なりますやら、それは次回のお楽しみ。

楚の中軍の元帥公子側は普段酒が好きで、一度飲みだすと止まらず一度酔うと終日醒めない。楚王は彼のこの癖を知っているので出陣の度に酒を飲まないように注意していた。彼も今は晋楚対峙しており自分に大きな責任があることを自覚し一滴も口にしていない。

この日楚王は矢に当つて帰陣し恥ずかしいやら腹立たしいやら、これを見て公子側は、

「左右両軍とも疲れております、明日は一日休息をとつたら如何でしょう、ゆっくりと計画を練つて是非とも殿の恥を雪ぎたいと思います」

側はそう言つて中軍へ帰つて随分考えたがなかなかいい案がまとまらない。彼が可愛がつていた身の回りの世話をする穀陽という下僕が元帥が夜半まで悩んで愁眉を開かない様子をみて心配して軍にある美酒を一杯暖めて持つて来て勧めた。公子側は一嗅ぎして驚ろき、

「これは酒じゃないか」
と言つと、穀陽は主人が酒が好きだとわかつていたので回りに氣を使つてごまかしを言つた。

「酒ではございません、山椒湯です」
側は彼の意を解して酒杯を持ち一気に飲み干した。口中に甘く香るい

い喉ごしは何とも言えない。

「山椒湯はまだ有るのか」
「いやございませう」

穀陽は大変まめめしく暖めて持つて来た。側はしばらく飲んでなかったで飲むほどに上機嫌となり、

「いい山椒湯だ、そなたはいいやつだ」

といい、次々もつて来させた。どのくらい飲んだらう。連日の過勞と苦悩も加わつてぐつたりと倒れこんでしまった。

楚王は晋軍が黎明の出陣を伝令しており、魯、衛軍も到着していると聞き、対応策協議のため急遽内侍に公子側を呼びに遣つた。側はすでに醉郷に入り昏々と眠つて呼んでも全く反応がなく、部屋はブンブンと酒の匂いが充満している。内侍はこの状態を見て、またいつもの癖だとわかり、楚王に司馬殿は酔払つておられますと報告した。楚王は氣がせいりて次々と十人ほど催促にやつたが側は全く目を覚まさない。穀陽は傍でこれを見てひそかに泣き出した。

「元帥が氣の毒だったから酒を出したのにこんな事になるなんて。大王に分るとおれも責任を問われて殺されるかもしれない。今の内に逃げよう」

楚王は司馬が来ないので仕方なく令尹の公子嬰を呼び相談した。嬰齊はもともと側とは意見が合わない。

「当初から晋軍の勢いを見て勝つのは難しいから鄭は棄てるしかない」と出兵に反対しましたが、ここまで司馬がこり押ししてやつて来たのです。にもかかわらず大切な時に酒を貪つて事を誤らせる恐れがあります。臣も手の施しようがありません。夜の闇に乗じてそつと撤兵した方がいいと思います。そうすればいくらかでも体面が保てるでしょう」

「それにしても司馬が中軍で酔つ払つていたのでは晋軍につかまつてしまひ恥の上塗りになるぞ」

楚王はそう言つて養由基を呼び、

「そちの神箭で司馬を守つて帰国してくれ」

と命じ、直ちに全軍に密かに陣払いの伝令を發した。鄭成公は軍を率いて楚軍を護り国境を出た。養由基の隊だけに残り殿を務めた。

「司馬殿が酔いが醒めるのを待つていたら何時になるかわからない」と心配し側を抱いて馬車にのせ革帶で車にしつかり固定して本隊を追うよう命じた。自分は三百人の射手を引き連れ、最後にゆつくりと撤退して行つた。

翌朝、晋軍が挑戦して楚の陣営に迫つてきたが、楚陣がもぬけの空であるのを見てやつと撤退してしまつた事が分かつた。樂書は追撃しようと言ひ、士變は強く反対した。斥候の報告では、鄭が各所で嚴重に守りを固めていると言ふ。樂書も鄭攻略は難しいと考え無理をせず凱旋する事にした。魯、衛軍もそれぞれ本国へ歸つていった。

一方、公子側は五十里ほど進んだ辺りでやつと酔いから醒めて体がしつかりと縛られているのがわかつた。

「誰だ俺を縛つたのは」

「司馬殿が酔つておられましたので、養將軍が車の上でゆつくり休まれるようにとこのようにされたのでございます」

と従者が急いでゆめ前後の経過を説明した。公子側の両眼はまだ朦朧としている。

「今、車は何処へ向かっているのだ」

「帰国の途中です」

「司馬」では側を指す。楚の正卿なので大司馬側とも呼ばれた。

「どうして帰国するのだ」

「夜中に大王さまが何度も司馬殿をお呼びになりましたが、司馬殿はお目覚めにならず、晋軍の攻撃を受けたらとても防ぎきれないと判断なさって、撤退する事にされたようでございます」

「穀陽めがわしをだめにしやがった」

と大声でわめき、急いで彼を呼んだがすでに逃げたあとで何処にも姿が見えなかった。

楚共王は二百里ほど行つとところで追撃の様子がないのを知つて胸をなでおろした。同時に、側が罪を感じて自刃するのではないかと心配して、

「昔子玉が敗れた時は、先君は軍中におられなかった。今日はわしがいたのだから戦いの責任はわしにあり、司馬の罪ではない」

と使者を出してそう言つてやった。しかし、公子嬰えいはこの際側を生かしておきたくなかつたので、別途に側の人をつかわして言付けた。

「昔の子玉の事は司馬もご存知の通り。大王のご慈悲により責任を追及されなくても、司馬は何の面目あつて再び楚軍を指揮なさるのですか」

公子側は慨嘆して

「令尹は大義でわしに詰問している、どうして生に執着しようぞ」

と言つて自ら縊死した。楚王はこれを知つて大変嘆き悲しんだ（この晋楚の戦いを鄢陵の戦いという。周簡王の十一年（紀元前五七五年）の事である。髡仙は酒の過ちを詩にしている。

子玉 楚令尹成得臣 晋文公との戦に敗れ王の逆鱗に触れ自殺した 王は後悔して引き止めたが間に合わなかつた。

独眼王周到に策を練るも 何と英雄司馬側酒丘に眠るとは
童僕我を愛し逆に我を害す 酒は万愁を晴らすとは言うものの

話し変つて、晋侯であるが、楚に勝利を収め帰朝して天下無敵と思ひ込み尊大放蕩の度を増してきた。土嬖は晋国の争乱が予見され、その心配の鬱積が昂じて寝込んでしまった。しかし医者にかからうとはせず、太祝（周礼による官名 祝辞 祈禱を司る）に命じむしろ早く死ぬるよう祈らせて、間もなく死去し子の范匄が後を継いだ。

この頃胥童が厲公に言葉巧みに取り入つていた。厲公は彼を非常に可愛がついて卿に拔擢しようと思つたが残念ながら空席が無かつた。そこで胥童は陰險な進言を行つた。

「いま卻氏三家が兵権を握り権勢が強すぎて独断専行が多くなつています。将来叛乱の恐れもありますので早めに彼らを除いておくべきでしょう。そうすれば官爵も空席がたくさんでき、殿が与えたい人に与える事ができます」

「卻氏に明らかな謀叛の動きが無いのに殺すと、他の家臣達が従わない恐れがあるんじゃないか」

「鄢陵の戦いで卻至が鄭成公を包围していた時、兩人は車を並べて長い間二人だけで話し合いその後釈放しています。きっと楚に通じる陰謀があつたのです。これは楚の世子熊伐にお聞きになればすぐ分かると思います」

厲公はすぐ胥童に熊伐を呼びにやつた。胥童はそこで熊伐を買収した。

「公子は楚に帰りたいありませんか」

「帰りたいのは山やまですが残念ながら…」

「わたしの言う事をお聞きになればお返ししましょう」

「どういう事でしよう」

「晋侯に会つて郤至の事を聞かれたらこれこれしかじかと答えてくれればいいんです」

と胥童が熊伐にそつと耳打ちし熊伐も了解したので彼を連れて晋侯の前に出た。晋侯は人払いをして熊伐に尋ねた。

「郤至が楚と私的に通じていたことはあるのか」

「わたしを釈放していただけるのでしたらお答えいたします」

「本当のことを言えは赦そう」

「郤至殿と我国の子重（令尹嬰齐）とは昔から私的にも大変親しくしており手紙の行き来も頻繁であります。郤至殿は以前『わが君侯は大臣を信頼せず淫楽は度を越し、臣民みな恨んでいてわたしも主人とは思っていません。人々は襄公を思慕していて襄公の孫の周（孫周）殿が京師にいますが、将来機会を見て孫周殿を奉じて楚につきたい』というような事を言っていました。この事はわたしは以前から知っておりまして」

もともと襄公には談という庶子の長男がいたが、趙盾が襄公を立てたので談は禍を避けて周へ行き単襄公の門下になり、後に一子が誕生し周で生まれたから周と名付けた。襄公が殺された後、人々は文公を思つて公子黑臀を迎えた。黒臀から驪（驪）に驪から州蒲（厲公）に継がれ、州蒲は淫乱で子がいないのでまたしても人心は襄公に向つたのである。だから胥童は熊伐にこの点を指摘させ厲公の心を揺さぶつたのである。厲公は痛い所をつかれ顔色を変えた。胥童は熊伐の話に付け加えた。

驪は文公の後を継いだ襄公である。黒臀成公の次君主孺景公である。誤りか。文公重耳―襄公驪―靈公夷皋―成公黑臀―景公孺―厲公州蒲―悼公周

「この間の鄆陵の戦いで郤驪と嬰齊が対峙しても一本の矢も打たなかった事からもわかります。郤至が鄭君を赦したのは明らかです。もしお疑いなら郤至にそつと監視をつけて今回の勝利を周天子に報告に行かせたら如何です。もし本当に異心あれば必ずその機会に孫周と接触するはずですよ」

「それは妙案だ」

厲公は郤至を周へ戦勝報告のために派遣した。

胥童は裏で人を派遣して孫周に言つた。

「今晋国の大権は郤氏の掌中にあります。温季（郤至）殿が戦勝報告に来ますからお会いになったら如何です。他日帰国する場合に頼りますよ」

孫周はその通りだと思ひ、郤至が周に着いて公事が終わると公館を訪ねて行つた。当然国内の諸事を質問し郤至はそれに対し一々答え兩人は半日話し合つて分かれた。この一切が密かに探られて早速厲公に報告された。厲公は郤至が本当に謀叛の気持ちがあるものと信じ郤氏を除こうという考えになった。ただししばらくは適当な時期が見当たらなかった。ある日、厲公が女達と酒を飲んで遊んでいた時、ふと鹿の肉を食べたくなつたので寺人の孟張にすぐ調達してくるように命じた。しかし折悪しく街には鹿の肉は見当たらなかった。そこへちようど車の上に一頭の鹿を乗せた郤至が通りがかった。孟張は有無を言わずその鹿を奪つて逃げた。郤至はかかんかに怒つて弓を一杯に引き絞一矢で孟張を射殺して鹿を取り戻した。厲公はこれを聞いて、

「季子（郤至）め、わしを馬鹿にしたな」

と言つて胥童や夷羊五らの側近と相談して郤至を殺そうとした。

「卻至を殺せば、卻錡、卻璧が必ず謀反を起こします。一緒にやつてしまつたほうがいいでしょう」

と胥童が言う、いようこ 夷羊五も、

「公私の武士が八百人は集められますから君命があれば夜襲をかけて無防備のところを攻めれば必勝間違いないありません」

と言つた。わつしやうきようこ 長魚矯は武力では難しいと見て

「三邵の家兵は宮中の親衛隊の倍はいますから負かすのは難しいでしょう。敗れたら殿にまで累が及びます。卻至は司寇を兼ねていますし、卻璧は士師を兼ねています。いずれも訴訟関係の責任者ですから適当な訴訟をでつち上げて、あらかじめ現場に兵を伏せておき、審理中に隙を見て刺し殺すのがいいと思います」

と言うと、厲公は賛成して言つた。れいこう

「そりや名案だ、じゃ力士の清沸魑をそなたたちに協力させよう」

長魚矯はその後、三邵が講武堂で審議を行っているというのを聞きつけた。彼は清沸魑と一緒に顔に鶏の血を塗りたくつて喧嘩をして人を殺した風に装つて、それぞれ利刀を持ち合い殴りあいながら講武堂へやつてきて、裁判を要請した。卻璧は謀計だとは知らず審問を始めた。

清沸魑は作り話を説明する振りをして近づきさまに突然刀を取り出し卻璧の腰を刺した。卻錡は急いで刀を抜き清沸魑に斬りかかったが長魚矯も抜刀して向つてきて堂下で斬り合いになった。卻至は様子を見て車に跳び乗り外へ逃げた。清沸魑は卻璧に止めを刺し卻錡を挟み撃ちにした。錡も堂々とした武将ではあるが千斤の力士清沸魑と敏捷な少年長魚矯の二人相手では敵わない、終に清沸魑に刺された。長魚矯は卻至が外へ逃げて行くのが見えたので、

「まずい、おれは彼を追う」

三邵はこの日揃つて大変な日になった。卻至は必死に逃げたが途中でばつたり胥童と夷羊五の八百人の兵士にぶつかつてしまつた。

「晋侯の命令である。謀反人の卻氏を捕えろ、逃がすな」

急いで車を返そうとしたが長魚矯が跳び乗つて来て何もできず滅多切りにされてしまつた。清沸魑は卻錡、卻璧の首を取り、血の滴る三個の首級を下げて宮門に入つた。

無道の暗君不良の臣 君龍を傘に朝堂を専断
一朝讒言を信じるや 講武堂前戦場と化せり

上軍副將の 荀偃は講武堂で上軍元帥の卻錡が講武堂で刺客に襲われたと聞き、その時は未だ犯人が分かつてなかつたので、すぐ入朝し賊の討伐を申し出ようとした。同じく急いでやつて来た中軍の元帥 欒書と図らずも一緒に朝門まで来るとちようど胥童が武装兵士を率いてやつてくるのに出会つた。欒書と荀偃は思わず大声で怒鳴つた。

「反乱を起こした犯人が誰かと思つたらお前等だったのか。禁中に鼠賊が近寄るとは何事ぞ、速く退散しろ」

胥童はそれには答えず振向いて武装兵士達に、
「欒書と荀偃は三邵と謀叛を企んでいるのだ、みなを者捕えろ。褒美は思ひのままで」

と叫ぶと、彼らは寄つてたかつて欒書と荀偃を縛上げ宮中に連行した。厲公は長魚矯のことを終えて帰つて来たと聞きすぐ出て来た。武士共が次々入つて来るのを見て驚いて胥童にたずねた。

「罪人はすでに成敗したというのに兵たちはなぜ解散しないのだ」

「謀叛の仲間の變、偃を捕えましたので殿のご裁決をお待ちしている
のでございませう」

「今回の件に變、偃は関与していない」

長魚矯は厲公の前にひざまずいてそつと言った。

「變書と卻氏は一緒に戦功を立ててきています。荀偃も卻錡の部下
です。三郤が殺されればこの二人もきつと不安になり早晚卻氏の復讐に
出る事になるでしょう。今日彼等を処分しておかないと宮中の太平は保
つことはできないと思います」

「一時に三卿を殺し更に他の重臣にまで累を及ぼす事はわしにはで
きん」と言つて二人を無罪とし現職に戻した。變書と荀偃は感謝して
帰宅した。

長魚矯は嘆息して、

「殿は二人を許したけれど、この二人は殿を許すだろうか」

と考え空恐ろしくなり、すぐ西戎へ亡命した。

厲公は兵たちに厚い褒美を与え、三郤の遺体を三日間朝門に掛けその
後埋葬を許した。卻氏一族は死罪は免除されたが官職を罷免され下野す
る事になった。胥童が卻錡に代わり上軍の元帥に、夷羊五は卻犇に代
わつて新軍の元帥になり、清沸魑は卻至に代わり新軍の副将になり、楚
の公子熊茷も釈放されて帰国した。胥童が卿に列せられたこともあり、
變書、荀偃等はこれらの小人と伍して仕事をすることを恥じて仮病を理
由に朝廷に出なくなり、それをいい事に胥童達はますます厲公の寵愛を
傘に朝政を我が物にした。

ある日厲公は胥童を連れてもう一人の寵臣 匠麗の家へ遊びに行った。
匠麗の家は太陰山中にあり絳城から二十里以上離れていて三日経つて

も帰つてこない。

城中では荀偃と變書が密談し荀偃がそつと言った。

「殿はご存知の通りの無道な方です。我われは目下病氣という事にし
て参内していませんので今のところ小康を得ていますが、この後胥童等
が我われを疑い又殿に讒言して三郤のような事にならないとも限りませ
ん。そうなつてはおしまいです。何か対策を講じなければなりません」

「その通りだな。だが、どうするか」

「我々は大臣です、君主よりむしろ国家社稷の事に重きを置くべきで
す。今百万の大衆は貴殿の掌中にあります。もし別な賢明な君主を立て
ようと一声お掛けになれば、みんなついてきますよ」

「大丈夫だろうか」

「龍は淵の中にいれば誰もそれを窺うことはできませんが、淵を離れ
て陸に上があれば子供でも抑えられます。殿は匠麗の家で遊び呆けて三日
も帰つてきません、これこそ淵を離れた龍です。何をこ心配されますか」

「わが變家は代々みな晋の忠臣だった。しかし国家の大計のためには
それをやらざるを得ないようだな。ただ、きつと後世の人はわしに弑逆
の罪をきせるだろうが、ま、仕方ないか」

と大きなため息をついた。

二人は相談して病気が良くなったと言つて、予め牙将程滑に武装兵士
三百人を太陰山の左右に用意させておいて、太陰山の匠麗の家へ行き
晋侯に相談が有ると面会を求めた。

「殿は朝政を処理なさらず、三日間もお帰りにならないため臣民が失
望いたしております。曲げてお帰りにたきたくお迎えに上がりました」
厲公はしかたなしに承諾し、胥童を先導にして變書と荀偃は後の部

隊になって帰る事になった。太陰山の麓まで来ると突然砲声が響き谷間から三百名の武装兵士が飛出してきた。程滑は先ず胥童を叩き斬った。厲公は驚き車から転がり落ちた。欒書は兵士を太陰山の麓に駐屯させ厲公を営中に監禁した。

「范氏と韓氏がこの場にいないと、後で不都合な発言をされる恐れがある。君命だといって呼ぶべきだ」

欒書がそう言うので、荀偃ももつとだと承知しすぐ二輛の車を用意して士匄と韓厥をそれぞれ迎えにやった。士匄は使者に用向きをにたずねたが答えられなかったので、疑問に思つて腹心に韓厥が行くのか行かないのかを探らせた。韓厥はその前に病氣と言つて断つたようである。智者の韓厥の考えも大体同じだと思つて行くのをやめた。

欒書は二人とも来ないので荀偃に不安を口にすると、

「あなたはもう虎の背中に乗つてしまつたのです、今更下りられないでしょう」

と言つて欒書に気合を入れた。欒書も納得し、その夜程滑に命じて厲公に鳩酒（毒酒）を届けさせた。厲公はこれを飲んで死んだ。軍中で草々に収棺し翼城東門外に葬った。士匄、韓厥は突然君主が亡くなった事を聞き一緒に城を出て葬儀に駆けつけたが、死因を尋ねることはしなかった。

葬儀が終わつた後、欒書は群臣を集め誰を新君に立てるかを協議した。荀偃が発言した。

「胥童は卻至が孫周殿を擁立しようとしていると言つて厲公に誹謗し、三卻事件を起したのですが、これは予兆だったかもしれません。霊公が桃園で亡くなり襄公の後が絶えましたがやはり天意がこの方にあつ

たのではないかと思うのです。ですからこの方をお迎えすべきです」

誰もこれに異論がなかった。欒書はすぐ荀偃を京師に派遣し孫周を迎え君位を継がせた。公子周はこの時僅か十四才だったが天性の聡明さがあつて志も考えも卓越していた。彼は荀偃の迎えを受けるとその詳細を確かめ直ちに單襄公に別れの挨拶をして荀偃に随いて帰国の途についた。清原という所まで来ると、欒書、荀偃、士匄、韓厥等の大臣たちが迎えに来ていた。ここで孫周は皆に言つた。

「わたしは他国に居候し、正直なところ、帰国など望むべくもなくまして国君になるなど考えても無かつた事です。しかし、君主というのは命令で仕事をするのであり、もし名だけの君主で命令が聞かれないのであれば君主など無いほうがいい。卿等が私の命令を聞くというのであれば今日にも即位します。そうでなければ他の人を立てていただきます。わたしは虚名だけで州蒲（厲公）のようなのは御免蒙ります」

欒書をはじめ、これを聞いてみな慄然と恐れ入つて答えた。

「我々みな、賢君にお仕えしたいと考えてまいりましたので、誰も命令を粗末に致す者はございませぬ」

欒書は退出後、諸臣に言つた。

「新君は前の殿とは違つ、十分心してお仕えするように」

孫周は絳城に入り太廟に参拝し即位した。これが晋悼公である。

即位の翌日、夷羊五、清沸魑等君主の悪行に迎合した罪を追及し即刻朝門で斬首し、その一族はすべて国外へ追放した。また、厲公殺害の罪を追及し程滑を市中での八つ裂きの刑（車裂の刑）に処した。欒書はこれに驚きその夜眠れず、翌日すぐに老齢を理由に、後任に韓厥を推薦し引退を申し出たが、間もなく心配がこうじて寝込んでしまい遂に帰らぬ人

となつた。

悼公はかねてより韓厥が賢人だと聞いていたので、欒書の後任として中軍の元帥に任用した。

韓厥はお礼を述べた後そつと悼公に進言した。

「臣等は全て先輩の功績のお陰で始めて君主に奉公できるのです。先輩の功績の中でも趙氏に優るものはありません。趙衰殿は文公を、趙盾殿は襄公を補佐しその忠誠によつて君主は覇業を遂げておられます。靈公の寵臣の奸佞屠岸賈は趙盾を殺そうとしましたが趙盾は出奔して危うく難を逃れました。靈公は軍の反乱により桃園で殺され景公が位を継ぎましたが、また岸賈が寵愛され、彼は趙盾がすでに死んでいたのに趙氏が靈公を弑逆したとして趙一族に罪を遡及し趙氏を絶滅させてしまいました。臣民みなこれを残念に思い今も不平が鬱積しております。しかし天の助けでしょうか、幸な事に趙氏の遺児趙武が健在です。殿は即位後ずつと賞罰を明らかにされ晋国の政を大改造なさつて来られました。すでに夷羊五の罪も正されましたがこれを機に趙氏の功績を追認されては如何でしょうか」

「その事はわたしも聞いている。その趙氏の遺児は今何処に居るのですか」

「当時岸賈は趙氏の孤児を徹底搜索いたしました。趙家に公孫杵臼と程嬰という食客がいて、その杵臼が偽の遺児を抱いて甘んじて岸賈の誅殺を受け趙武を逃しました。程嬰は武を孟山に匿い今年で十五年になります」

と韓厥は悼公に当時の経緯と現状を縷々説明した。

「二人をわたしに会わせてくれませんか」

「屠岸賈が未だ廷臣としていますので、どうかこの事は内密にお願い申し上げます」

「承知している」

韓厥は宮門を出ると自ら車を御し趙武を迎えに孟山へ向かった。

その昔程嬰が車を御して密に故絳城を出て今日新絳城に入る。出入する城郭は異なれども十五年間の感慨はひとしおである、

韓厥は趙武を内宮へ連れて行つて悼公に朝見させた。悼公は宮中に匿い、突然外部に病氣だとふれた。翌日韓厥は百官を連れて見舞いに上がった。屠岸賈もその中に居た。

「卿の皆さんはわたしが何の病氣が分かりますか。実は功勞簿をひも解いて見ていたらどうしてもよく判らないことがあつて、それが引つ掛けて気分が優れないんです」

「功勞簿の不明な事とは何でございましょう」

大夫たちはわけがわからず叩頭の礼をしてたずねた。

「趙衰、趙盾の二代にわたる国家功勞者の祀りがどうしてできなくなつてしまったのだろう。これと思うどうしても気分が塞いでしまうのです」

「趙氏が滅びてすでに十五年になり、今殿がその功を追認なさろうとお考えになつても残念ながら誰も跡継ぎがおりません」

と大夫たちは声を揃えて答えた。悼公はすぐに趙武を呼び出した。趙武は卿達に向つて鄭重に挨拶をした。大夫たちの中にさめきが起きた。

「この若者は誰なんだろう」

「彼がいわゆる孤児の趙武です。あの時殺された趙氏の孤児は実は食客程嬰の子だったのです」

屠岸賈は腑抜け状態で酔い痴れたようにどさつと倒れこみ一言も言えなかった。

「全て屠岸賈の所業である。屠岸賈一族を滅ぼさなければ、地下の趙氏の冤魂をどうして慰められようぞ」

悼公はそう言うつてその場で屠岸賈の斬首を命じ、韓厥と趙武に軍隊を率いて屠岸賈一族を誅滅するよう指示した。趙武は屠岸賈の首級を請い受け趙朔の墓に供えた。国中の人々は手をたたいて喜んだ。

昔屠岸賈が趙氏を滅ぼし、今趙氏が屠家を滅ぼす
ただ争は十五年を前後するのみ 怨み仇き報復は繰返す

晋悼公は屠岸賈を誅し、趙武を朝堂に呼び加冠の式（元服）を行つて屠岸賈に代つて司寇を彼に命じ、以前の田禄を全て趙武に戻してやつた。また、程嬰の義を賞し彼を軍正に登用しようとした。しかし嬰は、

「あの時わたくしが死ななかつたのは趙氏の孤児が幼なかつたからであります。今、趙武様は官に就かれ仇討も終わられました。杵臼一人を死なせてわたくしだけが富貴を貪る事はできません。地下の杵臼に報告をしなければならぬのです」

と言つて自刎して果てた。趙武はその遺体を抱いて慟哭し、晋侯の許しを得て篤く弔い公孫杵臼と同じく雲中山に葬つた。これを『二義塚』という。趙武は父の死に準じて三年の喪に服し、その徳に報いた。

山深き谷に匿い育てて十五年 袴中の嬰児 今雪々父祖の冤
程嬰杵臼二人を称えて二義という 其死何れが前後問う要もなし

悼公は趙武を復官させ、宋国から趙勝を呼び戻し邯鄲を与えた。

さらに、群臣の位階を大幅に見直し賢者を尊び有能者を登用し、前功を記録し小罪は赦し、百官は多士渌々となった。

主要なものを挙げてみると、韓厥を中軍の元帥、士匄をその副将とし、荀偃、欒黶、趙武をそれぞれ上、下、新軍の元帥、荀偃、士魴、魏相をそれぞれ上、下、新軍の副将、祁奚を中軍の尉、羊舌職をその副官、魏絳を中軍の司馬、張老を候奄（敵情偵察担当）、韓無忌を公族大夫（公族及び卿大夫の子弟を管掌）、士渥濁を太傅、賈辛を司空、欒糾を悼公の御者、荀賓を車右將軍、程鄭を贊仆（君主の事と馬管理）、鐸遏寇を上軍の尉、籍偃を上軍の司馬というような顔ぶれである。

賢能の適材適所、国政の改革、課税の軽減と思ひやり、孤児寡婦対策等を進めたので民衆は大変喜んだ。宋国、魯国等はこのことを聞き相前後して祝賀にやつて来た。ただ鄭公は楚王が自国鄭のために片目を失つた事に感じて晋国には臣従しようとはしなかった。

楚共王は厲公が殺された事を聞き喜びをあらわにし、今こそ復讐の時と思つた。ところが新君が位を継ぐと、賞罰の厳正な実施、賢者の登用、国政改革等を行つて朝廷の肅清を行ない内外ともに心服して覇業が復興して来ていると聞き、飲びが突然不安に変わった。直ちに群臣を招集して中原を脅かし晋の覇業に待つたを掛けようと諮つた。令尹嬰齊は手を束ねたまま策が無い。その時公子壬夫が進言した。

「中国では宋が爵位が高く国も大きくしかも晋呉の間の要所に位置しています。晋の覇業に待つたをかけるには先ず宋から手を付けるべきです。今、宋の魚石、向為人、鱗朱、向帯、魚府の五大夫が右師の華元と折り合い悪くわが国に亡命してきています。彼等に兵力を貸し与えて宋を討たせ、勝てば宋の地を魚石に封じてやるのです。これ、『敵を以つ

て敵を制す』の計です。もし晋が宋を救援に来なければ諸侯の信頼を失う事になり、救援に来れば魚石を攻める事になり、我われは座してその戦いの行方を眺めていればいいのです。如何でしょう」

共王はその策を採用し、すぐに壬夫を大将とし魚石らを案内役とし大軍を率いて宋討伐に向かった。

この勝負如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第六十回

智武子の分軍により楚軍を疲弊させ

魯三將 偃陽城で力量發揮

周簡王十三年（紀元前五七三年）夏四月、楚共王は右尹壬夫の計を採用し宋討伐軍を出した。魚石等五大夫（宋から楚への亡命者）を先導とし自ら大軍を率い鄭成公と合流してたちまち彭城（現江蘇省徐州）を落した。魚石等に嚴重に守るよう命じ三百乗の戦軍を残した。

「最近晋と呉が通じるようになったがこれは楚としてはまずい。彭城は呉晋往来路にあたる。そなた達に大軍を残していくから、積極的に宋の地を取れ。また晋呉の使者は絶対に通すな。いいか、十分に注意してわしの信頼を裏切らないように頼むぞ」

共王はそう言いおいて帰国した。

その冬、宋成公は逆に大夫老佐に命じて彭城を攻撃させた。魚石は迎撃したが老佐に敗れてしまった。楚令尹嬰齊は彭城が包囲されていると聞き救援に駆けつけた。老佐は敵を軽視して楚軍に深入りし、矢に当たって死んだ。嬰齊は軍を進め宋に攻め込んだ。宋は大変恐れて右師華元を使者として晋に救援を求めた。

「昔、文公の覇業は宋を救援した事からスタートしました。わが国の興廢はこの一挙にあります。救援に立たないわけには参りません」

韓厥は悼公にそう進言し、早速使者を出し諸侯に呼びかけた。

悼公は自ら大将韓厥、荀偃、欒黶らを率いてまず台谷に駐屯した。

嬰齊は晋の大軍がやって来ると聞くやさつさと撤兵し帰国してしまった。

周簡王十四年、悼公は宋、魯、衛、曹、莒、邾、滕、薛の八カ国の

軍で彭城を包圍した。

宋大夫 向戌は兵士にはしゝ軍に登らせて城に向かつて、

「魚石らは君主に背いた反逆者である。天もこれをお赦しにはならない。いま晋は二十万の大軍でこの孤城を徹底的に踏み潰そうとしているのだ。どちらが正義の軍かがわかつたら逆賊から逃れて投降して来さない。罪なき者を殺しはしない」

と数回投降を促した。彭城の民衆はこれ聞き、魚石たちに付いていてはまずいと思い、門を開け晋軍を入城させた。この時楚兵の数は少なくはなかつたが、魚石は彼等に思いやりがなかつたため協力を得る事ができず、悼公が入城すると皆逃げ散つてしまつた。魚石、魚府、向為人、向帯、鱗朱の五大夫は全員捕えられて悼公の前に引出された。悼公は五人の大夫を斬首したがその一族は赦して河東の壺丘に移した。その後軍を鄭に移し鄭伯を問責した。楚右尹壬夫は鄭救援のため宋を攻撃したので諸侯は軍を帰し宋を救援し、それぞれ撤兵した（彭城の戦い）。

この年周簡王が崩御し世子泄心が即位した。即ち靈王である。靈王は生まれた時から口ひげが生えていたので、周の人々は彼を髭王といつた。髭王元年の夏、鄭成公が危篤になり上卿の公子駢に、

「楚王はわが国を救うために目に矢を受けられたのだ、わしはこの事を忘れる事ができない。わしの死後も決して楚に背く事のないように」と言つて息を引き取つた。公子駢は世子髭頑を奉戴し即位させた。これが鄭僖公である。

晋悼公は鄭が屈服しないので、諸侯を戚（河南省濮陽）に大集合して協議した。魯の大夫仲孫蔑がまず策を述べた。

「鄭の虎牢は險要の地であり楚鄭の連絡の要衝でもあります。此処

に城を築いて関を設置し大軍を置いて鄭に迫れば、鄭は降らざるを得ないでしょう」

すると楚から出奔して来た巫臣も献策した。

「呉楚は一水で隣接しております。臣が呉に参りまして呉に楚を攻める約束を取り付けたいと存じます。呉は何度も楚の属国を騒がし楚はこの対処に苦勞しています。ここでもう一押しして呉に楚を攻撃させたら、楚は東で呉との戦いに苦しみ晋、鄭の方には手が廻らなくなるでしょう」

悼公はこの両意見を採用した。この時は齊靈公も世子光を上卿崔杼と同行させ会合に参加させていたので、悼公は齊を含め九諸侯の兵力を合わせて虎牢に築いた城壁を拡大しトーチカを増設して、大国は兵千人小国は五百人から三百人を出させてそこを守らせた。鄭僖公は案の定恐れてついに晋に講和を求めた。晋侯はそれを確かめ帰国した。

さて晋軍尉祁奚は年七十才余りになり老齢を理由に退官を申し出た。悼公は彼を大要尊重していたので彼に後任人事について訊ねた。

「解狐が適任と存じます」

と祁奚が答えたので悼公は不思議に思つて聞き返した。

「彼はそなたの仇人じゃないのか、どうして彼を推挙するのかね」

「殿がお訊ねになられたのはこの職に誰が適任かという事で、臣の仇人がいけないとは仰られませんでした」

悼公はすぐ解狐を召したが残念ながら解狐は就任前に病死してしまつた。悼公は再び祁奚にたずねた。

「解狐の外には誰がいいだろうか」

「解狐でなければ次は祁午が適任でしょう」

「彼はそなたの息子じやないか」

「殿は適任者をお訊ねになり、息子が駄目とは仰つしやいませんでした」

悼公は更にたずねた。

「中軍の副尉羊舌職も亡くなったが彼の後任はどうかね」

「羊舌職には二人の息子がいます。一人は赤、もう一人は盼。どちらも有能な人物で、何れをお選びになられても結構です」

悼公はその意見に従い祁午を中軍の尉に、羊舌赤を副尉に任命したが誰も文句を言うものはなかった。

話し変わつて巫臣の子巫狐庸は晋侯の命を受け呉へ行き、呉王寿夢に会つて楚攻撃を依頼した。寿夢は承知し世子諸樊を大将に江口で練兵を行った。その事は早速諜報によつて楚に知らされた。楚の令尹嬰齊はこれを聞き、

「呉軍は楚に侵入した事はありませんが、もし一度でも国境を侵したら癖になる可能性がありますから早いうちに叩いておく必要があります」と進言すると楚王も同意した。嬰齊は水軍を顧問し精銳三万を選び長江に出て鳩茲を撃破した。

河流に乗つて下ろうとすると勇將鄭廖が提言した。

「長江は流れが速いので進むは易く退くのは大変です。小職が一隊を率いて先行しようと存じます。状況が有利であれば進軍すればよし、不利な状況であれば停止して大敗を避けられます。元帥には郝山磯（磯は岩場の事）で駐屯いただき、臨機応変に動いていただければ万全かと存じます」

鄭廖の進言に随い、甲士三百、白軍服三千人を選抜した。みな気力はみなぎり十人力、大小の船合計百艘が一斉に砲声を放ち舳先を東に向け進發した。

直ちに諜報船から鳩茲が落ちた事が世子樊に届いた。

「すでに鳩茲を失つた。楚軍は必ず勝ちに乘じて下つて来る。宜しくこれに備えるべし」

諸樊はそう命じ公子夷昧に軍船数十艘を率いて東西の梁山に敵を誘い出し、公子余祭に命じて采石港（鳩茲の東北）で待ち伏せさせた。鄭廖軍は郝山磯付近から梁山に兵船がいるのを見て勇躍軍を進めた。夷昧は一寸当たつては負けた振りをして東に逃げた。鄭廖は追つて行き、采石磯を過ぎたあたりで諸樊の大軍に出遇つた。接近戦になつて間もなく采石港で激しい砲声が鳴り響き、余祭の伏兵が後方から挟撃してきた。前後から雨のように降りしきる矢を顔に三本受けながら鄭廖はそれを抜いて力戦した。夷昧は船体を牛皮で保護した大戦艦に、厳選した勇士を乗せ敵船を徹底的に叩き大半を沈没させた。鄭廖は力尽き捕えられたが彼は虜囚より死を選んだ。その他逃げる事ができたのは甲士八十、白軍服三百に過ぎない惨敗であつた。嬰齊は罪を恐れ敗戦をこまかして鳩茲の勝利だけを報告しようと思つたが、呉の世子諸樊は勝ちに乘つて反攻し嬰齊を大敗させ鳩茲を取り戻した。嬰齊は恥と憤懣が高じて陣中で寝込んでしまい郢都に帰り着く前に亡くなつた。

巫臣が呉人に戦車戦法を教えしより、東方に戦塵起る

兵士捕われ名将死す、かつて楚が巫臣家を族滅せしは失策か

（族滅：一人の罪を一族に及ぼし皆殺しにする刑罰）

共王は右尹の壬夫を令尹に指名した。ところが壬夫は天性の貪婪で属国の君臣から賄賂を絞り取った。陳成公も我慢できず、轅僂如を晋に使わし晋国に臣従を願い出た。そこで晋悼公は諸侯を鷄沢（邯鄲の東の湖沢の名）に大集合した（鷄沢の会盟）。呉子寿夢も参加し中原の勢いは大いに奮った。

楚王は陳を失った事を大変怒り、事情を知って壬夫を殺し王弟公子貞字子囊を令尹にして、直ちに五百乗の戦車を率いて陳討伐軍を出した。その時はすでに陳の成公は亡くなっていて、継承した哀公は楚の威を恐れ再び楚に帰順した。

晋悼公はこれを聞いて非常に怒り、陳を取り戻すために楚と戦おうとした。ところが突然無終国の君主嘉父が大夫孟楽を使者にして虎豹の皮百枚を献納してきた。使者の口上はこういう事である。

「山戎諸国は斉桓公が征服して以来ずっと平安を保っていたのですが、最近燕、秦の力が弱まり中国に覇を称える者がいないと見くびってまた我儘放題に侵略を始めました。我が主君は晋君がご聡明だとお聞きし、桓公・文公の覇業を継承される方だと存じ上げております。秦も貴国の威徳を口にしておりますので、諸戎は貴国と同盟を希望いたしております。そういう事でわが主君は小職を遣わしこの件に就き御承諾賜りますようお願い申し上げます」

悼公は諸將を集め協議した。

「戎狄とは交流がありませんのでむしろ討つべきです。昔斉桓公が覇者となった時は先ず山戎を平らげその後楚を討ちました。豺狼のような奴ですから兵力で押さえ込むしかありません」

というのが大方の意見であったが、司馬魏絳だけは反対した。

「それはいけません。今始めて諸侯を糾合したばかりで未だ大業が定まったわけではありません。もし戎討伐のために出兵すれば、楚は必ずその虚に乗じて事を起こし、その時諸侯はきつと晋に背き楚に付くでしょう。そもそも夷狄は禽獣のようなもので諸侯は兄弟です。禽獣を得て兄弟を失うのは愚策といえましょう」

「戎と講和すべきか」

「戎と講和するメリットは五つございます。戎は晋の隣国であり土地が非常に広いので土地より物の方を喜びます。物を土地と交換して土地の拡大を図れることが利点の第一です。侵略が落ち着けば辺境の民は安心して耕作につけることが第二の利点。徳を以って遠方の者を懐柔できれば兵を動かさなくて済む事これ利点の第三。戎狄がわが国に帰順すれば周りに影響が大きく諸侯はみな畏れをもつて帰服するでしょう。これ利点の第四です。更に、北に心配が無くなれば南に専心できます。これ利点の第五です。これらの五つのメリットを考慮すれば申し出を断る理由がございません」

悼公は喜んで、早速魏絳に講和をさせるために、孟楽と一緒に無終国へやり国主の嘉父と協議を調えさせた。嘉父は山戎の諸国に号令をかけて皆を無終に集め血をすすり盟約を結んだ。

「これより晋侯は覇主となる。中華の盟主として諸戎は決め事を守り、北方を防衛し、互いに侵犯反逆行為はこれを行わず平和を守ること。盟約に背くものあれば天地の神々がお許しにならない」

諸戎はこの盟約を承諾し皆大変喜び、魏絳にそれぞれ贈物をしようとしたが彼は寸毫も受取ろうとはしなかった。諸戎は顔を見合わせて「晋国の使者がこんなに廉潔な方だとは」

悼公は魏絳の復命を聞いて大いに喜んだ。

今日の会議でも僖公は堅守で晋の救援を待とうと考えた。しかし駢は「諺に『遠くの水は近火を救わず』」と申します。是非とも楚に付くべきです」

『韓非子』説林上「人を遠くの越に飯^イ借りて溺子^ニを救ふ。越人善く遊泳ぐと雖も子は必ず生きず。失火して水を遠の海に取る。海水多しと雖も人は必ず滅消せ。遠水は近火を救わざればなり。守屋主韓非子の人間學^ニ」は訳者

方なく承諾した。荀罃は韓厥の後任として中軍の元帥となり鄭討伐の大軍を出した。虎牢ころうまで来ると鄭が講和を求めてきたので荀罃はそれを認め

め晋軍は引揚げた。そうなるに楚共王は自ら親征し、またまた鄭を取り戻し盟約を交わして帰国した。

悼公は激怒し、大夫たちに諮問した。

「鄭は攻めると服従し、引揚げるとまた裏切る。鄭をこつちに貼り付けるいい案はないか」

荀罃が建策した。

「鄭を抑えきれなかった理由は楚に強い戦闘力があるからです。鄭をこちらに帰服させてしまうには先ず楚をぼろに疲れさせる必要があります。そのためには『以逸待勞の計』^{いいつたいろう}をとるべきと考えます」

「どうするのだ」

「兵は何度も動かす事はできません、疲れてしまうからです。諸侯も何度も集めるわけには参りません、何度も呼び出すと怨みを買うことになりです。内では兵の疲れ、外には諸侯の怨みがありどうしても楚に徹底的に勝てないのです。そこで上、中、下、新の四軍を三軍に組み直しそれぞれに諸侯を組合わせ、毎回一軍だけを使い順番に交代して敵にあたります。楚が攻めて来たら我が軍は退き楚が退けば又打って出ます。当方は毎回一軍を動かして楚の全軍を引張りまわすのです。敵は戦おうとしても我が軍が引揚げるので戦えないし、休もうとしても我が軍が攻めていくので休めないというわけです。我が方は休みながら敵は疲れ、我が方は速やかに動けますが敵はそうはいきません。このようにすれば鄭をしつかりと牽制できます」

悼公はその案を大変気に入った。そこで、荀罃に命じ曲梁で大規模な軍の編成替を行い四軍を三軍に分けて輪番制を採用した。

荀罃が指令を出す壇上には、『中軍元帥智』と大書した橙色の国旗が立っていた。彼は本来荀氏であるのに『智』という字を書いたのは何故か、理由は次の通りである。荀罃、荀偃は叔父甥の間柄でどちらも大將だからよく間違いがあつた。そこで荀罃の父親の封地が智邑であり、荀偃の父親は晋が三行を採用した時中行将軍だつた事からそれぞれ智氏、中行氏と改名し、荀罃は智罃といい、荀偃は中行偃と名乗つたのである。荀罃が決めたこれによつて軍中も見間違ひ聞き間違ひの混乱が無くなつたという事である。壇下で次の三軍ができた。

第一軍 上軍元帥荀偃、副將韓起、魯国、曹国、邾国の三國、中軍副將范匄後詰。

第二軍 下軍元帥欒黶、副將士魴、齊国、滕国、薛国の三國、中軍上大夫魏頡後詰。

第三軍 新軍元帥趙武、副將魏相、宋国、衛国、小邾国の三國、中軍下大夫荀會後詰。

荀罃は、第一次上軍出征、第二次下軍出征、第三次新軍出征と伝令を発し、中軍の将兵は分かれて後詰となった。鄭との盟約を取る事が目的であるから楚との交戦は絶対許さなかつた。

ところで、悼公には揚干という同母の弟がいる。今年やつと十九才で初めて中軍戎御（君主の戦車を御する役）の職をもらつたばかりで、若いので血氣盛んだが戦陣の経験はまだ無い。鄭国を討つと聞くと手ぐすねを引き、一軍を率いてすぐにも敵に殴りこみたいと思つていた。しかしなんと智罃の軍隊編成の中に彼は名前もなかつた。カチンときて、死力を尽くすから先鋒にして欲しいと申出てきたが智罃は、

[∞] 以逸待勞の計 鋭氣を養つて、疲れた敵にあたる計 『孫子』十三篇第七軍争篇 近きを以て遠きに待対し、逸元氣を以て勞疲れに待し、飽を以て飢に待す。

「わたしが軍の編成替をした本旨は、ただ迅速に進軍撤退を行なうだけで、戦闘を行って功を立てるものではありません。編成作業はもう終りました。若將軍は武勇に優れておられますが、今回はその必要がないのです」

と説得したが聞かない。

「そんなに強くお望みでしたら、暫時中軍の荀大夫のもとで新軍の後詰をお願いします」

「新軍は第三次出陣じゃないか、そんなに待ちきれない。一軍に替えてくれないか」

智罽は承知しなかった。揚干は悼公の弟である事を待み、命令を聞かず自分の兵を率いて中軍の副將范匄はんがいの後ろに並んだ。司馬の魏絳が命令によって隊列を檢閲していたが、揚干が規律違反を犯しているのを見つけないで太鼓を打って皆に知らせた。

「揚干殿が元帥の命令に違反し隊伍の秩序を乱しました。本来軍法に照らして斬首する所ですが、ご主君の弟君である事を鑑み、ひとまず彼の御者を処刑し以って軍の肅正を行います」

と言って部下の將校に命じ、直ちに揚干の御者を捕えて斬り、壇の下にその首級を掛けた。軍中は肅然とした。この揚干は幼い時から貴人を笠に着て傲慢放縱で軍法を知らず、自分の御者が目の前で斬られるのを見て、驚いて全身が震えた。一方では公衆の面前で体面を傷付けられ怖くもあり恥かしくもあり恨みを抱いて軍營を駆け出し悼公の前へ行つて、魏絳に恥をかかれ諸將に面目丸つぶれだと泣いて訴えた。悼公は弟の心を思つて深くも考えず、

「魏絳がわが弟を辱めたのはわしを馬鹿にしたようなものだ。絶対許

せん、魏絳は必ず斬る」

といきり立つて、中軍の副尉羊舌職ようぜつしやくを呼び出して魏絳を捕えに行けと命じた。羊舌職は、

「魏絳は志操の固い男です。難を避けたり、罪を逃れたりには致しません。軍でやる事が終われば必ず自首してまいります。臣が捕えに行く必要はございません」

と悼公に答えた。彼の言う通り、やがて軍隊でやるべき事が終わると、魏絳は右手に劍を持ち、左手に書簡を捧げて自首して来た。王宮正門まで来ると、悼公が自分を逮捕すると言っているのを耳にしたので、従者に書簡を献上させ、自刎しようとした。そこへ下軍副將士魴しやうと主候大夫張老が息せき切つて駆けつけて来て、急いで自刎しようとする魏絳の劍を取上げた。

「司馬殿が参内したと聞いてきつと楊公子の事だと思つて二人で殿に事情を説明しようと急いでやって来たのです。どうして命を粗末なさるのです」

魏絳は晋侯が羊舌大夫に自分を逮捕するように命じた事を話した。

「司馬殿がなさった事は国法に基づく公正無私な行為であり、決して死ぬ事はありません。わたし達が書簡を殿にお届けしましょう」

といつて三人で宮門へ行き、先に二人が悼公に拝謁して魏絳の書簡を呈上した。悼公はそれを開いて読んだ。概略以下の通り。

臣はご主君にお認めいただき中軍の司馬を拝命いたしました。『三軍の運命は元帥の采配による、元帥の采配は命令によつて行われる』と申します。もし命令が守られず、実行されなければ、河曲の戦い、

邲城の敗戦の二の舞でございます。臣は命令に従わなかった者を誅殺し司馬の職を全う致しました。しかしそれがご主君の弟君でございますので臣自身の罪は万死に当たる事を承知致しております。御前にて自裁致し、ご主君の弟君をお思いになられるお気持ちにお報いいたしたく存じます。

「魏絳は今何処にいるのか」

「絳は罪を恐れて自決しようとしておりましたところを臣等が引き留め現在宮門でご裁決をお待ちいたしております」

悼公は身の毛がよだつ思いですぐ席を立ち靴を履く間もどかしくはだして宮門へ向かった。そして魏絳の手を取って詫びた。

「わしが言った事は兄弟の私情だ。そなたが行った事は軍の国務である。わしは弟を教え諭す事もできず軍紀の大綱を曲げるところだった。誤りはわしの方にある。申し訳ない、卿は早々に原職に復帰するように」

「殿は絳をお許しになられた。絳は退つてよろしい」

と羊舌職が傍から宣言し、魏絳は叩頭して『不殺の恩』に感謝し、羊舌職と士魴、張老も叩頭して挨拶し、この名君であれば覇業の事も心配なしと喜び合つて四人揃つて退出した。

悼公は内宮へ戻り揚干を呼んで、

「法をわきまえないそなたのために、わしはもう少しのところで大切な将を殺すところだったじゃないか」

と厳しく叱り、彼を公族大夫の韓無忌の所へやつて三ヶ月礼法を学ばせそれが終わるまで謁見を許さなれと言った。揚干は恥かしそうに鬱々

として下がつた。髯翁詩に言う。

軍法は公族といえど乱行を許さず 中軍司馬霜烈なり
覇主を志す悼公 忠臣を剣下に失なう事ができようか

智罃は分軍之法が決まったのでいよいよ鄭討伐を考えていた。その時突然宋から手紙が届いた。楚鄭両国が度々宋の国境に攻め込んで来ており、偃陽国（現山東青峰県）を取つて軍用道を確保しようとしていると言う。

上軍元帥の荀偃が提案した。

「楚が陳、鄭を取り今また宋を侵略しようとしているのは、晋と覇権競争をしようというものです。偃陽は楚が宋を攻めるための道です。機先を制して偃陽を攻めればすぐ落とせます。以前彭城を攻めたとき宋の向戌に功績がありましたので彼を偃陽に封じ属国にして楚の道を断つという考えも有ります」

「偃陽は小国とはいえ非常に堅固な城だ。もし攻めて落とせなかったら諸侯の笑い種になつてしまふぞ」

智罃はちよつと心配していた。

「彭城の役では我が方が鄭を討とうすると楚は宋を攻めて鄭を助けました。虎牢の役では我が方が鄭を取りましたが楚はやはり宋を攻めてこれに応じました。今回鄭を攻めるに当たりましては宋を固めておく必要があります。荀偃殿が言われるのはこのことです」

中軍の副将士魴が荀偃の意見を援護してそう言った。荀罃は念を押した。

「お二人は偃陽を落とす自信はあるか」

。河曲戦：晋対秦 趙盾の命令違反で秦を逃がす。邲城の敗戦：晋対楚 趙盾の命令違反で大敗

「万一失敗した場合は軍令の処置に従います」

伯遊はくゆう（荀偃）が発案し伯暇はくか（士匄）も賛成するのだから心配する事はなからう」

と悼公は二人の自信を見て心を開いて直ちに許可した。そこで第一軍と魯・曹・邾ちゆうの各国軍を発動し偃陽えんやうを攻めた。

偃陽では大夫婁斑ろうはんが、

「いま魯軍が北門に陣を構えております。わたしが門を開いて打って出るときと魯軍は城に攻入って来ますから半数ほどが入った頃に門を閉ざし入った兵を皆殺しにします。魯が敗れたら曹も邾も恐れをなし、晋軍の鋭気も挫けるはずです」

と献策して、君主はすぐ彼の意見を採用した。

さて、魯軍の方では孟孫蔑もうたんべつが部下の叔梁紇しゅくりやうこつ、秦蕞父しんきんほ、狄麂弥てきしびを率いて北門を攻めていた。ふと見ると吊り門が開いていた。蕞父は麂弥と勇躍城に攻め込み、叔梁紇もこれに続いた。突然ガラガラという大きな音と共に吊り門が叔梁紇の頭上から落ちてきた。紇は戈ほこを投げ出し落ちてくる門を両手で軽々と支えた。秦父、麂弥は後方から引揚げの鐘が聞えてきたので後方で何か変事が有ったかと急遽引揚げた。婁斑が大量で後を追った。すると城門で大男が吊り門を手で支え、引揚げてくる味方を逃がしていた。

「この門が落ちてきたら千斤(250 kg)どころの重さではないぞ、何という力だ。おっとり刀で出て行行って奴に門を落とされたら外に締め出されて大変な事になる」

婁斑はそう考え追跡をやめ眺めていた。叔梁紇は晋軍が全員引揚げるのを待って、

「魯で名の聞えた上將叔梁紇しゅくりやうことは我の事なり。城を出て戦おうと思ふもののはわしが手を離さないうちに速く出る」

と大声で叫んだが城中からは誰も応じるものはいない。婁斑は弓を引き絞り紇を射ようとしたが叔梁紇は両手を離さずと体をよけると、吊り門はガシャンと落ちた。

紇が本営に帰り蕞父と麂弥に、

「あんた達の命はわしの両腕にかかってたんだぜ」

と言うと、蕞父、麂弥はそれぞれ、

「引き金が鳴らなければ偃陽城に攻入り大功を手にしたのになあ」

「明日は見てろ、一人で偃陽えんやうに乘込み魯人の力を見せつけてやる」といきまいた。

翌日、孟孫蔑は城攻めを行なうのに、部隊を百人毎に一隊の編成として攻撃する事にした。

「わしは一人でいい、手伝いは要らん。一人で一隊だ」

狄麂弥はそう言って大型の車輪を二つ見つけてきてしっかりと装甲し、左手にその輪を持って盾にして右手に矛を持って敵の中を飛ぶように跳び回った。偃陽城えんやうの上では魯將の勇猛な姿を見ていて一計を考えつき、城の下へ長い布を垂らし下に向って叫んだ。

「登城の手助けをしてやろう、この布に捉まって城に上がってくる勇気のある奴はいるか。それこそ本当の勇士だ」

「俺がやる、その位の勇気がなくてたまるか」

と魯軍の中から大声を出した者がいた。秦蕞父しんきんほである。両手で長布を掴みスルスルとあつという間に城頭にたどり着いたが、城の兵士に布を

刀でブツンと切られ秦董父はもんどりうって落ちて行つた。城壁の高さは数仞（じん 1仞は1.6m）^{1.6m}る。他の者ならたとえ死ななくても重傷を負うところだが、秦董父は何ともない。城の上からもう一度布を垂らされた。

「もう一度やれるか」

「やらいでか」

董父は挑発に乗ってまた布を伝わって登つたが同じくまた切られて落ちて立ち上がったところへまたまた布が下つてきた。

「もう一度やる勇氣はあるか」

「やらないきゃ男じゃない」

董父は声を荒げて言つて前と同じく布を伝つて登つた。こんな事を二度も続けても顔色も変えないので城の上の兵士達は却って泡を食つた。急いでまた布を斬ろうとした時董父に兵士が一人捕まつて城壁の下へ投げ落とされぐしゃぐしゃになった。董父は布を伝つて下りて、逆に城の上に向かつて叫んだ。

「未だやるのか」

「將軍の神勇は十分見せてもらつた。もう止めた」

秦董父は得意になつてその二本の布を持つて軍中を見せびらかせて回ると、見るものは皆古を巻いた。

『力虎の如し』とはこの三將のようなことを言うんだな

孟孫蔑は感心してそうつぶやいた。

玁狁は魯將がいずれ劣らぬ猛將なので出て戦う事を禁じ、堅守に徹する事にした。各軍包圍攻撃は四月丙寅に始まり五月庚寅まで二十四日になるがまだ落ちず攻撃側に倦怠感が出てきたしたが城側はまだ余力がある。

突然大雨になった。平地でも水深三尺程になり軍中是不安に襲われた。荀偃、士匄は出水のため不測の事態が起こることを心配して、荀偃に撤兵を要求するために一緒に中軍へ行つた。

さて荀偃は撤退を認めるでしょうか、それは次回のお楽しみ。

孫林父 歌『巧言』を聴き衛侯を追放

かくようじやう

晋及び諸侯軍が偪陽城を包圍し二十四日になるがまだ落とせず、そのうち大雨になり大水が出て平地でも水深が三尺になった。荀偃、士匄は軍に不測の事態が起こることを心配し一緒に中軍の智罽を訪ねて進言した。

「小さい城だから容易に落とせると思つていましたがこんなに長引き、しかも大雨になり夏ですから洪水の季節です。西には泡水、東は薛水、北東の方には郭水があり三水は皆泗水につながっています。万が一雨が止まなければ三水は溢れ撤退も容易ならざる事になります。ここは一度引揚げ出直すべきだと考えます」

智罽は激怒して、手元のもたれ机を二人に投げつけ怒鳴りつけた。

「わしは事前に『この城は小さいが堅固だから攻略は容易ではない』と言つたが、そなたたちは殿の前で大見得を切つて引受け、わしを引張り出してここまで来たんじゃないか。長い間包圍して何の進展もない。たまたま雨が降つたら帰りたいだと！来る時はそなたたちの意見に従つたが帰る時は勝手にしません。七日待とう。それまでに偪陽に決着をつける。さもなければ軍法に照らし斬首だ。さつさと行け。二度と来るな」

二人は驚き顔は土色に変わり、言われたままハツ、ハツと答えて引下つた。そして部隊に帰り部下の將士に言つた。

「元帥は七日間でこの城を落さなければ我々を斬首すると厳令を發せられた。それ故そなたたちにも期限を決める。六日間で落さなければ

先にそなたたちを斬り、その後で我々は自刎して軍法に従うつもりだ」

諸將はお互いに顔を見合わせた。二人は更に加えた。

「軍中に戲言はない。我われはこれより矢も飛礮も恐れず昼も夜も休まず攻撃し絶対に引下らない、前進あるのみだ」

魯、曹、邾三国にもこの旨を伝え一斉に攻撃に入った。水の勢いは少しづつ引き始めたので偃も勾も城の上から雨あられのように降り注ぐ矢や礮をものともせず率先して攻撃した。庚寅の日に攻撃を開始し甲午（五日目）には城中の矢、礮が無くなつてしまった。荀偃が城楼に攻め登り士匄もすぐそれに続き、続々と蟻が這い上がるように勢つて攻め上り城内に攻入つた。垢斑は市街戦で戦死した。偪陽の君主は大夫達を引連れ跪いて智罽を迎え投降した。智罽は君主一族を全員中軍に留置した。使つた日数はただの五日間だったが、もし智罽のあの一喝が無ければ落せなかつたかもしれない。

鉞を掲げて登壇すれば絶対の権限 越権を何ぞ赦すべし
小机一投すれば三軍畏れ 堅城鉄壁何をか恐れん

（鉞：まさかり）

悼公は偪陽がなかなか落ちないのを心配して精兵三千人を選抜し自ら助勢のために出陣し、楚丘まで来たところで智罽の捷報に接した。悼公は宋に使者を出し偪陽を宋の向戌に封じようとしたが、向戌は宋平公と一緒に晋侯に会いに来て、どうしても受封を断るので結局平公に与えた。宋、衛両君はそれぞれ宴を設けて悼公を款待した。智罽が魯の三將の武勇譚を話すと悼公はたいそう喜びそれぞれに軍服を与えて帰し

鉞まさかり。昔天子 君主が將軍に征討を命じる時 生殺の権限を与えたるしとして授けた斧鉞ふろ。

た。偃陽の君主は楚を助けた咎で庶人に落とし、一族の中の賢者を選び霍城に住ませ、咎姓を継がせ先祖の祀を行わせた。

その秋、荀会が亡くなった。悼公は魏絳が法の執行能力があるので彼を荀会の代わりに新軍の副将にし、張老を司馬に任じた。

その冬、第二軍が鄭討伐に出陣し牛首に駐屯し、虎牢の軍を加えた。折しも、鄭では尉止が反乱をおこし公子駟、公子癸、公子軫を殺したが、公子の子息たちが家兵を率いて賊を攻め、公孫蠆も援兵を出して尉止の一党を誅滅するという事件が発生し、公子嘉が上卿になっていた。

「鄭は内乱で余裕はないでしょうから、急襲すれば抜けます」

と欒黶が言ったが、智罃は、

「相手の内乱に乗じるのは不義である」

と言つて攻撃を緩めた。公子嘉が使者を出して講和を求めて来たので智罃はこれを認めた。楚の公子貞が鄭の救援に来たが時すでに晋は全てを終えて引揚げていたので、鄭は又楚に寝返った。春秋左氏伝には悼公は三度出兵し鄭を帰服させたところがあるがこれはその最初の周靈王九年（紀元前五六三年）の事である。

翌年の夏、悼公は鄭がまだ帰服していないので、第三軍に鄭討伐を命じた。宋の向戌軍が最初に東門に到着した。衛の上卿孫林父軍は小邾国の軍と一緒に北鄙に駐屯し、晋の新軍元帥趙武等は西郊外に本営を構えた。荀罃、智罃は大軍を率いて北林から西に堂々と鄭の南門へと進み各軍予定通り攻撃態勢を整えた。鄭君はまたも恐れて使者を出して講和を求め、荀罃もまたこれを許し兵を宋国まで撤退させた。鄭簡公は自ら亳城の北まで出向き諸軍をねぎらい、荀罃は簡公と血をすすつて盟約を結び、晋宋各軍は解散した。これがいわゆる三度の出師の

二度目である。楚共王は怒つて、公子貞を秦へ遣つて鄭討伐の援軍を頼んだ。秦景公の妹が楚王夫人であり両国は婚姻関係にあったので、この依頼を承諾し嬴詹を大将に戦車三百乗を率いて楚の助勢に出した。共王も自ら大軍を率いて、

「鄭を滅ぼしてしまふまでは絶対に帰国はしない」

と誓つて滎陽に向けて進発した。

さて鄭簡公は自ら亳城へ出かけ晋と盟約を交わして帰ると、楚軍が間もなくやつて来ることがわかり群臣と協議した。大夫たちは、

「現在の力関係は楚は晋に及びません。しかし晋は来援は遅く、帰るのは早いのでまだ両国は直接交戦していません。晋が必死になれば楚はかなわず引き下るはずです。ですから此処は晋につくべきです」

ということ晋につく事に一致し、公孫舍之がさらに進言した。

「晋を必死にさせるには怒らせなければなりません。怒らせるには宋を攻めるべきです。晋宋は非常に親密ですから我々が朝に宋を攻めたら晋は怒つて夕方にはこちらへ攻めて来るでしょう。晋がやつて来れば楚はかなわず引くでしょうから楚への言い訳が立つわけです」

大夫たちはこの案に大賛成した。

会議中諜報員が楚は秦の援軍を得ているという情報を探り当てて来た。

公孫舍之はこれ聞いて、

「これは天が晋に付けという事です」

と喜んで言った。大夫たちはその意味が解せない。舍之は加えた。

「秦楚に攻められたらとてもたまりません。彼等が侵入してくる前にこちらから出向いて宋を討つ案内役を買つて出るのです。そうすれば楚

を懐柔する事ができるし、晋を怒らせて早く来させる事もできます。一挙両得じゃないですか」

簡公はその意見を採り、公孫舍之に命じ單車で夜を徹して南へ走らせた。潁水えいすいを渡り一舍(12km)程行ったところで楚軍に出遭った。公孫舍之は車を下りて楚王の馬前に拝伏した。楚王は激しい表情で怒鳴りつけた。

「鄭は寝返りを繰返し信用できん。わしは今決着をつけに来た。お前は一体何しに来たんだ」

「わが主君は常に大王の恩徳を感じ大王のお力に畏敬の念を持ってございまして、終身一庇護をお受けしたいと願っております。ましてや盟約に違背しようとの気持ちには寸毫もございません。しかしながら晋は宋と一緒になつてわが国への暴虐、侵攻が絶えません。わが主君は社稷が失われる事を心配して晋と一時的に講和を行ないとりあえず晋軍を引揚げさせております。晋軍は撤退しましたので、鄭は以前どおり大王にお仕える国でございします。主君は大王にわが国の誠をご理解いただければいけないと心配致しまして、特に臣を遣わしお迎えに上がり誠の一端をお示し致すものでございます。もし大王が宋を攻めるお考えでありますしたらわが主君は先頭に立つて大馬の労をいとわず、誓約に違わぬ事を明らかに致します」

公孫舍之の話に共王は怒りを鎮め喜びの表情に変わった。

「鄭君がわしの宋討伐に従うというのなら何も言う事はない」

「弊職が発発する時には軍事費用の準備は終えておりまして、先鋒となるべく大王が東鄙へお越しになるのをお待ちいたしております」

「その計らいはありがたいが、秦の庶長(嬴詹)と滎陽城下で会うことになっているからそれからしよつ」

「秦国は非常に遠く晋、周を通らなければ鄭には来られません。ご使者を出されてお断りになられたら如何ですか。大王の威厳と楚軍の力があれば西戎(秦)の力など借りる必要はないんじゃないでしょうか」

共王は喜び秦の援軍を断る使者を出し、公孫舍之と一緒に東へ進軍した。有莘ゆうしんで鄭簡公の軍と合流して宋を攻撃し大掠奪を行つて帰った。

宋平公は向戌を晋に派遣し、楚鄭連合軍の行状を訴えた。悼公は案の定怒つて即日出兵しようとした。今度は順番で第一軍の番である。

「楚が秦に援軍を頼んだのは毎年の出陣に疲れが出てきたからでしょう。我われが一年に二度出兵すれば楚は果たして出て来れるでしょうか。力強さを示し意志を強く持てば今回は鄭を手に入れます」

悼公は智罃の進言に従つて、直ちに宋、魯、衛、斉、莒、邾、滕、薛、杞、小邾の各国を一斉に鄭に集合させ東門で閲兵を行った。途中非常に沢山の捕虜や戦利品があつた。この出兵は左氏伝にいう悼公の鄭への三度の出師の三度目である。鄭簡公は公孫舍之に言った。

「そなたは晋を怒らせて速く来るようにしむけ、その通りやつてきたがこれからどうする」

「晋に講和を求めると同時に楚にも使者を出して救援を頼みます。楚がすぐに来れば当然両者戦いになりますから勝つた方につけばいいし、楚が来なければわたしが晋との盟約を結びます。十分なみやげを持つていけば晋は必ず我われを庇護しますから楚を心配することはありません」

簡公もそれを了承した。そして大夫伯駢を晋へ遣つて講和を求めさせ、公孫良霄と太宰石穀を楚に遣つて次のように言わせた。

「晋軍が十一国を率いて又もや攻めてまいりました。その勢いはすさまじく鄭の存亡は旦夕に迫っています。どうか大王のお力を持つて晋を

屈服させていただきたくお願いいたします。もし救援いただけない場合は鄭の社稷は保てなくなり止むを得ず晋に下らざるを得ません。その時は何とぞ哀れと思し召してお許し願います」

楚共王は怒って公子貞を呼びどうすべきかたずねた。

「当方の兵は帰ったばかりでまだ息が静まっていけないほどで、とても再出兵できる状態ではありません。しばらく鄭は晋に譲り後日取り戻す事にすればいいことで心配には当たりません」

と公子貞は答えた。楚王は怒り覚めやらず使者の二人を軍中に拘留し返さなかった。髡仙詩にうたう。

楚晋 兵を交え累世の仇敵 繰返す波状攻撃に楚軍動けず

使者に何の罪ありて拘束するや 楚軍始めて知る分軍の妙計

(分軍の妙計→以逸待勞の計 第③回注に⑧)

この時晋軍は蕭魚(河南許昌)に本営があつた。伯駢が晋軍へ行く
と悼公は声を荒げて言つた。

「そなた達、講和するといつてわしを騙したのは一度だけじゃないぞ。今回も我が軍の矛先を緩める策じやないだらうな」

「わが主君はすでに楚に使者を出して絶縁を告げております。決して二心はございません」

「わしはそなたに対し誠意をもつて対処している。もし再び背くような事があればこれは諸侯を騙す公悪である。もうわし一人の問題ではない。帰って十分鄭君と相談して出直して来なさい」

「我が主君は薰香沐浴して弊職を遣わしました。本心から鄭国を君侯にお任せいたしたく存じております。どうかお疑いなきよう伏してお願ひ申し上げます」

「貴国の気持ちがそこまでしっかり決まっているなら盟約を結ぼう」
悼公は新軍元帥の趙武に命じて伯駢と一緒に鄭に入城させ鄭簡公と盟約を結ばせた。簡公も公孫舍之を趙武に同道させ悼公の陣へ遣つて盟約を結ばせた。

この年の十二月、鄭簡公は自ら晋軍を訪れ諸侯に会い改めて盟約を結びたいと要請した。

「盟約はもう終わっています。あなたにそのお心があるのでしたら神がご覧になっています、あなたを信用していますからその必要はありませんよ」

悼公はそう言つて、

「途中で得た鄭国の捕虜は全員縄を解き帰国させる事。鄭国のものは寸毫たりとも犯す事を禁ずる。違反者は軍法に照らし処罰する。虎牢の兵は全員撤退せよ、鄭国軍の自主防衛に任せる」
と命じた。諸侯はみなそれを引き止めた。

「鄭はまだ信頼できません。また寝返った場合再びこのように軍を集めるのは困難です」

「長い間諸国の將士は苦勞してきたが、もう恨みは解消する時期だ。これから鄭とは新しい付き合いが始まる。信じて任せなきや。わしが鄭に違背しなければ鄭もわしに背く事はないじやないか」

悼公はそう言つて鄭簡公に、

「兵も疲れているだらう。お互いに休もう。今後晋につくか楚につくかそれはあなたの考えで決めればいい、わしは強要はしない」
とやさしく言つた。簡公は感激の涙を流して、

「あなた様は誠を持つて人に接しておられる。禽獸といえどもこれに

感動しないものではありません。ましてわたしも人間の端くれです、どうしてこのご恩を忘れられましょう。再び寝返るような事があれば神のお裁きがございましょう」

と言つて帰つて行き、翌日公孫舍之に感謝の贈物を届けさせた。それは樂師三人、女樂人十六人、歌鐘三十二個などの樂器、刺繡の女工三十人、特殊戰車十五乘、その他武器及び兵士をつけた通常戰車百乘というもので、悼公はこれを受取り、女樂人八人と歌鐘十二個を魏絳きこうに与え、「そなたは諸戎狄と和を図ることを教えてくれ、諸侯をなつかせる事ができた。諸侯は音楽の和のように心服している。そなたと一緒にこの音楽を楽しみたいものだ」

と言ひ、また、戰車の三分の一を智罃ちおうに与え、

「わしに以逸待勞の法を教えてください、楚をくたくたにさせて鄭と講和することができた。これみなそなたの功である」

と言つと、絳、營よう兩將とも叩頭し、

「これらは皆、殿のお力と諸侯のご苦勞に乗つただけでございます。臣らの力などどれ程もございせん」

と言つて辞退した。

「卿たちがいなければ今日のわしはない。そう言わないで受取つてくれ」

悼公が強くそう言うので二人とも拝受した。

同日、十二国の軍はそれぞれ引揚げた。帰国後悼公は各国へ挨拶の使者を送り援軍の勞に対し謝意を述べたので諸侯たちは悼公の配慮を喜んだ。これより鄭国は心から晋に臣従し二心を抱くことはなくなった。

鄭の猿の如く繰返す向背 晋伯その変節を改心せしむ

爾後二十四年の臣服を見て 今こそ知る兵戈は忠信に如ず

この時秦景公は鄭を救援のため晋討伐に出て、櫟れきで晋を破つたが、既に鄭が晋に下つた事を知り撤退した。

翌年周靈王十一年（紀元前五六一年）呉の君主寿夢は危篤になり、諸樊しよはん、余祭よさい、夷昧いまい、季札きさつの四人の息子を枕元に呼び、

「お前たち四人の内では札が最も賢人である。札が立てば呉は万々歳だ。わしはずっと札を世子せいしにしようと思つていたが、何しろ本人がどうしても『うん』と言わない。わしが死んだら、位は諸樊から余祭、夷昧それから季札へと伝えなさい。必ず孫ではなく弟に伝えるように。必ず季札を君主にさせなさい、それが呉の社稷しゃいくのために幸せなんだ。わしの遺言に逆らうやつは天佑がなくて必ず不幸になる」

そう言い終わつて亡くなった。諸樊は国を季札に譲つて、

「これは父上のお考えなのだ」

と言つと、季札は、

「わたしは父上のご存命の時に世子をお断りいたしております。父上が亡くなられてから君位を受けるなどということはできません。兄上がこれ以上わたしに譲ろうとなさるのでしたら国外に逃出さざるをえません」

と強く断るので、諸樊はやむを終えず、次に余祭に継承する事を宣言して父親の命に従ひ即位した。晋悼公は使者を派遣して弔賀の意を表した。

翌年周靈王の十二年（紀元前五六〇年）、晋將智罃、士魴、魏相が相次いで亡くなった。悼公は綿山で練兵を行い土匄しがいを中軍の將にしようと思つ

「命令が不明確だったのはわしに問題があったのだ。命令が行われなければ成功はおぼつかない」

「と言って諸侯軍を各国へ歸し晋軍も撤兵することにした。」

しかし下軍の車右欒鍼らんしん（欒廩の弟）は一人だけ撤退せず范匄はんかい（士匄）の子范鞅に言った。

「今回は秦に報復する事が目的だから何もしないで帰ったのでは恥の上塗りになる。我われ兄弟で軍にいたのに一人とも引揚げてしまうなどという事はとてもできない。どうです、わたしと一緒に秦軍を攻めませんか」

「あなたが国の恥を思つて言うのであれば、鞅も是非お供しましょう」
そう言つてそれぞれ自分の部隊を率いて秦軍へ討ち入つた。

一方、秦軍の方では、秦景公が大将嬴詹及び公子無地を率い四百乗の戦車を出して椹林よくりんから五十里ほど離れたところに駐留し斥候を出して晋軍の動静を探つていた。ふと見ると東の方に砂埃が上がり一団の軍馬が駆けてくるではないか。直ちに公子無地に迎撃させた。欒鍼は勇猛に攻撃を仕掛け、范鞅も彼を助け奮戦し次々と十数人の甲首を取つたので秦軍は潰走しそうになった。しかし晋軍に後続軍がないのを知つて再び攻撃を仕掛けてきた。

「秦軍の兵力は多くてとてもかきません」

と范鞅が言うが欒鍼は聞かない。そのうち嬴詹の大軍が押寄せてきた。欒鍼は奮闘したが七本の矢を受け力尽きて死んだ。范鞅は兜を脱ぎ一人きりになつて単車で逃げ切つた。欒廩は范鞅が一人で帰つて来たのを見て、

「弟はどうした」

「秦軍中で亡くなりました」

欒廩は怒つて矛で范鞅を刺殺そうとした。鞅は敢えて反抗せず中軍へ逃げ込んだ。廩は後を追つて来た。

「媚殿、いったい何をそんなに怒っているんです」

范鞅の父親の范匄が廩に言つた。欒廩の妻欒祁は范匄の娘なのである。欒廩はかかん人に怒つていて押えきれず、怒鳴つて答えた。

「あんたの息子がわしの弟を誘つて秦に殴り込み、弟は死にあんたの子は生きて帰つて来た。あんたの息子が弟を殺したんだ。鞅を追放すると言ふなら許してやるが、そうでなければわしが鞅を殺して弟の命の償いにしてやる」

「それは知らなかった、それなら追放も止むを得ないかもしれんな」
范鞅はそれを聞いてすぐ秦へ出奔した。秦景公は何しに来たのかと訊ねた。范鞅が事の次第を説明すると、景公は大変喜び客卿の待遇を与えた。

ある日、景公がたずねた。

「晋君はどういう人だ」

「賢君です。部下をよく知り適材適所に配置します」

「晋では誰が一番賢人と言えるかね」

「趙武は仁徳があり、魏絳は勇猛なるも乱れません。羊舌肸は春秋に造詣深く、張老は信に篤くしかも智謀の人です。祁午は事に臨んで沈着であり、父范匄は大切な道理をわきまえる事ができます。その他の公卿も皆法令規則をマスターしそれぞれの職位をきちんとこなしており、わたくしなどが誰が一番などと軽々に申し上げる事はできません」

「それでは晋の大夫の中で誰が一番に滅びると思ひますか」

「欒氏でしよう」

「身分不相応に驕っているからだろうか」

「それでも欒廩らんゑんまでは先祖の余慶が及んでいられるかもしれませんが、彼の子盈えいまではおそらく持ちますまい」

「どうしてそう思うのです」

「欒武子らんぶし（欒廩）は民をいたわり士を愛しましたので人々は皆彼に従っていました。君主れいこう 厲公れいこう 弑逆問題は有りましたがそれを彼の非とはせず彼の徳を称えました。民が召公奭を想い甘棠の木を愛したという故事ことがありまますように人々が欒書の子欒廩を大切にするのは当然です。しかし、欒廩が死ねば、その子盈の善さは未だ人々には及んでおらず、欒書の徳は遠く昔のことで、欒廩への恨みが吹き出すのはこの時でしょう」

「卿は人の存亡が見えるんですね」

と景公は驚いて言った。

景公は范鞅はんかうに父親の范匄はんがいを紹介してもらって、庶長武聘を晋に派遣し晋侯との旧交を修復させ、あわせて范鞅の復位を頼んだ。悼公は承諾し范鞅は帰国した。悼公は范鞅と欒盈を公族大夫に任命し、欒廩に人の恨みを買わないよう注意した。これより秦、晋は友好関係が続き春秋の終わりまでお互いに干戈を交える事はなかった。

東西の隣国代々姻戚なるも 一度仇となれば争い日々新なり

甘棠の愛 召公奭はよく衆民の和をもたらした。郷邑を巡視した時甘棠の木の下に訴訟を聞き政事を決した。侯伯から庶民に至るまで各々その所を得て職を失う者はない。召公が死んでも人民は召公の政治を思ひ、甘棠の樹を懐かしんであえて切らずこれを歌詠して「甘棠の詩」詩経 召南甘棠を作した（「史記 燕召公世家」）

玉帛贈り干戈収めば 本来仲良き事は美しきなり

この年欒廩が亡くなり子の欒盈が後を継ぎ下軍の副将になった。

話変わって、衛国に話題を移す。衛献公名衎は周簡王十年（紀元前五七六年）に父定公から位を引き継いだ。喪中も謹慎しないので嫡母の定姜はこれでは位を維持できないと心配ししばしば諭すけれど全く聞かない。位に就いてから恣意放縱が益々ひどくなり、周りは媚びへつらう連中ばかりで、一日中酒か狩りかに耽っていた。定公は存命中から同母弟の公子黑肩を可愛がり彼に国政を任せていた。黒肩の子公孫剽は父の爵位を継ぎ大夫となり非常に権謀術数に長けていた。上卿孫林父や亜卿あけい 甯殖は献公が道に外れた行動が多いので剽と誼を通じた。林父は更に密かに晋と結び外の協力者とし、国内の金めの物を戚邑に移動し、妻子をそこに住ませた。献公は彼に叛心ありと疑ったが、確証がない事、孫氏に強い軍事力がある事もあり自重していた。

ある日、献公は孫、甯両卿と昼食の約束をした。二卿は正装してお呼びがあるのを門で待機していた。早朝から真昼まで待ったが誰も呼びに来ないし、宮中から誰一人出てこないのに変に思っていたがそのうち日が西に傾き、腹は減るし眠気も差して我慢できず宮門を叩いて門衛の内侍に様子をたずねた。

「主君は裏の庭で弓をなさっております。お二人さま、用でしたら自分でどうぞいらつしやうて下さい」

二人はそれ聞いて腹が立った。腹が減ったのを我慢して裏の射的場へ行くと、皮冠を被って弓の教師の公孫丁と弓術の競争をしていた。二人

が近づいても皮冠を脱ぎもしないで弓を腕に引っかけ、げんそうにたずねた。

「二卿、何か用か」

「二緒して昼食を賜るという事で臣等は今までお待ち申し上げておりました。大変腹が減っておりますがご命令に背く事もできませんので、ここへ参った次第でございます」

「わしは弓にふけて忘れていた。今日は下つてくれ、日を改めて約束しなそう」

と言いつ終わるとそこへちょうど雁が鳴きながら飛んできたので、二人の事を無視して公孫丁に命じた。

「今度はあれを賭けよう」

孫、寧二人は馬鹿にされたようで恥ずかしく引下つた。

「殿は遊興にふけて媚び諂う連中ばかりを近づけ、大臣たちには微塵の敬意も示さない。このままじゃ我われは将来不測の禍を受ける事になる恐れがある」と思いますが」

と林父が言うと、寧殖も同意見だったので林父は続けた。

「公子剽殿を君主に奉戴したらどうかと思ひますがどうですか」

「わたしもそれがいいと思います。一緒に動きましよう」

孫林父は家に帰り早々に飯を済ませその夜の内に戚邑へ行き、密かに家臣の庾公差、尹公佗等に家兵、兵器を整え謀叛の準備をさせた。さらに長男の孫劄に献公の話し振りを探らせた。

翌日孫劄は宮中へ行って献公に会い、

「父は突然風邪を引きまして気分がすぐれずしばらく河上の住いで療養せざるを得ません。どうかお赦し願います」

「そなたの父親の病気はおそらく腹の減り過ぎが原因だろう。今日はそなたを飢えさせるようなことはしないから心配するな」

と笑いながら言つて、内侍に酒と料理を持ってこさせ、楽人に詩を歌わせ興を添えた。太師（楽長）がどんな詩を歌いましょうかと聞くと献公は即座に答えた。

「じゃ、『巧言』^二の最後の一章をやれ、この歌が現在の情勢にぴつたりだ」

「この詩の言葉には不吉な意味が含まれています、宴会の上で歌うには不適當ではないでしょうか」

傍にいた師曹が怒つて大声で言つた

「殿がやれとおっしゃるのをやればいいのだ、つべこべ言うな」

もともとこの師曹は琴の名手で、献公は彼を愛妾の琴の教師にしている。教えてもできないのがいたので師曹は怒つて十回鞭で打つた。彼女が献公の枕辺で泣いて訴えたので献公は怒つて彼女の前で師曹を三百回の鞭打ちにした。師曹はその後ずっと献公に恨みを抱いていた。彼はこの詩が不吉な意味を含んでいる事を知つていて、実は故意にこの歌を歌わせて孫劄を怒らせようと思つたのである。師曹は朗々とその歌を歌つた。

彼は誰ぞ 河岸にいるやつは

力も勇氣もあらざるに 乱の階登るのか

献公の意図は河上にいる孫林父に謀叛の気持ちがあると疑つており、

二 巧言 詩経（小雅）にある詩 巧言 西周最後の王幽王を非難したもの。

詩を借りて彼を脅そうとしたのである。孫劄そんかくはこの詩を聴いて大変驚きじつと座つておれず、しばらく我慢をしていたが口実を見つけて辞去した。その際、献公は皮肉を込めて、

「今、師曹が歌つた詩を親父に言つておけ。そなたの親父は河上に住んでいるがその一挙一動は全てわしの手のひらにあるようなものだ。十分謹慎して養生するようにとな」

孫劄は叩頭し慌てふためき戚邑へ帰り林父に報告した。林父は、

「殿は我々をかなり警戒しているな。座して死を待つわけにはいかん。大夫遽瑗は賢者として知られているから彼の協力が得られれば非常にやり易くなるのだが」

と考へ、密かに衛都に戻り遽瑗を訪ねた。

「殿が暴虐荒淫だという事はお手前もすでにご存知のはず。このままだと国が減びてしまうかもしれません。ご高見をお聞かせいただけませんか」

「臣下として君主の誤りは諫止すべきは諫止し、それができなければ去るしかありません。他の方法は私にはわかりかねます」

これを聞いて遽瑗の協力は無理だとわかり辞去した。彼が帰ると遽瑗は動乱が起きる事を察知し魯国へ逃避した。

孫林父は丘宮に人を集め宮廷攻撃の準備をした。献公はこれを知つて使者を立て孫林父に講和を求めたが、使者は殺された。献公は寧殖のところへも人を遣つたが、彼も林父に応じて既に軍備が整つていた。献公は更に北宮括を呼出したが病氣だといつて出て来ない。

「事態は急を要します。早く逃げれば或いは活路があるかもしれません」

と公孫丁が言うので、仕方なく宮中の衛士二百人余りを集め宮中を逃

出した。丁が弓を手挟みびつたりと後に従い、一行は東門を開いて齊国へ逃げようとした。孫劄そんかく 孫嘉兄弟はこれを追ひ河沢で追いついてそこで混戦となつた。しかし献公の二百余名の兵たちはみな逃げ散り、残つたものは僅か十数名になつてしまつた。公孫丁は近づくものを無駄矢なく射殺し献公を守りながら戦つては逃げた。孫兄弟も遂に追撃をあきらめて引揚げた。

帰り始めて間もなく兄弟は増援に來た庾公差ゆこうさ いんこうだ 尹公陀に出会つた。

「衛侯を捕えるまで報告に来るなどの相公のご命令です」

「すごい弓の達人がついています。將軍も十分氣をつけてください」

「それは私の師匠の公孫丁じゃないかな」

尹公陀は弓を庾公差に習つたがその公差は公孫丁の弟子なのである。すなわち三人は同じ流れを汲む師弟關係であり、それぞれの技能はお互いよくわかつてゐる。

「衛侯はまだそう遠くへは行かない、とにかく追え」

十五里ほど追つてやつと献公に追いついた。

献公の御者が傷ついたので公孫丁が手綱を取つていたが、ふと振返ると後方を追つてくる者が見え、それが庾公差だと判つた。

「追つてきたのは臣の弟子です。弟子が師匠を殺す道理がありません。

殿、ご心配なく」

と言つて車を止めた。間もなく庾、尹の二人がやつてきた。庾公差は尹公陀に

「やつぱり師匠だよ」

と言つて車を降りて公孫丁に挨拶をした。公孫丁も挨拶を返し彼に手を振つて帰れという。庾公差は車に帰り声高に、

第六十二回

諸侯連合して斉を攻め

晋臣 相謀つて樂盈を追放する

「今日の我々師匠と弟子はそれぞれに主人がいます。もし私があなたを射れば師に背く事になり、射なければ主人に背く事になります。しかし私に両全の策があります」

と言うと四本の矢を車輪に叩きつけて鏃を取り、

「師匠驚かないで下さい」

と大声で叫び、四本を連続して少しも人に傷つけず献公の車の前後横木と左右両側に打ち分けた。射殺す事はできると言う技量を見せつけ、恩を売った。四本の矢を射終わると、

「師匠、お体を大切に」

と言って車を返し帰っていった。公孫丁もまた御者を勤め落ちて行った。

尹公陀は献公を見るとすぐ弓の技量を發揮して功を立てたいと思つたが、師匠の庾公差が傍にいますので勝手な事もできなかった。帰る途中、だんだん後悔の念萌え出してきて、勇気を出して庾公差に言つた。

「あなたと公孫丁は弟子と師匠の間柄ですから恩を売られました。私と彼とは師弟関係は一代離れていますから師の恩より主命の方が大切です。このように功をむさむさどのがしてどのように主人に報告なさいますか」

「そうではないんだ、あの師匠は神箭だ。技量は養由基に劣らず、お前では彼の相手にはならない。むさむさ死に行くな」

尹公陀は庾公差の言う事が信じられず、すぐさま自分一人で引返して衛侯を追つた。

この結末如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

さて、尹公陀は庾公差の言う事を信じないで再び衛公を追ひ、二十余里走つてやつと追着いた。公孫丁は振向いて来意をたずねた。

「わが師匠とあなたは師弟の恩があるのでしようが、わたしは庾公差殿の弟子だがあなたは技術を受けたことはありません。わたしとあなたは行きずりの人に過ぎません。そんな人のために主命に背く事はとてもできません」

「そなたが庾公から技術を習つたのであれば彼の技術が誰から受けたのかは分かっているだろう。人間としてその本を忘れてはいけなないんじゃないか。気まずくならないうちにさつさと帰りなさい」

尹公陀は聞かず弓を一杯に引絞り公孫丁に狙いを定め一矢を放つた。公孫丁は悠揚迫らず手綱を献公に渡し、飛んできた矢を軽々と手で受け、すぐ自分の弓に掛け尹公陀に射返した。尹公陀は慌ててかわしたが矢はバシッと左腕を貫いた。尹公陀は激痛のため弓を棄て逃げ出したが、公孫丁のもう一本の矢で遂に絶命した。驚いて随行してきた兵士はみな車を棄てて逃げしまった。

「そなたの神箭がなければわしは助からなかつたな」

と献公は感心した。公孫丁は急いで又手綱をとり、馬車を駆け斉国へひた走りに走つた。

十余里ほど進むとまた後方から車が地面を震わせて飛ぶように駆けてくる。

「また追っ手かな、どうしよう」

と獻公は慌てた。段々近づいてくるのを見るとそれは同母弟の公子鱣が随従するために懸命に追ってきたのである。獻公はやっとほっとして一緒に斉へ逃げ延びた。齊靈公は獻公を萊城に住まわせた。宋儒はその詩の中で、獻公が大臣に敬意を払わなかったために国を逃げ出す羽目になったのは自業自得だと言っている。

尊き事天地の如く威は神の如し 臣下の君主追放とは何事ぞ
是より君臣の綱紀荒廃せり 上の無道は下之に従う

孫林父は獻公を追放し、寧殖と相談して公子剽を迎え新君とした。即ち衛殤公である。彼は晋にこの事を報告した。

悼公は中行偃に諮問した。

「衛は臣下が君主を追放して勝手に新たな君主を立てている。これはとても正当とは認められない。どうしたら良からうか」

偃の考えは、

「衛の衍（獻公）の無道は諸侯の誰もが知っている事でして、衛の臣民が自ら望んで剽を立てた事ですから我々は関与しない方がいいと思います」

という事で悼公もそれに従った。

齊の靈公は悼公が孫林父と寧殖を成敗しないと聞き嘆息して言った。

「晋侯はやるべき事をサボっている。それならこつちにしても覇主を狙うまたとない機会だ」

早速出兵して魯の北鄙を討ち郕を攻めて大量の掠奪を行って引揚げた。周靈王十四年（紀元前五八八）の事である。

齊靈公は最初魯侯の娘顔姫を夫人にしたが子ができなかった。顔姫に ついてきた下女嬖姫が子を生み光と名付けて太子に立てた。その後、 戎子 という愛妾ができたがこれにも子が無く彼女の妹仲子が牙を生 み戎子がその公子牙を自分の子とした。ほかに公子杵臼を生んだ女性も いたが靈公の寵愛がなかった。戎子は寵を恃んで毎日靈公に牙を太子に するよう枕辺で吹込んだので靈公はそれを承知してしまった。しかし牙 の生母仲子は見識のある人で、靈公を諫めて言った。

「公子光殿は太子になって久しく、しかも各国諸侯とも度々お会いに なっておられます。いま何の理由も無く彼を廃したら国人が従わず、将 来に禍根を残す恐れがあります」

「太子の廃立はわしの権限だ。不服を言うものがあるわけがない」
と言って、すぐ公子光に兵をつけて即墨（現山東省平度県東廟）の守り

に出した。光が都を離れるとすぐ太子を廃して公子牙を太子にし、上卿 の高厚を太傅に、夙沙衛という智勇兼備の寺人を少傅に任じた。

魯襄公は齊の太子光が廃されたと聞き使者を出して詰問した。靈公は もちろん答える事はできず、逆に魯が将来公子光の大権争いを援助する 事を懸念して、軍を増強し軍勢力で魯を威嚇しそのうち光を殺そうと考 えた。これは靈公の無道の極みといえる。魯は晋に使者を出して状況を 訴えたが、ちょうど晋の悼公が病篤く魯国を救援するどころではなかつ た。

その年の冬、悼公は世を去り世子の彪が継いだ。即ち晋平公である。 魯は使者叔孫豹をお悔みとお祝いのために晋に派遣し、ついでに荀 偃に齊国からの脅威を訴えたが、

「今は新君が立つたばかりでちよっと手が離せないんです。来年の春

諸侯を集める予定ですから、もし斉侯がそこに出席しなければそれを理由に討伐を考えましょう」

荀偃はそう答えた。

周靈王十五年（紀元前五五七年）、晋平公は即位の元年、諸侯を罍梁（けきりよう）に大集合した。齊靈公は欠席し大夫の高厚を代理出席させた。荀偃は怒って高厚を捕えようとしたので高厚は逃げ帰り、齊は再び出兵して魯の北鄙、東防を攻め守將臧堅（ぞうけん）を殺した。魯叔孫豹（しよそくひんぼう）はまた使者として晋に救援を求め、平公は大將中行偃（ちゆうえん）に諸侯を大集合させ大卒齊討伐に出た。

中行偃は閲兵して帰った夜、ある夢を見た。

黄色い着物を着た使者が一卷の文書を令状として偃を捕えに來た。偃は大きな宮殿に連れて行かれた。前方に正装した王者が端座していた。使者は偃に跪くよう命じた。同様に跪いている人たちを見ると、それは晋厲公、欒書（らんしよ）、程滑（ていかう）、胥董（しよどう）、長魚矯（ちやうぎけう）、三卻（さんご）たちではないか。偃は驚き不安になった。胥董等と三卻が随分言い争っているが内容はよくわからぬ。そのうち獄卒が彼等を引張っていった。残ったのは厲公、欒書、中行偃、程滑の四人だけである。厲公が殺された顛末を訴えた。欒書は下手人は程滑だといった。程滑は首謀者は書、偃であり自分は命令に従っただけで自分だけが罪をかぶる理由はないという。

殿上の王者は判決を下した。

「当時欒書は政權を担当していたから罪は最も重い。よって五年の内に子孫絶滅の刑に処す」

「これには逆賊偃も協力している。どうして奴が無罪なのだ」
と厲公は憤然と立上り戈で偃の首を切落とした。夢の中で首が目の前

に落ちるのを見た。偃はその首を手で拾い上げ頭に載せて門を出た。そこで梗陽（こうやう）の析栲師（れいこうし）靈皋（れいこう）に出会った。

「あなたの首はどうして歪んでいるんですか」

と言つて直してくれた。

非常に痛かったのが目覚めた。奇妙な夢であつた。

翌日参内の途上ちやうど靈皋に出遭つた。車に乗せて彼に昨日の夢を一通り詳しく話した。

「貴家に冤罪が及びますね。死を避けるのは難しそうです」

「今から東で戦いが始まるんだが大丈夫かな」

「東の悪気はかなりなものです、戦いはたとえ主將が死ぬ事になつても必ず勝ちます」

「齊に勝ちさえすれば、わしは死んでもかまわん」

晋軍は黄河を渡り魯済（ろせい）で諸侯と会し、晋、宋、魯、衛、鄭、曹、樓（きよう）曠（かう）、薛（せつ）、杞（き）の小邾（せうしよ）の合計十二ヶ国が連合軍を組んで齊に向つた。齊靈公は上卿高厚に太子牙を輔佐して国を守らせ、自らは崔杼（さいしよ）、慶封（けいほう）、析婦父（せきふふ）、殖綽（しよくちやく）、郭最（かくさい）、夙沙衛（しよくさゑい）等大軍を率いて平陰城に駐屯した（この戦いを平陰の戦いという。この城の南に防（へい）がある。析婦父に命じて防門の外に横一里程の幅で深い塹壕（せんごう）を掘らせ精銳を選んで守らせ敵の攻撃を抑えた。これを聞いて夙沙衛（しよくさゑい）が進言した。

「十二カ国の気持ちは必ずしも一致はしていないはずですから、到着

防（へい）齊（せい）長城（ちやうせい）のことである。平陰城（へいいんせい）の防（へい）は齊國が築造したので齊長城（ちやうせい）と言われ最も早（はや）時期の長城である。《史記》齊筑防（ちやうしよくへい）以爲長城（ちやうせい）とは後（ご）言（ごん）方（ぽう）である。平陰城（へいいんせい）の防（へい）が西（せい）端（たん）に防門（へいもん）があり齊（せい）と魯（ろ）ならびにその他（ほか）中原（ちゆうげん）諸國（しよこく）との陸路（りくろ）要衝（ようしやう）であつた（北京金盾出版社校注）

したばかりのところを奇襲すべきです。一つの国を叩けば他の国は意気が消沈します。たとえ守りに徹するにしても天然の要害を選ぶべきです。ささやかな防門の塹壕などでは敵を防ぐ事はできません」

「これだけ深い壕があれば、まさか飛んでくるわけでもあるまいに」
靈公はそう言つて彼の意見を無視した。

一方、荀偃は齊軍が塹壕で防衛しているのを知つて大笑いして、

「齊は我々を恐れて戦う気はないな。なればこちらにいい考えがある」
と言つて、魯、衛、邾、莒の四国に、

「我われの大軍は平陰から攻め込むから、魯、衛両国軍は須句を回り、邾、莒両国軍は城陽を通つて、軍をあわせて琅瑯から攻入つて下さい。臨淄城下で落ち合ひましょう」

と命じ、四国は拝命して自軍に戻つた。司馬の張君臣に偽兵工作として付近の山あいの險要な各所に旗を立てさせ、草を束ねたにんぎょうに甲冑を着せ空車の上に立て、大旗を立てた車に切つた木を縛りつけ、車が動けば砂埃が立つようにし力士に車を引かせて山間を行つたり来たりさせた。荀偃、士匄は宋、鄭の軍を率いて中央に、趙武、韓起は上軍と滕、薛の兵を率いて右に、魏絳、欒盈は下軍と曹、杞、小邾を率いて左にと、主力部隊を三路に分けて、戦車に石と木片を積み歩兵には土囊を一つずつ背負わせた。方門に着くと三路の砲声が相呼応しそれぞれ塹壕に木や石を放り込み、更に数万の土囊が投げ込まれてあつという間に巨壕は平らになつてしまつた。晋軍は破竹の勢いで進撃した。齊軍は支える事ができず大半が殺傷され、主将の析婦父もあぶなく捕虜になりそうになつた。析婦父は驚いてほうほうのいでで平陰城に逃げ込み靈公に報告した。「晋軍は三路に分かれ、塹壕を埋めて攻め込んできており、その勢い

は大変なものでとても太刀打ちできません」

靈公は少し怖くなり自ら巫山に登つて敵軍を見た。なんと見渡す限り山谷の險要な地にはすべて無数の旗がひらめき、車馬が行き交つている。

「諸侯軍はこんなに多勢だったのか、とりあえず退却するしかないな」と驚き振向いて部將たちに聞いた。

「殿をやるものはいないか」

「小臣が一隊をお預かりして後を断ち、殿が安全に退却できますようお引き受けいたします」

夙沙衛が申し出た。靈公は非常に喜んだ。ところがその時二人の将軍が進み出て言つた。

「この堂々たる齊の国に、勇士が一人もいないというわけじやあるまいし。寺人なんか殿を任せたのでは諸侯の物笑いだ。夙沙衛には先に撤退させてやつてください。我われが殿を務めます」

その二人とは万夫不当の勇者殖綽と郭最である。

「将軍たちに殿をやつてもらえれば後の心配なく引揚げられる」

と言つて靈公はすぐ許可した。夙沙衛は靈公に用いられなかったのが恥づかしで顔を上げられず引下り、齊侯と一緒に先に退却せざるを得なかつた。二十数里ほど進むと石門山という所に着いた。ここは両側が巨岩が切立っていてその間にやつと羊腸のような小道がある。殖綽、郭最を恨んでいた夙沙衛は彼らを陥れようと、軍が通り過ぎるのを待つて、三十四余りの馬を殺して道を塞ぎ、更に大型戦車数輦で封じ込めてちよつとした砦を作りびつしりと山道の入口を封鎖した。

殖綽と郭最是兵を指揮して追撃を断ちながら徐々に退いた。石門の隘路に差掛かつた時、馬がそこらじゅうに死んでいて大きな戦車が道を塞

いているため戦車が通れない。

「夙沙衛が怨んでわざとやったんだ」

二人は急いで兵たちに馬の死体を除かせて道を通そうとしたが、前の車が邪魔になり馬の死体を運び出す空き地がなくどの位時間がかかるかわからない。兵は多いが道が狭いので人の使いようがないのである。その内後ろから砂埃が立ち早くも晋の勇将州綽の一隊がやって来た。殖綽は車を返し迎え撃ったが州綽が放った矢が殖綽の左肩に命中した。郭最は拙いと思ひ慌てて矢を番えて助けようとしたが、殖綽は手を振って制止した。ゆつくりと肩の矢を抜き、声高に聞いた。

「將軍はどなたですか、わたしの肩に命中させたのは素晴らしい射手です。ご尊名をお伺いできませんでしょうか」

「わたしは晋国では名のある州綽と申します」

「やはりそうでしたか。わたくしもほかでもない齊国では知れた殖綽と申します。巷間で『ふざけていると、二綽が怖いぞ』と言われているのをお聞きになった事がありますか。わたしと將軍は共に勇猛をもつて天下に名を知られています。好漢は好漢を惜むといひます。ここは見逃していただけませんか」

「將軍がおっしゃる事もわかりますが、お互い主人がおりそうも参りません。將軍が投降するのでしたらわたしは全力を挙げてあなたのお命はお守りします」

「嘘じやないでしょうね」

「お疑いなら誓いましょう、もし將軍のお命を助けることができないければ、あなたと死を共にします」

「それでは郭最の命もあなたに預けましょう」

殖綽と州綽は約束をして揃って縛につき、部下たちも皆見投降した。

殖綽郭最勇猛なる二虎 隘路に入りて志を得ず

私怨により虜囚となる 国辱の男はやはり寺人

州綽は二人を中軍に連れ帰り、功を報告し併せて二人の勇猛を称賛し任用すべきだと言った。荀偃は二人を暫く軍中に監禁し引上げる時に決裁する事にした。連台軍は平陰を出発して、道々の街は見向きもせず齊の都臨淄城外にやってきた。魯、衛、邾、莒諸軍も到着した。范鞅が先ず雍門を攻めた。雍門付近には葦や荻が多かったのでそれに火をつけ、州綽は申池の竹に火をかけ、各軍一斉に火攻め策をとったので城郭の周囲はみな火と化した。臨淄城下に迫り城の四面を包圍し、関の聲は地を震わせ矢が城楼を襲う。城中の軍民は驚き、靈公も非常に恐れてそつと車を用意させ東門から逃げ出そうとした。上卿の高厚がこれを知って急いで前へ出て佩劍を抜き手綱を切り、涙を流して諫言した。

「敵軍がどんなに先鋭であつても深入りしてきていますので、後方に心配がないわけではありません。必ずそのうち退却します。主君が出て行つてしまわれましたら城は持ち切れません。お願いでございす。十日お留まり下さい。もしそこで力尽きればその時になって退去されても晩くはありません」

靈公は仕方なく留まつた。高厚は軍民を率いて必死に防戦した。

さて、各国が臨淄城を包圍して六日目に、突然鄭国の国元から急使があり、大夫公孫舍之と公孫夏が連名で封緘した手紙が鄭簡公に届いた。それは機密且つ緊急を要する内容で、概略次の通りである。

臣舍之、臣夏は命を奉じて子孔と共に国を守っておりましたとこ

ろ、思いもよらず子孔が叛心をいだき、楚に内通して楚軍を鄭攻撃に誘い内応しようとしています。現在楚軍はすでに魚陵に達し、旦夕の内に鄭都に到達する見込みです。事は危急を要します。どうか社稷のために大至急軍をお返し下さいますようお願い申し上げます。

鄭簡公は驚き、急いで書簡を持って晋平公に会った。平公は荀偃に相談した。荀偃は次のように進言した。

「わが大軍は殆んど戦うことなく臨淄までやってきて、一挙に斉を打ち負かす積もりでしたが、今だに落せません。鄭の国元から救援を求めてきているのに万一の事があれば全て我國の責任になります。この際軍を返し鄭を救援すべきです。それに今回臨淄は破れてはいませんが斉を十分に驚かしましたから、おそらくもう魯を侵犯する事はないでしょう」

平公はその意見に従い部隊に包囲を解き撤兵を命じ、鄭簡公を先に帰させた。

諸侯軍は祝阿まで引き上げて来たが、晋侯は楚軍のことが気になって諸侯と酒を楽しめない。師曠は晋侯に、

「臣が声音で殿のご懸念を占ってみましょう」

と言って『南風』という歌と『北風』という歌を笛に合わせて歌った。『北風』はのどかに聞えたが『南風』は声が滅入って凄みを感じられたので師曠は平公に答えた。

『南風』は音が弱く死を感じさせます。これは楚に功がないだけでなく楚自ら禍を招く事になるということです。三日以内にいい報せが参るはずですよ」

師曠とは字を子野といい晋国第一の聡明な人物である。幼いときから

音楽を好み、音楽に専心できない自分を悩んだ。

「技が拙いのは心の乱れによる。色々な物を見るから乱れるのだ」

と言ってヨモギの葉をくゆらせて目をつぶし音楽に専心した人である。そして遂には氣候の変化を察知し陰陽の消長を明らかにする能力を身につけ、天機や人事での彼の見方に間違いがなく、吉凶を占うも見ることができると言われた。だから太師に任じて音楽を管掌させ、平時から晋侯の信頼厚く行軍には必ず随行させていた。

晋侯は彼から三日以内に云々と聞いたので軍を止めて吉報を待つとともに、斥候を出して情報を探らせた。

三日も経たないうちに探りのものが鄭大夫公孫蠆を連れて帰つて来た。

「楚軍はもう引揚げました」

と公孫蠆が言う。晋平公は変に思つて詳しく聞いた。

「楚では子庚が子襄に代わつて令尹になつてからずっと、先代の仇を討とうと鄭討伐を謀つておりました。公子嘉（子孔）は楚と密かに内通し、楚軍がやつて来たら迎撃するという名目で城外で楚に会う手はずになつていたのですが、公孫舍之、公孫夏が事前に公子嘉の陰謀を察知して、城の守りを厳重にし出入りを厳しく取り締まったので子嘉は出て楚に会うことができなくなりました。楚の子庚は潁水を渡ったけれど内応の消息が来ないので魚齒山の麓で軍を駐留させて待つていましたが、たまたま雪まじりの大雨となつて数日止まず、駐留地が一尺程水浸しになつてしまいました。高みに上がつて水はよけても激しい寒さで死者が続出し兵たちから怨嗟の聲が上がり子庚はやむを得ず撤兵する事にしたのです。わが主君はすでに子嘉を誅殺致しましたので貴軍をお煩わせする

ことのないよう、取あえず小職を遣わし急報申上げるようにとの事でございませう

これを聞き平公は大喜び、

「子野（師曠）は真に音の聖人だ」

と師曠を讃えた。

楚の鄭討伐は失敗した事を諸侯に報告し、各国の軍を解散し帰国させた。師曠を称える詩がある。

《南風》《北風》の歌を聞けば 両国の吉凶直ちに知る

師曠は音で天地に通じ 盲人樂官の祖となりぬ

これは周靈王十七年（紀元前五五五年）十二月の事であり、晋軍が黄河を渡って帰国したのは十八年の春であった。

晋では中行偃が帰途、突然頭に腫瘍ができ著雍に逗留していたが二月に亡くなった。首が落ちた夢、梗陽の祈禱師の予言が現実となったのである。殖綽、郭最は偃の死の混乱に乗じて枷を外し斉に逃げ帰った。晋侯は荀偃の子呉に大夫を継がせ、范匄を中軍の元帥に、荀呉を副將に任命した。

この年の五月、齊靈公は病に倒れた。大臣の崔杼、慶封は示し合わせ、もともと太子であった公子光をそと即墨から臨淄に連れて帰った。慶封は自家の武士を率いて夜、太傅高厚の門を叩き出迎えた彼を捕えて殺した。太子光は崔杼と王宮に闖入し寵姫戎子と公子牙を殺した。靈公は病中この変事を聞き、大変驚き大吐血をして亡くなった。公子光が継いで齊庄公となった。寺人夙沙衛は一家を引き連れて高唐へ逃げた。齊

庄公は慶封に追撃させたが夙沙衛は高唐城に拠って反旗を翻した。庄公は自ら大軍を率いてこれを攻めたが一ヶ月余り落せなかった。高唐の人工僂は勇士で夙沙衛は彼を登用し東門を守らせた。しかし工僂は夙沙衛が成功する勇ではないとわかり、寝返りを決め、城から慶封軍に矢文を送って、夜半に東北の角で待っているからそこから大軍で城に登って欲しいと知らせた。庄公は矢文を信じなかったが殖綽と郭最是

「約束して来たのですからきつと内応するでしょう。我われ二人を行かせてください。去勢犬（寺人即ち宦官を軽蔑）を生け捕りにして石門山の隘路での恨みを晴らしたいと思います」

と願いだした。庄公は心配しながらも、

「十分注意して行ってくれ、わしも後話しようぞ」

そう言って二人の申出を許した。

殖、郭は兵を率いて東北の角へ行き、夜半を待っていた。やがて城の上から長い縄が数本下りて来た。二人がその縄にすがって登ると兵士たちも続々と登った。驚いた事に工僂は夙沙衛を捕えて来ていた。郭最是直ちに城門を打ち破り齊兵を入城させた。城中は猛烈な修羅場となったがおおよそ一更（二時間）程で決着が着いた。齊庄公が入城すると工僂と殖綽が縛った夙沙衛を庄公の前に連行した。

「去勢犬め、お前はわしに何の恨みが有って長幼の序を踏みにじろうとしたんだ。いま公子牙は何処にいるんだろうね、お前は牙の少傅だろう、どうして側にいてあの世までも護りしないんだ」

夙沙衛はうな垂れて一言もなかった。庄公は斬首を命じ、肉味噌にして家臣達全員に配り、工僂に高唐城を守らせて都へ引揚げた。

さて、晋の上卿の范匄は、前回の齊都攻略が結果を出せていないので

平公に再度討伐の大軍を出す許可を得て出兵した。しかし晋軍が黄河を渡ったばかりのところ、齊靈公が亡くなった知らせを聞き、范匄は、

「君主が亡くなったところを攻めるといふのは仁に悖ることだ」と言つて直ちに撤兵した。その報せはすぐ齊に届いた。

大夫晏嬰はこれを聞いて進言した。

「晋国は先君が亡くなった事を知つて兵を引き我われに仁を施しました。我われも不義にならないように講和をして両国を戦争の苦しみから救ふべきではないでしょうか」

この晏嬰は字を平仲^{へいちゆう}と言ひ、身の丈は五尺足らずだが齊国第一の賢者であり智謀の士である。

庄公も即位したばかりで国内は未だ落着いていないし、晋軍がまたやってくるのも心配なので、晏嬰の進言を受け入れ晋国に使者を送り講和を求めた。平公は澶淵^{せんえん}に諸侯を集めて、范匄に総理させ齊庄公と血をすすり盟約を結んだ（澶淵の盟約）。この後暫く両国間では戦いはなかった。

ところで、下軍の副將欒盈^{らんえい}は欒驪^{らんれい}の子である。驪は范匄の嫡であり范匄の娘が驪に嫁いでいる。すなわち欒祁^{らんき}である。欒氏は欒賁^{らんひん}に始まり、欒成^{らんせい}、欒枝^{らんし}、欒盾^{らんどん}、欒書^{らんしよ}、欒驪^{らんれい}、欒盈^{らんえい}に至り、七代連綿と続いて卿宰相となつてゐる。その家格権勢は晋国内随一である。晋朝の文武その半数は欒氏一門から出ており、また半数は婚姻関係がある。魏氏では魏舒^{せきよ}、智氏では智起^{ちき}、中行氏では中行喜^{ちゆうかうき}、羊舌氏では羊舌叔虎^{しゆくこ}、籍氏では籍偃^{せきえん}、箕氏では箕遺^{きい}これらの大夫はみな欒盈と密接な交際があり非常に堅い仲間意識がある。欒盈自身若い頃から下士に謙虚であり金を惜しまず付き合つたので、彼のためなら命を惜しまずという者も多い。

州綽^{しゅうしやく}、邢劓^{けいけい}、黃淵^{こうえん}、箕遺等の勇將をしつかりと部下にしており、更に督戎^{とくじゆう}という男は千斤^{きん}（^{きん}）を持ち上げるといふほどの力持ちで、戦闘の時は両手に矛を持つて振り回す万夫不当の大力士で心から欒盈に心服し寸刻も離れようとはしない。ほかに辛貳^{しんじ}、州賁^{しゅうひん}のように彼のためにいろいろ走り回る者は数知れない。

欒驪が死んだときは夫人の欒祁^{らんき}は四十歳くらいで、寡婦の寂しさに耐えられず、しばしば報告のために屋敷へ来る州賁^{しゅうひん}の男前にほれて遂に私通し、部屋にあるめぼしいものはみんな彼に与えてしまつた。欒盈が晋侯に従つて齊国討伐に出征した時、州賁は憚ることなく公然と屋敷に泊り込んでいた。欒盈が帰つてきてこれを知つたが母親の面子もあり、仕方なく別な口実を作り内外の守衛担当者を叱り、出入りするもののチェックを厳重にするよう命じた。欒祁は恥ずかしさが怒りに変りまた淫心を抑えきれず更には欒盈が州賁を殺すのではないかと心配にもなつて父親范匄^{はんけい}の誕生日に長寿祝いを理由に里帰りをして機会を見て父親に言つた。

「盈が謀叛を企てているのですがどうすればいいでしょう」

范匄は言つてゐる事がよくわからず詳しく説明させた。

「あの子は、『范鞅が兄の欒鍼^{らんしん}を殺したから父欒驪が追放したのに、許されて帰国して何の罰も受けず逆に重要な地位についてゐる』と常々恨みに思つていて、『今は范氏の親子が国政を独占している。范氏が繁栄すれば欒氏は衰退する事になるから、たとえ死んでも共に天を戴く事はない』と口にし、毎日智起^{ちき}、羊舌虎等と密謀して大夫たちを仲間にしようとしています。わたしが情報を漏らす事を心配して厳しく監視しています、今日はやつと出てくる事ができたのですが、もうお会いする事はできません」

きないかもしれません。父娘の情を思うとどうしても黙っておれなかったのです」

范軼が傍にいて欒祁の話を後押しして、

「わたしも彼に叛心があると言う事を聞いたことがあります。彼は仲間が多いので防備が必要です」

息子と娘が口を合わせて言うので范囚も信じてしまった。そして平公に密かに欒氏追放を奏上した。

平公はそつと大夫陽畢に聞いてみた。陽畢は元々欒驪にはいい感情を持つておらず范氏と親しかったので、

「欒書の厲公弑逆事件は事実ですし驪は凶悪な性格でした。盈になつて国人を抱き込む不穏な動きがみられます。欒氏を除き弑逆の罪を明らかにし、君主の威をお示しになれば、わが国の将来の幸せというものでしょう」

と答えた。

「しかし、欒書は先君を擁立した功積があるし、盈の罪状はまだはっきりと見えてはいない。欒氏を除く理由がないがどうしたらいいか」

「欒書が先君を擁立申し上げたのは自分の罪隠しです。先君は私恩のため弑逆という国仇を追及なさいませんでしたし、殿も又それを放任なさいますと被害が増大します。盈の罪がはっきりしないという事でしたら、弑逆の与党狩りを行い、盈は赦して追放し、彼が凶暴に走れば誅殺の名目ができますし、もし死を逃れて逐電すれば、それもよしです」

平公は了承し范囚を呼び本件を協議した。

范囚は、首領を押える前に与党狩りを行うのは無理ではないかと考え、「盈がいる時に与党狩りを行うとこれはすぐ内乱になります。むしろ

盈を著邑城建設置責任者にして出した後、頭のいない与党狩りを行うべきです」

と進言した。平公は早速欒盈を著邑に出した。

盈の出発に際し与党の箕遺が引き留めて言った。

「欒氏が怨みをたくさん買っていることはあなたもご存知の通りです。趙氏は下宮の難で欒書さまに怨みがあり、中行氏は秦討伐の戦役で元帥の命令を無視した欒驪さまに、范氏は范軼を追放した欒驪さまにとそれぞれ欒氏に怨みを持っております。それに智氏は智朔が若くして死に智盈はまだ幼いので中行氏の意のまま、程鄭は殿のお気に入りという事で、欒氏は孤立しています。著邑の事は国家にとってそんなに急ぐことはありません。あなたがいらつしやる必要はないじゃありませんか。お断りになって殿のご意向を確かめられてそれによつては準備をすべきです」

「君命は断れない。もしわたしに罪があるのであればどうして死を逃げようか堂々と裁きを受けよう。もし罪が無ければ国民はわたしに同情するだろうからわたしを害する事などできるはずがない」

と言ひ箕遺の意見を聞かず、督戎の運転で絳城を出て著邑へ赴いた。欒盈が出発して三日後、平公は朝廷で大夫たちに言った。

「欒書には弑逆の罪があつたが未だにその処罰が行われていない。現在その子孫が朝廷に多く、わしは恥ずかしく思う。どうしたらいいか」

「追放すべきであります」

下宮の難、趙氏滅亡を謀た首謀は屠岸賈であるが、景公が趙氏を滅ぼさきか否か欒書、卻鉤に意見を聞きた時、欒、卻両家はすでに屠岸賈と同じ仲間、趙家めめに弁明をしようとはしなかつた。

大夫たちが声を揃えて答えたので、**樂書の罪状を国門**（都の城門）に掲げ、陽畢に軍を率いて**樂氏**を国外へ追放するよう命じた。都に在る**樂氏一族**はみな追放され、**樂氏の封地**も没収された。**樂樂、樂魴**は一族を連れ、**州、緯、刑、蒯**と二緒に**絳城**を離れ、**樂盆**のところへ走った。**羊舌叔虎、黃淵、箕遺**も**絳城**を出ようと思つたが既に城門が閉じられていて、**樂氏**の与党狩りが始まると聞いたので、三人は家兵を集め夜陰に乗じて反乱を起こし東門を破つて出て行こうとした。**趙氏**の食客**章、鏗**が**叔虎**の隣に住んでいたのでその密謀を聞き**趙武**に知らせた。**范匄**は**趙武**から連絡を受け**范匄**に三百人の兵士で**叔虎**の屋敷を包囲した。

さてこの結末如何なりますか、それは次回のお楽しみ

第六十三回

老祁奚 羊舌救出に尽力

范鞅 機転をきかし難窮を脱身す

箕遺は**叔虎**の屋敷にいて**黃淵**が来るのを待つて夜中に一斉に反乱を起そうと思つていたが、**范鞅**に屋敷を包囲され屋敷外の兵は集合する事ができず遠くから様子を見たり、中には逃げてしまったものもいる。**叔虎**は梯子に登り堀の外に向かつてたずねた。

「將軍、此処へ見えたのはどういう理由ですか」

「あなたたちは日頃**樂盆**と徒党を組み、今はまた都門を破つて外と連絡を取ろうとしている。これは謀叛と同罪です。わたしは晋侯の命令であなた方を逮捕に参りました」

「わたしは何もやってないのに誰がそんな事を言つたんです」

范鞅はすぐ**章、鏗**を証人として前に出した。**叔虎**は大変な力持ちで堀の石を剥ぎ取つて**章、鏗**めがけて投げつけると頭に命中した。**范鞅**は怒つて兵に屋敷に火をつけ攻撃を命じた。**叔虎**は慌てて**箕遺**に、

「坐して縛につくより、死中に活を見出しとにかく逃げよう」

と言つて戟を持ち先に出て行き、**箕遺**も剣を抜いてその後が続き、大声で叫びながら火をものともせず切り抜けていった。**范鞅**は火の中に二人を見つて兵たちに一斉に矢を射させた。火勢は強く次々と飛んでくる矢を避ける事はできない。どんなにすごい能力もこれではどうしようもない、二人揃つて矢を受けて倒れた。兵が鉤棒で引つ張り出すとすでに半死の状態だった。縛つて車に乗せ、消火して引揚げようとする、ガラガラという大きな車の音が聞こえ天まで届くような松明の明かりがみ

えた。中軍の副将荀呉が自分の部隊を率いて范軼の加勢にやつて来たのである。途中黄淵もこれに出会い捕えられた。范、荀双方の兵を合わせ叔虎、箕遺、黄淵を中軍元帥范匄の前へ護送して行つた。范匄は、
「欒家の仲間は非常に多い、今三人を捕えただけでまだ禍の根は除かれていない。全員を逮捕しろ」

と言つて再び隊を分け搜索を命じた。絳州城の騒がしい一夜が開けると、范軼は智起、籍偃、州賓を、荀呉は中行喜、辛飴、並びに叔虎の兄羊舌赤、羊舌肸をそれぞれ捕え朝門外に監禁し平公の裁決を待つていた。

羊舌赤は字を伯華、羊舌肸は字を叔向といい、叔虎と同じ羊舌職の子だが叔虎は庶子である。もともと叔虎の母親は羊舌夫人の部屋つきの侍女だったが美人だったので夫君が彼女に食指を動かした。しかし彼女を夫のところへは行かさなかつた。この時伯華も叔向も成長していたので母親に嫉妬しないよう諫めた。母親は笑つて、

「嫉妬なんかじゃないのよ、美人は心中に悪が潜むというじゃないの。深山大澤には大蛇が住んでいます。彼女が大蛇を生んでお前たちの禍になつてはいけないと思つて近づけないようにしているのよ」

叔向たちが父親の気持ちをもつて強く母親に頼んだので結局許すことにした。一夜で懷妊し叔虎を生んだ。長じると母親に似て美男で力勇気ともに抜群の青年に成長した。欒盈は幼い時から彼と一緒に寝起きし非常に親しかつた。彼が欒氏の与党中の与党だったから赤・盼兄弟も一緒に捕えられたのである。

そのころ楽王鮒、字を叔魚という平公におもねつて寵愛を受けている大夫がいた。彼は日ごろから羊舌兄弟の才徳を敬慕していたが残念な

がら縁がなく付け合ひは無かつた。二人が捉えられた事を聞き、わざわざ朝門へ出向いて羊舌肸に会い慰めの言葉を書いて、

「ご心配要りません、殿にお会いして全力で申し開きを致しましょう」と言つたが肸は黙つて答えない。楽王鮒は恥ずかしさに顔を真っ赤にして去つた。兄の赤はこれを見ていて弟に詰問した。

「我われ兄弟が此処で命を落としたら羊舌家は断絶してしまうじやないか。楽大夫は殿の寵愛を得ていて殿は彼の意見なら必ずお聞きになる。もし彼が何か言つてくれて運良く赦免されたら先祖の祀りを絶やさなくて済んだのに、どうして素直に大夫の好意を受けなかつたんだ」

「生死は天命です。もし天佑があつて救つてくれるとしたら祁老大夫でしよう。叔魚などに何ができません」

「叔魚は朝夕殿の傍ににいるのにそなたは『役に立たない』と言ひ、祁老大夫は政治から身を引き閑居しているのに『彼がやつてくれる』という。その処がわしにはよくわからん」

「叔魚は殿に媚びるだけで、殿が良しと言へば良し駄目だといえはすぐ迎合しますが、祁老大夫は人を推挙するのに仇や親族は関係ありません」

やがて朝議が開かれ范匄が平公に欒一味の逮捕者名簿を提出した。平公はその中に羊舌兄弟が三人とも入っているのを見て疑問に感じ、楽王鮒に質問した。

「叔虎の陰謀に赤や盼が加わつていたという事を聞いているか」

楽王鮒は叔向に恥をかかれたので、

「親しさから言えば兄弟が一番です。知らない事がありましようか」と答えた。平公はそれを聞き彼らを投獄し司寇に刑罰を検討させた。

この時、祁奚はすでに老齡により退官し祁で隱居していた。その子の祁午は羊舌赤と同僚で仲がいい。彼は使いの者を夜中に走らせ父親に報せて、范匄に手紙を書いて赤を助けてやつて欲しいと頼んだ。奚は報せを聞いて大変驚いた。

「赤も盼もどちらも晋の賢臣なのに、これは思いもよらん冤罪だ。わしが自分で行って助けてやらなきゃ」

早速、車に乗りその夜のうちに都に入り、祁午にも会わず直接范匄の門を敲いた。

「お年を召しておられるのに風露を冒してお越しになられたのは、わたくしに何かお叱りを受ける事があるのでしょうか」

「ほかでもない、晋国の社稷の存亡を思つて参りましたのじや」

「大夫殿のお心を煩わす社稷に関する事とは如何なる事でしよう」

「賢良の人は社稷を守つてくれるものです。羊舌職殿は生前晋国のため心智を尽してくれました。彼の二人の息子はどちらも父親の志を継いでいます。不肖の庶子のために皆殺しにするというのは惜しいじやありませんか。昔、卻芮が謀反を起こしましたが卻缺は朝廷の重職に登りました。父子の罪が相互に及ばないというのに兄弟ならなお更でしょう。いまあなたは私怨によつてたくさんは無辜の人を玉石ともに殺そうとしています。これは晋国の社稷にとつてたいへん危険な事です」

范匄は恭しく席を立て、

「大夫のおっしゃる通りでございます。ただ、殿の怒りが未だ醒めておられませんので、大夫殿にご足労をお願いして小生と一緒に殿にお会いになつていただけませんか」

と言つて車を並べて参内し平公に会つた。

「赤と盼は賢臣であり叔虎は不肖、全く違います。赤、盼は欒氏の事はきつと聞いていないでしょう。しかも羊舌氏の功労は無視できません」と進言すると平公ははたと悟り、赤、盼の二人を許し原職に復帰させた。智起、中行喜、籍偃、州賓、辛俞は全員庶人に落され、叔虎、箕遺、黄淵は斬首となつた。

羊舌赤、盼は参内し罪を赦された主恩に感謝し、退廷後、

「祁老大夫を訪問してお礼を言わなければ」

赤が弟にこう言つと盼は、

「老大夫は社稷のためにやったことで、我われのためではありません何も礼を言う事はありませんよ」

と言つてさつさと車に乗つて帰つてしまつた。赤は氣になつてひとりで祁午を訪ね、祁奚に会いたいと頼んだところ、

「父は晋君に会つたらそのまま祁へ帰つてしまつて、此処へは一度も立ち寄りませんでした」

と祁午は答えた。赤はそれを聞いて、

「あの方は人を助けても礼を言われるのを好まない人なんだ。わしは弟の見識にはとてもかなわん」

と感心して独りつぶやいた。

微勞にも報酬を望み 私寵を頼みて恥を知らぬ

奚と盼こそ正道なり 笑うべし賄賂求めて止まぬ者

州賓が再び欒祁と私通を始めたので、范匄は力士を使つて殺した。

さて、曲沃の守将大夫胥午は以前欒書の食客だったので、著邑へ行く

途中の曲沃に立寄つた欒盈を心から歓待した。欒盈が著邑の城造りの話をする時、胥午は曲沃の人間を助つ人に出すと言つた。三日逗留していら欒榮らがやつて来て都での事件を報告した。

「陽畢が軍を率いて間もなくやつて来ます」

督、戎は非常に憤慨し、

「晋軍が来るのなら迎え撃とうじゃないか。簡単に負けはせん」

と言つと、州綽、邢蒯も、

「そうになると、恩主の部下だけでは力不足でしょうから我われ二人もお手伝い致しますよ」

と挙兵して抵抗しようとしたが、欒盈は、

「わたしは殿に背いた覚えはない。恨みを持つ者に陥れられただけだ。抵抗しなければこれ以上何もしないだろう。逃げた方がいい。そのうち殿にも真相が判つていただけるはずだ」

と言つた。胥午も同じ考えだつた。欒盈は直ちに車馬を整え胥午と涙の別れをして楚国を頼つて行つた。陽畢が軍隊を率いて著邑へ着くと、著邑の役人が、

「欒盈殿は此処へは来ないで曲沃からすでに出奔してしまいました」

と言つので、仕方なく追々欒盈の罪科を宣伝しながら引揚げた。しかし、人々は欒氏は功臣であり欒盈が人に施しを行い部下を愛する人柄である事をよく知つていたので、その冤罪を嘆かない者はなかった。范匄は平公の許可を得て、欒氏に随いて行く事を禁じ、随従者は全員死刑という命令を発表した。

欒氏の家臣辛俞は欒盈が楚へ行つたと聞き、家財を整理し数台の車に積んで欒盈を追おうとしたが守衛に捉えられ平公の前に連行された。

「わしの禁令にどうして従わないのだ」

「わたくしめは本当に馬鹿です。ご主君がどうして欒氏に随いて行くのを禁止なさるのがよくわからないのです」

「欒氏に随いて行く者の目には君主が見えなくなるからだ」

「本当に主君を無視するなどというお触れでしたら臣は免罪です。『三代その家に仕えれば君臣の關係ができ、二代仕えただけでは主人と下僕の關係に過ぎず。君に仕えるには死を以つて報い、主人に仕えるには真心を以つて奮励すべし』と聞いております。わたくしめの家は国家には殆ど奉公できていませんが欒家には三代にわたり仕えてまいり、欒家はわたくしめにとつては主君であります。主君を無視していいからこそ随いて行くとしたのです。どうして禁令に違反たとおっしゃるのでしょうか。盈が罪を得たと致しましてもご主君は追放されただけで誅殺なさらなかったのは先代の大馬の労を、ご配慮されての事でございましょう。今、国外に流浪しもし食料や日用品が無くなりある日突然旅先で亡くなつてしまいましたらご主君のお優しい仁徳が結局何にもならなくなります。わたくしめが参ろうと致しましたのは臣としての道であると同時に、ご主君の仁のためでもあります。まして世間では『君危難に遭えども棄てるべからず』と申します。これはご主君のおっしゃつておられる『君を無視するべからず』という事ではないでしょうか」

平公は辛俞の言うことが大変気に入った。

「そなた、しばらくわしに仕えてみないか。欒氏の俸祿をそなたにやろうじゃないか」

「先ほども申しましたように、欒氏は臣の君でございします。今の君を棄てまた別の君に奉公するのは『君を無視するべからず』の禁令に背き

ます。どうしてもお引留めになるとおっしゃるのでしたら、むしろ死を賜りたく存じます」

「わかった。行つてそなたの所信を貫きなさい」

辛俞は叩頭して挨拶をし、数輜の荷物を率いて堂々と絳州城を去つた。辛俞の忠義を称える詩がある。

翻雲覆雨の如く世情軽し 霜雪ありてぞ松柏榮える

死力尽す三代の臣 どうして主君 欒盈を晋君と換え得よう

翻雲覆雨： 掌を反す度に雲や雨変わるように人の心は変り易い

欒盈らは楚国の国境で数ヶ月過した。郢都へ行つて楚王に会おうと思つたが、ふと気持ちが変わつた。

「我が祖父は国家のために尽力したが、結局楚を仇敵にしてきた。ひよつとして楚が我われを受入れなかったらどうしよう」

そう考え直して斉国へ行こうと思つた。ところが斉までの旅費が無い。そこへちょうど辛俞が家財を処分した貴重品を持つて来たので、一同揃つて斉国を頼つて行く事ができた。周靈王の二十一年紀元前五五一年の事である。

ところで斉の庄公は特に武勇を好み、人の下につくのを潔しとしないという性格である。晋との澶淵の盟約を受入れたが内心は平陰の敗北を大変恥辱と思ひ報復を考えていた。そして武勇に優れた人を広く求めこれを近衛隊とし天下に出たいと考えていた。そこで卿大夫とは別に『勇

』杜甫詩集食符の一節の引用であらう『翻手作雲覆手雨 紛紛輕薄何須數 君不見簞食時交 此道今人棄如土 手を翻ひるがえせば雲となり手を覆 おおえは雨となる 輕薄な輩が多く一々数える事ない 君は知らずや管仲鮑叔牙の貧賤の交わりをこの人の道を今人は土くめのように捨てしまっている

爵』という位を新設し俸給も大夫相当の待遇とし、その条件は力であれば千斤を持ち上げ、弓術であれば七枚の鎧を貫くほどの技能を要求した。先ず 殖綽、郭最を決め、その後賈罕、邴師、公孫敖、封具、鐸甫、襄尹、僕埋の合計九名を採用した。庄公は毎日これらの人達と宮中で力比べや弓の競技をして楽しんでた。

ある日朝議をしているとき近臣が、

「ただ今、晋の欒盈殿が放逐されてわが国に亡命してまいりました」と報告してきた。庄公は大変喜び、

「わしは晋に怨みを晴らしたいと思つていたところなんだ。晋の譜代の家臣が亡命して来たという事は、わしの思ひは達せられたようなものだ」

そう言つて誰かに迎えにやろうとした。すると、大夫晏嬰が、

「それはなりません。小が大に仕える基本は信義です。晋と盟約を交わしたばかりなのに晋が追放した臣を受け入れたのでは晋から問責を受けたらどう対処されますか」と反対した。庄公は笑つて、

「卿の言う事は正しいとは言えんぞ。斉と晋の力はほぼ同じだ。どちらが大きいとも小さいとも言えない。盟約を交わしたのは急場をしのぐため、わしは晋や魯、衛、曹、邾などに服する積りなどない」

と言つて晏嬰の意見を無視し使者を出して欒盈を迎え入れた。盈は斉侯に謁見して叩頭し追放されたいきさつを訴えた。

「心配する事はありません。わたしが一肌脱いであなたをお助けして晋国に返して差上げましょう」

欒盈は何度も頭を下げて感謝した。庄公は宴を設けて款待した。

州^{しゅう} 綽^{しやく}と邢^{けい}劓^いが樂^{らく}盈^{えい}の傍^{わう}に侍^ししているのを見て、二人の体格が非常に堂々としているので庄公はその名を聞いた。二人は正直に答えた。

「過日^{かじつ}、平陰の戦いの時、殖^{しき}綽^{しやく}、郭最^{かくさい}を生捕りにしたのはあなたたちじゃないですか」

二人は叩頭^{くわうとう}して謝った。

「わたしはあなたたちを以前から敬慕していたのです」

そして庄公は樂盈に言った。

「わたしは卿にいただきたいものがあるんですが、ぜひ承知していただきたいのです」

「何でございましょうか。君命でございましたら何でありましょうとも惜しむものではないです」

「わたしの希望は他でもありません。この二勇士を暫時わたしにいただきたいのです」

樂盈は断る事ができず仕方なく了承し、不愉快な気持ちで車に乗り、嘆いて言った。

「督戎がいなかったからまだよかったが、彼がいたら一緒に取られてしまふところだった」

庄公は州^{しゅう} 綽^{しやく}、邢^{けい}劓^いを『勇爵』の末席に加えたが、二人は不満であった。ある日、殖^{しき} 綽^{しやく}と郭最^{かくさい}がともに庄公のそばにいた。州^{しゅう} 綽^{しやく}、邢^{けい}劓^いの二人はわざと驚いたふりをして綽^{しやく}、最^{さい}を指して、

「この人たちは晋の捕虜だったのにどうして此処にいるんですか」と皮肉った。郭最^{かくさい}はそれに答えて、

「わしらはあの時は去勢犬にはめられ捕えられたが、あんた達のように逃げて来たのとは訳が違ふんだ」

と言うと四人は売り言葉に買い言葉でけんかになった。

「あんたはわしの口の中の虱だ、未だ跳ね回っているのか」

「あんたたちは今わが斉国にいるんじゃないか。正にまな板の鯉なんだぞ、気をつけてものを言ったほうがいいぞ」

「あんたたちがわしらを気に入らんと言うのなら、わしはすぐにもわが主人の所へ戻るまでだ」

「このれっきとした斉の国でお前等一人位いなくてもどうということはないわ」

四人は言葉はこわばり、顔は真っ赤になってそれぞれ佩剣に手を掛け一触即発の状態になった。

庄公は双方をなだめて酒をとってねぎらい、州^{しゅう} 綽^{しやく}、邢^{けい}劓^いに言った。

「わしはあなたたちが斉の連中の下風に立つのを潔しとしない事は十分わかっている」

そう言つて『勇爵』の名をを龍虎の二つの爵位にし左右に分けて、右列を龍爵といい州^{しゅう} 綽^{しやく}、邢^{けい}劓^いをトツプとし斉の盧蒲癸^{ろほき}、王何^{おうか}をその下につけた。左列を虎爵といい殖^{しき} 綽^{しやく}、郭最^{かくさい}をトツプに賈^{くわ}率^{そつ}等の7人とした。みなこれに列する事を誉れとしたが州^{しゅう}、邢^{けい}、殖^{しき}、郭^{かく}の四人は内心は快く思つていない。

崔杼^{さいしよ}、慶封^{けいほう}は庄公擁立の功により上卿に昇進し共同で国政を担当した。庄公はしよっちゆう住まいの工事をし、酒を飲み、或は剣舞、射撃と君臣隔てなく遊びに興じた。

さて、崔杼^{さいしよ}の前妻は成と強という二人の子を生んで数年で亡くなった。二度目の妻は東郭偃^{しやくくえん}の妹で、先に棠公に嫁して棠姜^{とうきやう}という棠無咎^{とうむこ}という一子をもっている。その棠姜は美人で、崔杼が棠公の葬儀に行つ

た時その美しい容姿をのぞき見て東郭偃に頼んで後妻とした。彼女は此処でまた一子明を生んだ。崔杼は後妻を愛していたので東郭偃と棠無咎を崔家の家臣にし幼子崔明を託した。そして棠姜に成長したら嫡子にするのと約束した。

ある日庄公が崔杼の家へ酒を飲みに行った時、崔杼は棠姜を出して酌をさせた。庄公は棠姜が絶世の美女なので夢中になり、その後東郭偃に手厚いまいないを渡して仲をとらせ、隙を見ながら棠姜と私通するようにになった。度重なると崔杼も気がつき棠姜に問い詰めた。

「おっしやる通りです。国君の力で迫って来られると、女一人では拒みきれません」

「それにしても、そなたは何故今まで言わなかった」

「悪い事だと判っていましたのでどうしても申し上げられませんでした」

崔杼はしばらく沈黙の後、

「わしから何も聞かなかった事にしておきなさい」

と言いつれから庄公謀殺の意を固めた。

周靈王の二十二年(紀元前五百五十年)、吳王の諸樊が晋に求婚して来たので晋の平公は娘を嫁にやることにした。この話を聞き齊庄公は崔杼に謀計を持ち掛けた。

「わしは欒盈を受容れてやったが、まだ利用した事がない。聞くところによると曲沃の守將は欒盈と大変親しいという事だ。齊もこの婚礼の嫁つきの侍女を送り届けるという名目で欒盈をそつと曲沃へ返し、晋を攻撃させたらと思うがどう思うかね」

崔杼は齊侯に恨みがあるので、齊晋が仇敵関係になるよう仕向け、晋

侯が攻めて来るのを待つて主君に罪をなすりつけて齊侯を殺し晋公の歓心を得るという案を考えた。庄公が欒盈を曲沃へ届けようという謀計はちよつとこの案にぴったりである。そこで次のように進言した。

「曲沃の守將が欒盈と親しいとはいへ、晋を倒すほどの力はありません。殿が軍を率いて欒盈の後に続かれた方がいいのではないでしょうか。欒盈が曲沃に入ったら、殿は衛國を打つとデマを飛ばし濮陽を経由して南から北へ攻め上り晋を挟撃すれば晋は支えきれないでしょう」

庄公は喜んでこの案を欒盈に話すると、欒盈も喜び了承した。しかし家臣の辛兪は引き止めた。

「兪が殿に従つて参つたのは忠義を尽くすためで、殿にも晋君に忠義を尽くしていただく存じます」

「晋君がわしを臣だと認めなかったらどうする」

「昔殷の紂王は周文王を羑里城に監禁しました。その時文王は天下の三分の一を持つていましたが殷に臣事致しました。晋君は欒氏の功績を考慮しないで殿を追放し外国でやつと生活するような仕打ちをし、晋國民はみな同情しています。一度謀叛を起こしてしまいましたら天下の何処にも身の置き所がなくなってしまうです」

辛兪の必死の説得も欒盈は聞かなかった。辛兪は泣いて、

「今回出兵なさればきつと欒家の滅亡は免れますまい、兪は死んでお送り致します」

と言つて佩刀を抜き自刎して果てた。史臣彼を讀えていう。

盈出奔すれば追従し 盈謀反起こせば諫死す

公に於いては君に背かず 私に於いては主に背かず
高邁なるかな辛兪 正に晋の義士なり

齊庄公は一門の女性姜氏を花嫁付の侍女として、大夫析婦父に温車せきふしや（寝台車）をたくさん連ねて晋へ送らせた。欒盈及びその一族を乗せて曲沃へ送るためである。州綽しゅうしゃく、邢劓けいおも同行を希望したが庄公は晋へ帰ってしまうのではないかと心配して代わりに殖綽しよくしゃく、郭最かくさいを出すことにした。しかし庄公は二人に、欒將軍の部下とはなるが、わしに仕える身だということをお忘れなど釘を刺した。一行が曲沃を通った時、欒盈らは服を着替えて城に潜入し、夜中胥午大夫の門を叩いた。午は夜中の訪問に驚き、門を開き欒盈を見て再び驚いた。

「恩主殿どうして此処へ」

「密室で話したい」

午は盈を迎え入れ奥の部屋へ通した。午の手をとって何か言おうとしたが言葉にならず思わず涙がこぼれた。

「何かありましたら一緒に相談いたしましょう。泣かないで下さい」
盈は涙を収めて話し出した。

「わしは范、趙等の大夫たちにはめられて先祖を祀る事ができなくなつてしまつた。齊侯が冤罪に同情してわしを此処へ連れてきてくれたんだ。齊兵が間もなく此処へ来る。あなたが曲沃の兵を動かして絳都攻撃に協力してくれたら、齊兵が外を、われ等が中を攻め絳都を手に入れる。わしに恨みを持つ者は捕えるしかないが、晋侯には齊との和解をお願いしようと思うのだ。欒氏の復興はこの一挙にある」

「現在晋の勢力は非常に強く、范、趙、智、荀の諸家は大変仲がいいので、成功は難しく自滅に近いように思われますが」

「わしの方にも一騎当千の督戎とくじゆうがおり、殖綽、郭最かくさいという齊の勇

者もいる。更に欒楽、欒魴等の弓の名手もいる。晋が強いといつても何もう恐れる事はない。それに以前わしが下軍で魏絳の副将をしていた時、彼の孫の魏舒にはよく面倒をみてやったものだ。彼は恩に感じていつでもわしに応えてくれるはずだ。もし魏氏が内応してくれば十中八九成功する。万一事成らず死ぬ事になつても悔いはいない」

「それじゃ、曲沃の連中の気持ちがどうかを探つてみましょう」

胥午はそう言つて欒盈を奥の部屋に匿つた。

翌日、胥午は共太子（驪姫に謀殺された太子申生）の夢を見たといつてその祠を祀つた。供え物を下ろし直会の宴（祭儀の後の宴）を張り、壁の後ろに欒盈を隠しておいた。酒が三巡して盛り上がった頃、

「共太子の冤罪は我われどうして我慢のできない事件だった」

と胥午が言つと、みな嘆息した。胥午は続けた。

「似たようなことがある。欒氏は代々大功があるのに晋では欒氏を追放してしまつたのだ。これは共太子の場合と同じではないか」

「そのことは國中不満だらけです。ご子息を国へ返す方法はないのでしょうか」

「仮にご子息が今此処におられたらみんなどうする」

「ご子息を主に仰ぐ事ができれば我われ力を尽くし、死んでも悔いはありませんよ」

と言つて泣き出すものが多かつた。

「諸君、嘆く事はない、欒氏のご子息はここにおられるのだ」

欒盈は壁の後ろから出てきて皆に挨拶した。出席者もみな挨拶を返した。欒盈はみなに、

「もし再び絳州城に帰ることができれば以て瞑すべしです」

と帰国の意思を述べるとみな喜んで従うといい、その日はゆつくり飲んで散会した。

翌日、樂盈は一通の手紙を書き曲沃の商人に託し絳城の魏舒に届けた。魏舒はもととも范、趙はやり過ぎだと不満に思っていたので、密書を受取りすぐに曲沃軍に内応する旨の解答を送った。樂盈は大変喜び、胥午は曲沃の戦車を三百二十乗集め、樂盈がこれを率いて進発した。樂氏の一族は老弱を除き全員従軍した。督戎を先鋒にして、殖綽、樂楽を右軍、郭最、樂魴を左軍とし、日暮れ時に出發して、曲沃を出て六十里を進軍し一夜のうちに絳都に到着した。城郭の崩れた所から入城し直接南門に達した。絳城の守備軍は少しも知らず正に疾風迅雷、急のことで備える間もなかった。督戎が大声で叫び率先して突撃し一時二時間足らずで城の南門を切り開いて、樂軍を引入れ正に無人の境を行くようであった。

この時、范匄は屋敷に居て朝食が終わったところであった。突然樂王魴が息せき切ってやってきて樂氏が既に南門に来ていると報告した。范匄は驚いて急遽息子の范鞅を呼び迎撃させようとした。樂王魴は、「急を要します。ご主君を奉じて固宮へ避難願います。固宮なら堅守できます」

固宮とは晋文公が呂飴甥、卻芮に宮殿を焼き討ちされた事を反省して、宮宮の東隅に不測の事態に備えて建てたものである。周囲十里余りあり、宮内は公宮並みで、食料も十分に貯えられており、三千人の武装兵士が順番に配置されている。外部は深い堀が有り、堀の高さは数丈有って非常に堅固だから固宮と言っている。

范匄は内応するものが現れるのを心配した。

「諸大夫はみな樂氏に怨まれています、魏氏だけは気をつける必要があります。早速君命と呼びつけるべきです」

と樂王魴が言う。范匄も同じ考えて、范鞅に君命という事で魏舒を呼びにやり、同時に車を用意させた。

「行き先は極秘です」

と樂王魴が言う。このとき平公は外家の葬儀であった。范匄と樂王魴は鎖帷子の上に喪服を着て墨纁をつけ、女たちをごまかし宮中に入り平公に状況を説明しそつと固宮に連れて行った。

一方、魏舒家は城内の北隅に有った。范鞅は車を飛ばして魏舒家に着くとすでに門外に兵や戦車を南に向けて車に武器を装備し樂盈を迎える用意ができていた。

范鞅は車を下りて、

「樂氏の謀叛です。殿はすでに固宮に避難されています。我が父及び諸大夫のみなさんは殿のところに集合しておりまして、あなたさまを迎えに来るよう命じられました」

と言った。魏舒が何か答える前に范鞅は魏舒の車に跳び乗り、右手に剣をとり左手で魏舒の帯を引いた。驚いて魏舒は声も出ない。

「出發だ」

范鞅は御者に命じた。

「どちらへですか」

「東へ向かって固宮だ」

南に向いていた魏舒の兵は東に向きを変え固宮へ向かった。

さてこの結末如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第六十四回

樂盈 曲沃城で死し
齊杞梁 莒の且干門で死戦す

范匄は魏舒を迎えにわが子范軼を遣わしたがどういふことになったか内心落ち着かず、自ら城に登り様子を眺めた。すると一隊の軍が西北の方からやつてくるのが見えた。わが子と魏舒が同じ車に乗っているではないか。

「樂氏孤立したり」

と思わず喜びの声が上がり、すぐに宮門を開いて入れた。魏舒は范匄に会ったが顔色も落ち着かなかった。范匄は彼の手をとって、

「みな將軍が樂氏に通じていると言うが、わたしはあなたがそんな人ではないとわかっていました。あなたとわたし組んで樂氏を滅ぼせば、事が成功した暁には曲沃をあなたの封地にしましょう」

と言った。魏舒はすでに范氏の堅牢な籠の中である事を知り、仕方なく言われるままに従つて平公に拝謁し、共に迎撃対策を協議した。間もなく趙武、荀吳、智朔、韓無忌、韓起、祁午、羊舌赤、羊舌肸、張孟等が次々それぞれの軍を引き連れ集まつてきたので軍勢は一段と勢いづいてきた。固宮の門は南北二ヶ所だけでどちらも嚴重な関門である。范匄は、趙・荀両家協力して南門を、韓無忌兄弟は協力して北門をそれぞれ二重の守備態勢をとるよう命じ、祁午等には周囲の巡察警戒を命じた。匄、軼父子は平公のそばを離れなかった。

樂盈は絳城に入ったが魏舒が来ないので心配になり軍を入り口で止め、様子を探らせた。晋侯並びに百官はみな固宮に避難し、魏舒もその

中にいると言つた。

「魏舒め、わしを騙したな。見つけたらこの手で叩き殺してやる」
樂盈は魏舒が自分を騙したと思ひ切齒扼腕し、督戎に言つた。

「氣をつけて固宮を攻めろ、勝つた暁にはそなたと一緒に富貴を味わおうぞ」

「兵の半分をいただければ南門はわたしだけで攻めます。殿は諸將を率いて北門を攻撃願います。どちらが先に攻め込めるか競争致しましょう」

督戎は張り切つたが、一方殖綽と郭最は樂盈に協力するために一緒に来てはいるが、盈が齊へ州綽、邢蒯を連れてきて以来齊侯が二人を常に自分等より上に扱うので、いわゆる『坊主憎けりや袈裟まで憎い』である。氣分が晴れずその恨みがどうしても樂盈のほうに転嫁せざるを得ない。しかも口の端々に督戎を誉め殖綽と郭最の二人を重用しようとなないので、二人は冷え切つてしまひ傍觀的になつて力戦する意欲が湧かない。樂盈が頼れるのは督戎だけであつた。

督戎は直ちに二本の戟を持つて固宮へ駆けて行き南門の攻撃に掛かつた。関外の様子を見ると威風凜凜、殺氣が立上がり、まさに黒い厄病神が下りてきた様である。晋軍も元もとその勇名は知っているのでこれを見てみな胆を冷やした。趙武はその姿を羨ましうにため息をついて見ていた。趙武の部下に解雍、解肅という兄弟の勇將がいた。どちらも長槍の使い手で軍中では有名であり、趙武が羨ましうに嘆息しているのを見て不満に思ひ、

「督戎といえども三頭六臂じゃあるまいし、われわれ兄弟力不足です。が門を出て生捕りにして参りたいと存じます」

と申し出た。趙武は、

「くれぐれも用心して、敵を甘く見ないように」

と注意して許可した。二将は装束を揃え車を飛ばし門を出た。斬壕を隔て督戎に向かい大声で言つた。

「そこに来ているのは督將軍ですか。惜しいですね、あなたのような立派な將軍が謀反人についているとは。早々に帰順なされば、今でしたらまだ禍を転じて福となす事もできますよ」

督戎はこれを聞いて怒つて、兵士に斬壕を埋め立てるよう命じた。兵たちが土石を運んでいると督戎はいらいらして二本の戟を地に支え力いっぱい跳び上がりさつと壕の向うへ跳び越えた。逆に解兄弟の方が驚いて急いで槍を構えて督戎に挑んだ。督戎は二本の戟を振り回し全く恐れを知らない。すぐ解雍の戦車の馬が督戎の一戟をくらつて背骨が折れて車が動かなくなり、解雍の馬も驚いて嘶き走れなくなつてしまつた。解兄弟は督戎が一人だと馬鹿にして車を下りて戦つた。督戎の二本の大戟は右へ左へ振る度にびゅうびゅうと鳴響く。解雍がさつと槍を突いてきた。督戎は一方の戟でさつとかわし引いた勢いでバシツと解雍の槍をへし折つた。解雍はその槍のさおを投げ捨てて逃げ出した。解雍は慌てふためいて槍を出すのが遅れたため督戎に一突きで刺し倒された。督戎は振り返りすぐに解雍を追つた。解雍は逃げ足が早く堀を回つて北門まで来ると宮中の兵士が縄を降ろし引張り上げた。督戎は遂に間に合わず仕方なく解雍のとどめを刺そうと戻つてみるとついに敵に固宮の中へ連れ戻されていた。督戎はカンカンになつて一人戟を持って大声で叫んだ。

「力があると思う者は何人でも出て来い。まとめて戦おうじゃないか、

時間をもつたいない」

門の上からは誰も返事がなかった。仕方なく督戎は本宮へ戻り明日の攻撃の準備をしておくように指示した。

その夜重傷だつた解雍は亡くなつた。趙武はその死を非常に惜しんだ。

「明日、もう一度彼と決戦し、兄の仇を討たいと存じます。死んでも悔いはありません」

と解雍が誓つて言つと、荀呉が、

「自分の部下の牟登という老将に牟剛、牟勁という二人の息子がありどちらも千斤の力持ちで現在晋侯の侍衛を務めています。牟登に言つて今夜二人を呼び寄せ、明日解將軍と一緒に戦わせば一人に三人なら督戎に負けることはないでしょう」

と提案した。趙武も賛成し、荀呉が牟登に指示した。

翌朝、牟剛、牟勁の二人がやって来た。なるほど立派な体格で獐猛な容貌をしている。趙武は慰勞の言葉を与え、城門を開き解雍と一緒に出陣させた。督戎はとつと壕を埋めて戦車に乗つて城下で挑発している。三将が出てくると、

「死を恐れぬ者はさあ来い」

と大声で叫んだ。三将は物も言わず一本の長槍と二本の大刀で一挙に督戎に突つ掛つて行つた。督戎は全く恐れる様子がなく、殺気立つて車から跳び下り、二本の戟を振り回し氣力をふり絞つて戦つた。戟は千斤の重みでふり下ろされ、たちまち牟勁の車軸は叩き壊わされてしまつた。しかたなく車を跳び下りて戦つたが督戎の一撃を食らつて滅多切りにされてしまつた。牟剛は頭に来て懸命にぶつかつていったが督戎の戟の動きが矢のように早く入り込む隙がない。老将牟登は危ないと見て門

の上から引上げを命じ金を鳴らした。牟登は門を出て牟剛、解肅の援護のため斬り込んで行った。督戎は兵たちに城門の攻撃を命じた。城門の上からは雨のように矢や石が飛んできて兵の損傷が非常に多くなってきたが督戎だけは一歩も下らず勇猛そのものだった。

趙武と荀呉は二陣とも連敗し范宄に危急を告げた。

「督戎一人に勝てないでどうして欒氏の謀叛を平定できるのだ」

范宄はその夜遅くまで燭をとり悶々としていて、そばに侍っていたある奴僕（召使い）が遠慮がちにたずねた。

「元帥は随分お悩みのようですが、督戎の事ではございませぬか」

見るとそれは斐豹である。彼は元々屠岸賈の部下の猛將斐成の子であり、屠岸賈の与党として連座し官を剥奪されて奴僕に落され中軍に服役していたのである。

范宄は身分を顧みない発言を奇異に思つてたずねた。

「そなたに督戎を除くいい案があるのか、それが有れば重賞ものだ」

「わたくしは『罪人名簿』に名があるため、志は高く持つておりますが官に登用される資格がございません。もし元帥が丹書からわたくしの名を消していただけるのでしたら督戎を殺してご恩に報いたいと存じます」

「もしそなたが督戎を成敗したら、晋侯に申し上げて丹書からそなたの名を抹消して中軍の牙將にしようじゃないか」

（牙將 五千人程度を率いる正副將軍に次ぐ軍官）

※ 丹書 ①罪状を書き記した罪人名簿 古くは朱筆、書たのでこの名がある、ハハはの意味 ②別に道德を書き記したものを丹書といふ 第 10 回注 6 参照。

「本当ですか」

「嘘なものか、神に誓つて約束は守る。ところでどの位の兵が必要か」

「督戎とは絳城で昔から知つていてよく相撲の勝負を賭けたものです。彼は力を持ち非常にせっかちで、一對一で戦うのを好みます。沢山の兵で行つたのでは勝てません。わたくし一人で行つて奴を捕える方法があります」

「行つたきり帰つてこないという事はないだろうな」

「わたくしには今年七十八歳の老母のほかに妻子もいます。どうして罪の上に罪を重ね、不忠不孝ができません。神明に誓つて申し上げます」

范宄は喜んで酒食をだし、犀の甲冑を一式与えた。

翌朝、斐豹は白い練り絹の軍服の下に范宄から与えられた鎧をつけ、頭にはなめし皮の冠をかぶり、麻の履をはき腰に利刃をしのばせ、手には重さ五十二斤の銅錘（ハンマー）を持つて范宄の所へに挨拶に行つた。

「では参ります。奴を殺して凱旋するか、さもなくば彼の手に掛かつて死ぬかで、両存はなき覚悟であります」

「わしも行つてそなたの働きを見よう」

すぐ車呼び斐豹を右に乗せ南門へ行つた。趙武、荀呉がやつて来て督戎は続けて二将を討取つた英雄だから無理だろうと言つたが、

「今日は斐豹が一人で督戎に挑戦するといふんだ。晋侯の福運を見てみようじゃないか」

そう言っている内に督戎が門下によつて来て、大声で挑戦してきた。

※ 犀の甲冑 雄虬の皮で作った鎧甲 その皮は厚く当時の高級な甲冑である

ひひょう
斐豹は城門の上から叫び返した。

「督戎、斐大だ、わかるか」

斐豹は長男だから自分を斐大と呼び、昔そう言って呼び合っていたのである。

「斐大か、おまえどうして命を粗末にしようとするんだ」

「みんなはお前を怖がっているが俺はお前なんか怖くない。兵を下げてくれ、一対一でやろうじゃないか。生き残るのはどちらか一人。残った者が将来に英名を残す事になるんだ」

「よし、そりやおもしろい」

督戎が約束通り兵を下げると、門が開き斐豹がたつた一人出てきた。二人は城門の下で交戦した。二十合程渡り合ったが勝負がつかない。

「廁に行きたくなつた。ちよつと待ってくれないか」

とごまかすと、督戎が聞くわけがない。斐豹はあらかじめ城の上から地形をよく見ていて、西の方に空地があり低い塀があつてそこに隙間があるのを知っていたのでそつちに走った。

「何処へ逃げようというんだ」

と督戎は大声で後を追つた。范勾は城門の上から見ていて、督戎が斐豹を追つていくのを見て冷や汗をかいていた。実は斐豹はある計略があつて、低い塀まで走って行き、急にその中へぴよんと跳び込んだのである。督戎は斐豹が塀を越えたのを見て自分もさつと跳び越えた。目の前に斐豹がいると思つたらいいではないか。斐豹は大木に隠れて督戎が飛び越えてくるのをじつと待っていて、不意に五十二斤の銅錘で後ろから殴りつけた。それは督戎の頭に命中し頭が碎けて倒れた。それでもまだ督戎は右足を蹴つて斐豹の胸の犀の鎧の一枚を引きちぎつた。斐豹は

急いで腰の剣を抜いて首級を切り取り再び塀を越えて出てきた。城門の上では斐豹が手に血の滴る首を持っているのを見てやつと彼が勝つたのだとわかつた。解肅、牟剛は軍を率いて門を開き敵に突入して行つた。欒軍は大敗し、半数は殺され半数は投降し逃げたのは十人のうち一人か二人あるかなしかであつた。

「殿は何と幸せな方なのだろう」

と范勾は感激し、斐豹に酒を与え彼を晋侯に引き合わせた。晋侯は賞として戦車一乘を与え、功第一等とした。潜淵先生の詩がある。

督戎の神力は天下無双 奴僕が相手と誰知ろう

先例破る破格の登用 哀れなり督戎紛物を食わされり

さて欒盈は大軍を率い北門を攻めていたが次々と督戎の捷報を聞き、「督戎が二人いたら固宮など落すのに何の心配も要らないんだが」と言うつと、殖綽は郭最の足を踏み、郭最是目で答え、俯いて何も言わなかつた。欒楽と欒魴だけは降りしきる矢や石を構わず功を立てようと頑張つていた。韓無忌、韓起は前に連敗しているので軽々に門を出ようとはせず守備に徹していた。

三日目になり欒盈は督戎が殺され全軍壊滅したという報告を受けた。驚いて全く打つ手がなかつたが、氣を取り直し殖綽、郭最に相談した。

「督戎殿でさえ駄目なものを我々のようなものではとてもとても」

と二人は笑つて全くやる氣がない。欒盈は涙が止まらない。

欒楽が一計を献じた。

「我われの生死は今夜で決まります。兵たちに命じ全員北門に集め三更に降に戦車を高く重ねてそれに登つて関門に放火すれば或は固宮に入

れるかもしれません」

樂盈はその案に従った。

一方晋侯は督戎の死を喜んで、酒を出して祝った。韓無忌、韓起も祝いに来て二更まで飲んで解散した。北門に帰ってやつと点検が終わった頃、突然軍の音が轟いた。樂軍が集まり城門の高さと同じくらいに車が積み上がりその上から無数の火矢が射掛けられ門に火がついた。火の勢いは猛烈で門内の兵士は守りきれなくなった。樂樂が先頭を切って討ち入り樂魴が続き、勢いに乗って遂に外門を占領した。韓無忌等は退いて内門を守り、急いで中軍に救援を求めた。

范匄は魏舒を南門へ遣り荀呉と交替し荀呉を北門へ二韓の救援に遣った。そして晋侯と楼台に登り外門の樂軍の様子を眺めたが静かで声もない。

「これはきつと罠です」

范匄はそう判断して内門に用心して防衛するようにと伝令しておいした。夕方になると樂軍はまた車に登り相変わらず火器で内門を攻めた。今度は火器対策がとられていて、帳は牛革製で水を含むと火を防げるのである。しばらく戦って両者静まった。范匄は、

「賊は迫っている。早く撃退しなければ斉軍が来たら国が危うい」

と言い、息子の范鞅はんおう、斐豹ひひょうと一緒に南門から出て北門に回り外から攻撃させ、これと時刻を合わせ韓兄弟は内門を守り、荀呉に牟剛と一緒に内門を出て外門に突撃させ、背腹から挟撃するよう命じた。趙武、魏舒には門外に兵を待機させ敵が南に逃げるのに備えた。手配を終え、范匄自身は晋侯を奉じて楼台から観戦した。

范鞅は出陣前に、

「わたしは衆望を得るには年が若すぎます。中軍の旗をお借りしてもよろしいでしょうか」

と范匄に頼み許された。鞅は剣を持ち中軍旗を立てて出陣した。南門を出たところで部下に、

「今日の戦は前進あるのみだ。万一負けた場合はわたしは先ず自刎する。決して諸君だけに無駄死にさせる事はない、進め！」

と叫ぶとみな大いに敵愾心を燃やし奮い立った。

一方荀呉は范匄の命令を受け、将士に腹こしらいをさせ約束の時刻を待った。見るも樂軍は騒ぎ出してみな外門を出ようとした。その様子から范鞅の外からの部隊がやって来たのがわかり、関の声を上げ関門を全開して、牟剛が先頭に立ち荀呉がそれに続き全軍一斉に攻撃に出た。樂盈も晋軍の内外からの挟撃に配慮し、樂魴に装甲車で外門の口を塞ぎ兵を分けて防いだので荀呉の軍は外へ出られなくなった。范鞅軍がやって来た。樂樂はその隊に中軍旗が見えたので、

「元帥が来たのか」

と驚き、実態を探らせた。報告では息子の范鞅だとわかり、

「それなら心配は要らん」

と安心し車に立って弓を構えて部下たちに、

「縄を十分用意してわしが射倒した者を縛って来い」

と言って晋軍に駆け入り、右に左に射て無駄矢は一本もない、同乗していた弟の樂樂に、

「矢がもつたいないですよ、殆ど無名の連中なんだから」

と言われて射るのはやめた。

しばらくすると、遠方から一台の車がやってくるのが見えた。車中の

将はなめし皮の冠に白い練り絹の軍服を着た奇怪な姿である。

「あれは斐豹だ。わが督將軍を殺した奴だ。射殺せ」

樂楽が言うと樂楽は、

「やつが百歩の範圍に入つて来ればそなたはわしに喝采するだらうよ」

と言つているとその横のほうからまた一車現れた。樂楽はそれが若將軍范軼であることがわかった。

「范軼をやれば斐豹の比ではないな」

と思つて范軼に近づき矢を放つた。樂楽の矢は百發百中であつたが、あいにくこれは外れた。范軼は振り向いて樂楽を見つけ、

「叛賊め、死ぬ前に俺を射ようというのか」

と范軼が大声で罵倒すると樂楽は車を返して逃出した。彼は本当は范軼が怖いのではなく、一矢射損ねたので誘い込んで近づき際にもう一度矢を放つ積もりだったのだが、こともあろうに、殖綽、郭最是樂楽が弓の名手だから功を彼に取られることを嫌つて、樂楽が退却しているのを見て、

「樂氏敗れたり」

と叫んだ。樂楽の御者はこれを聞いて他の樂家の大將が何か失敗したのかときよろきよろとしよそ見をしたため手綱の処置を誤り、車が槐樹の大木の根に触れて転倒し樂楽も投げ出された。そこへちょうど斐豹がやつて来て長戟で腕を切り落とした。哀れなり樂楽、樂氏中の第一の猛將は遂に槐樹の下で死せり。

百發百中の猿臂將軍 一矢無念や英雄を外す

天すでに樂氏を滅ぼさんとし 大功を許さざるか

樂楽は先に車を飛び降りたが樂楽を助けに行く勇氣はなくさつさと逃げてしまった。殖綽、郭最是内心自分たちのやつた事を非常に恥かしく思い帰国して斉侯に会う事もできず、殖綽は衛國に、郭最是秦國へ逃げて行つた。

樂盈は樂楽の凶報を聞き大声で泣いた。兵たちもみな涙を流した。樂魴は北門口を守り切れず兵をまとめ樂盈を守つて南へ逃げた。荀呉と范軼は兵を合わせ追撃してきた。樂盈、樂魴および曲沃の兵は必死に食い止めてやつと晋軍を振切つた。樂盈、樂魴も身に重傷を負い絳城の南門まで帰つて来たところへまたもや魏舒の一隊に阻まれた。

「魏伯（魏舒）、そなただけは下軍で一緒に仕事をした頃の事を忘れてはいないだろう。わしは死を覚悟してはいるがそなたの手にかかつては死にたくない」

と樂盈は涙ながらに言つた。魏舒も心中忍び難く兵を左右に開き樂盈に路を譲つた。樂盈と樂魴は残兵を率いて急いで曲沃へ歸つて行つた。間もなく趙武の軍がやつて来て魏舒に聞いた。

「樂盈が来たろう、どうして追わないんだ」

「彼は釜中の魚であり、甕の中の鼈です。自ずから適當な料理人がいるはずですよ。わたしは昔からの交情があります。とても刀を下す事はできません」

趙武も同情し追わなかつた。范匄は樂盈が逃げてしまった事を聞いたが、魏舒が同情したんだろうと思ひ追求せず、范軼を呼んで、

「樂盈にしたがつているのはみな曲沃の兵だ。きつと曲沃へ歸つたのだらうがもう爪も牙も無くなつてゐる。そなた一軍を率いて曲沃を攻

め後顧の憂いを断て」

と命じた。荀呉も同行を願ひ出たので許した。二将は三百乗の戦車を率いて曲沃を包囲した。

范匄は晋平公を奉じて元の公宮に戻り丹書を焼き、斐豹のお陰で奴隸の籍から脱した者は二十余家にのぼった。范匄は斐豹を牙将に登用した。話変わつて、斉庄公の方であるが、欒盈を送り出して間もなく、王孫揮を大将に、申鮮虞を副将、州綽、邢蒯を先鋒、晏釐を後詰、賈季、邴師等を隨身させ吉日を選んで自ら大軍を率いて救援に進発した。先ず衛を襲つた。衛は警戒して城を出て戦かおうとはしない。斉も城攻めは行わず帝丘（河南省濮陽西南）を望み北に向かつて直接晋の国境を侵し、朝歌（河南省淇県）を三日で攻め落したので庄公は朝陽山に登り軍をねぎらつた。ここで軍を三隊に分け王孫揮と諸将は前隊とし、左の道を取つて孟門隘（河南省輝県の隘路）を進み、庄公は自ら龍、虎の両爵を従え後隊とし、右の共山を進み太行山で合流することにした。途中共山の麓で野宿している時邢蒯が毒蛇にかまれて死ぬという事件があり庄公が非常に彼の死を惜しんだ。

一日足らずで両軍は太行山で合流した。庄公は山に上り新旧の絳都を眺め、これから絳都攻撃を協議しようとしているところへ、欒盈が敗れて曲沃に逃げ込み晋侯が大軍で曲沃へ向かつているという情報が入った。

「我が志遂に成らずか」

と慨嘆し少水で軍を檢閲し撤兵した。邯鄲の守将趙勝は斉兵を追つた。庄公は大軍が追撃してくるのが分かつたが、すでに前隊は先発していたので急いで逃げた。晏釐だけは留まつて追撃を阻止したが敗れて趙

勝に斬られた。

范鞅、荀呉は曲沃を一ヶ月余りにわたり包圍攻撃を続けた。欒盈側は戦うたびに敗れ、城内は死者が半数を超え矢も食料も尽きてしまい、終に落城した。胥午は自刎し、欒盈、欒栄等は生け捕りになった。欒盈は悔やんでつぶやいた。

「ああ、辛俞の忠告を聞かず、結局こういうことになってしまったか」

荀呉は欒盈を収監して絳城に護送しようとしたが、范鞅は、「殿は優柔不断なところがおありになるから、万一情に引かれてお赦しにでもなつたら、恨みを持った男を放免する事になり後顧の憂い残す事になる」

と言つてその夜人を遣つて欒盈を絞殺した。同時に欒栄ほか欒氏の一族を全て殺してしまつた。ただ混戦の中で欒魴だけは城壁に縄を下ろし宋を頼つて行つた。范鞅等は兵を引揚げ復命した。平公は欒氏の事件を諸侯に発表した。多くの諸侯が祝賀の使者をよこした。この後范匄は老齢を理由に退職し趙武に政権を移譲した。

賓は桓叔を、枝は文公を輔佐し

この功盾に盾は書に伝え代々国家の支柱なり

願奢りて九仞の功を一簣にかき

盈は好士なれどもその身は滅ぶ

家を保つに踏む道あり 以て子孫の戒めとすべし

さて、斉庄公は晋討伐を掲げて出兵したが結局何の功も挙げられていない。雄心は衰えず、斉の国境まで帰つて来たが国へ入ろうとせず、

「平陰の役は吾が自分の土地を増やそうとしてわが国を攻めて来た

事が発端だ。あの時の恨みを晴らさないではおけない」

「と言って国境上に兵を駐屯させ、戦車を大量に準備した。州・緯、賈傘らには堅固な戦車を五乗賜り『五乗の客人』と呼んだ。」

賈傘が臨淄の華周、杞梁は勇猛な男だと推薦したので庄公は早速人を遣つて召出した。二人が参内すると戦車を一乗与え同乗して従軍し功を立てるよう命じた。華周は退ると食事もしないで不満そうに、

『五乗の客人』というのは彼等が勇猛だからだが、我われだって勇猛だという事で呼び出されたんだ。あの連中は一人で五乗、われ等は二人で一乗、これじゃ我われは用いられたことにはならん。馬鹿にしているじゃないか。断つて他所へ行つた方がいいよ」

と言つたが、杞梁は、

「わしには老母がいるから他国へは行けない。だから主君の命令に従うつもりだ」

と言ひ、帰つて母親にこのことを話した。

「お前は今まで正義という程の事はしてきてないし、このままでは死んでも無名のままじゃ。たとえ『五乗の客』がいても誰もお前を馬鹿にしているわけじゃない。頑張りなさい、君命から逃げてはいけません」

杞梁は母にこう説得され華周に母親の話をした。

「女性でさえ君命を大切にすべきだといわれる、わしも君命を奉じる事にしよう」

二人は下賜された車に同乗して庄公に従つた。

庄公は兵を数日休めた後、王孫を大軍と共に国境に留め、『五乗の客』と精銳三千だけを連れて、枚をふくませ肅々と吾国に向かった。華周と杞梁は先鋒を願ひ出た。

「戦車は何乗必要か」

「我われは、自分等だけでお仕えた者ですから自分等だけで参ります。賜りました一乗だけで十分です」

庄公は彼等の武勇を試そうと笑つて許可した。華周と杞梁は交替で御者を担当する事にした。

「もう一人右側にいたら敵の一隊くらいは相手にできるんだがなあ」
出発前にそう言っていたら、ある兵卒が勇敢に申し出た。

「わたしは將軍方に同行させていただきたいのですがよろしいでしょうか」

「そなた名前は」

「わたしは斉の人間で隰侯重と申します。將軍方の義勇をお慕ひ申しあげ是非お供いたしたく存じます」

これを許し三人同乗して颯爽と出かけた。

莒の郊外に着き露宮で一夜を明かした。翌早朝、莒の黎比公は斉軍の間もなく来るとわかつたので三百人の兵を引連れ郊外を巡視していた。そこではつたり華周、杞梁の車に出会つたので喚問しようとする、周、梁はまなじりを上げて大声で叫んだ。

「我らは斉将である。わしと決闘しようという者はいるか」

黎比公は突然で驚いたが、相手の車には後続部隊がないのがわかり、兵士に包囲させた。周、梁は隰侯重に、

「そなた休まず太鼓を叩け」

と言つて、それぞれ長戟を取つて車を跳び下り左右に突つ込み片つ端から切り倒した。三百人の兵士の半数は殺傷された。と黎比公は驚いて言つた。

「わたしはお二人の將軍の武勇を始めて存じ上げました。これ以上殺し合うのを止めて、莒国きよこくを分けて將軍方と共有致しませんか」

それに対し両將は声を揃えて、

「国を出て敵に帰するは不忠なり、命を受けこれを棄てるは不信なり、敵に入つて敵を殺すは將の務めなり。貴国の利益はわれわれには関係ないことだ」

と言つと、再び戦いが始まつた。黎比公れいひこうは防ぐ事ができず大敗して逃げて行つた。

齊庄公の大隊がやつて来て、二將だけで戦つて敵を敗走させたと聞き、使者を出して彼等呼び返した。

「そなたたちの勇敢さと実力はよくわかつた。それ以上戦う必要はない。今後そなたたちも齊国経営に共に當つてもらいたい」

と言つと周、梁は、

「主君は『五乗の客』を創られましたが我々は一乗しか与えられませんでした。我われの勇氣を輕視されたからでございましょう。また利で釣ろふとなさるのは我われのやつた事への侮辱であります。敵陣に入り込んで戦うは將の務めですし、齊国の利益は我々には関係ない事です」と言つて挨拶して使者を返し車を棄て、歩いて且于しよの城門に迫つた。黎比公れいひこうは狭い道に溝を掘つて炭を燃やした。炭火は赤々と燃え進むことができない。

「古の土は死して名を後世に残しました。わたくしも死んであなた方に溝を越えていただきます」

隰侯重しよほうじゆうは、そう言つて火の上に盾を敷いてその上に伏して二人を渡した。二人が渡つて振り返ると隰侯重はすでに焼け焦げていた。二人は声

を出して泣いた。杞梁は涙を収めたが華周は泣き止まなかつた。

「お前、どうしてそんなに泣くんだ、死ぬのが怖くなつたのか」

「死ぬのは何ともない。あいつはわしと変らない勇氣があつたからこそ先に死ねたんだ。だからあいつの事を思うと残念で仕方がないんだ」

黎比公れいひこうは二將が火の溝を越えて来たので、急いで弓の上手な者を集め門の左右に伏せて二人が近づくのを待つて二將に放射した。二人が門に達する直前に百本もの矢が一斉に放射された。二將は矢をもつとせずつつ込んで行き又二十七人を斬り殺した。城側の兵士は城の上から輪になつて次から次に矢を雨のように発射した。杞梁きりやうが先に重傷を負つて死んだ。華周は身に数十本の矢を受け力尽き捕えられたが意識はまだあつた。黎比公れいひこうは車に積んで城中に戻つた。

意氣軒昂 五乗の客に劣らぬ勇士

姿は熊か虎の如く力は千鈞を抜く

誰知ろうこれぞ身命顧みず單車で敵陣に殴り込み

義に殉じたる勇士なり

齊庄公は使者の復命を聞き周、梁が死を覺悟している事を知り、直ちに大隊を率いて進軍した。且于しよの城門まで来るとすでに三人は戦死したと聞き非常に怒り、即刻攻城を開始しようとした。

黎比公れいひこうは齊軍に使者を遣わし、

「我が主君は單車を見ただけでしたので貴国の派遣された方だとは存じませんでした。しかも貴国の死者は三名ですが弊国の死者は百余人にのぼります。彼等は自ら死にに来たのでして我われは特に兵を増やしたわけではございません。わが君主は君侯の威を畏れまして小職に十分

お詫び申し上げ、今後毎年斉国へ朝見させていただきます、決して二心なき事をお誓いするように特命がございました」

と謝ったが、庄公の怒気は益々高まり講和を認めようとしなかった。黎比公は再び使者を出し華周を送還し杞梁の遺体も返しさらに金帛（金や絹）を贈って斉軍をねぎらおうとしたが、それでも許そうとしなかった。その時突然王孫揮から、

「晋侯が魯、宋、衛、鄭の各国主と夷儀（現在の河北省北邢台）で会合して斉討伐を謀っていますので早急に帰国願います」

という急報が入った。この報せを受け庄公は仕方なく莒の講和を許した。黎比公は大量の金帛を献納し、華周を溫車（寝台車）に乗せ杞梁の遺体を輿に載せて斉軍に送り帰した。隰侯重だけは炭火の中で灰になつてしまつていたので帰すことができなかった。庄公は即日軍を引揚げ、杞梁を臨淄郊外に葬むよう命じた。

庄公が臨淄郊外に帰つて来ると、杞梁の遺体を迎えに来た妻の孟姜に出遭った。庄公は車を止め彼女に弔意を伝えた。孟姜は使者に丁寧な挨拶をして言った。

「梁に罪がございましたらどうしてお殿様に葬儀をお願できません。もし梁に罪がなければ夫の居場所が我が陋屋でございます。郊外は弔う場所として適当ではありませんので此処でのお祈りはお断り申し上げます」

「わしが悪かった」

と言つて庄公は大いに恥じて杞梁の家に位牌を置いて葬儀を行なつた。彼女は夫の棺を送つて城外に埋葬するに際し、そこに三日野宿し棺を抱いて泣き続けた。涙が涸れると血が流れ出し、その切迫した悲しみ

と妻の精誠に感じて臨淄城の壁が突然数尺崩れ落ちたという。

後の伝説に、范杞梁という秦の人が長城建設に送られて行つて死に、何も知らずに夫に冬服を届けに長城へ行つたその妻孟姜女が夫の死を聞いて痛哭しそのため長城が崩れたという話があるが、これはきつと斉將杞梁の事が誤り伝えられたのであろう。華周は斉に帰つたが重傷だったのやはり間もなく死んだ。その妻も常人にないほど哀哭切々たるものがあつた。『孟子』の中で、「華周、杞梁の妻が夫のために善く泣いて弔つたので、斉国の風俗がそのように変わった」と称えているのはこの事を言っているのである。

杞梁の忠勇 千秋忘れはずまい

悲痛なる妻女の慟哭 城を崩す

これ今もなお斉国の風俗となり

寡婦の哀哭 孟姜にならう

これは周靈王の二十二年（紀元前五五〇年）の事で、この年は谷水があふれて洛水に流れ込み、黄河も氾濫して平地は二尺余り浸かつてしまつた。そのため晋侯は斉討伐を中止した。

ところで斉の右卿崔杼は庄公の淫乱を憎んでいたので（妻女嬖妾を寝取られた恨み）晋軍がやつて来るのを期待していた。それに乗じて大事を決定するつもりで左卿慶封と成功したら斉を分け合おうという相談までしていたが、洪水のため晋軍が来ない事になったので内心誤算が生じ面

孟姜女 秦始皇帝時代、万男の長城建設に徴用された夫が、過酷な労働で死ぬ。妻の孟姜女は夫から便りがないので心配し、冬衣を届けに長城にまで行く。そこで夫の死を知り、彼女が長城そばで泣き続けたところ長城が崩れたという（民間伝承）

白くない。ちょうどその頃、庄公が近侍の賈豎かしゆうを些細な事で鞭打ち百回の刑にし、賈豎が庄公を怨んでいるという情報聞き込み、彼にまいな
いを与え味方に抱き込んで庄公の一举一動を漏れなく報告するよう命じ
た。

いったい崔杼は何を企んでいるのであろうか、それは次回のお楽し

第六十五回

崔杼と慶封 齊侯光を弑し國政を専斷

崔杼 衛公から國政一任の約束を得て復國に協力

周靈王二十三年（紀元前五四九年）五月、莒の黎比公は齊侯に毎年朝見を許されて、この月自ら臨淄を訪問した。庄公は喜んで北郭で宴を設け彼を款待した。崔氏の屋敷は正にその北郭にあつたのである。諸大夫はみなこの宴会に出席したが、崔杼は庄公の言動を探るため、風邪で起きられないと称して欠席し、密かに腹心に賈豎と連絡を取らせていた。そのうち賈豎から連絡が入つた。

「殿は宴席が終わり次第相國を見舞いなさるとおっしゃっています」

崔杼は笑つて、

「殿がわしの病氣を心配するわけがない。わしの病氣を幸いに破廉恥なことをしようというのであらう」

と言つて、妻の棠姜を呼んで計画を話した。

「わしは今日無道な馬鹿殿をやつてしまおうと思つてゐる。そなたがわしの計に協力するなら、そなたの恥ずかしい行為は無かつた事にし、そなたの子を後継にする。もしわしに随わないと言うのであれば、先ずそなたたち母子を斬る」

「女は夫に随うものでございます。ご命令がございましたら何でもお言いつけどおりに致します」

崔杼は棠姜に命じ内室の左右に百人の兵を、崔成、崔強には門の内側に、東郭偃には門外にそれぞれ兵伏を置かせた。手配が終わると鐘の音を合図と決めた。そして再び賈豎に殿が来たらこれこれと密書を送つ

た。

一方庄公は棠姜の色香にほれて寝ても起きてても彼女の事を思つてゐるが、崔杼が厳しい防備体制を敷いてるのでそう度々は行けない。

この日は崔杼が病氣で宴会に出られないというのを聞くと、彼女の事を思つて気もそぞろで宴席での礼儀もいい加減になつた。宴が終わると早速車を飛ばして崔氏の病氣を見舞つた。

「主人は容態が重くやつと藥を飲んでやすんでおります」

と門衛がうその説明をした。

「何処で寝ているのか」

「離れの寢室でおやすみです」

庄公は喜んで内室に入つて行つた。この時、州綽、賈躄、公孫敖、僕埋の四人も随いて行こうとしたが賈豎に引止められた。

「殿がここまでお見えになつたのが何のためかお分かりでしょう、相國を驚ろかせてお楽しみをぶち壊さないように門の外でお待ちになつたら如何でしょうか」

州綽等はその言葉を信じて門外に留まつたが、賈躄だけはついて行き正房で待つてゐた。賈豎はそうつと中門を開めの中に入った。守衛もそうつと大門を閉じ鍵をかけてしまった。

庄公は内室に入ると棠姜が艶かしい姿で出迎えた。また一言も交わさないうちに侍女がやつてきて

「相國さまが喉が渴くので蜂蜜湯がご所望のようでございます」

と言ふ。棠姜はすぐ帰つてくると言つて侍女とゆつくりと横の出口から出て行つた。なかなか帰つて来ないので庄公は歌を口ずさみながら欄干にもたれて待つてゐた。

幽玄なる静寂の部屋にて 美人と遊ばや
深奥の幽邃なる部屋にて 美人に会たや
美人は見えず ああ待遠しや

歌が終わつた頃、突然廊下から武器の音が聞こえてきた。

「どうしてこんな所に兵がいるんだらう」

庄公は変に思つて賈豎を呼んだが返事がない。間もなく左右の兵士が一斉に飛び出してきた。庄公は驚き謀叛だとわかつて急いで後方の門へ走つたが門は閉まつていた。庄公は大変な力持ちで門を破つて高樓に逃げ登つた。棠無咎は兵を指揮してこの樓を包圍し叫んだ。

「相国の命により淫賊を捕えに参つた」

庄公は欄干にもたれて無咎に言つた。

「わしはそなたたちの君主だ。逃がしてくれないか」

「相国の命令ですから勝手なまねはできません」

「相国は何処にいるんだ。互いに傷つけないという盟約を結びたい」

「相国は病気で来られません」

「罪は認める。太廟で自尽する事で相国にわびたいがどうだろうか」

「我われは淫賊を捕えよと命ぜられてゐるのみでそれがご主君かどうかは存じませんでした。ご主君が罪をお認めでしたら、虜囚の辱めを受けるよりご自裁なさつたらいかがです」

庄公は話がわかりそうに無いと見て、窓から跳び出し花台に上り堀を越えて逃げようとした。無咎はこれを見て狙い定めて放つた一矢が庄公の左腿に中たり、堀から落ちたところを兵士が一斉にとび掛かり刺し殺した。無咎は直ちに合図の鉦を打たせた。

時刻は黄昏時で賈拳は正房で耳をそばだてていたところ、突然賈豎が扉を開いて明かりを持って出てきた。

「室内に賊が入り殿があなたをお呼びです。先にお入り下さい、わたしは州將軍方に知らせてまいります」

「わしに明かりをくれ」

賈豎は明かりを渡そうとしてわざと手を滑らせて落し火は消えた。賈拳は剣を取つて手探りで進みやつと中門に入つたところで、仕掛けられた紐に足をすくわれ倒れたところを、門の横から跳びだして来た崔強に刺し殺されてしまった。州綽らは門の外でいたから内部の事は知らない。東郭偃は好意を示す振りをして州綽らを近くの建物に誘つた。明かりの下で酒肉を出し剣は下ろしてゆっくりやりましようと言つて、従者にも酒を振舞つた。その時突然屋敷内で鉦が鳴つた。東郭偃は、

「殿が酒をお飲みになつてゐるのでしよう」

「相国が病気だと言つのに」

「相国は病が篤いんです、誰がはばかりるもんですか」

そのうちまた鳴つた。偃は立ち上がり、

「わたし中に入つて見えます」

そう言つて偃が出て行くと兵士が一斉にほう起した。州綽は急いで剣を搜したが無い。事前に東郭偃が部下に盗ませたのである。

州綽は怒つた。門前に有つた車に石が乗つていたのでこれを碎いて兵士に投げた。ところがちょうどそこへ来合させた僕に当たつて足が折れてしまった。公孫敖は馬をつなぐ杭を引き抜き振り回して多くの兵士たちがこれにかかつて傷付いた。兵士たちは彼等に松明を投げつけたので髪は焼け焦げてしまった。その頃大門が突然開き、また崔成、崔強が新

手を引連れて門内から出てきた。公孫傲は崔成の手を引張り腕をへし折ったが、逆に崔強の長戈に刺殺され即死した。足を痛めた僂埋も彼に殺されてしまった。州綽が兵士の戟を奪い取って戦いを仕掛けてきたので、東郭偃は、

「馬鹿殿は淫乱無道でしたからすでに誅戮されました。皆さんには関係ない事です、命を大切にして新君主にお仕えになったら如何です」と大声で叫んだ。州綽は戟を放棄して、

「他国の亡命者を斉侯は心から遇してくれました。今日は斉君をお守りする事もできず、却って僂埋を傷付けてしまいました。恐らくこれは天意でしょう、一命を棄て斉侯のご寵愛に報いるしかありません。ここで生きて斉、晋両国の人々から失笑を買うのには耐えられません」

と言うと石垣に頭をぶつけて死んだ。なんとその石も裂けていた。邴師は庄公の死を聞き朝門の外で自刎し、封具は家で縊死した。鐸父と襄尹は庄公の死を弔いに行く積もりだったが、途中で賈辛等みな死んでしまったという事を聞き彼らも自殺した。髡翁の詩がある。

虎の如く龍の如く勇氣は絶倫 君恩思い死も亦軽し
私恩は私恩で報う 大臣の殉死かつて有りしや

この時王何は盧蒲癸と一緒に死のうと誘ったが癸は、
「そんな事しても意味が無い、取りあえず逃げて後のことを考えるべきだ。運よくどちらか新しい体制に受け入れられたら、お互いを推薦する事にしたらどうだ」

と言う。王何もこれに同意して誓約し、王何は莒国へ出奔した。盧蒲癸は出国に際し弟の盧蒲癸に、

「殿は自衛のために勇爵を作られた。殿と一緒に死んだのでは意味が無い。わしは出奔するがそなたは崔、慶に仕官し、わしに殿の報復のために帰国する機会を教えてください。報復できたら死んでも悔いはない」と言い残し晋国へ出奔した。盧蒲癸は慶封の家臣になった。申鮮盧は楚に出奔し楚に仕えて後に右尹になった。

斉の大夫たちは崔氏の謀叛を聞くと皆門を閉じそつと情報を探って出て行く者はいなかった。しかし晏嬰だけは崔氏の屋敷へ行き庄公の枕元で大声で泣いた。そして立ち上がり三度跳ねて亡きがらに国のために尽くす元氣があることを示して行つた。

「晏嬰は殺しておくべきではないですか」と棠無咎がいうと崔杼は溜息をついて言つた。

「彼は賢人で知られている。殺して人心を失う方がもつと心配だよ」晏嬰は帰って陳須無に、

「立君の件を協議しなければならぬな」と相談したが陳須無は

「兵権は高、国両氏にあり、政権は崔、慶の両氏にありますから、わたしなど何の力もありません」

と言ひ、晏嬰が帰ると、
「とても乱賊と一緒に仕事はできん」

と言つて宋へ出奔した。晏嬰は次に高止、国夏に会ったが、彼らも、「崔氏がここまでやって、慶氏も協力しているとすればわたしが口出しする余地は無いですね」

と言うので嘆息して帰つた。
間もなく、慶封は庄公の残党狩りを徹底し、崔杼を朝廷に迎えそれか

「高、国を呼び出し立君の件を話し合った。高、国は崔、慶に譲り、慶封も崔杼に譲った。」

「靈公の子杵臼殿がすでに成長されているし、母君は魯の大夫叔孫僑如の娘さんだから、杵臼殿を立てれば魯との友好も図れるがどうですか。」

崔杼がこう言うのと三人は唯々諾々と認め、公子杵臼を君主に迎えた。これが景公である。この時景公は未だ年が若かったので崔杼が自ら右相になり慶封を左相にした。群臣に太公の廟で犠牲の血をすすって崔杼、慶封に協力する事を誓約させた。

慶封、高、国と誓いが進み、順番が晏嬰に回ってきた。

「主君に忠実で国家の利益を考えているのであれば、それに協力しない者は天誅をうけるだろう。」

と嬰が天を仰いで言うのと崔、慶は色をなした。高、国が、

「両相の行動はまさに忠君であり、社稷を利するものです。」

と言って中を取って言うのと崔、慶とも怒りを解いた。この時黎比公はまだ齊にいたので崔、慶は景公を奉じて黎比公と同盟を結んだ。

崔杼は棠無咎に州綽、賈拳の遺体を集め庄公と一緒に北郭に葬り、礼法を無視して、『地下でも武勇逞しくされてはかなわん』と言って武器を併葬しなかった。そして、太史伯に庄公の死因を瘡（マラリア性の熱病）だったと書けと命じた。しかし太史伯はそれに従わず、

夏五月乙亥、崔杼其の君光を弑す
（光は齊庄公の名 呂光）

と書いた。崔杼はこれを見て非常に怒り、太史を殺してしまった。太史伯には仲、叔、季の三人の弟がいてみな史官であった。崔杼は太史仲に代って書けと命じたが彼も事実を書いたのので又殺され、叔も同様に殺

された。季も兄たちと同じく事実を書いた。崔杼はその竹簡を持って、「おまえの三人の兄がどうなったか見たであろう、死にたくなければわしの言う通りに書き直せ」

と彼に言った。季はそれに答えて言った。

「事実を直書（事実通り曲げずに書く）するのが太史の職分です。その職分を怠って生きるくらいなら死んだ方がましです。昔趙穿が晋靈公を弑した時、太史董狐は趙盾が正卿だったのに弑逆の犯人を討たなかったで、『趙盾其の君夷皋（靈公）を弑す』と書きましたが趙盾は董狐を罰しませんでした。史職の何たるかを知っていたからです。譬えわたくしが事実を書かなくても、天下に必ず事実を書く人が現れるでしょう。」

ですからわたくしが不実を書いても相国の汚点を隠さないだけでなく、わたし自身識者の失笑を買う事になります。どうぞ殺すなら殺して下さい。」

崔杼は彼の正論を聞きため息をついて、

「わしも社稷を守るためにやむを得ずやったことだ。直書されても人々はきつとわかってくれるだろう。」

と言って木簡を季に投げ返した。季は木簡を拾って史館へ向かう途中、南史氏（季と同役）がやってくるのに出会った。何をしに来たのか訊ねると、

「あなたの二兄弟が全員亡くなったと聞き、五月乙亥の事件がうやむやになってはと心配になって、わたしが書くつもりで木簡を持って来ただです。」

と言う。季が木簡を見せると南史氏は安心したように挨拶して帰って行った。髡翁（これを詩に讃えていう）

綱紀乱れ乱臣後を断たず
これを斧鉞を用いず筆で誅す

死を恐れず職責放擲を恐る 南史直書不殺を知りて安心す

奸雄白日史臣の魂を奪わんとす

阿諛迎合は史書への冒瀆なり

崔杼は太史の筆を氣にして、今回の謀殺を賈豎のせいにして彼を殺した。

この月、晋平公は洪水の勢いが退いたので、斉を討伐するために再び諸侯を夷儀に集めていた。崔杼は左相慶封を使者として庄公が亡くなった事を晋軍に報告させた。

「大夫たちはみな貴国の誅伐を恐れて、社稷を保つために貴国に代わり庄公を討ちました。新君杵臼は母君が魯姫様でございますので、改めて貴国にお仕えして、変らぬ旧誼をお願い致したいと申しております。なお、奪取致しております朝歌の地はお返し、幾つかの宗廟の祭器、樂器等を献上させていただきたく存しております」

そう言つて諸侯たちにも賄賂を渡した。平公は喜び兵を引揚げ、諸侯も皆解散しそれぞれ帰国した。これより晋と斉は再び友好状態に戻った。この時殖綽は衛にいたが州綽、邢劓何れも死んだと聞いて斉に戻ってきた。衛の献公衞は亡命して斉に居たが、以前から殖綽の武勇を聞いていたので公孫丁に十分な金を渡して招き、彼を部下にすることに成功した。

さて話は呉に移る。この年、呉王諸樊は楚討伐に出て、途中巢（現安徽巢縣）を攻めた時、巢将牛臣が低い堀に隠れて放った矢が命中して亡くなった。大夫たちは寿夢の臨終の言葉を守つて諸樊の弟の余祭を王

に立てた。

余祭は、

「兄は巢で非業の死を遂げた。先王は国王即位の順序を決めておられる。早く位を弟の季に渡そうと思うから、生には執着しないつもりだ」と言つて夜中に天に向かい死期が早まる事を祈った。それを見て側近の者は引き止めた。

「人が最も大切にするのは寿命です。王が自ら寿命を短くするように祈られるというのは人として尋常な行為とは申せません」

「昔太王は長男を廢し末子を立て大業を成し遂げられた。今兄弟四人が次々繼承した場合、もし皆が長生きしたら季札も老いてしまうんじゃないか。だからわしは早く死んで季札が繼承できるよう祈っているのだ」呉の話は取敢えずここでおいておく。

ところで、衛大夫孫林父と寧殖が君主衛を追放し弟の剽を君主に立て（衛剽公）、いつしか十数年が過ぎていた。寧殖は重病にかかり、死に臨んで息子寧喜を枕辺に呼び、

「寧氏は武公庄公以来代々忠誠且つ節操を守つてきた家柄だ。君主追放は孫林父のやつた事でわしの本心ではない。いつも孫、寧と並べて言われるが、わしは弁明できないで死ぬのが本当に残念で地下で先祖に合わせる顔が無い。先君を復位させ、わしの過ちを恢復してくれてこそわ

太王 古公亶父 商殷朝時代の周族の首領 周は彼の時から強大になった。このため後世の子孫から太王と尊称された。子が三人あり長子太伯 次子仲雍 末子季歴 季歴は姫昌の生んだ子で太王は彼女を愛したため季歴に位を継がそうとした。そのため太伯と仲雍は位を避けて荊蛮に走り、断髮刺青をして地元の首領になり自らを勾呉と名乗り、その子孫が江南に呉の国を立てた（北京金盾出版社校注）

が子だ。そうでなければそなたに先祖を祀ってもらいたくはない」

「わかりました、必ずやります」

と寧喜は泣いて誓った。寧殖は亡くなり、喜が左相を継いだ。喜はこの日から先君の復国を念頭に置くようになった。現君主殤公(しょうこう)劉は何度も諸侯と会い、周囲の国々とは問題はなく、上卿の孫林父も追放した献公(かんこう)を仇敵としていたため、つけ入る隙がなかった。

周靈公の二十四年(紀元前五四八年)、衛獻公は夷儀(いぎ、現山東省聊城)を襲撃し(ここを根拠地とし、公孫丁を密かに帝丘城(ていきやうじやう、現河南省濮陽)に遣つて寧喜に復国の話を持ちかけた、

「そなたの父親の気持ちには反する事になるが、わしを復国させてくれたら衛国の政治は全てそなたに任せよう。わしは先祖の祀りさえできればいいと考えている」

寧喜はこれを聞き、忘れる事ができない父の遺言であるし、政治を任せると言うので非常に喜んだ。しかし、一方では心配もある。

「衛侯は一時的に甘い話で復国を求めて来るが、騙されて結局臍(はぞ)をかむ事になったらつまらない。公子鱄(せん)は賢者だし信頼できる人だから彼が保証人になっていれば他日反古になることは有るまい」

〔公子鱄 献公出国の時追隨して来た献公の弟〕

そう思つて次のような返書を書いて密かに使者に渡した。

本件は国家の大事であります。臣一人ではお引受けしかねます。

子鮮殿は人々の信頼の厚い方です。子鱄殿がお立会いいただいでのお話でしたら、ご相談にお乗りいたしましょう。

子鮮は公子鱄(せん)の字である。献公は子鱄に頼んだ。

「わしが復国したら国政を全て寧氏に任そうと思うんだが、そなたに

是非一緒に行つてもらいたい」

子鱄は口ではいいと言つたが行く気は全くない。献公が何度も催促したが子鱄はそれに対し次のように答えた。

「世の中に政治に関与しない君主はいません。殿は政治を寧氏に任せるとおっしゃったら、後日きつと後悔なさいます。その時は子鱄は寧氏の信頼を失う事になりますから鱄はどうしても命令に従うことができません」

「わしは今、片田舎に追放の身でどうせ政治など関係ない。もし先祖の祀りができてそれを子孫に引継ぐ事さえできれば満足だ。嘘じゃない」
「殿のお気持ちは固いようですから、鱄もこれ以上殿のお考えの邪魔をするわけにもまいますまい」

と言つて密かに帝丘城に入つて寧喜に会い、献公の約束を伝えた。

「子鱄殿がその約束に責任を持っていただけなのでしたら、わたしもこの件につき責任を持ちましょう」

「鱄もしこの約束を守れなければ、衛の穀物は決して口にしません」
鱄はこう天に誓った。

「鱄殿が誓つて下されば泰山ほどの重みがございます」

と、寧喜も安心して言つた。公子鱄はこれを献公に報告した。

寧喜は寧殖の遺命を遽(きょ)に話した。ところが彼は耳をおおつて、「わたしは君主追放には関与しなかったし、その復国にも関与したくはありません」

と言つて衛を去つて魯へ行つてしまった。寧喜は次に大夫の石惡(せきあく)と北宮遺(ほくきやうい)に話を持ちかけると二人共賛成した。喜はさらに右宰穀(ゆうさいこく)に話したが、

「それはいけません。新君が立たれてすでに十二年になりますが、とくに失政があつたわけではありません。旧君を復国させようということとは新君を廢するという事で、あなた方親子で二代の君主に礼を失する事になります。これは誰にも受け容れてもらえないでしょう」

と言下に反対した。

「わたしには父の遺命があるので止めるわけにはいかないんです」

「じゃ、わたしが旧君に会つてみて、人柄が昔とどうなのか見て参りましょう。それから相談いたしましょう」

寧喜は承知した。

右宰穀は密かに夷儀へ行き献公にあつた。献公はちようど足を洗つているところで穀が来たと聞くと靴を履く間もどかしく裸足で出てきて満面に喜色をあらわした。

「そなたは左相からのいい話を持って来てくれたのだらう」

「いいえ、臣は他の仕事の途中表敬訪問にお寄り致しましたので、寧喜殿は存じありません」

「それなら、左相に早くわしを復国させるように言つてくれ。左相はわしの復国を考えなくても衛の政權を得たいとは思つたらう」

「君主としてのやり甲斐はやはり政治にあるでしょう。それを放棄しては君主の意味が無いではないですか」

「そんな事はない。君主というのは、尊名、美名をもらつて思う存分奇麗な着物を着、美味いものを食ひ、奇麗な宮殿に住んでいい車に乗り、倉には物が豊富にあつて、左右に近臣がうち並び、后宫にはたくさん女がいて、時に巻き狩りに行ければもう十分だよ。面倒な政務に関わつて苦勞をする事なんかないじゃないか」

穀は愕然とし黙つて退出し、公子鯁に會つて献公の話をした。

「殿は長年国外で苦勞を尽されたからそんな話になつたのでしょうか。大臣を尊敬し、賢能を任用し、財を節約し、民を慈しみ、寛大であり、言つた事に責任を持つ事が君主の道である事は殿はみな十分承知です」

穀は歸つて寧喜に言つた。

「わたしが會つたところでは旧君の言われる事は糞土のような全くろくでもない。昔と何も改まつていませんよ」

「子鯁殿に会いましたか」

「子鯁殿の言う事は筋が通つていましたが、旧君に大臣を尊敬し、民を慈しむ云々ができるとはとても思えませんね」

「わたしは子鯁殿を信じましょう。それにわが父の遺言も有りますので、直らないのはわかつていてもやらざるを得ません」

「どうしても決行なさるのでしたらチャンスを待つてください」

孫林父は年を取り庶子の長男孫蒯と一緒に戚邑に住み、孫嘉、孫襄の二人の息子を都に留めて朝政を執らせていた。

周靈王二十五年(紀元前五四七年)二月、孫嘉は殤公の命を受け使者として齊に出かけていて朝廷には孫襄一人であつた。ちょうどこの時献公が様子を聞きに公孫丁を寄こして来た。右宰穀は、

「事を起そうとなさるのなら今がチャンスです。父親も兄もいまだから襄をやりましょう、襄をやれば子叔(殤公)は何の力もありません」

と寧喜に言つた。寧喜も同じ考えだったので密かに家兵を集め、右宰穀に公孫丁と一緒に孫襄を襲わせた。孫氏の屋敷は壯麗で公宮とほとんど

ど遜色なく堀も厚く堅固で家兵は千人に及び雍鋤、楮帯が交替で一日中警らして廻っている。この日は楮帯の当番で、右宰穀の兵が来ると閉門して門の上に登り来意を訊ねた。舍人（孫襄）にお会いして相談したい事がございます」

「相談にどうして兵が必要なのだ」

楮帯は弓を引こうとした。穀は急いで下がり兵に門を攻撃させた。孫襄は自ら門の上上がって督戦した。楮帯は射手に命じて交替で窓から次々射下したので近づく者は射殺され数人の死者が出た。雍鋤も屋敷の異変を聞き援護に駆けつけた。両軍混戦の内に双方に死傷者が続出した。右宰穀は不利と見て兵を返した。孫襄は門を開き自ら兵を率いて追撃してきて長い鉤で右宰穀の車を引掛けた。右宰穀は危険を感じ公孫丁に、

「公孫、早く弓を使え」

丁はそれが孫襄だとわかり弓をいっぱい引き絞って放った一矢は見事襄の胸に命中した。だが雍、楮両将が助け上げ連れ帰った。胡曾先生詩に詠ず。

孫氏衰え寧氏栄える 天は一矢を以て孫襄を射る

狡兔の屋敷千年の富 墓中の光輝を誰か望まん

（狡兔三窟）

宰穀は引揚げて寧喜に、

「もし公孫の神箭がなければ追手は引下る事はなかったろう」

狡兔の屋敷（狡兔三窟） ずいゝ兔は穴をうづ用意し危険に備えているといふ。孫氏は都と食邑に屋敷を持ち、莫大な財を蓄え緊急に備えていたので、誰も亡びるなどと思わぬ。（『狡兔三窟』は戦国策 斉四で馮驩が主君に説得する場面に出てくる。困難をまぬかれぬに巧みであるといふ）

と孫家の難攻の状況を説明した。寧喜は、

「最初の攻撃で落せなければ、次はますます難しくなる。主将が矢を受けたなら軍心が乱れているはず。今夜わしが自分で攻める。今度駄目だったら他国へ逃避せざるを得ない。もう寧、孫両家は両立できる関係ではなくなった」

と言ひ、一方で万に備え妻子老少を疎開させ、他方では孫邸の動静を探らせた。黄昏頃帰って来た探りの者が次のように報告した。

「孫邸内から泣声が聞こえ門を出入りする人は、慌しい様子です」

「これはきつと孫襄の傷は重傷で死んだのに違ひない」

と言っているところへ北宮遺が突然やってきてそれを裏付けた。

「孫襄が死にました。孫家は今主人がいまません、速やかに攻撃すべきです」

その夜三更を過ぎた頃、寧喜は自ら甲冑を着け北宮遺、右宰穀、公孫丁らと共に家兵を全員集め孫邸を攻撃した。雍鋤、楮帯は遺体の傍で泣いていたが寧家の兵が又来たと聞き急いで甲冑を着けて出た。しかしすでに大門は破られており、雍鋤らは急いで中門を閉じたが、いかせん孫氏の家兵たちはすでに逃げてしまつて守る者がなく中門も破られてしまった。雍鋤は裏の堀を越えて戚邑へ逃げ、楮帯は乱軍に殺されてしまった。夜が明けて寧喜は孫襄家を滅ぼし襄の首を取って公宮へ行き殤公に会った。

「孫氏は国政を長く独断し謀叛の様子が見られましたのでこれを討伐し、孫襄の首級を取りました」

「孫氏に謀叛の動きがあるというのなら何故先にわしに知らせないのだ。わしなどに目が向いてないというなら、わしに会いに来てどうし

ようというのだ」

寧喜は立上り剣を取って退位を迫った。

「あなたは孫氏が立てた人であり先君の意向ではありません。群臣庶民みな旧君を思っております。どうか堯、舜の禪讓を踏まれ、退位下さいますようお願いします」

「勝手に宿臣を殺し、君主の廢立を勝手にしようとするそなたこそ謀叛人じゃ。わしは君主になってすでに十三年になる。屈辱を受けるくらいなら死んだ方がましだ」

と殤公は怒って戈を揮い寧喜を追い出した。喜は急いで宮門を出た。殤公は外に目を向けると、寧家の家兵が武器を揃えて宮外に充滿しているのを見て驚いて思わず後ずさりした。寧喜がひと声命令を下すや兵士は一斉に駆け上がり殤公を拘束した。世子角が異変を聞きつけ剣を引つぎ、助けに來たが公孫丁の一戟で刺殺されてしまった。寧喜は殤公を太廟に閉じ込め、酖毒を飲ませて殺した。

周靈公二十五年（紀元前五四七年）二月辛卯日であった。寧喜は妻子を呼寄せ屋敷に戻った。大夫たちを朝堂に集めて旧君受入れを議論した。全員参加したが、成公の子であり文公の孫である六十歳余りになる太叔儀だけは病氣を理由に欠席した。欠席の理由をたずねた者によると、

「新旧いづれも君主で、国として本件は大変不幸な事です。老臣としては議論を聞くに堪えません」

と答えたという。

寧喜は殤公の家族を追放し宮室を掃除し旧君を迎える準備を整え、右宰穀、北宮遺および公孫丁を夷儀に遣って献公を迎えた。献公は昼夜兼行三日で到着した。大夫の公孫免余が国境の外まで会いに來た。献公は

遠來の歡迎にその手をとって、

「今日またそなたと君臣になれるとは思ってもよらなかったよ」

と非常に喜びこれより免余を寵愛した。大夫たちはみな国境近くまで迎えに出、献公は車から拱手の札を返した。太廟に詣り朝廷に臨み百官が拝賀に來たが太叔儀は相変わらず病氣と称して参内しなかった。献公は使者をやって詰問した。

「太叔儀はわしが帰って來たのが氣に入らないのか。どうしてわしに会おうとしないんだ」

「殿が出国された時ご一緒する事ができなかった事。殿が国外におられました。臣は二心を持てず殿と連絡を取らなかった事。殿がお帰りになるこの大事にご協力できなかった事。これらの罪を追及されますと臣は逃げだすしかありません」

と言って急いで出奔しようとした。献公は自ら出掛けて行き彼を慰留した。儀は献公に会って涙ながらに殤公の葬儀を願ひ出てそれが許されたのでその後は参内するようになった。

献公は寧喜に国政を全て任せ、食品を大幅に増加させた。北宮遺、右宰穀、石悪、公孫免余たちにはすべて増禄し、公孫丁、殖綽は逃亡に随従した功勞により、公孫無地、公孫臣は父親が追放事件の時に節に殉じた事により大夫に昇格した。その他太叔儀、齊悪、孔羈、褚師申らは旧職に復し、遽瑗も魯から呼戻し旧位につけた。

一方孫嘉は齊へ表敬訪問をした帰途事變を聞き、直接戚邑へ歸った。林父は献公が絶対引下る事がないとわかっているのので、戚邑を晋に帰属させ晋侯に寧喜の弑逆を訴え後ろ楯を頼んだ。そして衛侯が戚へ攻めてくるのを心配して晋に援兵を依頼した。しかし晋の平公はたった三百人

の兵士しか派遣してこなかった。孫林父はこの三百人の晋軍に最前線に

近い茅氏を守らせた。孫蒯は不審に思つて聞いた。

「兵が少なすぎて衛を支える事はできないんじゃないですか」

林父は笑つて答えた。

「三百人しか送つて来ないという事はわしを重視していないと言う事だ。これに東鄙を守らせ、衛が晋兵を殺したら晋は怒るだろうから、

晋を怒らせたなら我われは晋の助けを期待できるという寸法だ」

「高見、恐れ入ります」

寧喜は晋が三百人しか送つて来なかった事を聞いて

「晋が本当に林父を助けようとしているのなら三百人なんて事はあ

りえないじゃないか」

と言つて、殖綽に兵千人を率いて茅氏攻撃を命じた。

さてこの勝負如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

第六十六回

寧喜 殺され子縛出奔

慶封 崔杼を殺し齊の国政を独断

殖綽は精銳千人の兵を率いて晋兵を襲い、三百の兵を簡単に一掃し

て茅氏に兵を駐屯させ衛に戦勝報告をした。孫林父は衛軍が東鄙に入つてきたと聞き、孫蒯と殖鉏を救援に遣つたが、二人は晋兵三百人はすでに全滅したと知り、しかも敵將の殖綽は齊国の有名な勇將だとわかると挑戦する勇氣がなく、全軍引返し林父に報告した。林父は怒つて、

「神や鬼はあるまいし、殖綽一人に対抗できなくて、衛国の大軍が来たらどうする。もう一度行つて来い。勝たなければ帰ってくるな」

孫蒯はしぶしぶ引下り殖鉏と相談した。

「殖綽は万夫不当の勇者ですから普通じゃとても勝てません。誘導作戦しかありませんね」

「それじゃこうしよう。茅氏の西に圍村という所がある。周りは樹が茂りその真ん中あたりにちよつとした村があつて村の中にほんの小さな小山がある。わしはその山の下に落し穴を掘つて草を掛けておくから、そなたは先ず百人でやつらに挑戦し村の入り口まで誘い出してもらいたい。山の上から罵詈雑言をあびせ、殖綽が怒つてわしを捕えに来たら罠にかかると言う寸法だ」

殖鉏はその案に従い、百人で茅氏へ駆けつけ敵状を探る様子を見せながら、殖綽を見つけると恐れれた振りをして逃げ出した。殖綽は自分の力に自信があるので、殖鉏の兵数が少ないのを小馬鹿にして本部に連絡しないで随身の数十名だけで追撃した。殖鉏はあつちへ曲がりこつち

へ曲がりしながら園村まで引張つて来て村には入らず、そのまま斜めに林の中へ逃げて行つた。殖・綽は林の中に伏兵がいるかもしれないと用心して車を止めさせた。ふと見ると小山の上に三百人位の兵がたむろして一人の将を守っている。その将は体が小さいが金ぴかの甲を被り刺繍のついた鎧を着ていて、殖・綽の名を呼んで罵倒した。

「おまえは斉から逃げてきたろくでもない奴だな。饗家でも使ひものにならん廢棄物だったのに、わが国に押入つて来て衛の飯を食っている恥知らずめ、まだ何かやろうというのか。わしら八代続く孫氏が国のためにならない事をするわけがない。事の善悪がわからんおまえ等は禽獸と同じだ」

これを聞いて殖・綽はカンカンに怒つた。衛兵の中にその将を知っている者がいた。

「あれは孫相国の長子の孫・嗣です」

「孫・嗣を捕えたら孫林父を半分捕えたようなものだ」

その小山は低くて登りやすそうである。

「進め！」

殖・綽の号令のもと戦車が猛烈な勢いで駆け出した。ところが小山の傾斜に差し掛かるや否やそのままの勢いで馬が落し穴に踏み込み車も引きずり込まれて殖・綽もあつというまに穴の中の人になつてしまった。孫・嗣は彼の力を恐れあらかじめ用意していた射手に命じ一斉に穴の中に矢を放ち射殺した。哀れなるかな、さすがの猛将もここに名もない兵士にかかつて死んでしまったのである。まさに水甕を井戸のそばで割つてしまつたような、全く惜しい話である。

神勇將軍万夫不当 無名の孫・嗣相手にならず

ただ最後の奇策功を奏し 己が力に自信持つ

孫・嗣は熊手で殖・綽の死体を引上げ首級を切り取り、衛軍を蹴散らかして帰つて孫林父に報告した。

「晋兵を救わなかつたと責められたら、答えようがない。ここは勝利を伏せて負けた事にしておこう」

林父はそう言つて雍・鉏を晋に遣わして敗戦の報告をした。

晋平公は衛が晋兵を殺したと聞き、怒つて正卿趙武に命じ、衛へ出兵するため同盟諸国の大夫を澶淵に集めた。衛の献公はこれを知り、寧喜と一緒に晋へ行つて平公に直接孫林父の罪を訴えたが、平公は彼等を捕えて監禁した。

齊の大夫晏嬰は主君景公に忠告した。

「晋侯は孫林父の言を容れ衛侯を捕えましたが、そんな事をするとな後各国の有力な大臣が次々と真似て君臣關係が乱れる恐れがあります。晋侯にお会いになり衛侯のとりなしをなさつて、献公の亡命をお受入れになつた恩を大切になさるべきではないでしょうか」

景公はそれに同意し鄭の簡公を誘つて晋へ行き、平公に献公のとりなしをした。平公はその来意に共感も覚えたが、孫林父の話が先入観となつていてすぐには了解しなかつた。晏平仲（嬰）はそつと羊舌肸を説得した。

「晋は諸侯の長であります。不安を解消し過ちを補つてやり、強きを押さえ弱きを助けるのが盟主の務めであると存じます。林父が最初に君主を追放した時林父を討たず、今また臣下のために君主を捉えろというのは筋が通りましようか。昔、文公が元咺（けんげん）の話聞き衛成公を捉え京師

に連行しましたが、周天子はその扱いが君臣の順序を間違っていると不快感を示したので文公は恥じて衛侯を釈放しました。京師に連行する事でさえ問題なのに、まして諸侯が諸侯を拘禁するというのは如何なものでしょうか。あなた方が諫言しなければ、大臣たちが徒党を組み君主を抑えるというような事になりかねません。嬰は晋侯が盟主の地位を追われる事を心配して敢て申し上げるのでございます」

盼は趙武に平公への説得を頼みその結果衛公は赦されて帰国した。だが寧喜は釈放されなかった。右宰穀は献公に、晋公に十二名の歌舞美人を献上して寧喜を赦してもらったらどうかと勧めた。その結果平公は喜んで寧喜を釈放した。寧喜は帰国後、得意になり朝事を独占して献公への報告も指示依頼も全くなくなった。大臣たちは自分が決めるべき事項についても彼に相談するようになり、献公は全く有って無きがごとき状態になった。

さてその頃、宋の左師向戌は、晋の相国趙武及び楚の令尹屈原と親しかったので、楚へ表敬訪問して昔の華元の話をし、彼に倣って晋楚両国を講和させたいと申し出た。屈原は彼の趣旨には賛同したが、

「それは非常にいい事です。しかしそれぞれに同盟諸侯があり、そのため今まで和議が調わなかったのです。もし晋楚の属国同士が相互に訪問し合っただけのように親しくなれば長く戦争を止める事ができるのです」

と言うので向戌は晋楚両君に、宋で会見し停戦と相互訪問を取決めるよう提唱した。楚は其王の時から今に至るまでしばしば呉の侵略にあい、国境近辺が不安定だったので屈原は晋と友好を図り呉に専念したいと言

う気持ちがあった。一方、趙武も楚がしょっちゅう鄭を攻めて来ていたので和議でこの方面での和平を希望していた。それ故双方この提案を喜びそれぞれに帰属する諸国に使者を出し会合の時期を連絡した。衛へも晋使が来たが寧喜は献公に知らせず勝手に石悪を出席させた。

献公は怒ってこの事を公孫免余に話すると免余は、

「臣が筋を通して詰問してみましよう」

と言つてさっそく寧喜に会つた。

「この会盟はわが国にとって重要な事項ですがどうして殿にお知らせしないんですか」

と免余が言うと、寧喜はむつとして、

「子鱣殿と盟約があつて政治向きの事は全てわたしの判断に任せるという事になっていきます。それなのにどうして猿夢居のようなことをしなければならぬのですか」

と言うので免余はそのまま献公に報告した。

「寧喜は非常に無礼です。始末してしまふべきです」

「しかし、寧喜がいたからこそ現在があると言う事も事実だ。その約束はわしが言い出したことだから文句は言えない」

「臣は殿に用いられおめがねにかなう事ができましたが何のご恩返しもできておりません。どうかわが家兵で寧氏を攻撃する事をお許しください。うまく行けば殿のためになりますし失敗しましても責任は臣だけで負います」

「十分配慮して、わしに累が及ばないようにしてくれよ」

献公の了解を得たので同族で年下の公孫無地と公孫臣に会つて、

「相国の専断はそなたたちも知つての通りだ。殿は政治は任せるとい

う相国さうこくとの約束を固く守られて我慢をしておられる。寧氏ねいしが将来力をつけてまた昔の禍が起ころんとも限らないが、どう考えるか」

と相談した。二人は声を揃えて、

「殺るしかないじゃないですか」

「わしも殿にそう言っただが、お聞きにならない。わしらが勝手に反乱を起した事にすれば、うまく行けば殿のためになる。駄目だったら他国へ逃げるしかない」

「じゃ我われ二人が先陣を務めましょう」

話が決まったので、免余めんよは血をすすり誓約を交わした。

周靈王の二十六年（紀元前五四六年）春、公孫無地は寧喜ねいきの行動を探り当て免余に言った。

「寧喜は寧氏の屋敷で春の宴を催していますから、防備は疎かだと思えますわたくしが先に参りますから後に続いてください」

「占つてみたか」

「やると決めたのですから、占つてどうします」

公孫無地と公孫臣は家兵をかき集め寧氏を攻撃した。

寧氏の門にはからくりがしてあった。からくりとは地面に深い穴を掘ってその表面に板を敷き、別に仕掛けがあつてそれに触れると板が開いて乗ってる人が落ちるようになっていた。通常、昼間はその仕掛けが作動しないようにして夜だけセツトしているが、この日は宴会で家の者全員堂内で芝居を見る事になっていて守衛がいなかったため、昼間だが巡警代りにその仕掛けをセツトしていた。無地はそんな事とはつゆ知らず、その仕掛けに触れて開いた穴に落ちてしまった。寧氏は物音に驚き総出で賊を捕え、当然無地もつかまつた。公孫臣が戈を振りながら助けに来

たが多勢に囲まれ戦死した。

寧喜が無地に、

「お前が此処へ来たのは誰の指示だ」

と聞くと無地は目をむいて大声で罵倒した。

「功を待んで君主を無視して独断している不忠な貴様を見て、我われ兄弟は社稷しゃしやくを思い貴様を殺そうと思つたが不運にも失敗した。誰の命令でもあるものか」

寧喜は怒って無地を庭の柱に縛りつけ鞭を打って殺した。

右宰穀は寧喜が賊を捕えたと聞き、夜になって車で訪ねて来た。寧氏の者が門を開くとその隙に免余が兵を指揮して突入し先ず門で右宰穀を斬つた。寧氏の邸内は大混乱となり、寧喜は驚き慌てふためき謀反人は誰だと呼んだ。

「国を挙げて皆そうだ、名前なんか聞いてどうする」

と免余が言い返すと寧喜は驚いて逃げ出した。免余が抜刀して後を追うと、免余は堂の柱を三度逃げまわつた所で二本の剣を受けて死んだ。免余は寧氏を全員殺して献公に報告した。献公は寧喜と右宰穀の死体を朝廷の庭にさらした。

子鱈は聞きつけ素足で朝廷へ駆けつけ寧喜の死体を抱いて大声で泣いた。

「殿は嘘をおっしゃつてはいません、あなたを騙したのはわたしの方です。あなたが亡くなられた今、わたしは何の面目あつて衛國に居られますようか」

彼は天を仰ぎこう叫んでさつさと出て行き、牛車に一家全員を載せ晋国へ出奔した。献公は人を遣つて慰留したが鱈は聞かない。献公は更に

大夫齊悪に罇の後を追わせ、齊悪はやつと河岸で追いつきどうしても帰国して欲しいと説得したが、子罇は頭を振って、

「わたしを衛國に戻すには寧喜を生き返らせるしかありません」

と応じなかった。齊悪はそれでもしつこく説得したが、子罇は一羽の元氣な雉を捕えて齊悪の前でその頭を落し、

「わが一家が今後もし衛國に足を踏み入れ、衛國の飯を食った場合はこの雉と同じ結果になる」

と誓いを立てて言った。齊悪これ以上無理強いはできないとわかり仕方なく帰国した。子罇は晋國に出奔し邯鄲に隠れ住んで、靴を作つて粟に代える生活をし生涯『衛』の事は一言も口にする事はなかった。

暖かき故郷を離れ 履を編み蕭然と清貧に甘んず
約束は金石の如く重く 九泉の人との背信に苦しむ

齊悪は献公に復命した。献公は何度もため息をついて寧喜ら二人を下寧に葬つた。献公は寧喜の代わりとして免余を正卿にしようとしたが、

「臣では力不足です。太叔殿の方が適任です」

と免余がいうので太叔儀に政權を任せ、これよつて衛國はしばらく平安な日が続くことになった。

さて晋楚和平に話を戻す。宋の左師向戌は両國が相互に顔を合わせた停戦會議を提唱した。晋楚それぞれ晋は正卿趙武が、楚は令尹屈建と共に宋へ赴き、各國大夫も次々と到着した。晋の同盟國魯、衛、鄭は晋の左に、楚の同盟國蔡、陳、許は楚の右にそれぞれ車で城のように囲んで駐屯した。宋は地主であつて仲介役として發言は控えた。

會議では次の事を話しあつた。

相互に定期的に訪問する事、楚の同盟國は晋に、晋の同盟國は楚に朝見する。晋楚への貢納品は兩國に折半し負担増を抑える。晋楚に匹敵している齊秦兩國は同盟ではないので交流は控える事。晋の邾、莒、滕、薛あるいは楚の頓、胡、沈、麇のようなそれぞれの同盟小國は、力のある者は自分で朝見し、力なき者は近隣の有力國に付ける事等。これらを決定事項として宋の西門外で歃血して盟約を交わした。

楚では屈建が、脅迫して盟約を乗っ取り趙武を殺そうと、ひそかに衣の下に鎧を着ておくようにと伝令を發したのを聞いて、伯州犁は強くこれを引き止めた。一方趙武も楚の伝令を伝え聞き羊舌肸に對抗手段を準備しようと考えたが肸は武をなだめて言った。

「今回は停戦協定を結ぶ会です。もし楚が兵を動かせばあちらの方が先に諸侯の信頼を失います。誰がそんな國に帰順しましょうか。あなたはおつしやつた事をきちんと守りさえすれば何の心配も要りません」

盟約の時になつて、楚の屈建は仲介役向戌に歃血を自分が先にやりたいと言ひ出した。これを聞いて趙武も向戌に、

「昔わが先君文公は踐土の會盟で王命を受けて中原諸侯の盟主となつてゐる。楚に先行される理由はない」

と反駁した。屈建はこれに対し、

「王命を言うなら楚も恵王から盟主を命じられてゐる。この点では楚、晋は対等だ。晋は長く盟主をやつてゐるのだから今回は楚に譲るべきで、いつまでも晋に先にやられたのでは楚は晋の下風に立つ事になり、対等とはいえないではないか」

と主張した。向戌がこれを晋に伝えた。趙武はどうしても承知でき

なかったが羊舌肸ようぜつぎ、

「盟主は徳のある者が務めるものであつて兵力ではありません。徳があれば歃血が後になつても諸侯は盟主に推戴するでしょう。逆に徳がなければ歃血を先に行つても諸侯は従いません。しかも諸侯を集めたのは停戦が目的です。停戦は天下のためで、歃血の後先を争えば兵を動かす事になり、それでは諸侯の期待に反し、天下の損失です。ここはしばらくお譲りください」

と説得したので楚が先に歃血することを認めて盟約を締結し解散した。この時石惡は寧喜が殺された事を聞き衛に帰ることができず、趙武に従い晋へ行く事にした。この会盟により晋楚は平和を取り戻した。
(弭兵の会 即ち第二次晋楚不戦協約びへいのかい)

さて、話を齊に戻す。齊の右相崔杼さいしよは自ら庄公を殺し景公を立て、その威勢は齊国を震撼させた。左相の慶封けいほうが酒を飲み、巻き狩りにうつつてぬかすという性格で都にいない事が多かったので、崔杼は朝政を専断しやりたい放題で、慶封も次第に彼を嫌うようになってきた。崔杼は以前、棠姜とうきやうに崔明を跡継ぎにする事を約束していたが、長男の崔成さいせいが片腕を失つたので(庄公弑逆事件の時公孫傲に腕を折られる)可哀そうになつてその事を口に出せなくなつた。崔成はこれを知つて自分から跡継ぎを崔明に譲つて崔邑さいに隠居したいと申出たので崔杼はそれを許した。ところが東郭偃とうかくえん、棠無咎とうむこが、

「崔の地は宗廟のある邑で、これは必ず一族の宗主に与える物です」

⁸³ 弭兵の会はBC564年 晋楚はこれより四十年間戦争はなかった。宋華元が提唱した第一次不戦協約は第58回注232参照

と反対するので崔杼も仕方なくそのことを崔成に言つた。

「わしは本当はそなたに崔邑を与えようと思つたが、偃や咎が聞かないんだ、どうしたらいいかね」

崔成はその事を弟の崔強に話した。

「嫡子の位を譲っているのに、食邑の一つもけちつて渡さないと言う事だったら、父上のいらつしやる間は彼等は静かにしているけれど、父上が亡くなつたら我われ兄弟は奴隷にされるかもしれせんよ」

「じゃ左相にとりなしてもらおうか」

二人は慶封に会つて事情を話した。

「お父上は偃と無咎の意見しかお聞きにならない。わしが言つたところで聞くものじゃない。このままだと何時か殺されるかもしれないぞ、むしろ先にやつた方がいいんじゃないか」

「我々もその気はあるんですが何しろ力がなく何もできないのです」

「じゃ後日相談しよう」

と言つて二人を帰したあと盧蒲癭ろほつを呼んで二人の話をした。

「崔氏の内紛は慶氏の望む所じゃないですか」

という盧蒲癭の言葉にはつと気がついた。

数日後崔成兄弟がまた東郭偃、棠無咎の苦情を訴えて来たので慶封は、

「もし事を起こそうとなさるのでしたらあなた方をお助けしますよ」

と言つて甲冑や武器百セットを彼らに与えた。崔成兄弟は非常に喜び、夜中に家兵を率いて崔氏の屋敷の傍に伏せていた。東郭偃、棠無咎は毎朝崔氏を訪れていたので、彼等が門に入ろうとした時兵が突然飛び出し二人はその場で殺された。

崔杼はこれを聞いて非常に怒り、車を出せと叫んだがみな逃げて誰も

いない。やつと既に馬係がいたので彼に車を出させて使用人一人を連れて慶封家へ急がせ、家中の事件を話した。慶封は知らなかった振りをして驚いて見せ、

「崔、慶両家はいいも悪いも実質一つです。子供たちがそんな事をするなんて。もしあなたが二人を討ちたいとおっしゃるのでしたら援助しますよ」

崔杼はその言葉を本心だと信じて感謝して言った。

「もし援助を得て二人の反逆児を除き崔宗室を安泰にする事ができれば、崔明にあなたが義父と呼ばせましょう」

慶封は盧蒲癸を召して全家兵を彼に預けそつとこれこれと策を授けた。

彼は直ちにその命を受けて出て行つた。崔成、崔強は盧蒲癸の兵が来るのを見て、門を閉じようとした。ところが、

「わたしは左相（慶封）のご命令で兄弟のお味方に参じたのです」と、盧蒲癸が誘いかけたので成は強に言った。

「庶弟（崔明）を除くには必要だな」

強も同意し兄弟は盧蒲癸を信じて開門して招き入れると、盧蒲癸の後兵士がなだれ込んで来た。成、強は阻止できず盧蒲癸に詰問した。

「左相の命令はどういう命令だったのだ」

「左相はお父上のご依頼を受け、わたしにお二人のお命をいただくようにとのご命令でございました」

盧蒲癸がそう言つて兵士に「やれつ」と命じると何か言う間もなく二人の首は地に落ちた。更に兵士達にはぶち壊しや略奪を自由に許した。

棠姜はこの混乱を見て、驚きの余り奥の部屋で縊死した。ただ、崔明

は事前に屋外にいたので難を逃れた。

盧蒲癸は二つの首を下げて崔杼に報告に来た。崔杼は二人の首を見て、憤りと悲しみがこもこもであった。

「内室は驚いてなかったか」

「夫人はお休みで起きては見えませんでした」

舒は喜んで慶封に言った。

「帰りたいが馬を御する者がいない、御者を一人貸していただきたいが」

「わたしが相国の御者を致しましょう」

盧蒲癸が申し出た。崔杼は慶封に何度も礼を言つて車に乗つた。屋敷につくと大門は全て明けつ放しで誰もいない。中堂に入ると内室が丸見えで、部屋の中はがらんとしていて棠姜は梁にぶら下がったままであった。崔杼は驚きの余り放心状態で、盧蒲癸に何か言おうとしたが彼はとつとに挨拶もせず帰つてしまつていた。崔明はどこかとあちこち搜したがこれも見当たらず、大声で泣き崩れ、

「慶封に騙された、わたしは家を失つたいま、どうして生きていけよう」と言つてやはり首を吊つて果てた。まったく悲惨な話である。

昔日力を合わせ謀反を起し 今日相容れず相争う
見よ崔杼の屋敷の惨状を 生を全うせし奸雄幾人ぞ

崔明は夜半に密かに屋敷に戻り、崔杼、棠姜の遺体を一つの棺に入れて車で持出し祖先の墓所に葬つた。一緒に作業をしたのは馬飼いだだけだったのでこの事は誰にも知られず、埋葬後崔明は魯に亡命した。

慶封は景公に、

「崔杼は先君を弑逆しましたので討伐せざるを得ませんでした」

と報告した。景公も仕方なく了承し、慶封が斉国を独裁する事になった。彼は景公の命で陳須無を宋から呼戻した。須無は老齢を理由に子の陳無宇を代りに出仕させた。

周靈王二十六年（紀元前五四六年）の事である。

この頃、呉、楚では抗争が相次いでいた。この年楚康王は水軍で呉を攻めたが、呉は対抗措置ができていて楚は成果を上げられず撤退した。

呉王余祭は継位して二年ではあるが勇猛果敢で命を惜しまない。楚の行動に腹を立て相国屈狐庸に命じて楚の属国舒鳩（現安徽省舒城县）を誘って楚に背かせた。楚令尹屈建が舒鳩討伐の兵を起すと、養由基が先鋒を申し出た。

「將軍はお年を召しておられますし、舒鳩はちっぽけな国ですから負ける心配はありません。將軍を煩わせるほどの国ではありません」

「楚が舒鳩を攻めたら呉は必ず救援を出すでしょう。わたしは何度も呉と戦っていますから呉の軍情はよくわかっています。是非お連れ下さい、死んでも恨みは致しません」

屈建は彼から『死』と言う言葉がでたので気になった。養由基は更に、

「わたしは先王の知遇をお受けしておりますので体を張って報国致したいと考えていましたが、残念ながらその場がありませんでした。このまま老いて、もし病死して臣の籍を外れるような事にでもなれば、令尹をお怨み致しますぞ」

とまで言うので屈建は意思が固いと見て先鋒を許し大夫息桓をつけた。

養由基は離城に達した。呉王の弟夷昧が相国屈狐庸と共に救援に駆けつけた。息桓は大軍の到着を待ったほうがいいと言ったが養由基は、

「呉は水には強いが、今は陸に上がった蛙だ。しかも敵は弓があまり得意じゃない。来たばかりで体勢が整っていない処を急襲すべきです」と言って矢を番え先頭だつて射始めた。矢の飛ぶところごとく死者が出て呉軍は少し退却はじめた。基は追撃し狐庸に出遭った。

「叛国の賊め、どの面下げてわしに会おうと言うのだ」

そう罵倒して狐庸を射ようとした。狐庸は車を返して逃げた。その逃げ足の速さを見て基は驚いて、

「呉人にもあんなに馬車の操作が上手な奴がいるんだな、残念ながら射るのが間に合わなかった」

と言っているうちに周りに装甲した戦車が包囲してきて基はその包囲に取り囲まれてしまった。車の将士はみな江南の射手で万矢を一斉に基に射かけた。ああ、哀れ一世の神箭も乱箭の下に死す。

昔、楚共王が『力を持つ者は必ずそのために命を落す』と言ったことがあるがそれが現実となった。息桓は敗軍を収めて退却し、屈建に報告すると、

「養叔を死なせたのはわしの責任だ」

と嘆息し、柘山（現安徽省阜慶）に精兵を伏せ、別途子強に家兵で呉兵を誘い込むよう命じた。子強は十数台刀合わせすると逃げ出したが狐庸は伏兵を心配して追撃しなかった。夷昧は高みから観戦していたが楚軍が見えないので、楚軍逃げたりと判断し全軍で追撃を開始した。柘山の麓まで来ると子強は急に車を返し伏兵が一斉に跳び出し、夷昧は瞬く間に包囲されどこを突いても脱出できなくなってしまった。幸い狐庸の軍

がやつてきて楚兵を撃退しやつと救出された。呉は敗軍を率いて帰国し、楚屈建は舒鳩を滅ぼしてしまった。

翌年、楚康王は再び呉を討つために秦に援軍を頼んだ。秦景公は弟公子鍼を援軍に出した。しかし呉の盛兵が江口を堅守したので楚は呉領に入らず、仕方なく軍を返し、晋に寝返って久しい鄭に攻撃の矛先を向けた。楚大夫穿封戌が鄭将皇頤を生捕にしたが、公子圍がこの功を奪おうとし、穿封戌が渡さないと、圍は逆に康王に、

「皇頤を生捕つたのに穿封戌に横取りされてしまいました」

と訴えた。間もなく穿封戌が皇頤を連行して功の報告に来て、公子圍に盗られそうになった事を訴えた。康王はどちらの功か決めかね太宰の伯州犁に判断をゆだねた。

「鄭の捕虜はそこらの卑賤な者ではなく大夫ですから彼に聞けば誰にやられたか答えるでしょう」

犁はそう言つて皇頤を庭に立たせ、王子圍に手を上に拱手して上位に対する礼をとり君主の弟であると、また穿封戌に手を下に拱手して下位に対する礼で方城外の県長官だと双方を皇頤に紹介し、

「あなたはどちら方に捕われたのですか、正直に言つていただきたい」とたずねた。皇頤は王子圍の顔を立たい伯州犁の意の内を察知し憎々しそうなそぶりで、

「わたしはこの王子に負けて捕われてしまいました」

と答えた。穿封戌は怒つて矛掛けから矛を取つて公子圍を打ち殺そうとしたので圍は驚いて逃げた。伯州犁は二人を追ひ説得してつれて帰り、康王に功を折半するよう進言した。自分でも酒を用意して圍と戌を仲直りさせた。自己の都合で事実を曲げる事を『其の手を上下す』（春秋左氏

伝）襄公26年 という言葉はこの伯州犁の事に遡るのではなからうか。

生擒の功の虚実を弁するに 密かに謀り貴臣に阿る
將軍の記功にはこの類多し 正道堅持は誰ならん

ところで、呉の隣国の越は子爵の家柄で夏王禹の後裔である。無余の時に始めて封地を得、夏、殷、周を経て三十余世の後裔が允常である。允常は政治に熱心で彼によつて越は強盛になった。呉はこれを嫌い、余祭の四年に初めて越に侵攻し、越の宗人（宗室の礼儀を管掌）を捕え足切りの刑に処し門衛の官に任じ、余皇大舟（呉の大船の名）の守官につけた。余祭が船を見ながら酔払つて寝ている所を宗人は余祭の佩剣を奪つて彼を刺殺した。従者はこれを知つて宗人も殺してしまった。

余祭の弟夷昧が位を継ぎ、国政を季札に任せた。札は出兵を止め、民を安んじ他国との友好を図る事にし夷昧も彼の意見に従つた。季札は先ず魯を表敬訪問し、五代（おおよび周の諸侯国としての）の礼樂を教わり、それぞれ好意を持つた。その後、次々と斉、鄭、衛、晋を訪ね齊では晏嬰（えんえい）と、鄭では公孫僑（こうそんけい）と、衛では蘧瑗（きよえん）と、晋では趙武（ちうぶ）と、韓起（かんき）と、魏舒（ぎじょ）と親しくなった。それらの人々はみな当時の賢臣であつたし、同時に季札が賢者である事も天下に知れ渡つた。

さてこの後如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第六十七回

盧蒲癸 慶封を追放

楚靈王 諸侯と大合戦を行つ

周靈王の長子は名を晋、字は子喬という。生まれながらに聡明で、笙を善くし『鳳凰鳴』という曲を創作した。十七歳で太子になったが伊水、洛水を視察して帰つた後突然亡くなったため靈王は非常に悲しんだ。

「太子は緱氏山の頂上で鶴に跨り笙を吹いておられまして、地元の人に『天子に感謝しています。わたくしは浮丘公と一緒に嵩山で楽しく暮らしていますからご心配なきよう』と言付けたそうです」

とある者の報告があつた。浮丘公とは昔(黄帝時の伝説上の仙人である。靈王はその塚を掘らせたが棺は空っぽで仙人はどこかへ行つてしまつていた。靈王二十七年に太子晋の夢を見た。鶴に乗つて迎えに来たところで夢から醒めたが醒めた後も戸外に笙の余韻が残つていた。

「息子がわしを迎えに来た。行かなきゃならん」

靈王はそう言つて次子の貴に継位すると遺言し病氣でもないのに亡くなり、貴が即位し景王となつた。

この年楚康王も亡くなった。令尹屈建は群臣と相談し康王の同母弟の麇を王とした。間もなくその屈建も亡くなり公子圍が令尹となつた。

さて話題を齊に戻す。齊相国慶封は国政を専断するようになって次第に傲慢になった。ある日、彼が盧蒲癸の家で酒を飲んだ時、盧蒲癸が夫人に酒の酌をさせた。慶封はその美しさに惚れて遂に彼女と通じてしまった。このため国政の大権を息子の慶舎に譲り、妻妾と財宝を盧

蒲癸の家に運び込み、封は癸の妻と同宿し、癸も封の妻妾と通じ合いお互いにしなかった。時には両家の女子供も一緒になって飲み食いし、酔つた挙句は聞くに堪えない事を口にする。傍にいる者は口をおおっているが二人は全く意に介さない。盧蒲癸はこの機に乗じて兄の盧蒲癸を魯から呼び戻したいと頼み慶封の許可を得た。癸が帰つてくると封は彼をわが子の慶舎につけた。慶舎の腕力は拔群である。癸も勇猛であるしまた阿諛迎合も上手だったから慶舎に大変気に入られ、娘の慶妾を癸の妻に与え、父上嬪殿と呼び合つてその寵信度合ひはますます深まつた。癸はずつと庄公の仇討だけを考へてきたが同心者が得られなかった。そこで狩獵に出かけた時慶舎に王何(おうか)が勇猛な男だと推薦した。

「王何は今何処にいるんだい」

「莒国におります」

慶舎は使いを出して呼寄せ、王何が齊に帰つてくると癸と同様に寵信した。崔、慶の乱後は暗殺を恐れて外出の度に信頼おける壮士に武器を持たせて前後を守らせるのが慣例となつていて、慶舎は盧蒲癸、王何を信頼し二人をその役に任じていたので誰も彼等に近づくことはしなかった。

古い規則では卿大夫に対し国君が支給する食事には二羽の鶏を使うことになつてゐる。この頃の景公は鶏の掌が好きで、一度に数十個も食べ公族、卿大夫もこれを真似たので鶏が高級食品となり高騰した。料理長は従来の予算では供应できなくなつたので慶氏に予算増額を頼みに行った。盧蒲癸は慶氏に問題を起させるため、慶舎に、増額を認めないで料理長に、

「お前が料理の責任者だ、どうして鶏でなきゃいけないんだ」

と「言うように唆^{そゝ}した。料理長は仕方なく鴨を鶏の代わりに使った。

奴僕^{やつが}がその鴨が御前に出す物とは知らずその肉を盗み食ひしてしまった。当日、高蠶^{こうたい}字子尾^{しび}および欒^{らん}灶^{そう}字子雅^{しが}という二人の大夫が景公と食事を伴にしていた。出てきた物が鶏ではなく鴨の骨だったので怒って、

「慶氏の政治は公膳^{こうたん}（国君が出す食事）をここまで削り、わしらを愚弄^{ごろう}するのや」

と言って食わずに帰ってしまった。高蠶は慶封に文句を言いに行こうとしたが欒灶が引止めた。この事を早くも慶封に知らせる者がいて、慶封は盧蒲癸に相談した。

「子尾、子雅がわしの事を怒っているようだ、どうしたらいいかね」「文句をいうやつはやつちまえばいいじゃないですか、ご懸念には及びませんよ」

盧蒲癸はそう言うてこれを兄の癸に話すると、癸は王何と相談した。

「高、欒両家と慶氏に溝^{みち}ができたようだ、両家の協力が得られる可能性がでてきたぞ」

王何はその夜高蠶を訪ね慶氏が高、欒両家を攻撃しようと謀議していると焚きつけると、高蠶はこれを聞き激怒した。

「慶封は本当は崔杼^{さいしよ}と一緒に庄公を弑逆した仲間じゃないか。崔氏が滅びて慶氏が残っているが、いよいよ慶氏を討って先君の仇を報復すべき時だ」

「わたしもそう思います。大夫が外から、わたしと盧蒲氏が内部から事を起こせば成功疑いなしです」

高蠶は密かに欒灶と話し合い機会を見て事を起こすことにした。陳無宇^{ちんむいう}、鮑^{ほう}國^{こく}、晏^{えん}嬰^{えい}らはこの計画を知ってはいたが、慶氏の専横を憎ん

でいたので口にしなかった。

盧蒲癸と王何は慶氏を攻める事の吉兆を占った。占いの結果は、虎穴より離れ、彪血を見る。

と出た。癸は占いのお告げを慶舎にたずねた。

「仇を討とうと思う者にこのようなお告げがあつた場合は吉でしようか凶でしようか」

「そりや必勝だな。虎と彪は父子だ。父子が離れて血を見るといふことだから敗れるわけがない、それにしても仇とは誰のことだ」

慶舎はお告げを見てそう聞いた。

「村の知り合いの話ですよ」

慶舎はそれでも全く疑いを持たなかった。

周景王元年（紀元前五四四年）八月、慶封は一族の慶嗣^{けいし}、慶遺^{けいゐ}と一緒に東萊^{とうらい}へ巻き狩りに出かけた。このとき陳無宇にも同行を命じた。父親の須無^{しゆむ}は心配して無宇に言った。

「慶氏は襲われる恐れがある。同行すれば巻き添えを食うかもしれない。断ればいいじゃないか」

「断れば疑がわれる恐れがあります。いざと言う時は理由をつけて呼戻^{よへ}していただければ何とかして帰ってきます」

そう言うて無宇は慶封の巻き狩りに同行した。彼等が出発したのを見て盧蒲癸は喜んで、

「占いに『虎穴より離れ』とあつたが、この事だな」と言うて嘗祭^{しやうさい}に乗じて事を起こす事にした。陳須無^{ちんしゆむ}はこれを知って

嘗祭^{しやうさい} 新嘗祭^{しんしやうさい}にいなめさき：その年新しく取れた穀物を先祖に祭るまり。

息子が慶封の難に巻き添えにならないように妻（無宇の母）が病氣だといって彼を呼戻す使いを出した。無宇は慶封にこれをお占ってくれるよう頼み、密かに陳氏、慶氏のどちらが吉かを占ったのである。

慶封は占った亀甲を見て、

「これは『滅身』の卦だ。下の者が上に剋ち、卑なる者が尊なる者に剋つ。老夫人の病氣は治らないという意味だな」

無宇は亀甲を手にとって泣き止まない。慶封は彼を哀れんで帰してやった。慶嗣が無宇が車に乗るのを見て何処へ行くのかと聞くと、

「母が病氣で帰らざるを得ないので」

と言って走り去った。

「無宇は母親が病だといっていますがきくと嘘です。国元で事件があるのかもしれませんが。直ちにお帰りになったほうがいいのではないですか」

と慶嗣が慶封に忠告したが慶封は全く心配する様子がなかった。

「そなたは彼の何処が心配なのだ」

無宇は河を渡った後、橋を壊し舟を沈め慶封の帰路を絶ったが、そのことを慶封は全く知らない。

八月初旬もまさに終わろうとしていた。盧蒲癸の部隊並びに家兵が慌しく戦闘準備にかかっている時、盧蒲癸の妻慶姜が癸に、

「あなたがなさろうとしておられる事をわたしには相談がございませぬが、そろそろお話下さってもいいんじゃないですか」

と言った。癸は笑いながら無視しようとした。

「そなたは女じゃ。相談してもしょうがないじゃないか」

「女は男より智恵があるという話をお聞きになった事はございませ

んか。昔武王に十人の治世の能臣がいましたが邑姜もその中の一人で当然諸計画に参与していました」

「昔、鄭の大夫雍糾が鄭君の密謀を妻の雍姫に漏らしたため自分は殺され君主は追放されてしまった例があり今も天下の戒めになっている。わしはそれを懸念するのだ」

「女は夫が頼りです。夫唱婦隨、まして君命となれば重き物でございます。雍姫などは母親の言葉に惑わされ夫を害した内室の虫で問題外です」

「もしそなたが雍姫の立場だったらどうする」

「当然夫に協力して、漏らすなんて事はとてもできません」
葵はそれを聞いて計画を妻に話した。

「齊侯は慶氏の専横に苦しみ、欒、高両大夫と謀ってそなたの一族を追放しようとしている。わしはその準備をしているんだ。絶対に口外無用だぞ」

「相国はいま巻き狩りに出ていますからチャンスですね」

「やるのは嘗祭の日だ」

「慶舎は性格が剛腹で独断専行、しかも酒色に耽り公務を怠っています。しかしもし父が嘗祭に欠席したらどうなさいます。わたしが必ず出席するように仕向けて参りましょう」

「わが命はそなたに委ねよう。決して雍姫の二の舞にならないよう」
慶姜は慶舎の所へ行つて、

「子尾（高薑）、子雅（欒灶）が嘗祭に乗じて父上を害しようとして

いるという噂を聞きました。当日はお出にならない方がいと存じます」と計画をしやべった。

「あの二人はわしが太廟の神聖な場所にいるときを狙うとは畜生のような奴だ。奴等に何ができるものか。わしは行く、恐れることなど何もない」

慶姜は帰って盧蒲癸に報告し一緒に計画に加わった。

当日になった。斉景公は太廟で饗祭を執り行い諸大夫も皆これに随った。慶舎も自ら参加し慶繩が献酒の儀を行なつて慶氏が儀式を取り仕切った。太廟の周りは慶氏の私兵で取り巻いて守りを固めていた。盧蒲癸と王何はずっと矛を携え慶舎の前後を少しも離れず随った。陳、鮑両家のお馬係は雑技等の余興が得意で、わざと魚里街ぎよりがけで余興を行つた。慶氏の部隊の馬が驚いて逃げ出し兵達がやつと捕まえて余興をゆつくり見るために馬をすべて縛り付け、甲冑を脱ぎ兵器を下し、余興を見に行つた。しかし欒、高、陳、鮑の四大臣の家兵がすでに静かに太廟の外に来ていたのである。盧蒲癸は小便を装つて外へ出て諸大臣の家兵と連絡を取り全て万端整った事を確認し、再び慶舎の傍へ戻つて戟を横にして高臺に合図した。臺は心得て従者に扉を三回コツコツと叩かせると、突然廟門が破られ兵達がどつと入ってきた。慶舎は驚いて立ち上がろうとした所を盧蒲癸が素早く背後から刺し、王何も矛で左肩を打碎いた。慶舎は王何を睨み付けて、

「叛乱の首謀はお前たちだったのか」

と言つて手元の礼器の壺を王何に向け投げ付けけると王何は躲す事が

魚里 齊都城内の街名これは公宮の堺外で太廟は公宮内にある

できず即死した。盧蒲癸は先ず兵士に命じて慶繩を取押えて殺した。慶舎は傷の痛みを堪えきれず片手で太廟の太い柱を抱えてゆさぶると棟ががらがら揺れたが、ついにひと声大声を発して死んだ。

景公はこの様子を見て驚いて逃げようとしたが、晏嬰は密かに「家臣たちは先君のために慶氏を誅殺して社稷を安泰にしようというもので、ご心配なさる事はございませぬ」

と言つたので景公はやつと安心し祭服を脱いで車で内宮に戻った。盧蒲癸が中心になつて欒、高、陳、鮑の四大臣と共に慶氏の一党を誅滅し、それぞれ慶封の巻き返しを防止するために分担して城門を守り、水も漏らさぬ厳重な防衛体制をとつた。

一方、慶封は巻き狩りから帰る途中、逃げてきた慶舎の家の者に出遭い叛乱の状況を聞いた。子の慶舎が殺されたことを聞き烈火のごとく怒り、直ちに帰還し西門を攻めた。城の守りは非常に嚴重なため攻め落とす事ができず、慶封軍の兵士は次第に逃げ散つていった。慶封は危険を感じ魯国へ出奔した。斉景公は不当に謀反人を庇う事がないよう人を遣わして要求したので、魯でも慶封を捕えて斉に渡そうとした。慶封はこれを耳にして身の置き場を無くし更に呉国へ逃げて行つた。呉王の夷昧は彼を朱方の地（現江蘇省鎮江）に住まわせ、斉の時以上の待遇をもつて厚遇して楚の動静を監視させた。魯の大夫子服はこれを聞いて、

「慶封は呉で優遇されている。天はあんな男にも福を授けるんだな」と叔孫豹に言うとは彼は、

「善人が富めばこれを賞といい、悪人が富めばこれを殃おろといふ」と言うのではないですか。そのうち災いに変わりますよ、何が福なものでるか」

と言ったという。

慶封は国外に逃げ、高蠶こうさい 嬖らんすが政務を担当した。崔、慶の罪を発表し、慶舎の遺体を朝廷にさらし、崔杼さいしよの死体が未だ上がっていないので死体の在処を訴えた者には崔氏の家宝の大璧たいへきを与えるという懸賞を掛けた。崔氏の厩番がその宝に目がくらみ自首して出た。そこで崔氏の墓を暴き棺を掘出して開けると崔杼、棠姜の二人の遺体が有った。景公はこれをさらそうとしたが晏嬰あんえいが引き留めて、

「婦人まで辱めるのは非礼ではないでしょうか」

と言うので崔杼の死体だけを市中にさらし見せしめた。崔杼が本当に死んだ事を知って、大夫たちは崔、慶両家の封地を山分けした。慶封の家財は皆盧蒲癸の屋敷に有ったので盧蒲癸は慶封と淫乱に耽ったと責任を追及され北燕に流され盧蒲癸も弟に随いて落ちて行つたので、この二人の家財も山分けの対象となった。大臣の中で陳無宇だけは何も取らなかつたので、大臣たちは没収した慶氏の莊園の車百台分ほどの木材を彼に分与した。彼はそれを全て民衆に施したので人々は彼の仁徳を褒め称えたものである。

その翌年周景王二年（紀元前五四三年）、嬖らんすが亡くなり子の嬖施らんしが大夫を継ぎ、高蠶と共に国政に当たった。高蠶は高厚の子高止こうしを嫌って二高並び立たなくなり、高止は追放され彼も北燕に出奔した。高止の子高堅こうけんは盧邑ろいつ（高氏の食邑、現山東魯南）に拠って反乱を起こした。景公は大夫閭丘嬰りよきゆうえいに盧邑を攻めさせた。

「わたしは謀叛を起すつもりはありません。高氏の後継人がいなくなるのを心配しているだけなのです」

と高堅は閭丘嬰に訴えた。閭丘嬰が高氏の後継者を立てることを認め

めると高堅は晋国へ亡命して行つた。閭丘嬰は景公に復命すると景公は高卿こうけんを高氏の後継者とした。

「本来閭丘を派遣したのは高氏を除くためだったのに一人除いて又一人立てたのでは何も変らないじゃないか」

高蠶はこの処置を怒って、密かに閭丘嬰を殺してしまった。子山しざん、子商ししやう、子周ししゅう等公子たちはこれに不満を持って批判したので、高蠶は公子達をみな国外追放した。

やがて高蠶は死に、子の高強こうきやうが大夫を継いだ。高強は年が若くまだ卿にはなつてなかつたから大権は全て嬖施に集中する事になった。

さて、この頃の国際情勢は、晋楚修好の結果、列国に平和が続いていた。鄭では大夫良霄りやうしやうが上卿じやうけんとして執政に就いていた。彼は字を伯有はくゆうといい公子去疾きよしつの孫、公孫輒こうそんの子である。性格は贅沢で酒を好み飲みだすと夜通し飲み、飲んでいる時は人の欠点をあげつらい、地下室を掘ってそこに酒の道具や鉦太鼓等を用意して歓楽に耽り、家臣がやってきても誰も会うことができないという有様であつた。

ある昼間、酒に酔つて参内し公孫黒を楚に表敬に遣りたいと鄭簡公に上申した。公孫黒はその時ちょうど徐吾犯の妹を恋ひ公孫楚と争つてるところだったので遠くへ行きたくなかつた。だから良霄にそれを免除してもらおうと訪ねていったが、

「主人は今地下室に入っていますのでお取次ぎできません」

と問番が断つた。公孫黒は怒つて家兵を全員集め印段いんだんと一緒に良霄の屋敷を攻めて火をつけた。良霄は酔払つていて、家の者が助けて車に乗せ雍梁ようりやう（鄭国の地名、現河南省禹県）に逃避した。酔いから醒めて公孫黒

に攻められたと聞き激怒した。数日の内に次第に家臣たちが集まってきた。首都の状況を報告した。

「各氏は同盟を結んで良氏に対抗しようとしています。ただ国氏と罕氏だけはその同盟に加わっていないようです」

「国、罕は我われに味方するつもりのような」

良霄は喜んで鄭に戻り北門を攻撃したが、公孫黒は甥の駟帯と印段に精兵を率いてこれを迎撃させた。良霄は破れ家臣もろとも戦死した。

公孫僑は良霄の死を聞き急いで雍梁に駆けつけ、

「兄弟が攻め合うとは。神さま、何という不幸な事でしょう」

と言って遺体を抱いて泣いて、家臣たちの遺体を全て集めて良霄と一緒に斗城の村に葬った。

「子産（公孫僑の字）は良氏の仲間か」

公孫黒は怒って公孫僑を討とうとしたが、上卿の罕虎がそれを押え、

「子産は死者にさえ礼を尽くす程ですから、生きている者に礼を欠くわけがありません。礼は国の本です。殺すという事は礼にもとります」と言ったので公孫僑を攻めるのを止めた。

鄭簡公は罕虎に政治を任せようとしたが、彼は子産の方が適任だと推薦したので公孫僑に政を執らせることにした。

周景王の三年（紀元前五四二年）の事である。

公孫僑が政務を執るようになると、彼は都城の者、在郷の者それぞれに本分を守らせ、貴賤を明確にするとともに、田畑の境界を明確にして水路を整備し、農村は五家を伍とし、儉約を勧め贅沢を抑えた。公孫黒

は国を乱した罪で死刑にした。また『刑書』を鑄造して法律を人々に示し、郷校を創り古典の勉強をさせた。国人の歌がある。

我が子弟 子産が之を指導す

我が田畑 子産が之を増産す

子産が亡くなれば 之を嗣ぐのは誰ならん

ある日鄭人の一人が、

「北門を出たところではつきりはないが良霄様に出遭った気がする。良霄様は身に甲冑を付け戈を持っていて、『わしは駟帯と印段に殺された。必ず二人を殺してやる』と言っていたよ」

と帰って別な者にその話をする、そのしゃべった男は突然病気になる。そしてその噂は国中に広がって、今にも良霄が遣ってくるような気がして、男も女も合戦を避けて逃げ出そうと騒いだ。間もなく駟帯が病気で死んだ。その数日後印段も死んでしまった。人々は恐れて昼も夜も心休まらない。公孫僑は鄭君に進言し、良霄の子良止を大夫にして良氏の先祖を祀る継承者とし、あわせて公子嘉（鄭穆公の子、楚に内通して殺された62回の子公孫泄も同様に継承者にする）と急に国中のデマが収まった。

行人の遊吉子羽が公孫僑に尋ねた。

「継承者をたてるとデマが突然止まったのは何故でしょうか」

「悪人が恨みを持って死ねば、その魂魄は悪鬼となって留まるが、も

※ 刑書鑄造 子産は中国史上初めて成文法を制定し法文を鼎に鑄込み国氏に示した成文法を作った事に批判があった。当時は「本来民を治めるのは徳を以て、まきで法で縛ろうとすれば、違法より寧ろ脱法を考へる」との考えが主流であった。

し祀る者が有ればあればその心配はなくなる。継承者を立てたのは良霄を祀つて魂魄を帰依させるためののだ」

「それなら良氏の継承者を立てればよく、どうして公孫泄まで立てる必要があつたのですか。子孔（公子憲）は悪鬼になる程の悪人ではないのに」

「良霄は罪人だから本来継承者を立てる事は許さないのに、悪鬼を恐れて継承者を立てたとなると人々は鬼神の説に惑わされ、収拾がつかなくなる。だからわたしは七穆に祀りが絶えないようにと良、孔二氏の継承者を同時に立て人々の心の迷いを取り除いたのだよ」

遊吉はそれを聞いて感心した。

周景王二年（紀元前五四三年）、蔡景公は楚公室の娘半氏を世子般の室として娶つたが、景公が彼女に私通してしまつた。世子般は怒つて、父でもなければ子でもないと言い、巻き狩りに行くと偽つて腹心の内侍数人とそつと内室に隠れていた。景公は息子が不在だと思つて東宮へ行き半氏の部屋へ入つた。世子般は内侍を率いて部屋になだれ込み景公を殺し、諸侯には突然の病で急死したと訃報を流し、自立して君主となつた。これが蔡靈公である。これは子が親を殺した大逆事件ではあるが、景公も子の嫁を寝取るという人倫に悖る事をしたのなら自業自得でもある。これを嘆じた詩がある。

新台の醜行青史を汚す 蔡景公何ぞまたその轍を踏む
宮中に忽ち起る謀反の火 昔の急子が憐れに覚えり

七穆 鄭穆公の子孫仍七大家族 罕 駟 豊 遊 印 国 良の各氏
新台醜行 衛宣公が世子急子の嫁夷姜を横取りし新台を築きそこに囲た。急子

蔡の世子般は諸侯に父景公は急病で亡くなつたと連絡はしたものの、弑逆事件である事を隠し通す事はできず、国内外へ漏れ出て各諸侯誰知らぬ者なき状況になつてしまつた。だがこの時の盟主（晋平公）は安逸を貪りこの不義を誅討することができなかったのである。

その年の秋、宋の宮中で夜失火があつた。夫人は魯の伯姫であつた。側近の者が火が近づくのを見て夫人に避難するように言つたが、伯姫は、「女の道として傳母（貴族の子女を養育教導する教師）が居ない夜に堂屋を出る事はできません。火がどんなに迫つてきても、女としてやるべき事は放棄できません」

と言ひ、傳母がやつて来た時は彼女はずでに焼け死んでいた。人々は彼女の情義の篤さのために息をついた。

晋平公は宋が同盟（晋楚不戰条約）成立に功績があつたので、この火災に同情して諸侯を澶淵に大集合し各国資金を出し合つて宋を援助することを決めた。宋儒の胡安定はこれについて、蔡の世子が父君を弑逆した事を追及しないで宋の火災に同情するのは事の軽重を見失つていると批判し、こういう事によつて晋平公は霸主の地位を失つていったのだと論じている。

周景王四年（紀元前五四一年）、晋楚は宋での盟約に基づき虢で会盟を行う事にした。この時の楚の令尹は屈建（当初の盟約の立会人）に代わつて公子圍であつた。彼は共王の長男だが庶子である。性格は傲慢で人に対する敬意がなく、人の下につく事ができない。自分の才を恃み、密か

はそれを孝心により従容と受止め怒らなかつた。

胡安定 本名胡瑗（こえん） 北宋の儒学者 安定に住み安定先生と呼ばれた

に王位篡奪を狙っていた。熊麿を懦弱だと馬鹿にしてほとんど独断専決した。かれは大夫遽掩が忠実実直なのを嫌って謀叛の罪をきせて殺し、遽罷と伍挙の二人の大夫を抱き込んで腹心とし、ひたすら王位篡奪を考えていた。

ある時郊外へ巻き狩りに出かけた時、勝手に楚王の旗旗を使用していた。途中芋邑を通った時、ここを守っていた申無宇は、圍の僭越な行為を厳しく指弾し持っていた旗旗を没収したので、圍は羞じて少しは静かになった。

今回號での会盟参加に先立ち、圍はその前に鄭に表敬訪問し豊氏の娘を妻にしたいと楚王の承諾を得た。そして更に楚王に、楚はすでに王を称しており地位としては諸侯の上位にあるから、その使者も諸侯の作法に準じ、列国に楚国の尊貴を知らしめたい、と言うと楚王はそれも許してしまった。

公子圍は結局国君の儀仗を僭用し、着物道具類を揃え諸侯に似せて矛を持った二人に先導させて出かけた。鄭の郊外まで来ると人々は楚王が自ら見えたと思ってあわて都に知らせた。鄭の君臣は大変驚き、夜の内に城門を出て跪いて迎えたが公子圍だとわかり、鄭国の執政である公孫僑は気分を害し、彼を入国させるとどんな災難が起きるかわからないと心配して、行人（外交官）遊吉に城内の賓館が壊れて修復中なので城外の賓館で休んでもらうよう伝えさせた。公子圍は豊氏と結婚の打合わせのため伍挙を使者として入城させ鄭伯の承諾を得た。鄭伯はたくさんのお贈物を贈って祝った。嫁を迎える日になって公子圍は突然鄭国を攻める気になり、花嫁を迎えに行くという名目で車を飾りつけ隙を見て事を起こそうとした。

公孫僑がそれに気付いて遊吉に言った。

「圍は何をするかわからん男だ。大勢の人間を城内に入れるな」

「わたしが行って話をつけてきましょう」

遊吉はそう言つて公子圍のところで出向いた。

「お聞きしたところ花嫁のお迎えにたくさんの方が城内に入ろうとされているようですが、我国は非常に狭いので従者の方々を収容することとはとてもできません。城外でお迎えになつていただけないでしょうか」

「ご主君からお許しいただいた豊氏との結婚ですのに野外で花嫁を迎えよと言われるのですか」

「周礼により、外国の軍隊は国都には入れないと定められております。ましてこれは婚姻の行事です。令尹がどうしてもたくさんの方で賑やかに行いたいと言われるのであれば、武装をお解きいただきたい」

「鄭側では我われを警戒しています。兵を下げざるを得ません」

と伍挙はそつと圍に言い、仕方なく兵士の武装を解いてから入城し宿舎に豊氏を迎えた後、会盟の場所へ急いだ。

晋趙武及び宋、魯、齊、衛、陳、蔡、鄭、許の各国大夫はすでにみな揃っていた。圍は使者を出して晋に提案した。

「楚と晋は先に盟約を行っており、今回は改めて修好をはかるに過ぎない事ですから、また敵血して盟誓を行う必要はないでしょう。宋に前回の盟誓を讀上げてもらつて確認すれば十分じゃないですか」

祁午はこれを聞いて趙武の指示を仰いだ。

「圍がああいうのは盟約の手続きの順序にこだわっているのです。前回の会盟では楚に先を譲りましたから今回は我が国が先に盟誓を行う順番です。もし前回の盟誓を讀上げるだけだったら楚に譲ったままになつ

てしまいますが如何致しましょうか」

「公子圍は今回楚王と同じ威儀でやって来たが、外部に対しこんなに高姿勢だという事は、楚国内でも王位篡奪のような事を考えていると思われる。しばらく彼の言う通りにさせてどんな傲慢にさせたほうがいいのではないか」

「前回子木（屈建）は上着の下に鎧をつけて会盟に臨みました。幸い不発に終わりましたが、圍は彼よりもっと激しい男ですから十分準備下さいませよう」

「修好という事は停戦の約束をすることである。わしは信を守るだけだ。他の事は何も考えるつもりはない」

登壇し公子圍は前回の誓約を読むよう頼んだ。趙武は言う通りにさせ、会盟は圍の思い通りに終わって意気揚々と帰って行つた。諸大夫は誰もがががて圍が楚の君主になるのだらうと思つた。史臣は詩に次のように言っている。

諸侯を睥睨傲慢公子 王の威儀を僭上す

列国皆知るその跋扈 楚王ただ燕雀のなすがまま

趙武は結局前回の盟約を読むだけに終わり、楚に主導権を譲つた事を恥かしく思い、諸侯の批判を気にして各国の大夫に信義を守つた苦心の胸の内を弁解した。帰途鄭を過ぎるころ同行していた魯大夫叔孫豹にも同じような事を言つた。豹はそれを聞き、

「宰相殿がおつしやる停戦協定は長期政策でしょう」

と言つた、

「我々その日暮らして長期的な事を考えている余裕はありませんよ」

と趙武は答えた。豹は趙武の前を退つて鄭大夫の罕虎に言った。

「趙孟（武殿）は長くないんじゃないかな。その日暮らして長期的な展望がないなどと言つて、年はまだ五十才前なのに八九十才の老人のようにくどくど言っているよ」

案の定、間もなく趙武は亡くなり韓起が代わつて晋の国政を担当する事になった。

一方、楚の公子圍が帰国すると楚王熊麇は病に伏せていた。圍は宮中へ見舞いに行き、楚王と秘密の相談があると言つて左右の者を下がらせ、帽子の顎紐を解いて楚王を絞め殺した。楚王には公子幕と公子平夏の二人の子がいた。変事を聞いて剣を抜いて公子圍を討とうとしたが、とても公子圍の武勇にはかなわず二人とも返り討ちにされてしまった。麇の弟右尹の熊比字子干、宮廐尹[㊦]の熊黑肱字子皙は楚王父子が殺されたのを聞き、禍が及ぶのを恐れ比は晋へ、黑肱は鄭へ出奔した。公子圍は諸侯に、麇が亡くなって自分が継位する事になった旨を連絡し、自ら王位を継承して熊虔と改名した。これが楚の靈王である。遼罷を令尹、鄭丹を右尹、伍拳を左尹、斗成然を郊尹にそれぞれ任じた。太宰伯州犁は公事で郊にいたが実直な人で服従しそうにないので人を遣つて殺してしまった。前王熊麇は郊の地に葬つたので郊敖と呼んだ。遼啓強を伯州犁の代わりに太宰にし、長子祿を世子とした。靈王は思い通りになつてますます驕慢になり、晋を抑えて単独で中原に覇を称えようと思うようになった。そこで諸侯を召集して会盟を行うために伍拳を晋に派遣

[㊦] 宮廐尹 令尹 右尹 左尹 郊尹 宮廐尹は皆楚国独特の官名である

した。また、豊氏の家柄が低すぎて夫人に向かないとして晋侯に婚姻を求めた。晋平公は趙武が亡くなったばかりだし楚国の力も懸念して全て承諾した。

周景王六年（紀元前五三九年）、楚靈王の二年十二月、鄭の簡公と許の悼公が楚へ行った。靈王は二人を留めて伍季の知らせを待った。

伍季が帰国して晋侯が二件とも承諾したと復命したので靈王は非常に喜び、翌年三月に申で会盟を行うむね各諸侯に使者を出した。鄭簡公は先に申へ行って諸侯を迎えたいと申し出て許可された。翌春になると諸国の会盟出席者は続々と踵を接して集まった。たゞ魯と衛は口実を設けて欠席し、宋は大夫向戌が代理出席したが、その他の蔡、陳、徐、頓、胡、沈、小邾等はみな国君が自ら出席した。

楚靈王が大軍を率いて申に着くと諸侯が皆挨拶にやってくる。

伍季は事前に楚王に進言しておいた。

「覇業を成さんとすれば先ず諸侯の支持を得なければならず、諸侯の支持を得るためにはその前に礼の作法に気をつけなければなりません。今回は王が諸侯を招集する最初の会合になります。宋の向戌と鄭の子産（公孫僑）は賢者で作法の専門家です。通っていますから、どうか慎重にお願いいたします」

「今までの礼にかなった会盟とはどういふのがあのかね」

「夏啓王の鈞台の会盟、商湯王の景亳の盟、周武王の孟津の盟、成王の岐陽の盟、康王の豊宮の盟、穆王の涂山の盟、斉桓公の召陵の盟、晋文公の踐土の盟、この六王一公いづれも礼の作法に従っています。どれをお選びになっても問題ありません」

「わしが諸侯に覇を称える時は斉桓公の召陵の会盟の作法に従おう」

だがそれは一体どういう礼法なんだ」

「六王二公の礼についてその名は聞いておりますが実はまだ勉強いたしておりません。聞くところによりますと、斉桓公が楚を討つて召陵に引揚げた時、楚は大夫屈完を斉に遣りましたが、斉桓公は同盟八国の戦車を披瀝して屈完に武力を見せ付け、それから諸侯を集め屈完と盟約を行ないました。今、諸侯が楚に服して来たばかりですから王も諸侯に力を示し彼らに畏敬の念を抱かせ、その後従わざる者を討てば諸侯は必ず随いて参りましょう」

「桓公が楚を討つたように諸侯の軍を使つてみたいが、先ず何処を攻撃すればいいだろうか」

「斉国の慶封は君主を殺し呉に逃げましたが、呉はその罪を問わず逆に優遇して朱方の地を与え一族を住まわせ、昔と変わらない富を成していて斉の人はこれに大変憤っています。しかも呉は我々の仇敵でもあるので、慶封討伐を理由に呉に出兵すれば一挙兩得ではありませんか」

という事で先ず盛大に戦車を並べ諸侯に脅威を与え申で会盟を行った。さらに徐国の君主の母親が呉の人だという理由で、呉に寝返るのを心配して徐君を三日間監禁し、彼が自ら呉討伐の道案内を申し出るのを待つて開放することまでしている。そして大夫屈申に諸侯の大軍を預け呉攻撃を命じた。彼は先ず朱方を攻め落し、慶封を生捕り一族を皆殺しにした。しかし呉に迎撃態勢ができていたという情報が入ったので撤兵し、捕えた慶封を楚王に献上した。

靈王は見せしめに諸侯達の前で彼を処刑しようとしたが、

『人を辱かしめ得るのは疾しき事なき者のみ』と申します。慶封を諸侯の前で殺せば死ぬ前に逆に王の好ましくない行為をしやべり出す恐

れがあります」

と伍拳が諫止したが、靈王は聞かず慶封を縛って軍前に引き出し、処刑官に刀を彼の首に当てさせ、罪を自白するよう迫って大声で言った。

「大夫の皆さんお聞き下さい、世の中にこんな男がいますか。慶封は君主を弑逆し、新君主が若いのを侮り大夫たちと結託しようとしたのです」

慶封もどうせ死ぬんだからと大声で反論した。

「大夫の皆さんお聞き下さい、世の中にこんな男がいますか。楚共王の庶子の圍靈王は君主である甥の熊麋を殺しこれに取って代り、諸侯の皆さんと同盟を謀ろうとしています。一体どちらが大逆無道でしょうか」

聞いている人々はみな口を覆って含み笑いをした。靈王は大恥をかきすぐに慶封を殺した。胡曾先生は詩の中に言う。

乱賊が乱賊を誅す 慶封力に屈すも心中何ぞ譲らん

靈王天誅と誇るとも 夏舒誅伐の庄王には何ぞ及ばん

（夏舒、夏姫の子、陳侯を弑逆53回）

靈王は申から帰り、屈申が朱方から撤兵し、呉に深入りしなかったという報告を受け、二心有りと疑って殺し、屈申を代りの大夫とした。そして遼罷を晋に遣って夫人姫氏を迎え、遼罷を令尹にした。

この年の冬、呉王夷昧は楚討伐軍を出して楚の棘、檇、麻を攻め落とし朱方の報復を行なった。楚靈王は怒って、再び諸侯の軍を集め呉討伐軍を起した。越君允常は呉に侵略され恨みを持っていたので、大夫の常寿過に一軍を預け諸侯連合軍に参加させた。楚の先鋒遼啓強の水軍が鵠岸で呉軍に敗れたので靈王の怒りは増長し、自ら大軍を率いて

羅洎（現河南省羅山県）に進駐した。呉王夷昧は楚軍の様子を探るため楚軍をねぎらう名目で一族の蹶繇（けいよう）を使者とした。靈王は怒って使者を殺して血祭りにあげようと蹶繇を拘束し、先ず部下に尋問させた。

「出かけて来る前に占ってみたか」

「占いました。結果は大吉でした」

「しかし大王はそなたを血祭りにあげようとしている。それでも大吉だと言えるか」

「我々呉人の占いは国家存亡の大事を占うものであって、個人の吉兆を云々するものではありません。わが主君が私に貴軍を訪問させたのは君王の怒りがどんなものかを窺うためで、それによって対応を考えようというものです。君王がもし気分が良くて使者を優遇した場合は弊國の警戒が緩み呉の危機は旦夕に迫りましょう。逆に君王が私を血祭りにあげれば君王が激怒している事を知り、弊國は軍備を懸命に整えますから楚軍を防ぐのは難しくありません。これこそ大吉じゃないですか」

靈王は復命を受け、彼はなかなかの賢士だと褒めて釈放した。

楚軍は呉の國境に攻め入ったが呉の防備は非常に用意周到で攻入る隙がなく、靈王は、

「以前屈申をむざむざ誅殺してしまったのは大間違いだったなあ」と後悔し、いいところなく撤兵した。

靈王は帰国し、出兵の功無く兵力で諸侯を驚かせる事ができなかった。そこで、物力で諸侯に国力を見せつけようと土木事業を興し、周囲が四十里もある『章華宮』という豪華な宮殿を造った。その中に四方が見渡せる高さ三千仞（約50m）もある『章華台』という高台を築いた。階段が高く急峻で最上階まで行くのに少なくとも三回は休まなければならぬ

というもので、そのため俗に『三休台』とも呼ばれた。中の宮室、高殿はすこぶる壮麗で、周囲には民家を配した。罪を負つて追放している者は全て特赦して呼び戻し花を添えた。工事完成後使者を各地に派遣し各諸侯に落成の招待をした。

さて招待に応じて来訪した者はどのくらいいたであろうか、それは次回のお楽しみ。

第六十八回

虎祁宮の祝賀の席で師曠 新曲を論じ
陳氏 私財を散じて斉國を貰わんとす

楚靈王は変な趣味があつて腰の細い人を異常に好み、男女を問わず腰周りの太い人を見ると目の中の釘のように嫌った。章華宮が完成すると腰の細い美人を選んでおいたのでまたの名を『細腰之宮』ともいった。宮女は大王の歓心を得るために空腹を我慢して腰を細くしようと、ひどい場合は餓死をも辞さないという有り様であつた。腰が太い者は醜いという風潮が広まり飽食を嫌うようになり、百官も入朝する時は王に嫌われないように帯でしつかり腰を締めて参内したものである（荀子）には細腰を好んだのは庄王とある。靈王はこの章華宮を好み昼夜を問わずそこで酒を飲み管弦の音が絶える事がなかつた。

ある日章華台で酒宴を楽しんでいる時、突然台の下が騒がしくなり、間もなく潘子臣が芋邑の責任者申無宇を靈王の前に連行してきた。靈王は驚いてわけを聞いた。

「無宇は大王の命もなく勝手に王宮に押入つて衛士を捕えるという無礼を働きました。王宮守護は臣の責務ですので捕えて王の裁決をお願いしたく連行してまいりました」

潘子臣がこう言うので王は無宇に訊ねた。

「そなたが捕えた衛士というのはどういう男だ」

「元臣の家臣の守衛であります。守衛をやらせておりましたところ堀を越えて侵入し臣の酒器を盗み出し、發覺すると逃げて半年ばかり見つけられませんが、王宮の守卒に紛れ込んでいるのを見つけたので

で捕えたわけ」でいます」

「わかったが今はわしの守衛になっている。赦してやってくれ」

「天には十の太陽があり（第八十一回注参照）、人には十の尊卑貴賤の等級があります。王以下公、卿、大夫、士、皂、輿、僕、台と次々と上の者は下の者を取締り下の者は上の者に仕えるという上下関係が維持されてこそ国の平和が保たれます。臣が自分の部下の守衛にその法を行なえず、王宮を口実に庇つてしまえば盜賊が横行し、誰が取押える事ができません。臣はどうしても王の命をお受けする事はできません」

靈王は無字の言い分を認めその守衛を無字に引渡し、王宮の守卒を勝手に捕えた罪を赦してやった。

数日後、大夫蓬啓強が魯の昭公を招待して章華宮に連れてきた。

「魯侯は最初は来ると言わなかったのですが、魯の先君成公と先の楚大夫嬰齊とは蜀（魯国内の地名、四川の蜀ではない）で会盟し友好関係があったと誘い、来なければ討伐軍を差向けるなどと脅したりすかしたりしてやっと連れてきました。魯侯は礼に詳しい人ですからどうかもの笑いにされないようご注意願います」

靈王は非常に喜び、蓬啓強に昭公の容貌をたずねた。

「彼は色白で背が高く一尺余の長い美髯があり、威風堂々としています」

これを聞いて、靈王は直ちに密令を出し国中から長身で美髯の男を十名精選して、立派な衣装を着せ三日間礼儀を教え接客大臣という名で魯侯に接見させた。魯侯は彼等を見たときと驚き、続いて楚王の案内で章華宮を見て歩いてその建造物の壯觀にさらに驚き、「すごい、こりや大したものだ」の連発であった。

「お国にはこのような宮殿はお有りですか」

「わたし方は小さな国ですから、貴国の万分の一にも及びません」

靈王は満面に自慢の色がにじみ出ていた。彼は魯侯を連れて『章華宮』に登った。此処がどんなに高いかを歌った詩がある。

高台は半ば雲を出で その高きこと眺望極みなし
草木は高き低き押並べて 山河も含めてみな一色

台は高く急峻でらせん状に曲がつて階を重ね、各階毎に周囲をめぐる手すりのある展望のための廊下がある。予め国中から選りすぐった二十名ほどの鮮やかな衣装を着せた女のような美貌の少年を酒宴に伺候させ彫り物のある美しい盆に玉の杯をのせて酒を勧め郢都の歌を歌い管絃と合奏させた。宴は絶頂に達し楽の音は心地よく耳に響き、杯が行き交い、化粧の香りが漂い、靈王と魯侯共に仙境にいるようで我を忘れた。酔って別れ際に靈王はみやげに魯侯に大屈の弓を贈った。大屈は弓の名で楚の国庫に所蔵する宝弓である。

翌日靈王はこの弓が惜しくなった。後悔して蓬啓強を呼んで相談した。「魯侯に弓を楚に返させる方法があります」

啓強はそう言って公館へ出かけ、魯侯に会って何も知らない振りをした。

「昨日宴が終わった後、王から何かおみやげがありましたか」と聞くと、魯侯は弓を取出して彼に見せた。彼はそれを見てすぐに丁寧にお祝いを言った。

「この一張の弓、そんなに価値があるんですか」

「この弓は天下に名の聞えた弓で、斉、晋、越の三国から譲って欲し

いと言つて来ておりましたが、我が君は簡単には手放しませんでしたのに今回特にあなたに譲られたのは特別のことです。将来恐らくこの三ヶ国が貴国へそれを譲れと言つて来るでしょうからあらかじめこの宝物を守る備えをしておいた方がいいと思いますよ。ま、それはそれとしてこれほどの厚情をお受けになられた事、お祝い申し上げます」

魯侯は不安になつて、

「この弓がそれ程の宝物とは知りませんでした。そんな大切な物をいただくわけには参りません」

と言つて使いの者に弓を返すように言つて挨拶もそこそこそそくさと歸つて行つた。伍卒ごそはこの事を聞いて、

「わが王は将来不慮の死を遂げるかもしれない。章華宮の落成で諸侯を招待しても誰も来ないのに、来て下さつたたった一人の魯侯に一本の弓を惜しんで信頼を失つてしまった。取るばかりで与えることをしなければ人からの恨みが重なつて、結局自分で首を絞めることになつてしまふだろう」

と嘆いたものである。周景王の十年（紀元前五三年）の事である。

一方、晋平公は楚が豪華な章華宮を造り諸侯を招いている事を聞き、「楚は蛮夷の国にもかかわらず立派な宮殿を作つて諸侯に誇示しているが、我国だつてそんなことに負けるわけがない」と大夫たちようほうたちに諮つた。大夫羊舌肸ようとうけいはこれに対し、

「諸侯の上に立つとする場合大切なことは、豪華な宮殿の有無ではなく徳によつて彼等を服せしめる事であります。楚が章華宮を建築するのは徳を失つている証拠です。どうして彼の真似などなさるのでしよう

か」

と諫めたが平公は聞かず、曲沃きよくよくの汾水ぶんすいのほとりに楚の章華宮をまねて新宮殿を建設した。広さは章華宮に及ばないが美しさはそれを上回るもので名を『鹿祁之宮しかきのみや』とし、彼もやはり諸侯に招待の使者を出した。髯翁しやうきゆうは詩の中でこれを嘆いている。

章華宮は万民の怨嗟なり 残念にも鹿祁宮これを字ばず

笑止覇君に遠計なく 土木で諸侯を召集せんとす

諸侯は鹿祁宮落成の招待を受け、みな密かに嘲笑しながらも仕方なく使者を祝賀のため派遣した。しかし鄭簡公は以前楚靈公の会盟に出席した後まだ晋に朝見してなかつたし、また衛靈公元は君主を継位したばかりでまだ晋侯に朝見していなかつたので、この両国君は自ら晋に向ひて祝つた。

衛靈公が先に晋に到着したのでここでは衛公の話をする。

衛公は晋への途中、濮水ぼくすいの岸辺で日が暮れたので旅館に泊まつた。夜中になつても寝付かれず、ふと耳元に琴の音が聞こえたので起きて枕にもたれて耳を澄ました。かすかではあるが清楚な音がはつきりと聞えてきた。それは樂師がまだ演奏したことのない新曲であつた。左右の者に聞いてみたが誰も聞えないという。靈公は元來音楽が好きな人であつた。名を涓けんという太師（樂官の長）がいて、作曲が得意でその時々状況に合わせて曲を作る事ができたため、靈公は寵愛し外へ出る時は必ず同行させていた。さつそく彼を呼びにやつた。師涓けんが来た時も曲は未だ続いていた。

「聞いてみてくれ、鬼神の音楽のように聞えるんだが」

師涓は静かに聴いていたがしばらくして音は止んだ。

「この曲の事は大体存じております。一日あれば書き写す事ができます」

彼がそう言うので霊公は更に一泊することにした。するとその夜もその音楽は聞えてきた。師涓は琴を使ってそれに随いていった。まことに素晴らしい音楽であつた。

一行が晋に着いて朝賀の挨拶が終わると平公は虎祁宮の高樓に宴を設けた。酒半ばになると平公が、

「衛には師涓という新曲をよくする人がいると聞いていますが今日は一緒にみえてますかな」

「台下に来ております」

「呼んでみていただけませんか」

霊公は師涓を台上に呼上げた。平公も師曠を呼んだ。二人は揃ってやつてきて階下で叩頭し謁見した。平公は師曠に席を与え師涓にも師曠の隣の席を与え、師涓にたずねた。

「最近の何かいい新曲はありませんか」

「こちらに参る途中でたまたま耳にした曲がございます。よろしければ琴で演奏させていただきますが」

平公は侍従に命じ年期ものの桐の琴を師涓の前に置いた。涓は先ず七弦の調弦を行ってから演奏に入つた。演奏が始まるとすぐ平公は素晴らしいと誉めた。曲がまだ半ばまでいっていない時、師曠が手で琴を押さえて、

「しばしお待ち下さい。これは亡国の曲でございます、演奏はどうか」遠慮願います」

と言つた。平公は顔色を変えて叱つた。

「どうしてそういうことを言うのだ」

「殷末の頃、延という楽師が紂王と退廃的な音楽を楽しんでいました。紂王が倦きることなくのめり込んだのがこの曲であります。紂王が武王に討たれた時、師延は琴を持って東へ逃がれて濮水に身を投げました。音楽の好きな者が此処を通るたびにその音楽が水中から聞えてくると思し申します。涓殿が途中でお聞きになったのはきつと濮水の岸辺だと思します」

衛霊公は心中驚いた。平公は更にたずねた。

「その後この曲で何か問題があつたのか」

「紂王がこれに耽つて国を滅ぼしたため、不吉な音楽という事でその後は演奏されることはありませんでした」

「わしは新曲が好きなんだ。涓殿終わりまでやってくれ」

師涓は調弦し直してこの曲を泣くが如く訴えるが如く抑揚をつけて曲の特徴をつぶさに表現した。平公は大変喜び師曠にたずねた。

「この曲は何と言う調子かね」

「いわゆる『清商』です」

「『清商』といえば最も悲しい調べといわれるものじゃないのか」

「『清商』は悲しい調べですが『清徵』ほどではありません」

「『清徵』は聞くことができるのか」

「できません。古に『清徵』をお聞きになった方はみな有徳の君主ばかりです。殿はまだ徳が十分ではありませんのでこの曲をお聞きにはできません」

「わしは新曲と聞くと我慢できん。ぐずぐず言わずにやりなさい」

師曠は仕方なく琴を整えて演奏を始めた。演奏が始まると一群れの玄鶴が南の方から次第に宮門の屋根に集まってきた。その数は八つがいになった。二度目の演奏に入るとその鶴が鳴いて飛び立ち順番に樓の階下に左右八羽づつ並び立った。三度目の演奏になると鶴は首を伸ばして鳴きながら翼を広げて舞い、琴の旋律にあわせ声は天空に達した。平公は手を打って喜び満座は喜びに満ちて、樓上でも樓下でもみなこの奇瑞をみて踊りださない者はいなかった。平公は白玉の杯に旨酒を満杯に注がせ自ら師曠に賜り曠はこれを飲み干した。

『清徵』にまさる曲はなかるうな』

平公が感心すると師曠がさらに、

『清角』の方がもっと素晴らしいものです』

と云うので平公は驚いて、

『清徵』より更にいいものがあるのか。どうしてそうわしに隠し立てするんだ』

『清角』は『清徵』とは比較にならず臣はとても演奏する自信がございません。昔、黄帝が鬼神たちを泰山に集合させた時、蛟龍に大きな車を引かせ、各方面の鬼神たちを帰順させて、蚩尤（軍神）を先頭に、風伯は塵を清め、雨師は道に水撒き、狼虎が前駆し、鬼神はそれに続き、騰蛇（飛ぶ蛇）は地に伏せ、鳳凰が地上を覆い、鬼神を大集合して『清角』を作りました。殿は鬼神を服せしめるには未だ徳が薄く神人からは遠く離れています。もしこの曲を奏できれば鬼神がどんどん集まり、禍はあつてもいい事はないでしょう』

『わしは老いた。『清角』を聞いたらもう死んでも悔いはない』

平公はそう要求したが師曠は固辞した。平公は立ち上がって師曠に強

硬に迫った。師曠は止むなくまた琴をとった。最初の演奏で西のほうより暗雲が起り、二度目を奏した時は狂風が立ち起りカーテンが引き裂け、料理の器はひっくり返り、屋根瓦は吹き飛び廊下の柱はことごとく引き抜かれてしまった。そのうち雷鳴とともに大雨が降りだしてたちまち樓下は数尺水浸しになり樓の中にもあらゆる所に水が入ってきた。従者は驚いて逃げ散り、平公も怖くなって靈公と部屋に伏せていた。かなり経って風も静まり雨も止んだ。側近も集まってきたて両君を助けて樓台を降りた。

その夜、平公は驚きのため動悸が激しくなった。夢の中で妙な物を見た。黄色い車輪程の大きさのものがひよろひよろと寢室に入ってきた。よく見るとそれはスツポンに似ており前足は二本、後ろ足は一本で、水桶のほうへ去って行った。平公は大声で「大変だ」と叫び、自分の声に驚いて目が覚め激しい動悸が止まらなかった。朝になって百官が寢室へ見舞いに来た。平公は皆に夢で見た事を話したが、誰もそれを理解できなかった。

しばらくすると、鄭君が朝賀のために、今宿泊所に着いたという報告があつた。平公は羊舌肸に鄭君をねぎらうよう命じた。肸はこれで殿の夢の事が明らかになかもしないと喜んだ。

『鄭の大夫子産（公孫僑）殿は博学多識で鄭伯が挨拶に出かける時は必ず彼を連れていきますから殿の夢の事を彼に聞いてみようと思います』

肸は宿舎へ行って食事を出して款待し、晋君のねぎらいの言葉を伝え、今病気のためお会いできないと話した。この時衛公も大水に驚いて気がすぐれないといつて帰った。鄭簡公も公孫僑だけを病氣見舞いのために残して挨拶をして帰って行った。羊舌肸は公孫僑に聞いた。

「主君の平公が夢で、色が黄色で足が三本のスッポンに似たものが内宮に入つて来たのを見たようなのですがこれは何かの祟りでしょうか」

「足が三本のスッポンであればそれは『能』です。昔、禹の父親の鯀が治水に失敗し、堯の摂政だった舜が鯀を東海の羽山で殺してその足を一本斬りました。足を斬られた彼が神化して黄色の『能』になつて羽淵に入つて行つたのです。禹が帝位についた時その神を祭り、その後三代（夏、殷、周）にわたり祀りを欠かした事はありませんでした。現在、周室は力衰え実質の政権は盟主にあり天子を補佐して百神を祀らなければなりません。」主君は未だこれを祀られていないのではないでしようか」羊舌肸はこれを平公に報告した。平公は直ちに大夫韓起に鯀を祀るよう命じた。その結果平公の病は少し落ち着いた。

「子産は本当に博識な男だなあ」

平公は感心して、莒が貢納した方鼎を彼に与えた。

公孫僑は帰国に際しそつと羊舌肸に言った。

「主君は民の苦しみを思いやるお気持ちがなく、楚の贅沢を真似てしまいました。心正しくなければ病は更に悪化し、手の施しようがありません。わたくしは一時的な話をして安心させて差上げただけです」

ある人が早朝魏榆地方を通つた時、山の麓で何人かの人が集まつて晋のことを話し合つていた。近づいてみると、何とそれは人ではなく十何個の石であつた。行き過ぎると又同じような声が聞える。急いで振り返るとその声は石から出ていたのである。彼は驚いて地元の人にその話をした。

「我われもここ数日石が話するのを聞いていますが、奇妙な話ですから誰にも言わなかつたのです」

この噂は絳州に聞えてきた。

平公は師曠を呼んで石がどうしてものを言うのかをたずねた。

「石がものを言うわけがありません。鬼神が人の耳についたのでしょう。鬼神というものは民衆の心の中にいるもので、民衆の中に執政者への不満がたまると鬼神は心休まらず、鬼神の心が休まらないと怪現象として現れてまいります。殿が『鹿祁宮』を建て民の財力を使果してしまいましたので民衆に怨嗟が起こり石がものを言つたのでしょう」

平公は何も言わなかつた。師曠は退つて羊舌肸に、

「神は怒り民に怨嗟が起つています。この贅沢は楚が先で本来楚君が受ける禍のはずですが、わが君の寿命の方が先が見えています」

と言つた。一月ばかりして平公は再び寝込んで起きられなくなつてしまつた。鹿祁宮を建ててから亡くなるまで三年足らずで、しかも大半寝込んだままの日々であつた。民衆を苦しめ人々の安らかな生活に心を配らなかつた君主の笑うべき結末である。

高樓鹿祁宮にて新曲奏で 民の膏血は尽き怨嗟は溢る

君主の命 神妖にさらわれ 遂には鹿祁宮もお荷物にならん

平公の薨去後大夫たちは世子夷を君主に立てた。即ち晋昭公である。

さて、齊の大夫高強の父高蠆は、高止を追放し勝手に閭丘嬰も殺したため朝廷の皆から総すかんを食つていた。父親が亡くなつて高強が大夫を継いだ時は、年齢はまだ若かつたが天性の酒好きで樂施も酒が好きだったため、お互いに大変気が合い、陳無宇と鮑国との交流は次第に減つていった。その結果、齊国は政務を担当する四家が二派に分かれる

ことになった。高、欒二人は集まって酒を飲んで酔うとその度に陳、鮑両家をあれこれと非難したので、陳、鮑両家は次第に疑念を抱くようになった。

ある日高強が酒気を帯びて召使に鞭を打ち、欒施が傍で煽動するような事があった。この召使は二人を恨んでその夜陳無宇の家へ駆け込んで、「高、欒両家が私兵を集めて陳、鮑両家を攻め滅ぼす準備を進めています。実行は明日の予定です」

と嘘を言い、続いて鮑家へも行つて同じ事を言つた。鮑国はこの話を信じて、急いでその召使を陳無宇の所へ遣つて一緒に欒、高両家を攻撃する約束を取りつけた。無宇は家兵に武装させ、兵を統合するために鮑家に向かった。途中高強が前方から車で来るのにばったり出会つた。彼はすでに半ば酔つていて、車の中から陳無宇に拱手の礼をしたがずねた。

「武装兵を率いて何をしに行くのですか」

「奴隷が逃げたので捕まえに行くのです。あなたこそどちらへ」

「欒氏の家で飲むと思つていゝんです」

無宇は車を急がせた。間もなく鮑家の門前に着いた。軍備は万端調つていて鮑国も正に車に乗ろうとするところであつた。無宇は子良（高強の言つたことを鮑国に話した）

「今から欒氏の家へ飲みに行くと言うのは本当だろうか。人を遣つて探つてみた方がいいんじゃないか」

鮑国は偵察に遣りその報告によると、欒、高の二天夫は衣冠を脱いで飲んで馬鹿騒ぎをしているという。

「あの召使の言う話はうそだったんだな」と鮑国がいったが、無宇は、

「召使が言つた事が嘘であっても、子良は途中でわたしが兵を動かしているのを見ている。何処へ行くのかと聞いたので奴隷が逃げたといひ加減な返事をしたけれど、今奴を討たないと、酔いが醒めたらきつと疑うと思う。万一彼らに先手を取られたら悔やんでも間に合わない。乗リかかつた船だ、酔つ払つていて準備をしていないところをこちらが先手を取つて攻撃すべきじゃないか」

鮑国も了解し両家の兵は一緒に行動を開始し、無宇が先発し鮑国がその後について欒家に押掛け前後の門を包囲した。

欒施が大きな酒杯を傾けようとした時、突然、陳、鮑両家の兵が攻めてきたと聞き、不覚にも大杯を落としてしまった。高強は酔つてはいてもまだ三分は正気で、欒施に言つた。

「至急家兵を集め武装させて朝廷へ飛び込み、主君を擁して陳、鮑を反撃すればまず敗ける事はない」

欒施は急いで家中の者を集めた。高強が先に立ち欒施がその後について後門を開いて飛び出し血路を開いて宮中へ走つた。陳無宇、鮑国は君主を彼らに抑えられては不利になるので急いで追撃した。そのうち高家の人びとが変を聞いて救援に駆けつけた。景公は宮中にいて外で四家が攻め合っていると聞き何事が起きたのかわからず、とにかく守衛に虎門（宮中最内部の門）を嚴重に閉鎖させて宮中の衛士に守備を命じ、急いで晏嬰を呼びにやつた。欒施、高強は虎門を攻めたが入ることができず、四家は門外で左右に別れ互いに対峙した。

まもなく晏嬰が衣冠を正し馬車でやつてきた。四家はそれぞれ使者を出して彼を自陣に誘い込もうとしたが晏嬰は見向きもせずに使者たちに、「わたしは主君の命に従うのみで勝手な事はできません」

と言ひ、宮門に入つていった。景公はさつそく晏嬰にたずねた。

「四家が争つて兵は寢門^{あぐら}まで来ている。どうしたらいいだろうか」

「欒、高両氏は代々の君主の寵愛を待み独断専行がもう長く続いています。高止を追放し、閭丘^{りやきゅう}を殺し、人々はみな彼を怨んでいます。今又寢門にまで攻め込んできており、これは許すべからざる罪であります。しかし陳、鮑両家も君命を待たずに勝手に兵を起こした事やはり明らかに犯罪であります。状況は以上の通りでございますが、ご裁定をお願いします」

「欒、高の罪状は陳、鮑より重い。追放に処す。使者には誰が適任か」

「大夫王黒^{おうくろ}がよろしくうと存じます」

景公は王黒に命じ宮廷の衛士を率いて陳、鮑両家と力を合わせ欒、高の家兵を攻めさせた。欒、高両家は破れて大衢^{たいく}まで撤兵した。国中の人はこの欒、高に憎悪を感じていたので誰も彼らに加勢しようとはしない。高強はまだ酔いから醒め切つてなかったので戦鬪に力が入らず、欒施が東門の方へ逃出したので高強も彼について逃げた。王黒は陳、鮑と一緒に追つて東門で再び戦いとなつたが、欒、高両家の家兵は次々と逃げ散つてしまつたので、二人も今はこれまでと魯国へ逃げて行つた。陳、鮑は欒、高の妻子を追放しその家財を山分けした。晏嬰は陳無宇に言つた、「あなたは歴代の旧臣を勝手に追放し、彼らの財産を取込んでしまいましたが、必ず後に批判を浴びる事になるでしょう。山分けした物を自分の物にしないで公に寄付し仁徳の名を得た方が、結局得るところが大きい

きいのではないでしようか」

陳無宇は納得して晏嬰に感謝し、自分の取分の食邑や家財を全て目錄にして景公に献上し、景公の母夫人孟姫にも別途自分の物を献上した。

「陳無宇は欒、高家を討つて公室の威厳を高め、利得物を公に献上するなど、彼の功績は大変なものです。高唐邑^{こうとう}を彼に与えたらどうです」孟姫は無宇が自分にも献納してきたので気を良くしてこのように景公に口添えをした。景公はそれに従つた。陳氏は豊かな高唐邑を得て却つて所得が増える事になった。陳無宇は下心を持つて徹底していい子になつて、

「高堂に国外追放された公子方は冤罪ですから帰国して原職に戻されたらいかがでしょう」

と進言し景公の許しを得た。公子子山、子商、子周を呼戻すため、身銭を切つてそれぞれの日用の諸道具から従者の衣裳に至るまで万般準備を整え、使者を分担してそれぞれを迎えにやつた。公子たちは帰国できる事だけでも大変な喜びなのに、必要な道具が完備されていて、それが陳無宇が用意してくれた物だとわかりみな感激した。

無宇は公室に多額の施しを行い、公子、公孫で無禄の者には全員に自分の収入を割いて禄を与え、また国内を廻つて孤児寡婦で困窮している者にはやはり身銭を切つて食物を与えた。金の貸し借りでは貸し出しを多くし回収は余り督促せず、貧しくて返済不能な者の証書は燃やしてしまつた。こういう施しの結果、国中の人々は陳氏の徳を称え彼のためなら死んでもいいと言ふほどであつた。

しかし史臣は陳氏の民への必要以上の施しは将来の内乱の端緒になる可能性があり、又臣下が私恩小惠で民衆の心を得るといふのは、君主

※ 寢門 天子 諸侯の正室を路寝という。宮内最も内側 正門を寢門 或は路門といふ。北京商務印書館「辭源」。齊の公室 寢門は虎の画が描かれたので虎門といふ。

が民に仁徳を施していないからだとも批判している。

君権を侵さんとする時 往々私恵で民心を買う

見よ陳氏の斉篡奪の計 これ一時仁徳篤く見えしのみ

景公は晏嬰を相国に登用した。嬰は民心が悉く陳氏に帰している状況を景公話し、景公に、刑の寛大化、賦役の軽減や民衆に対する生活扶助政策等を導入して民心を君主の方に引止める必要があることを勧告したが残念ながら聞きいれられなかった。

さて話を楚靈王に戻す。靈王が章華宮をつくり諸侯を招待したが魯侯以外誰も来なかったにもかかわらず、晋が虎祁宮を造ると諸侯が皆祝賀に集まったと聞き、非常に憤慨し伍挙を呼んで中原討伐を諮った。

「大王が仁徳で人を呼んでも来なければ来ない者に問題が有ります。しかし土木工事で諸侯を呼んで来ないからと言って責めてみても誰がそんな事に承服しましょうか。どうしても中原に出兵して威を示そうとなさるのでしたら何か問題のある相手を探し出しその討伐するという出兵の名目を作る必要があります」

「どこか適当な対象国はないか」

「蔡の世子般は父君を殺して九年になります。王は先ず諸侯を招集し、蔡君が来ても我慢をして放って置きます。弑逆の賊は子孫であっても死刑です、ましてや本人です。蔡君が楚に接近して来たらその時討ち取って土地を併合すれば一挙兩得ということになります」

そんな話をしているとき近臣から報告があった。

「陳国の訃報が届きました。陳侯溺殿が亡くなり公子留殿が継位した

そうでございます」

伍挙はこれ聞くと王に言った。

「陳の世子は偃師だから当然彼が継位すべきなのに、公子留が立ったというのは変です。偃師は一体何処にいるのでしょうか。陳国ではおそろく内乱が起きたのです」

陳国で何が起きたのだろうか、それは次回のお楽しみ。

第六十九回

楚靈王 擁護を授け陳・蔡を滅ぼし
晏平仲 言葉巧みに楚の君主を服せしむ

晏平仲 言葉巧みに楚の君主を服せしむ

陳哀公溺は最初の妃鄭姫が生んだ偃師を世子に立てていた。その後二番目の妃が公子留を生み、三番目の妃が公子勝を生んだ。一番目の妃は媚びて寵を得るのが上手だったので留を生むと哀公は留を大変可愛がった。しかし、すでに偃師を世子に立てていてこれを廢する理由がない。そこで弟で司徒の公子招を留の太傅、公子過を小傅に任命し二人に、将来偃師の次は留に継位させるようにと指示した。

周景王十一年（紀元前五三四年）、陳哀公は病気で寝たきりになり朝政を見られなくなって久しい。公子招は公子過に相談した。

「公孫吳（偃師の子）はすでに成長しているから、偃師が位を継いだらきつと呉を世子にするに違いない。そうになったら留殿に継位させることができず殿との約束が果たせなくなってしまう。殿は長く寝たきりだから今なら我々の思うままだ。殿が亡くなる前に偽の君命を出して偃師を殺し留殿を世子にしておけば安心じゃないか」

過もこの案に賛成し、大夫陳孔奐に話を持ちかけた。孔奐も承諾して、「世子は必ず毎日三回宮室へ殿の見舞いに行つて、朝も夕も殿のそばでいるので嘘の命令を出すことは無理です。むしろそれより宮門外に兵を隠しておいて、偃師が門を出入りする時に隙を見て刺せば一人でもやれます」

というので過は招と話し合つてこの件を孔奐に任せ、うまくいって留が君主になったら大邑に封じてやろうと約束した。孔奐は密かに腹心の

力士を呼び守衛の中に紛れ込ませた。守衛たちもその者が世子の側近の一人だと思ひ疑う事はなかった。世子の偃師が見舞いを終わつて夜宮門を出ようとした時、力士が突然灯火を消して世子を刺した。宮門は大混乱に陥つた。まもなく公子招と公子過がやつてきて、驚いた振りをして一方では賊の捜査に当たらせ、一方では、

「陳侯は病篤く朝政におつきになれませんので、留殿を君主に仰ぐべきだと存じます」

と提唱した。陳哀公は事変を聞き憤怒のあまり自ら縊死してしまつた。史臣詩にいう。

嫡長継位で本来国は安泰 何故庶子を愛して争端とせん

古来父君の偏愛多し 見よ陳哀公の行状の仔細を

（嫡長＝本妻が生んだ長子）

公子留は司徒招に擁護され葬儀を仕切つたあと即位し、大夫干徵師を楚に派遣して君主病死の訃報を知らせた。伍華は干徵師の話を靈王の側で聞いていて、陳の公子留が君主となり世子である偃師の行方がわからないという事情の裏には何かがあると疑惑を持つていた。ちょうどその矢先、

「陳公の第三子の公子勝殿と世子偃師殿の子公孫吳殿が面会を求めて見えております」

という連絡が入つた。靈王はすぐ招じ入れ来意をたずねた。二人は泣きながら跪いて挨拶をし、公子勝が話を始めた。

「嫡兄の世子偃師が司徒招と公子過に謀殺されまして、それを聞いた父は憤死して果てました。彼等は勝手に公子留を君主に立てましたので、わたしたちは危険を避けて大王をお頼りしてまいりました」

靈王は干徴師に問い質した。彼は最初は否認していたが公子勝に事実を指摘され答えに詰ってしまった。

「貴様は招、過と同じ穴の貉むじなだな」

靈王は怒って死刑執行人に命じて干徴師を縛り上げて斬刑にした。

伍ご卒は事件の内情を知って靈王に献策した。

「逆臣の使者は誅殺致しました、公孫呉を援けて招、過二人の奸臣の罪を追及するのは筋が通っていますから誰からも文句はございませぬ。先ず陳を平定し、次に蔡を討伐すれば、大王の功績は先君庄王に匹敵するものになりましょう」

靈王は大変喜んで、直ちに陳討伐のための出陣を命じた。公子留は干徴師が殺されたと聞き禍が及ばないよう君主になるのを避けて鄭国に出走した。

司徒の招と一緒に逃げたほうがいいのではないかと説得する者もいたが、

「楚軍が来てもしには退却させる腹案がある」
と招は冷ややかに言った。

楚靈王は大軍で陳国に向かった。陳の人々は世子偃師に同情し、その子公孫呉が楚軍の中にいるので喜こび食料を提供し楚軍を歓迎した。司徒招は事態が急を告げているので相談があると言つて過を呼びに遣った。過は駆けつけてきて席に着くや招をなじった。

「あなたは敵を撃退する計が有ると言っていたではないですか、それはどうなっているんですか」

「それにはまだ一つ足りない物があり、それをそなたに借りたいんだ」
「それは何ですか」

「あんたの首だよ」

過は驚き立ち上あがろうとしたが、招は側近に合図して過を鞭で払い倒し直ぐに剣を抜き首にした。そして自らその首を持って楚軍へ行き、楚王に、

「世子を殺し留を立てたのは皆公子過の一存です。わたくしは大王のお力におすがりするために過の首を斬って持って参りました。この事違ちがひありません」

靈王はその控えめな言い方が気に入った。招は更に膝行して、王座に近づき密かに、

「むかし、貴国の庄王様が陳国の乱を平定された時、すでに陳国は楚国に併合され陳県に改められました。その後陳の復国をお許頂きましたが、現在公子留は罪を恐れて国外へ逃げてしまいましたので国内は君主がいない状態です。この際、他の者に取られないよう王が郡か県に併合されたら如何でしょうか」

靈王はその言葉を非常に喜び、

「わしもその考えは同じだ。そなたは先に帰国し宮室の掃除をしてわしが巡幸するのを待つように」

と指示し、司徒招は叩頭して感謝し帰って行つた。

公子勝は楚王が公子招を許して帰国させたと聞き、又やつて来て靈王に哀訴した。

「今回の事件を計画したのは全て公子招です。実行の時に過が大夫孔奐を仲間に誘つたのです。過に罪を被せ自分は罪を逃れようとしています。これでは先君も先太子も地下で浮かばれません」

と言つて慟哭してやまない。軍部の連中もみな彼に同情した。

「公子、そんなに悲しまなくてもいい、わたしがちゃんと良いようにしてやるから」

と靈王もそう言つて彼を慰めた。

翌日、公子招は鳳輦、儀仗兵を準備し楚王を迎えた。楚王は入城し朝堂の席に座つて陳国の百官に接見した。靈王は先ず陳孔奐を前に呼び出し、

「世子を殺したのはお前だな。お前を誅殺しなければ皆にしめしがつかない」

と言つて斬首を命じ、公子過の首と一緒に国門に懸けた。次に公子招を呼出し問責した。

「わしは本来寛大を旨としているが公憤は捨置きたい。死を二等減じ東海の僻地への流刑とする」

招は弁解の余地も無く、言われたまま感謝して越国へ護送されていった。公子勝は公孫呉を伴い賊を討伐してもらつた礼を言上した。

靈王は公孫呉に、

「本来あなたを君主にして胡公の祀りを続けてもらおうと思つたが、招、過の殘党がまだ多く、そなたへの恨みで命を狙う者がいるかもしれないから、しばらくわしと一緒に楚へ行つていたほうがいい」

と言つて、将士に命じて陳国の廟所を壊し陳国を楚の県にし、鄭將皇頤生捕りの功争いでの不公正な裁定事件（その手を上下する）の時の穿封戌の功を認め陳公に封じ陳県を守らせることにした。陳国の人々はこの処置に非常に失望した。髡翁は詩で嘆じている。

賊を誅すが義軍なるに その名の下に他国を併合しようとは
忘れしや蹇田奪牛の諫めを 申公の忠諫なきぞ恨めし

（蹇田奪牛＝田の小道で牛を奪う） 53回 注220

靈王は公孫呉を連れて帰り一年間兵を休めて、また蔡討伐軍を出そうとしたが、伍挙がまた一計を提案した。

「蔡の般は悪事を働いたとはいえ在位がもうかなり長くなっており、人々も彼の罪状を忘れかけています。討伐軍を出せば、逆に何か言い出すかも知れません。むしろ誘い出してあつさり殺してしまつた方がいいのではないでしょうか」

靈王もその計に賛成し、巡幸を装つて申に進駐し、使者に土産を持たせて蔡にやり蔡靈公に申で会いたいから出かけて来て欲しいと以下の内容の国書を届けさせた。

君侯とお会いし親しくお話したく存じますので、申地までご来駕いただけますようお願い申し上げます。持参の物は軽少ではありますが皆様方をおねがいする一助にでもなりましたら幸甚に存じます。

蔡侯が専用車を用意させ出かけようとする、大夫の公孫歸生が引き止めた。

「楚王は貪欲な性格ですから信用できません。今来ている使者も大変なみやげを持つて来ているが言葉は必要以上にへりくだっています。おそらく我われを誘い出そうとしているのです。いらつしやつてはなりません」

「蔡の地は楚の一つの県ほどでもない。もし呼び出しに応じないで攻めて来られたら誰も支えられないだろう」

「どうしてもいらつしやるのでしたら、万一に備えて是非世子をお立て願います」

蔡侯は帰生の意見に従ってその子有を世子に立て、帰生を監国として世子の輔弼を命じた。そしてその日の内に車で申に向かい靈王に会った。

「此処で別れてもう八年になりますね。あなたの昔と代らないお元氣なお姿を拝見して大変うれしく思いますよ」

「ちつぽけなわが国を同盟国の一員に加えていただき、また王のお力で弊国の乱れを鎮撫いただきました事など、恩浅からぬ物がございます。王が中原に進出なさるという事をお聞きいたしました。が、命令がございましたら喜んで直ちにお手伝いさせて頂きたく存じます」

靈王は申の行宮で酒宴を設け蔡侯を款待し、歌舞を見せ、主客痛飲して楽しんだ。その後席を替え、従者は伍卒に外館で接待をさせた。蔡侯は酒を飲んで酩酊してしまつた。カーテンの後ろに隠していた武士が、靈王が杯を投げるのを合図に一斉に飛び出し蔡侯を席に縛り上げた。蔡侯は酔払つていてそれさえもわからない。

靈王は、皆の前で声明をよませた。

「蔡侯は父親である君主を弑逆した。わしは天に代つてこれを討つ。従者には罪はない。投降者には賞をあたえる。帰国希望者はそれもよし」

しかし、元來蔡侯は部下には恩を施し大切にしてきたので随従者には誰も投降しようとする者はいなかった。靈王がひと声号令を掛けると楚軍がさつと包囲し一人残らず捕えられた。蔡侯はやつと酔いから醒めて束縛されているのに気がつき、靈王に向かって目を吊り上げて叫んだ。

「わたしが何をしと言ふのです」

「お前は自分の手で父親を弑逆した。これは天理に悖る事で、今日天

誅が下るといふのは遅いくらいだ」

「帰生の忠告を聞かなかつたのが悔やまれる」

靈王は蔡侯を八つ裂きの刑（重裂の刑 注エー）ブックマークが定義されていません。参照に処し、一緒に死んだ者は全部で七十人に及び、かき等最下等の者も一切赦さず皆殺しにした。蔡侯般の弑逆の罪を木簡に大書して国中に公表し、公子棄疾に命じ大軍を率いて蔡に攻め込めた。宋儒は、蔡般の罪は誅殺も当然ではあるが、誘い出して殺すというのは非道であると非難している。髯翁は詩にいう。

蔡般に父なく君もなし 倫理を質さん鼓音高し
誘誅の非法を怪しむ勿れ 楚靈王は元來弑君の人

蔡の世子有は父親が出かけた後、朝に晩に謀者を遣わし様子を探らせていた。突然蔡侯が殺され楚軍が攻めて来るという報せが入つたので、直ちに兵士を召集し城に上げた。まもなく蔡城は楚軍に幾重にも包囲された。

公孫帰生が進言した。

「我われは長らく楚に付いてきましたが、晋、楚は停戦協定を結んでいます。協定内容もわかつていますので、晋に使者を立てて救援の要請をすれば或は晋楚協定を考慮して救援に来てくれるかもしれません」

その進言に従い晋への使者を募つた。父親蔡略が蔡侯と共に殺された七十人の中の一人であるという蔡洧という者が、父の復讐をしたいと申し出た。許されて彼は国書を持つて夜陰に紛れ城を下り、北へひた走りに走つて晋昭公に哀訴した。

昭公は群臣を集めてこの件を相談した。荀呉が進言した。

「晋は盟主です。諸侯の依頼を聞いてやり安心させる義務があります。陳を助けてやれず蔡も放置したのでは盟主とはいえなくなります」

昭公は弱音を吐いた。

「楚の虔（けん）の強力な兵力にわが方は対抗できないんじゃないか」

韓起はこれを聞いて、

「たとえ力及ばずといえども、座して見ておく事ができませんようかと進言した。そこで昭公は韓起に厥愁（けつしゅう）衛國の地に諸侯を集めるように命じた。宋、齊、魯、衛、鄭、曹の各国が号令に応じてそれぞれ大夫を派遣して来た。韓起が蔡救援の件を付議したが、各国大夫は声も出さず首を振って、だれも自分から積極的な意見を言おうとしないう。

「諸君はそこまで怖れて楚の蚕食を許すのですか。そういう事であれば陳、蔡のあと、次第に皆さん方の国に侵略の手が及ぶ事になってもわが君主はもうお聞きしないでしょう」

韓起がそう言っても大夫たちは顔を見合わせるだけで誰もそれに答える者はいない。宋の右師華亥が出席していたので韓起は彼に言った。

「宋で会盟を行った時、あなたの前任の右師華元殿が南北停戦を提唱され、もし先に軍を動かす者があれば各国が力を合わせてこれを討つと取り決めました。今、楚はその約束を破り陳、蔡に兵を出していますが、あなたはじつと手をこまねいて一言もおっしゃらないというのは、楚に信義がないというより、あれは貴国の欺瞞であつたということですね」

華亥は恐れのように次のように弁解し、提案した。

「わが国が盟約をこまかして盟主の機嫌を損じするような事を致すわけがありません。しかし蛮夷（蛮）が信義に背くについてはわが国

と致しましては何ともしようがございません。このところ久しく兵を動かした事がなく、戦争となれば勝負の行方はわかりません。むしろ停戦協定に基き、蔡を赦すよう楚に使者を送られたら如何でしょうか。楚もきつと嫌とは言わないでしょう」

韓起は各国の大夫がみな楚を恐れているので、蔡を救援するという事だけでは皆を動員する事はできないと判断し、仕方なく大夫の狐父（こふ）を使者として申城の楚王に手紙を持たしてやった。蔡洧（さいゐ）は各国が蔡救援軍を出さないと分かり、泣いて帰って行つた。狐父は申城に着き靈王に書を呈した。手紙の概要は以下の通り。

過日の宋に於ける盟約は南北相まみえ停戦のお約束をいたしたものであります。虢（かく）の会はそれを再確認したもので神にも誓いを立てております。わが主君は諸侯に盟約を遵守させ一度と言えども干戈を交えさせた事はございません。陳、蔡両国には確かに罪過がございました。貴国はそれを叱り義憤により討伐の兵を起され、ともかく問責の措置をお取りになりました。罪人はすでに処分されたにも拘らず未だに兵をお退きにならないのはどういう事でございましょう。諸国の政權担当大夫が弊国に集まり、わが主君は紛争解決に尽力すべきだと責められております。事態の等閑を恥じると伴に、出兵という事態に至る事を危惧いたしまして、盟約に従い諸大夫と相談のうえ本書（しんぷ）を認め貴国に蔡国の助命をお願いするものであります。もし貴国がこれまでの友好関係を考慮され蔡国の宗廟の存続をお許しただけでしたら、蔡国だけに留まらず弊国並びに同盟諸国共々みな君侯の恩恵を賜る事と感謝致すものであります。

文書の終わりには宋齊等各国大夫の署名があつた。靈王はこれを見て笑いながら言った。

「蔡城の落城はすでに旦夕にある。わしを三尺のガキだと考えているんじゃないか、こんな空言をもつて包囲を解けとはチャンチャラおかしい。早々に帰つて汝の主人に伝えよ。陳、蔡はわが国の属国だ、北の者には関係ない事で、汝らがとやかく言うことはない、とな」

狐父はもう一度哀願しようとしたが、靈王はさつさと奥へ入つてしまつて、返書の一枚も出そうとはしなかつた。狐父は憂鬱な気持ちで帰国した。晋の君臣は楚の態度を恨みはしたがどうしようもなかつた。

有力無心は力を持ち 有心無力は無駄骨を折る

有心有力揃つて来れば 涸海移山も止められまい

蔡洧が晋から帰国の途中、楚の巡邏の兵に捕えられ、公子棄疾の陣に引張つて行かれた。棄疾は彼を脅して投降させようとしたがどうしても投降すると言わないので軍の後方に収監しておいた。棄疾は晋が救援に來ない事がわかつたので益々城攻めを強化した。

帰生は事態の窮状を見て世子有に提案した。

「事此処に至つては、臣が一命を賭して楚軍へ行き撤退を説得するしかありません。もし説得できれば人民を塗炭の苦しみから救う事ができます」

「城中の指図は全て大夫に掛っている、私を捨てて行かないでほしい」「わたしが行くのをお許し頂けないのでしたら、臣の子朝呉に行かせましょう」

世子有は朝呉を呼出し涙ながらに派遣した。

朝呉は城を出て棄疾に会いに行つた。棄疾は彼を札を以つて迎えた。「公子の大軍の攻撃で蔡はまさに滅亡に瀕しております。しかし何の罪なのかわかりかねています。もし先君般の失徳が理由でございましたら世子（有）には何の罪が有るのでございましょう。また蔡の宗族や国民には何の罪があるのでしようか。何とぞ憐憫の情をもつて再検討をお願いいたします」

「わたしも蔡國を滅ぼす必要はないと思いますが、主命による攻撃ですので成果を持ち帰らなければわたしも処罰されます」

「もう一言申し上げたい事がございます。お人払いを願えませんか」「かまわずおつしやつてください、此処にいる者は心配要りません」

「楚王がどんな方法で王位に就かれたかは改めて申し上げる事もございませぬ。心ある人はみなこれに関し憤懣を持っております。しかも、内政面では民の膏血を絞つて土木工事を行い、外交では人命を尽くして干戈を交え民を慈しむ事無く顧みる事も無く飽くなき貪りを続け、先には陳を滅ぼし今回また蔡侯を誘殺しました。公子が先君の仇を忘れ靈王と共に人々の憤怒を積み重ねておられますと、将来王の責任の半分は公子に帰する事にならぬとも限りませぬ。公子は賢者として知られた方です、しかも『当璧』の吉祥（次ページ参照）をお持ちの方です。楚の人々は皆公子を君主に思つている事でしよう。公子が王に対し君主弑逆並びに民を苦しめた罪を挙げて兵を起せば誰も公子に反抗する人はいないでしよう。誰も無道の君に与し、万民の怨嗟を受けようとする者はいないでしよう。公子が愚計をお聞き入れ下さるなら小生は命を掛けて公子のために先駆け致します」

棄疾は朝呉の話の聞くと突然顔色を変え、

「匹夫め、巧言をもって我が君臣の離間を計ろうとするのか。本来なら汝のそつ首切り落とすところではあるがしばらく預けておく。速やかに投降すれば命は保障してやるが、さもなくば汝らの命は蔡ともども長くないと、早々に帰つて世子につたえよ」

と怒つて左右の者に命じて朝呉を陣外へ放り出した。礼をもつて迎えた棄疾が急に顔色を変えたのには理由がある。

もともと楚共王には愛妾の子が五人いた。年の順に、長男は熊昭即ち康王、次男が圍即ち靈王、三男は公子比字子干、四男は公子黑肱字子皙末子が公子棄疾である。共王はどの子の後継者にしたらいいか決めかねた。そこで神を祀り一個の璧玉を捧げて密かに祈つた。

「神様、五人のうちから国家の主となる賢者を一人お選びください」そしてその璧玉をそつと太廟中の広間に埋めて印を付けておいた。それから五人の息子に三日間沐浴齋戒させた後、五更なつて廟に入れ順次祖先を礼拝させた。その礼拝した場所が璧玉を埋めた場所に当たつた者が神に選ばれた者であるとしたのである。康王が先に入り璧を跨いでその前で礼拝した。靈王は拝礼した時肘が璧の上に届いた。子干、子皙は遠く離れていた。棄疾はその時幼くて乳母に抱かれて礼拝したがその場所が正に璧の紐の上に当つていた。当璧。共王は棄疾に神佑があると認め、彼を益々可愛がるようになった。だが共王が亡くなった時は棄疾はまだ幼なすぎたので、康王が先に即位したのである。楚国の大夫たちはみな『当璧』の事は聞いていて、棄疾が楚王になるべき人であるという事を知らない者はいない。今日朝呉が当璧の吉祥のことを言い出したので、棄疾はこれが漏れ伝わって靈王に危険視される事を恐れ、わざと怒つて朝呉を追ひ出したのである。

朝呉は城に戻り棄疾の話を報告した。世子は、

「国君が社稷のために命をかけるのは当然の事だ。未だ葬儀も終わつてないので君位も継いでないが、わしは摂政として国を守る立場にあり、この城と存亡を共にするつもりだ。仇に膝を屈するのは奴隸になるのと同じだ」

と言つてますます嚴重に守りを固めた。四月に包囲され今十一月である。公孫帰生は過労で倒れ床を離れられなくなった。城中の食料も食べ尽し餓死者が続出し、兵士は疲労困憊で支えきれなくなつてついに落城した。世子は城楼に端座し縛を受けた。棄疾が入城し民衆を慰撫し世子有を檻車に乗せ、蔡洧と一緒に護送し楚靈王に戦勝を知らせた。朝呉は当璧の発言があつたので手元に留め靈王には届けなかった。まもなく帰生は亡くなり、朝呉は棄疾に仕える事になった。周景王十四年（紀元前五三一年）の事である。

靈王はすでに郢都に戻つていた。彼は夢を見た。夢の中で九岡山の神だと言う神人がやつて来て王にいう。

「わしを祭りなさい。そうすれば汝に天下を与えようぞ」

王は夢から醒め非常に喜び、すぐに九岡山へ出かけた。ちようどそこへ棄疾の戦勝報告が届いたので、すぐ世子有を殺して犠牲として九岡山神を祀ろうとした。それを聞いて申無干は諫止した。

「昔、宋襄公が会盟に遅れた鄆君を犠牲にして睢水の神を祭り諸侯を手なづけようとして却つて諸侯の造反に遭いました（33回）。どうか王はその覆轍をお踏みになりませんように」

しかし靈王は聞かない。

「こやつは逆心般のせがれじゃないか、諸侯だった鄆君とはわけが

違ふ。こいつは犬畜生と同じだ」

「王のむやみに人を殺す性格は直りそうにないな」

申無干は王前を退出してこう嘆き、ついに年を理由に官を辞して田舎へ去った。

蔡涓は世子が殺されたのを知り三日間泣き続けた。靈王は彼の忠義を認め許して用いることにしたが、蔡涓は父親が靈王に殺されているのでずっと復讐心を抱き続けている。彼は靈王に進言した。

「諸侯が晋について楚につこうとしないのは晋は近く楚が遠いからです。陳と蔡を併合したので土地は中華と隣接する事になりました。陳、蔡にそれぞれ高くて幅のある城壁を築き、千乗の軍隊を配備し諸侯に威容を示せば、四囲の諸侯はみな恐れてなびいて来るでしょう。そうしたら呉越に出兵し先ず東、南を征服し、その後西、北方面に攻め込めば、周に代わって天下を取ることができるよう」

靈王は彼のへつらった発言を大變喜び、日ごとに寵信の度を増した。陳、蔡の城壁を作り直し高さ巾を倍にした。また兼疾を蔡を滅ぼした功により蔡公に任じた。また東不羹、西不羹の二つの城を築き楚の咎とし、楚に勝る者なし、天下は指呼の間にありと自認していた。そして太卜を呼んで占わせた。

「わしが王になるのは何時か」

「殿はすでに王でございます、それ以上何をお聞きになられますか」

「楚と周が並び立っている間は眞の王とはいえない。天下を取ってこそ眞の王といえるのだ」

太卜は亀甲を焼き亀裂をみた。

「占いでは駄目だと出ました」

と太卜が言うと、靈王はその亀甲を地に投げ付け腕をまくって大声で叫んだ。

「神さま、このちつばけな天下さえもわたしに下さらないとおっしゃるのですか。それじゃこの態度を何の為に生みになられたのですか」

「これは人間が行なう事です。占いなどで何がわかりましょう」
蔡涓はそう言って靈王を喜ばした。

諸侯はみな楚を恐れ、小国は朝見のため、大国は表敬訪問のために、こぞって使者を送って来て、楚国に通じる路は各国の使者で非常に賑わった。

ここでその中の一人斉国の上大夫晏嬰子平仲を取り上げてみよう。
ある日彼が景公の命を受けて修好を図るために楚国へ来ることになつた。

靈王は大夫たちにたずねた。

「晏平仲は背丈は五尺に満たないがその賢名はで諸侯に知られた男だと聞いている。今わが国は最強を誇っている時だから彼にひとつ恥をかかせて楚の威を見せつけてやりたいと思うのだが誰かいい案は無いか」
太宰遽啓強がそつと靈王に言った。

「晏平仲は応対が上手ですから一度だけでやつけるのは難しいと思われます。これこれのように・・・すれば如何でしょうか」

靈王はそれを聞いてはくそ笑んだ。遽啓強は夜間に郢城の東門の傍らに五尺そこそこの小さな穴のような門を作らせ、守衛に指示しておいた。

「斉の使者が来たら城門は閉めておき、この門から入城させよ」
まもなく晏嬰がぼろの毛皮の服を着て瘦せ馬の輕車に乗って東門へ

やつて来た。見ると城門は閉まっている。御者に守衛を呼ばせて案内を請うた。守衛は横の小門を指差して、

「大夫殿、あなた様の大ききでしたらこの小門でいいでしょう、十分余裕があります。何も門を開く必要はないでしょう」

「これは犬の穴で、人が出入りする所ではありませんね。犬の国へ来た使者でしたら犬の穴を通してやつて下さい。人の国へ来た使者には人の門を通すべきでしょう」

守衛は急いで靈王にその話を報告した。

「彼をからかってやろうと思つたが、逆にからかわれてしまったな」

靈王は急いで東門を開けて招き入れるよう命じた。晏子は郢都を觀察して城郭は堅固であり、町は繁華だし、土地も人民もなかなかのものでやはり江南の大国であると感じた。

楚の地をどのように見ていたか、宋の学士蘇東坡（蘇軾）に楚を歌つた詩がある⁹¹。

遊覽して三峡を過ぎれば 楚の川 尽く流れ平らかなり¹¹¹¹¹¹

北の客も南の客も共に親しみ 呉船蜀船入り交じる

江は平地に入りて野を二分 風は白砂を巻上げる

楚興亡の意を問わば 荊州城古来二重の構造にて堅固なり

晏嬰が町の様子に見とれていると突然街の方から二台の馬車がやつてきた。車には晏子の貧弱な体とは比較にならない、威風堂々とした体軀で鮮やかな甲冑をつけ手には大弓長戟を持ち天神のような男が乗つて

いて、王命により迎えに来たという。

「今日は修好のために来たのであつて宣戦布告のために来たものではありませんから、あなた方武士の出番ではありません」

と叱つて道を開けさせ、そのまま朝門に入ろうとすると、朝門外に十数人の見るからに文質彬彬とした立派な人々が正装して両サイドに並んでいた。晏子はこれは楚国の然るべき人々だとわかり急いで車を下りた。彼らと一人ひとり顔を合わせ、その後彼らと一緒に立つて楚王への朝見を待った。

この時、列の最後部の人が口を開いた。

「大夫は夷維の人、晏平仲殿ではありませんか」

闕韋龜の子闕成然であり官職は郊尹である。

「さようでございます。何か御用でございますようか」

「齊国は姜太公が封じられた国で兵力は秦楚に匹敵し、財貨は魯衛に相当するとお聞きしています。それなのになぜ桓公が覇を称えられた後、寡冑が相次ぎ、また宋や晋と争い、結果現在では朝に晋、暮れには楚にという節操無く走り回り、殆ど安らぎの時が無いような事になったのでしょうか。今の齊公が才覚において桓公に劣る事はないでしょうし、平仲殿の才が管仲に及ばないという事も無いと思います。どうして君臣力を合わせて大いに経綸を行い昔のように国を興そうとしないで、大国に臣従なさるのか。この点がどうしても理解できませんのでお教え頂きたいのです」

「昔から時を知つて行動する人を俊傑といい、変化に対応できる人を英豪といいます。周の綱紀が乱れてより五覇が次々と現れました。齊、晋は中原に、秦は西戎に、楚は南蛮にそれぞれ覇を称えました。すぐれ

⁹¹ 蘇東坡が長江を現四川富眉山から下て来て三峡を出た時に詠た『荊州十峯のうち第一首』

た君主が次々現れても運もあります。晋文公後も武運は続かず、強国の秦穆公もその子孫は脆弱で覇権を維持できませんでした。楚国自身、庄王の後やはりしばしば晋、呉の侮辱を受けてきてはいませんか。栄枯盛衰は斉国だけの事ではありません。わが主君は天運の盛衰を知っていますので時が来れば変化に対応すべく常時軍事訓練には力を入れております。今日わたしが表敬のために参ったのは隣国同士の礼によるものです。どうしてこれを臣従と言われるのでしょうか。あなたの祖先の子文殿は楚国の名臣で時を知り変化に明るい方でしたが、そのような見識の無い話をなさるとはあなたはあの方の子孫ではないのでしょうか」

闕成然は大恥をかって首を縮めて引下った。

又直ぐに左の列の一人が詰問した。

「平仲殿は変化に即応できると自負しておられる。しかし崔杼、慶封の事件が起こって賈辛以下多数の斉臣が義に殉じて亡くなりましたが、あなたは斉国の名家の子孫にもかかわらず賊を討伐もできず、地位を棄てることもせず、これでは名や地位を貪っているという事になりませんか」

誰かと見ると、上大夫陽匄字を子瑕という者が楚穆王の曾孫である。晏子はそれに答えた。

「大いなる節義を持つ人は小事にこだわらず、深謀遠慮の人は目下の些事にはこだわらないものです。昔より君主は社稷のために死し、臣は君主に殉ずるものだとわかれていました。先君庄公は、国家のために亡くなったではありませんから、庄公に殉じられた方は個人的昵懇のためでしょう。わたしは不才ではありますが庄公から寵信を受けたからと言って死んで名譽を手に入れようとは思いません。国難に遭遇した時、能

力ある臣下は残って国家の将来を考え、能無き者は去るべしです。わたしが去らなかつたのは、新君を定め、宗家の祀りを絶やさないためで、地位に恋々としたわけではありません。人々がみな死んだり逃げたりしたら国家は誰が守るのですか。さらに申しますと、弑逆事件はこの国にもあることです。お聞きしますが楚国の大夫の皆様方それぞれ自分が死力を尽くして賊を討つたといえますか」

これは暗に楚熊虔（霊王）の弑逆事件を指している。諸臣は逆に熊虔を君主に仰いだのであり、人を責める事はできても自分を責める事はできず、子瑕は反論できなかつた。

しばらくすると又、右の列の一人が詰問した。

「平仲殿、あなたは新君を定め宗家の祀りを絶やさないためと言われましたが、ちよつと言い過ぎではないでしょうか。崔、慶同盟の時も欒高、陳鮑と割れた時も、あなたは特に策略を提案するでもなく、どつちつかずで高みの見物をし、他力本願で勝つた方につく態度でしたが、尽心報国とはそういう事を言うのですか」

右尹の鄭丹字は子革である。晏嬰は笑いながら彼に答えた。

「あなたは物事の一面しか見ていない一を知って二を知らない。崔、慶同盟の時わたしはどちらにも付いていませんし、四家が争つた時も君主の傍にいました。柔もよし剛もよし臨機応変の態度で目的はただ一つ、君主と国家を守るという事でした。これが、いわゆる罔目八目、傍觀者は客觀的に物事が善く見えるということではないでしょうか」

左の列から又一人出てきた。太宰の遽啓強である。

「大丈夫は君主が遭遇している難局を救うためには、ある程度才略も規模も大きく鷹揚でなければなりません、お見受けしたところ平仲殿

はかなりけちではありませんか」

「あなたはどようしてわたくしがけちだと言われるのですか」

「大丈夫は名君に仕え相国しやうこくともなれば、当然衣服はさつぱりと着飾り、車もそれなりにいい物に乗り主君の恩寵を示すべきです。どようして外国へ使者として出るのに、ぼろを着て瘦せこけた馬車に乗るのですか。まさか俸給が足りないわけじゃあるまいし。あなたの毛皮の服はもう二十年も同じものだそうだし、貴家の祀の時の皿も豚の肘がのりかねるほど非常に小さいと聞いていますが、これをけちといわず何と言いますか」

晏子は手を打って笑って言った。

「あなたは何とまあ表面しか見る事のできない方ですね。わたしは相国しやうこくになつてから、父の一族、母の一族、妻の一族、それぞれみな毛皮の服を着て肉を食べ余裕ある生活をさせてもらっています。わたしのいざという時を待っている草莽そうもうの士し（在野）は七十余家あります。わたしは儉約けんやくしていても三族は余裕ある生活をしていて、わたし自身はけちのようでも群士が十分な生活をしていましたらそれこそ君恩を受け信頼されている証になるのではないのでしょうか」

答え終わると直ぐ又右の列から晏子を指して大笑いしながら言った。

「昔、成湯せいとうは背丈が九尺あつて賢王となり、子桑しそう（秦の將軍公孫枝）は力が万夫不当ゆえに名将になつたと聞いています。これからすると

十八史略：名は嬰、字は平仲、節儉力行を以て齊に重んぜらる。一狐裘三十年

豚肩豆ウツ、を掩才はた才は才、齊國之玉待ちて以て擧火する生活者、七十餘

家ありとある。斉國宰相の傍、晏嬰が一枚の狐の皮衣を三十年も着たという故

事から非常に儉約な事例を『礼記・檀弓』下「晏子」にも同じ成語がある。

成湯、殷商の開国の王湯王

昔から明君、名将はみな身体が立派だったので各々の時代に大功を立て名を後世に残す事ができました。あなたのように五尺に満たない体で、鶏一羽を絞める力も無く徒に口先だけが達者のようですが恥ずかしいとは思いませんか」

公子真の孫、囊瓦しんが字子常で楚王の車右の職にある。

晏子は鼻先で笑って答えた。

「はかりの分銅は小さくても千斤の重さに負けません。船はいくら大きくても結局水の意のままです。儻如きやうじよは体は大きかったが魯で殺されました。南宮長万なんぐうちやうまんも力では群雄を圧倒していましたが宋で殺されました。あなたは背も高く力もおありになる、おそらくこれらの人々に引けをとらないでしょう。わたしは自分の無能は良くわかっていますが、みなさまからご質問が有りましたのでお答えした迄です。得意がつてしゃべっているわけではありません」

囊瓦は返す言葉も無かった。

突然、令尹れいゐん薳罷ゐはいが見えたとの連絡があり、皆立つて拱手きやうしゆをして待った。伍挙ごきよが丁寧ていねいに晏嬰あんゑいに入朝するよう案内し、大夫達を振返つて言った。

「平仲殿は斉国の賢士でいらつしやる。弁舌で勝てる訳がないではないか」

まもなく靈王が昇殿し、伍挙が晏嬰を紹介した。

靈王はいきなり晏子に言った。

「斉国には人材がいらないのかね」

「斉国には息を吐けば雲になるほど、汗を振払えば雨になるほど人材は豊富で、歩けば肩が触れるほどでございます」

「じゃ、なぜこんな小者を修好の使者によこすのだ」

「わが国には使者を出す場合の規則がございまして、賢人は賢国へ不肖の者は不肖の国へ、大人物は大国へ小人物は小国へ出す事になります。臣は小人物で最も不肖の者ですから楚の国へ参りました」

楚王は発言を恥じ、思いもよらない返事に心中驚いた。

使者の公用が終わった頃ちようど、城外の人がみかんを献上してきた。

靈王は先ず一個晏嬰に与えようと彼はそれを皮ごと食べた。

「斉国の人はみかんを食ったことが無いとみえる、どうして皮をむかないんだ」

楚王は鬼の首をとったように手を打って大笑いした。晏嬰は居住まいを正して答えた。

「君主から賜ったものであれば瓜や桃、みかんの皮はむかないものだと聞かされております。ただいま大王よりみかんを賜りわが君主に対すると同様に致したまででございます。大王が皮をむけとおっしゃらなければどうして皮を捨てることができましようか」

靈王はこれを聞き思わず尊敬の念を起し彼に席を与え酒の用意をさせた。

しばらくして、三四人の武士が一人の犯罪人を引張って客殿の階下を通り過ぎようとした。靈王はそれを見てたずねた。

「その者は何処の者か」

「斉の者です」

「何を犯したのだ」

「窃盗です」

靈王は振り向いて晏子に聞いた。

「斉国の人は物を盗む習慣があるのかね」

晏子はこれが悪ふざけだと見抜き、わざと大仰に頓首（叩頭）して、

「江南の橘は江北へ行くところになると申します。これは気象や水

土壌が違っているからです。斉国の者が斉に生まれて国では盗みをしなのに楚国へ来ると盗むというのは、楚国の土地柄のせいで斉国とは何の関係もございません」

と答えると靈王はしばらく沈黙の後、

「わしは本当はあなたに恥をかかそうとしてかえって恥をかくことになってしまいました」

と言つて、その後は礼を以つて厚くもてなし斉へ帰した。

斉景公は晏嬰が楚で斉国の威厳を高めた功績を大変喜び、上相に任じ、同時に千金の毛皮の服を与え、封地を増しようとしたが晏子は一切断つた。また、晏子の屋敷を広げようとしたが彼はこれも固く断つた。

ある日景公が晏子の家へ行つた時、彼の妻を見て、

「この方が卿の奥方ですか」

「そうです」

「何とこんな老人ですか。わしに若くてきれいな愛娘がいる。卿に嫁にもらつてもらいたいのですが」

「若い時に嫁し年を経れば、互いに頼れるようになります。確かに妻は老いていますが、長年互いに助け合つて参りました。とても彼女を棄て去る気持ちにはなれません」

景公はこれ聞いて感心し、

「妻でさえこんな大切にしておいて棄てないくらいだから、主君に対しては言を待たないな」

と言つてこの後、彼をますます深く信頼し大黒柱として国を任せる事

になった。

今回はここまで、後は次回のお楽しみ。

第七十回

楚平王 三兄を殺して即位

晋昭公 覇主を自指し斉魯を脅す

周景王十二年（紀元前五三三年）、楚靈王は陳、蔡二国を滅ぼし、さらに許、胡、沈、道、房、申の小国六ヶ国を全て荊山（現湖北省南漳県西）に移動させた。人々は離散し怨嗟の声は道々に溢れた。靈王は周に代わって天下を取ることは容易だと考え、自分は毎日章華宮で酒を飲み、周へ使者を派遣して楚国の鎮めのため九鼎を要求しようとした。

右尹の鄭丹は靈王を諫めて言った。

「現在、斉と晋が強国ですし、呉越もまだ臣服しておりません。たとえ周王室が楚を畏れたとしても諸侯がおとなしくしていません。しょう」

靈王は憤然と、

「そうだ、忘れるところだった、以前申で諸侯を集めたとき、徐の国主を赦してやって一緒に呉討伐をする事になっていたのに、その後やつは約束を破り呉に付いてしまった。親征して先ず徐を平らげ、勢いに乗って呉を討てば、長江より東は皆楚のもので、天下の半分はわしの物だ」と言い、薳罷と蔡洵に世子禄の補佐をさせ留守を命じ、自ら盛大な閭兵式を行って東へ進発し、州来（現安徽省鳳凰一帯）を攻め潁水の尾（潁水が淮水に合流する地）に達した。司馬督に戦車三百輛をあずけ徐城を包囲攻撃させ、自分は大軍とともに乾谿（現安徽省亳州市東）に駐屯し後詰となった。

時に周靈王十五年（紀元前五三〇年）、楚靈王十一年の事である。

その冬、大雪になって積雪は三尺にも達した。その様子が詩にある。

雪雲が空を蔽い風は怒号 雪片飛来し鷲毛の如し

忽然として群峰は青色を失い 一つの間に公平地に銀濤生ず

千樹の寒巢に鳥雀硬直し 紅炬も効かず重ね着毛皮も猶寒し

この時軍士は更に哀れなり 鎧甲凍りつき着るあたわす

「以前秦が贈つて来た復陶裘と翠羽被（共に防寒用品）を取つて来てくれ」

靈王が言うに付人はすぐに取り寄せた。それを羽織り、頭には皮の帽子、足には豹の毛皮靴を履き鞭を持つて、テントを出て目前の雪を見た。右尹鄭丹がやってきたので靈王は彼に敬意を払い帽子を脱ぎ鞭を下に置いて立つて話をしている内に急に冷えてきて、思わず「こりや寒い」と叫んだ。これを聞いて鄭丹は靈王に進言した。

「王は何重にも毛皮を着用されて豹の毛皮の靴をお履きになり虎革の帳の中におられますがそれでも寒く感じておられます。兵士たちは単衣の服を着ているだけで、足ははだし冷たい甲冑を被り日夜風雪の中で武器を手に立っていますので、その苦しみは極限に達しています。一度都にお戻りになり徐討伐軍を召還させ、来春暖かくなつて再度出兵することになれば、王のためにも兵士のためにも両全ではないでしょうか」

「卿の言う通りだ。しかしわしは軍を動かして以来、向かうところ敵なしだった。近いうちに司馬から捷報が届くはずだが」

「徐は陳、蔡とは違います。陳、蔡は楚に近く長らくわが軍門にいましたが、徐は楚から東北に三千余里も離れていて、呉に軸足があります。王が徐討伐にこだわつて長く国外に出ておられると三軍は疲れと寒さに苦しみ、万一国内で謀叛でも起これば兵士たちは離心し王は危険な状態

に陥る恐れがあります」

鄭丹の必死の説得にもかかわらず靈王は笑つて言った。

「穿封戌に陳を、葉疾に蔡を守らせ、伍辛には太子と共に都の留守をさせている。この三人は楚の三重鎮だ。何の心配があると申すのだ」

そう言うに、靈王は左史倚相（いそう）を呼んで鄭丹に、

「この者は非常に博識で、およそ『三墳』『五典』『八索』『九丘』で通曉しないものはない。子革（しかく）、鄭丹、よくこの者の意見を聞くよう」と紹介した。しかし鄭丹は王に対して言った。「王は買いかぶつておられます。昔、周穆王が八頭の駿馬（きうば）にのり天下を周遊した時、祭公謀父（さいこうぼうふ）（周公の孫）が『祈招』の詩を作り、王の慢心を諫めました。穆王は諫言をお聴きになつて帰国され禍を免れました。臣は以前この詩について倚相にたずねましたが彼は知りませんでした。本朝の知識さえ不十分なのにどうしてもつと広範囲の能力が有ると言えましようか」

「『祈招』の詩とはどういうのだ。朗誦できるかね」

「やつてみましょう。詩はこういふのです」

祈招惜惜（いんじん）たり その任務は天子恩徳の教化なり

我を思ふ王の寛容 玉の如く金の如く

民を慈しむ心 酔飽の一点もなき

「その詩はどう解釈するのかね」

※これらは皆古書籍の書名『三墳』伏犧 神農 黃帝の書『五典』少昊 顓頊 高辛 唐 虞の書『八索』八卦『九丘』九州の誌

※穆王八駿は、周穆王の伝説上の八頭の駿馬。八駿は教説あるが『拾遺記』では足が地つかぬ程速く「絶地、鼻を追越す（翻羽）、一夜に千里走る（奔霄）ほんしょう、自の影を追越す（越影、光より速）、蹕輝ゆきと超光、雲を翔る（騰霧）とうむ、翼がある（挟翼）の八頭といふ（『拾遺記』は中国東晋の王嘉が撰じた志怪小説集

「憎憎とは穏やかな容貌のことです。祈父は兵を司る官で、平和と幸福を大切に、天子の恩徳が玉のように堅く、金のように重き事を民に照覽せしめます。そこで王は民力を大切にして度を越さず腹一杯満ち足りる前に適度に引揚げるような心がけた、という意味です」

靈王はそれが自分の事を言っているかわかり何も言わず、暫くして、

「卿よ、暫時退つていてくれないか、わしに少し考えさせてくれ」

と言つて鄭丹を退らせ、その夜靈王は撤退する氣になった。

ところが突然諜報の知らせが届いた。

「司馬督が徐軍に連勝し、徐を完全に包囲しました」

というのである。靈王は氣が變つた。

「よし、徐は滅ぼすせるな」

と言つて結局乾谿に留まる事に決めた。越冬し春が過ぎた。毎日乾谿で狩りを楽しみ、地元の人々を使つて行宮を作らせ、帰国のことは念頭から消えてしまった。

この頃蔡の大夫帰生の子朝呉は、蔡公の棄疾に仕え日夜蔡国の復興を考えて家宰の觀従と話し合つていた。觀従は朝呉に次のように進言した。

「楚王はみだりに軍を率いて遠征し、長らく国を空けたままで、国内は空つぽで外は兵士たちの怨嗟で満ちています。今こそ天が楚を滅ぼそうとしている時です。この機会を逸したらもう蔡の再興はありません」

「何か言い案があるか」

「逆賊度（靈王）の即位には三公子みな内心では不服でしたが独力では何ともならなかったのです。蔡公（棄疾）の命と言つて子干、子皙の二公子を呼び寄せて、これこれこの様に・・・すれば楚城は手に入りま

す。楚城を取れば逆賊度は巢穴を失ひ絶体絶命です。新しい楚王の世になれば蔡の再興は可能です」

朝呉はその案に基づき、さっそく觀従に晋へ行き子干に、鄭へ行き子皙に、それぞれに偽の蔡公の召喚命令を持たせてやり、

「蔡公は、陳と蔡の軍を指揮して、お二人を楚へお迎えし逆賊度を除こうと考えておられます」

と伝えた。二人の公子は非常に喜び、揃つて蔡郊外まで棄疾に会いにやつて来た。觀従は先ず朝呉に報告した。朝呉は郊外まで出て行つて二人を迎えて言つた。

「これは実は蔡公の命令ではありません。しかし楚城はとれます」

二人は不安な顔色になった。

朝呉は二人に次のように計画内容を説明した。

「王は勝手に国を離れて歸つて来ず、国は空つぽで何の防備もされていません。しかも蔡洵は父親を殺された恨みを持ち続けています。郊尹の闢成然（蔡公と親交があります）から蔡公が事を起せば必ず内応します。穿封戌は陳に封じられているとはいへ王には心服していません。蔡公が呼寄せたら必ずやつて来ます。陳と蔡の軍が空つぽの楚を襲撃すれば、袋の中の物を取るように簡単です。ご心配はご無用です」

朝呉の分析が明解なので子干、子皙の両公子はそれを聞いて安心した。朝呉はすぐに二人の公子と血をすすり、先王鄭叔の仇を討つ同盟を誓つた。朝呉はちよつと小細工をして報復の誓いを話しながら二人の注意をそらして盟約書の署名の最初に蔡公の名を書き込んだ。即ち蔡公が二公子と一緒に靈王を討つという誓約書にしたのである。これを誓約の方式に従つて犠牲と一緒に穴を掘つて収め、そのあと二人を連れて蔡城に入

った。

蔡公はちようど朝食中だったが突然二公子が現れ、余りに唐突だったので驚いて急いで避難しようとした。

「何処へ行くこうとなさるのです」

朝呉が蔡公の袂を取って言った。子干、子皙の二公子は蔡公を抱いて大声で泣きながら、

「度は無道じゃないか。兄の先王を弑し甥も殺し我われを国外に追放したんだ。わしらはそなたの力を借りて兄の仇を討つために来たんだ。成功したらそなたに王になつてもらおうと思つてゐる」

と言つた。棄疾は突然の話で動揺していい案が浮かばない。取り敢えず、

「まあちよつと待つて下さい。ゆっくり話し合おうじゃないですか」
と言つと、朝呉は仲を取つて、

「お二人は朝早く着かれお腹をすかせておられます。ご兄弟二一緒に朝食をお取りになつたら如何です」

と言ひ、朝呉は二人が食事を終わると次を急がせ、群集に対し大声で発表した。

「蔡公は二公子をお呼びになり二一緒に大事を決起される事になった。すでに城外で盟約を結ばれ二公子に先行して楚に攻入つて頂く事にした」

棄疾はそんな事言つていないと引き止めようとしたが、

「城外での盟約の犠牲と一緒に収めた棄疾殿の署名が入つた盟約書は皆に見られています。もうくずくずおつしやつている暇はありません、とにかく早く事を成就させ富貴を手にはされるのが上策です」

朝呉はそう言つてすぐまた蔡の人々に発表した。

「楚王は無道で、我われの蔡國を滅ぼしてしまつたが、今蔡公はわが蔡國の再興を許すとおつしやつておられる。我われは皆蔡の人間だ、蔡の宗廟が亡くなるのを見過ごす事はできない。二人の公子の後に続かれる蔡公に随つて楚に攻入ろうじゃないか」

蔡の人々はこの呼びかけを聞くと、直ちにそれぞれ武器を手にして蔡公の屋敷の門前に集まつた。

「人心はすでに一つになっています。急いで彼らを慰撫してお使いください。遅れますと逆に大変なことになります」

「そなたはわしを虎の背に乗せてしまつたな。これからどうする」

「公子お二人はまだ郊外におられますから急いでこれらの軍と蔡軍の総力と併合して下さい。わたしは陳公を説得に参り殿の軍に合流させます」

棄疾は朝呉の意見に従ひ蔡軍に子干、子皙の各軍を併合させた。

朝呉は陳公を説得させるために觀従に夜をかけて陳へ走らせた。途中陳の夏囓に遇つた。夏囓は夏微舒の曾孫で、日頃から觀従は彼と親しいので蔡復國の事を話した。夏囓は、

「わたしは現在陳公に仕えています、わたしも陳を再興させたいと思います。今陳公は病に倒れすでに起きられない状態です。行かれてもお会いできないでしょう。あなたは先に蔡にお帰り下さい。わたしがすぐに陳軍を率いてまいります」

觀従は帰つて蔡公に報告した。朝呉は更に蔡涓に内応するよう密書を書いた。蔡公は家臣の須務牟を先鋒、史卑を副將とし、觀従に案内役を命じ精兵をつけて先行させた。ちようど陳の夏囓も陳軍を率いてやつて

来た。

「陳公穿封戌は亡くなりましたが、大義を以って陳の国人を説得し救援に駆けつけて参りました」

夏囙の話聞き蔡公は大変喜んで、朝呉に蔡軍を率いて右軍、夏囙に陳軍を率いて左軍として、

「これは奇襲だからスピードが大切だ」

と言って星夜郢都に向かって進発した。蔡洧は蔡公の軍が来ると聞き、事前に腹心を城から出しそと迎えにやった。鬬成然は郊外まで蔡公を迎えた。令尹薳罷だけは兵を集めて守備を固めようとしたが、蔡洧が蔡軍のために城門を開き、先ず須務牟が郢城に入城して大声で叫んだ。

「蔡公は乾谿で楚王を討取った。大軍がすでに近くまで帰って来ているぞ」

国人は靈王の無道を憎んでいて蔡公が王になるのを望んでいたのも誰も抵抗する者はいない。薳罷は世子禄（靈王の子）を奉じて国外へ出奔しようと考えたが須務牟の兵が王宮を包囲していたので入ることができず、帰宅して自刎して果てた。胡曾先生は詩を残している。

自慢の私党も 思いもよらず次第に寝返る

同じ憤死に黄泉で鄭敖に合わせる顔も無からん

（鄭敖＝靈王に王位を篡奪され憤死した兄の前楚王熊麇）

蔡公の大軍はその後引き続き到着し、王宮を攻めた。世子禄、公子罷はともに殺された。蔡公は王宮を掃除させ、子干を王に奉戴しようとした。子干はそれを断わったが、

「長幼の序は無視できません」

と蔡公が言うので子干は即位し、子皙を令尹にし、蔡公を司馬に任じ

た。朝呉は密かに蔡公に聞いた。

「殿は義拳の推進者ですが、何故王位をお譲りになったのですか」

「靈王は現在乾谿に健在で国の先行きは未だ定まっていなない。しかも二人の兄を飛び越して自ら王になったりすれば、人は何を言うかわからないじゃないか」

朝呉は蔡公の気持ちを察し一計を提案した。

「楚王の軍隊は遠征が非常に長くなっていますのできつとみな帰心矢の如しだと思います。然るべき者を遣って利害を説いて誘えば、恐らく逃出して軍は自壊します。その時大軍で攻め込めば、王を生捕る事ができるでしょう」

蔡公はその案に賛成した。そこで観従を乾谿に遣り、

「蔡公はすでに楚に入城し王の二子を殺し子干殿を王に奉戴した。今、新王の命令が下り、帰国が早かった者には旧地を与え、遅かった者は鼻を削り、楚王に追従した者はその罪を三族に及ぼし、楚王に飲食を献上した者も同罪とする、と発表された」

と士卒に吹聴した。兵士はこれを聞くと直ぐにその大半が逃げ散ってしまった。

靈王は乾谿の行宮の楼台で相変わず酔払って寝ていた。鄭丹は慌ててこの状況を報告した。靈王は二人の子が殺されたと聞き地に伏して大声で泣いた。

「軍心はすでに離れています。王は速やかに帰還願います」と鄭旦がいうと、靈王は涙を拭きながらしみじみ言った。

「人はみなわしと同じように子どもが可愛いのだろうか」

「鳥獣でさえ子どもを可愛がっています、人ならばなおさらです」

「わしはこれまでたくさんの子を殺めてきたので、結局皆にわしの子を殺されてしまった。自業自得だ」

やがて物見からの報告があった。

「新王は蔡公を大将に任命し、闕成然に陳、蔡の二国の軍をあずけ、乾谿に攻めて来ています」

霊王は怒って、

「わしは成然には優遇してきたはずだ。まさかやつが謀叛に加わるとは。とにかく手を束ねて捕えられるより死ぬ前に一戦してやろうじやないか」

と言いつ、駐屯地を引揚げ、夏口から漢水を上り襄州から郢都を攻めようとした。しかし途中次々と士卒が逃亡し、霊王自ら剣を抜いて数人を斬り殺したが逃亡は止まらなかった。

訾梁（橋の名 現河南省信陽）に近づいた頃には従者はたった百人しかいなかった。

「全ては終わったな」

霊王はそう言つて衣冠を脱ぎ岸の柳に懸けた。

「もう少し郢都の近郊まで行つて国人の向背状況を見られたら如何でしょうか」

と鄭丹が言つた。

「国人は皆敵になっている。いまさら何を調べるのだ」

「駄目でしたら他国へ出奔し軍を借り巻土重来を図つては如何です」
「わしの面倒をみる諸侯などいやしな。よほどの天運がなければ恥

をかきに行くだけだ」

鄭丹はそれを聞いてもう救う方法が無いと判断し、新政権に罪を問われるのを恐れ倚相とともに郢都に逃げ帰り投降した。

霊王は鄭丹がいなくなりどうしようもなく、釐沢（草原と沼沢）を徘徊している間に従者は全て逃げてしまった。一人ぼっちになり腹が減つて村に食べ物求めようにも道がわからない。村人も逃げた兵士のうわさから彼が霊王だとわかつていても、新王の敵命があるので、皆怖がつて誰も彼に近づこうとしない。霊王は三日間飲まず食わずで道端に倒れこみ、動く事もできずただ目のみ開いて苦しみながら知つた者が通りがかるのを待っていた。ほどなく救いの星が一人やってきた。彼はもと宮中の守衛で宦官の畴という。霊王は最後の力を振り絞つて、

「畴よ、助けてくれ」

と叫んだ。涓人（宮中の雑用係 宦官が多い）畴は楚王が呼んでいるのが分かると反射的に面前で叩頭の挨拶をしてしまった。

「わしは三日間飲まず食わずだ、何か食い物を捜してきてくれないか」と霊王に頼まれた。

「人々は新王の命令を恐れていますので、何処へ行つても食物を手に入れることはできないんです」

霊王はため息をついて畴を近くに坐らせ彼の膝を枕にしてしばらく眠つた。畴は霊王が寝入るのを待つて土くれを自分の膝に置き換えて逃げて行つてしまった。

霊王は目を覚まし畴を呼んだが返事がない。枕元を探つてみたが枕は土くれに変わっていた。霊王は思わず天を仰いで泣いたが泣き声に力がな

そこへ又一人小型の馬車でやって来た。靈王の声がしたような気がしたので車を下りて見るとやはり靈王ではないか。

「どうしてこんなところにおられるのですか」

急いで地に拝してたずねると、靈王は满面涙でやつと口を開いた。

「卿はどなたですか」

「臣は申亥と申します。芋邑の申無芋の息子でございます。父は二度も王に罪を犯しましたが、王は二度ともお赦し下さいました。父は臨終の時、『王には二度も不殺のご恩を受けている、将来もし王に難儀が起った場合は身を挺して随従せよ』と臣に申しました。申はその言葉をしつかりと心に懷き忘れた事がございません。最近郢都が破れ、子干殿が即位されたと聞き、星夜を駆けて乾谿にまいりました。道々お探ししながら此処まで参りやつと天の助けでお会いできました。現在どこも蔡公の一党ばかりで行く所がございません。臣の家が此処から直ぐの棘村という所にあります。王にはそこに暫く避難されその後の事をご相談いたしましょう」

そう言つて申亥は跪いて王に糲をすすめた。王は無理をして吞み込みやつと立ち上がった。王を助けて車に乗せ棘村へ向かった。靈王が住んでいた章華台は、建物は高く奥深い宮殿であつたが、今見る申亥の家は農家で、門も戸も粗末で頭を下げて通らなければならぬ。靈王は非常に惨めになり涙が止まらなかつた。

「どうぞお寛ぎください。此処は人里はなれたところですから人の往来はございません。数日お住まいください。都の状況を調べて参りますからそれから進退を考えましょう」

申亥はがそう言うが靈王は悲しみの余り声も出ない。飲食を進めるが

靈王はただ泣くばかりで口をつけようとしなかつた。亥は自分の二人の娘を寝所に提供して王を喜ばせようとしたが、王は衣の帯を解く事もなく、一夜悲嘆に泣きくれているが五更の頃その声が聞えなくなつたと思つたら、靈王は寝所で自ら縊死して果てていた。胡曾先生は詩に言う。

章華宮枯草に没し 見る者靈王の昔日の贅を笑う

台下の土未だ干かぬに簫管の音絶え 哀れ身は野人の家に死す

申亥は靈王の死を知り非常に悲しみ自ら納棺埋葬したが、二人の娘も殺して殉葬した。後世の人は申亥が靈王の恩に感じて二人の娘を殉葬した事はやりすぎではないかと批判し詩に詠う。

章華の霸業既に零落 無辜の（罪なき）二女を何故墓に伴なわず
痛恨なり暴君死して 余殃（禍）女性に及ぶとは

蔡公は闕成然、朝呉、夏嚙等の諸将を率い靈王を追つて乾谿へ向かい、途中鄭丹、倚相に出会つた。二人は、楚王の今までの状況を話した。

「今は侍衛も皆逃げ散つてしまつて、ご自分も生きる意欲を失つていました。わたしたちは見るに耐えず逃げてまいつた次第であります」

「そなたたちこれから何処へ行くつもりだ」

「国へ帰るつもりです」

「わしと一緒に楚王の行方を確認してから帰つたらどうだ」

蔡公は大軍を率いて靈王の行方をたずね警梁までやって来たが全く手がかりが掴めない。或る村人がそれが蔡公だとわかつて、

「三日前に岸の柳の木に懸かつていました」

と言つて楚王の衣冠を献上してきた。

「そなた王が生きているのか死んだのか知らないか」

と聞いてみたが誰も知らないというので、その衣冠を受取つて重賞を与えて返した。蔡公は更に捜査を続けようとしたが朝呉は、

「楚王が衣冠を棄てたということはその勢力は殆ど無く、きつと溝にでも落ちて死んだのでしょう。これ以上究明の必要はないと思います。

むしろ子干殿が次々命令を出して民心を掴んでしましますと事が面倒になります」

「しからばどうするか」

「楚王が国外にいて国内の連中はまだその行方を知りません。民心が定まっていない今、数十人の兵に、蔡公の兵は敗れ楚王の大軍がまもなくやってくる、と城内のあちこちで噂を立てさせておいて、鬪成然に帰国させて子干殿に『これこれで大変な事態になっています』と脅しの報告をさせます。子干、子哲の両公子はいずれも懦弱で謀略がありませんからこれを聞けば驚いて自尽してしまうでしょう。殿は軍を整えてゆつくりと、帰国なされば、穏やかに王位にお就きになれ、枕を高くしてご安心いただけます」

蔡公はその案に従い、観従に百人ほどの兵を与え敗残兵に扮して郢都へ帰らせた。

「蔡公は敗れて殺された、もう直ぐ楚王の大軍が後からやってくるぞ」と、城のあちこちでデマを撒き散らすと都の人々は信じて驚き慌てた。しばらくして鬪成然が帰ってきて同じような事を言うのでますます都中がそれを信じた。

「楚王の怒りはものすごく、勝手に即位なさった罪を、蔡国の般や斉国の慶封と同じように追及するおつしやっています。殿も辱めをお受け

ならないように早くご自分のお考えをお決めになった方がいいでしょう。臣はすぐ逃げるつもりです」

鬪成然は子干にそう報告するなり、慌てて狂ったように出て行った。子干は子哲を呼んで事情を説明して、

「朝呉のために道を誤つてしまった」

と兄弟抱き合つて泣いた。宮殿の外ではすでに楚王が入城したと言つて騒いでいる。これを聞いて子哲は先に佩剣を抜き自刎した。子干も慌てて剣をとつて自殺した。宦官や宮女は慌てふためき逃げ回る者、自殺する者、泣き叫ぶ者で宮中は大混乱となつた。

鬪成然は兵を率いて再入城し、死体を片付け百官を率いて蔡公を迎えた。都の人々は事情が分からず入城してくるのは靈王だと思つていたが、入城して来た人が正に蔡公であつたので、やつといういろいろな前後の情報がみな蔡公の計略から出たものだと思つた。

蔡公は入城して即位し名を熊居と改めた。これが楚の平王である。昔共王が壁の上で礼拝した者を君主にすると神に祈つたことが、今正に実現した事になる。

しかし国人は靈王が死んだとは知らないからやはり王が帰つて来たというデマが飛び交い人心は落ち着かなかつた。平王は観従と密かに謀り前楚王の衣冠をつけた死体を漢水の河辺の上流に投げ捨て、下流に流し、前王を見つけたと報告させ魯梁に鬪成然を派遣して丁重且つ莊嚴に葬り、靈王の諡号を贈つた。同時に人々を安心させる内容の立札を立てやつと人心は収まった。その後三年間、平王は靈王の死体を引き続き捜させ、申亥が埋葬した場所を訴え出たので遺体を移して改葬しこの件は落着いた。

一方司馬督らは徐を長期間包囲しながら落せなかつたので、靈王の誅殺を恐れて帰国できず密かに徐に通じていた。靈王軍が壊滅して王が殺されたと聞き包囲を解いて帰国の途についた。しかし途中豫章で呉の公子光の襲撃に遭って敗れ、司馬督と三百乗の軍はすべて囚われてしまった。光は勝ちに乘じて楚の州来邑を手に入れた。これも結局靈王の無道のなせる結果である。

平王は楚の人々を集め、子干、子皙を公子の礼を以って葬儀を行った。その後、功にしたがつて大々的に人事異動を行い、鬬成然字瑕を令尹に、陽匄を左尹にした。薳掩と伯州犁の冤罪を思いやつて犁の子卻宛を右尹に封じ、掩の弟遠射、遠越を共に大夫に任じた。朝呉、夏啗、蔡洧をそれぞれ下大夫に任じ、また公子魴は勇敢に戦ったという事で司馬に任じた。このとき伍挙はすでに亡くなっており、彼の生前の直諫の功を感じて、その子伍奢を連尹しんいんに任じ『連公』と呼び、奢の子伍尚を棠たうに封じ棠幸とし『棠君』と呼んだ。その他遠啓強、鄭丹たちは原職に復帰させ、観従は希望して卜尹になった。百官みな感謝したが、ただ、朝呉と蔡洧は感謝せず官を辞して去ろうとした。平王が理由をたずねると、二人は答えた。

「我々が王の楚襲撃を補佐申し上げたのは蔡国を復興させたいが為でありました。今殿は大業成りまして大王になられました、我われの蔡の先祖の祀りの事はお考えになっていただけません。これこのまま大王の朝廷お仕えしたのでは蔡の人たちに面目が立ちません。靈王は貪むさぼつて蔡、陳を取り込んで人心を失いましたが、王はそうではないという

事で人々は喜んで王に服したはずです。靈王を反面教師にされ、陳、蔡を再興させていただければありがたき幸せに存じます」

平王は承知し、人を派遣して陳と蔡の君主の子孫をたずねさせた。まもなく陳の世子偃師の子呉と、蔡の世子有の子廬を採し出し、太史に命じ吉日を選んで、呉を陳侯に、廬を蔡侯に封じた。すなわち陳惠公、蔡平公でありそれぞれ帰国させて宗廟を祀らせた。朝呉と蔡洧は、蔡平公廬とともに蔡国へ帰り、夏啗は陳惠公呉を補佐し陳国へ帰って行った。従軍してきた陳、蔡の兵達にも十分ねぎらいそれぞれの主君に随い帰国させた。平王は靈王が以前、陳、蔡から略奪してきていた宝器をそれぞれに返してやり、靈王に強制的に荊山に移された小国六カ国の人々もそれぞれ元の土地に返してやった。枯木が芽吹いたように、朽ちた骨が息を吹き返したように各国の君民の歓びの声は轟き平王の徳を称えて止まなかつた。

周景王十六年（紀元前五二年）の事である。髡翁の詩がある。

結局民財尽して后主を定め 二国の再興許したる

奪いし物も返還し ただ靈王はその悪名を残せしのみ

平王の長子は名を建けん、字は子木といい、彼の母親は蔡国の鄖陽うんやうに封じられた人の女（蔡姬、きである。この時すでに成人していたので世子せいしに立て連尹れんいん伍奢を太師にした。また費無極ひむぎくという男がいた。昔から平王に

蔡姬 平王が蔡公として蔡に封じられた時家出をして蔡公のもと 駆け込んだ女性で建を生んだ。

費無極 史記伍子胥列伝は費無忌ひむきである。（忌も極も四声は異なりが音は同じ）

仕え阿諛迎合が得意だが平王は彼を特別可愛がり大夫に任じた。無極が世子の世話をしたいと願い出たので世子の少師にし、奮揚を東宮の司馬にした。

平王は即位して四囲が安定し穏やかになると色事や不健全な遊びに耽るようになった。そのため呉が州来を侵略しても王は報復の気がない。無極は世子の少師だが常には平王の側で淫樂に付き合っている。世子建は彼の諂う態度を嫌って疎外した。無極は令尹の闕成然が功を頼み傲慢になつていたので讒言して殺し、陽句を令尹にした。世子は事有る毎に闕成然が冤罪だということで無極は太子建が自分に不満を抱いているのを知り危険を感じし太子との間に暗に隙間が生じた。無極は鄢將師を平王に推薦し王は彼を右領（低級な職）につけ可愛がった。この後の事は後ほど触れる。

話を晋国に移そう。晋国（平公）が虎祁宮を造営して以降、諸侯は晋君が逸樂にふけるようになったとみて次第に晋から心が離れていった。昭公が晋の君主になり、彼は先人の覇業を取戻そうと、齊が修好をはかるために晏嬰を楚へ派遣した事を聞き、齊に対し晋にも使者をよこすよう要請した。齊景公は、晋楚がしばしばトラブルを起しているの、両者の隙を狙つて覇を称えようという野心が有ったから、晋の新君昭公の人となりを見ておきたい思いもあり、身ごしらえをして勇士の古冶子（やちこ）を連れて晋国へ出かけた。景公は三頭だての馬車の左側の馬を最も可愛がつていて、黄河を渡る時、舟の一番前のほうに乗せて自ら馬係に餌やりを指示をしていた。たちまち一天かき曇り大時化になり波濤がうねり舟が危うく転覆しそうになった。その時突然大竜（大スッポン）が水面に

現れ頭を伸ばして大きな口を開き舟の前部へぶつかつて来た。あつという間に例の景公が大切にしている馬を啗えて河の淵に潜つてしまった。景公は驚いた。古冶子が傍らから、

「殿、怖がられる事はございませぬ、臣が捜してまいります」と言うが早い、着ている物を脱ぎ捨て剣を口にくわえて波濤の中へ飛び込み波を蹴つ大竜を追ひ、かつ浮かびかつ沈み、流されて九里、そのうち行方が分からなくなつてしまった。

「ああ、治子も死んでしまったか」

景公が愛馬と勇士を失つて嘆いていると、しばらくすると風も波も止み、水面が紅く染まり、古冶子が左手に馬の尾を挽き、右手に血が滴る竜の頭を持つて波間から出てきた。

「これは正しく神勇だ。先君が作られた『勇爵』の位は空席のままであつたが、彼ほどの勇士はどこにもいない」

景公は驚いて重賞を与えた。

さて、一行は絳州に着き晋昭公に会つた。晋侯は酒宴を設けてもてなした。晋国の荀息が相札（しやうさい）を務め、齊国は晏嬰が相札を務めた。酒がまわつた頃晋侯が、

「宴中特に面白い事ありませんが、お酒を賭けて投壺（とうこ）の試合は如何ですか」

と提案し景公も同意した。壺と矢が用意された。齊侯は拱手（きこうしゅ）して晋

（相札（しやうさい））相は補佐人を意味する。古代朝聘、会盟、祭祀等の儀式には必ず補佐人が、この補佐人を相い、儀式の相を務める事を相札（しやうさい）といふ。投壺（とうこ）古代の宴席の遊びで、二つの壺の中に矢を投込んで勝負を競ひ、敗者に酒を飲ませるもの。

侯に先を譲った。晋侯が矢を手にとると、荀呉は傍らで詩を作つて献上した。

酒は有りて淮水の如く 肉は小山の如し

殿の矢、壺に入らば 諸侯の師とならむ

晋侯は矢を投げた。思い通りに壺に入つた。残りの矢を下に置くと晋の臣たちは皆地に伏して万歳と叫んだ。斉侯は面白くない。矢を取つてその詩を真似て、

酒は有りて澠水の如く 肉は陵の如し

我が矢、壺に入らば 晋に代りて斉興らむ

と言つて矢をボンと投げるとこれもびつたり壺に入つて晋侯の矢と並んだ。斉侯は高らかに笑つて残りの矢を下に置いた。晏嬰も地に伏して万歳と叫んだ。晋侯は急に顔色を変えた。荀呉は景公に、

「只今のお言葉は失言ではありませんか、わが主君は、夏の会盟で天下の盟主になっています。あなたのおっしゃる『晋に代りて斉興らむ』とはどういう意味ですか」

と詰め寄つた。晏嬰が景公に代つて答えた。

「盟主はいつも同じというものではありません。徳のある方が務めるものであります。斉が覇業の力を失つて晋国が代つたばかりであります。晋に徳があれば従わない者はございませぬ。もし徳がなければ、呉や楚も盟主の地位を狙っています。なにもわが国だけが考えている事ではございませぬ」

羊舌肸が口を挟んだ。

「晋はすでに諸侯の盟主であり、壺の矢で云々することではありませぬ。これはむしろ荀相の失言です」

荀呉は自分の誤りを認め黙つた。斉の臣古冶子が階下から大声で言った。

「日も傾いてまいりました、もう失礼する時間ではないでしようか」
斉侯はそれを聞いて控えめに挨拶をして退去し、翌日帰国した。

「諸侯の中には晋から離れようとする者が出てくる恐れがあります、覇業を安定させるために諸侯に少し実力を見せるべきです」

羊舌肸がそう言うと、晋侯も同じ思いで大々的に大閱兵を行った。兵力は総計戦車四千乗、兵士三十万人。

「例え徳に不足があつたとしてもこれだけ兵力があれば大丈夫です」

羊舌肸はそう言つて先ず周朝に使いを出して、天子の家臣を派遣してもらい軍に權威付けをして、その秋七月に平丘（現河南省封丘）での諸侯召集を発表した。諸侯は王臣が出席するというので欠席しようという者はいなかつた（これを平丘の会盟という）。

会盟の日が来た。晋昭公は韓起に留守を命じ、荀呉、魏舒、羊舌肸、羊舌鮒、籍談、梁丙、張骼、智臯等を率いて四千乗の全軍濮陽城に向け進發した。衛地に連なつた三十余營は全て晋兵であつた。先ず周の劉猷、公擊が到着し、斉、宋、魯、衛、鄭、曹、莒、邾、滕、薛、杞、小邾の十二諸侯が揃つたが、晋軍の壮大な軍容を見て皆恐れをなした。会合が始まり、羊舌肸が盟誓（同盟の誓い）の盆を捧げて、声高らかに言った。

「先臣趙武は奸計にはまり楚と停戦協定を結びましたが、楚度（靈王）は信賴の置けない男で結局自滅してしまいました。わが君は踐土の会盟の旧事に倣い、天子の恩恵を賜り改めて同盟の誓いを立て中華の鎮護のために共に力を合わせたいと考えます」

諸侯はみな頭を下げて賛成したが、斉侯だけは同意しなかったので、
羊舌肸が詰問した。

「まさか斉侯は盟約に反対と言うわけじゃないのですか？」

「諸侯が従わない時に誓約を結び確認しあうのであって、今みな晋国
に従っている状態でどうして何のために盟約を結ぶのですか？」

「踐土の会盟で従わない国がありましたかな。もしあなたが盟約に不
同意でしたら、わが君は四千輛の戦車を出動して臨淄城に^{りんし}、^{ようぜつ}挨拶に参ら
なければなりません」

羊舌肸が激しい口調で言い終わるがはいか、壇上全体に太鼓の音が
弾け三十万の晋兵が各々の陣営に次々と大旗を立てた。斉侯は今にも攻
撃して来そうな様子を見て、

「貴国がどうしても盟約が必要だという事であれば、わたしもこれに
従わないわけではありません」

と言い直した。そこで晋侯が先に血をすすり、斉、宋が続いた。王臣
劉摯は終始オプザバーとして盟約には加わらず立会人に徹した。邾、
莒両国が魯国にしばしば侵略されている事を晋侯に訴えた。晋昭公は盟
主として公平と威厳を示す必要を感じ、魯を会盟から外し魯の大夫季孫
意如を軍中に拘束した。

これを見て鄭の大夫子服がそつと荀呉に言った。

「魯国は邾、莒より十倍も大きい国です、捨てた魯が斉や楚についた
ら晋にとつて大変な損失です。楚が滅ぼした陳、蔡を救えなかった上に
また兄弟の国まで棄てるのですか？」

荀呉もその通りだとして韓起を通じて晋侯に勧め、意如を放免した。
これによりますます諸侯の評判を落とし、晋国は盟主に復帰できなくな

ってしまった。史臣の詩がある。

楚をまねて虎祁宮を建て 列国の離心威で留めん
投壺に見えし諸侯の離合 むかしの山河今は昔

さてこの後如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第七十一回

晏平仲 二桃で三士を謀殺

楚平王 世子を追放しその嫁を娶る

齊景公は平丘から帰国して、晋の兵力に脅迫されて盟約は結んだが、晋には遠大な計画がないことが分かったので、改めて桓公の覇業の復活の志を強くして、晏嬰にたずねた。

「晋は西北の霸主で、わしは東南の霸主になるというのはどうじゃ」

「晋は虎祁宮建設で民を疲弊させ、それによつて諸侯の信頼も失つています。殿が覇を称えるためには民を思いやる必要があります」

「民を思いやるとは具体的にはどうすればいいんだ」

「刑罰を簡明にすれば人々の怨みがなくなり、税金を軽くすれば君恩を感じます。昔先王は春は農作業を巡視し不足があれば補充してやり、秋には收穫を見て税の軽減を行なつたという事です。これを実施されたらいかがです」

景公は煩雑な刑を簡略化し、国庫を開いて窮民の救済に当て、国民は君恩を感じ喜んだ。

そこで先ず、東方の諸侯を召集した。徐子（徐国の国君）が召集に応じなかつたので景公は勇士田開疆を大将として出兵し蒲遂の戦いで、敵將羸爽を斬り、兵士五百余を捕えた。徐子は非常に畏れ齊に講和の使者を送つてきた。齊侯は鄒子、莒子及び徐子、莒、邾、徐各国の国君と蒲遂で盟約を結ぶことにした。徐は齊侯に甲父の鼎を贈つた。晋の君臣はこの事を知つたけれど詰問することはなかつた。齊は日増しに強くなり、晋と覇を競うほどになった。

景公は徐との戦いで功のあつた田開疆と、大鼂を斬つた古冶子に『五乗待遇』^{きと}という榮譽を与えた。田開疆はさらに公孫捷という勇士を齊侯に推薦した。顔は藍で染めたよう、目が飛び出し、身の丈一丈、

千鈞を持ち上げるほどの力がある勇士である。景公は彼を一見して驚き、一緒に桐山へ狩りに連れて行つた。山中で突然、目の吊り上つた白い額の虎が飛び出してきた。虎はガオーと咆哮を發するとまっしぐらに齊侯の馬に向かつて来た。それを見た公孫捷は車から飛び降りて、武器を持たず両手で猛虎を捕え左手でえり首の皮を掴み右手でなんと一発で殴り殺し景公を救つた。景公は帰城し彼にも『五乗待遇』を与えた。この三人は兄弟の契りを交わし、『齊国三傑』を自称していた。しかし次第にこの三人は功と猛勇を恃み大口を叩き、市民を威圧し、公卿や大臣に対しても横柄になり、ひどい場合は景公に対しても言葉遣いや態度が傲慢になり礼を失するようになった。景公は彼らの才勇を惜しんで許していた。

梁丘抛^{りやうきう}という阿諛迎合が得意で景公にとりいり寵愛を受けていた佞臣がいた。彼は景公に媚^{こび}を売つて寵信を固めると同時に三傑とも親しくしていた。しかもこの頃、陳無宇^{ちんむう}が施しを行なつて多くの人々の心を掴んで国を動かす力を隠し持っていた。田開疆も陳氏と同族であり、将来両者が力を合わせると国家として憂慮すべき事態になる。晏嬰は非常に心配して彼らを除こうとするが景公は聞く耳を持たず逆に三人から怨みを買う事になった。

ある日、魯昭公は平丘の会盟で晋国から侮辱を受けたので（前回最後、齊国と友好を図ろうと自ら齊に出向いた。景公は酒宴を設けて歓待した。

五乗待遇 齊庄公は州綽^{しゅうしやく}しやくと、賈^か奉^{ほう}かき^きらには堅固な戦車を五乗賜わり『五乗の客』と呼んだ。

魯は大夫の叔孫婭が、齊は晏子が相礼（七十四 注記284）を担当した。『三傑』は剣を帯びて傍若無人の態度で昂然と階下に立つていた。酒宴たけなわの頃、晏子が景公に言った。

「果樹園の金桃がもう熟しています。両君の長寿をお祝いしてお出ししたいと存じますがよろしいでしょうか」

景公は許可し園吏に金桃を採って来させようとしたが晏嬰が、

「金桃は大変珍しいものですから臣が自分で行っていいものを採って参りましょう」

と云つて鍵を持って出て行つた。

「この金桃は『万寿金桃』と申しまして先君の時、東海の人が海の向こうの度索山で採れたものだと言つて大きな種を持ってきたのです。又の名を『蟠桃』とも言います。植えてから三十年経つても花が咲くだけで実がなりませんでしたが、今年になってやっと幾つか実を結んだのです。大変珍しいものですから園門に鍵をかけているのです。今日は君侯がお見えになりましたので一緒に召し上がつていただきたいと存じております」

魯昭公は拱手の礼をとつて感謝した。

しばらくして晏子が園吏を連れて戻つて来て彫刻が施された盆にのせて献上した。盆にはお椀くらいの大きさの炭火の様に真っ赤に熟れた桃が六個のついでに馥郁たる香氣が漂い見るからに珍しい果物である。

「たったこれだけか」

「まだ三、四個ありますが未熟ですので六個だけ採つて参りました」

景公は晏子に酒を勧めるように言い、晏子は玉杯を捧げて恭しく魯侯にすすめ、内侍に桃を献上させて口上を述べた。

「升ほどの桃で世にも珍しい物です。両君にこれをお召し上りいただき長寿をお祈りいたします」

魯侯は酒を飲み干すと桃を一個とつて味わつた。その美味さは例えうがなく絶賛して止まない。次に景公も酒を飲み干し桃を食つて言つた。

「この桃は非常に珍しいものです。叔孫大夫はその賢名四方に馳せ、今日はまた相礼を務められ、苦勞さまで、どうぞ一個お取りください」

叔孫婭は遠慮して、

「臣は晏相国の万分の二にも及びません。相国は国内では国政を修め、国外では諸侯を心服させその功績は大変なものです。臣が頂いたのでは僭越至極です。この桃はどうぞ相国に召し上がつて頂きますよう」

「叔孫大夫は相国に遠慮なさつてゐる。それではそれぞれに酒と桃を進ぜよう」

二人は拝跪して感謝して頂戴した。

晏嬰その後次のような提案をした。

「盆にはまだ桃が二個残つております。諸臣の中から自己申告によつて功勞の大きな者を顕彰してこの桃を与えるというのは如何でしょうか」

景公はそれは名案だといつて、早速内侍に命じて階下の諸臣に自らの功がこの桃を食う価値がある大功と自信のあるものは相国が判定するから名乗り出よと伝えさせた。

公孫捷が胸を張つて列から出て、

「桐山での狩りで殿に一緒に居ました時、素手で猛虎を退治して殿をお助けしましたが、この功は如何でしょうか」

と言つと晏子は驚いたように、

「大変な力で危険な事態から殿をお守りした功績は非常に大きい、酒杯と桃を一個をお上りになつて席にお戻り下さい」

と言うと、古治子が奮い立つて列から出て発言した。

「虎を殺すのはそんなに珍しくも何ともない。わしは以前黄河で化物の大竜を斬つて殿の危きをお救ひした。この功は如何です」

「あの時は波濤が巻き起こり將軍が化け物大竜を退治してくれなければ、船は転覆して溺れていたかもしれない。これは世にも珍しい奇功だ、酒と桃の価値がある事疑いない」

晏子は急いで酒と桃を与えた。

すると田開彊が裾をからげて列を出て傲慢に言つた。

「わしは殿の命を受け徐を攻めて、徐の名將を斬り五百人を捕虜にした。徐君は恐れて、みやげを持つて講和を請うてきた。郷、莒も恐れをなしてわが君を盟主に仰ぐ事になったが、これは桃を食うには当たりませんか」

「開彊の功は先の二將に比べ十倍もの功績です。ですが如何せんもう桃はありません。酒を飲んでもらつて次の桃が熟れるまで待つて頂きますよう」

と晏嬰が奏上した。

「卿の功が最も大きい、惜しいかな申告が遅すぎた。その大功に報いる桃がない」

景公は残念そうに言うと、田開彊は、

「大竜を斬つたり、虎を殴り殺すのは小事に過ぎない。わしは千里の外を跋涉し血戦にうち勝つたのに桃を食う榮に浴する事ができず、両国の君臣の前で面目を失ひ万代に恥を曝す事になってしまいました。

どの顔させて今後朝廷に立てましようか」

と言うや否や引き留める間もなく佩劍を抜いて自刎して果てた。公孫捷は驚いて、

「我われが微功で桃を食つてしまつて、田君は大功を立てたにもかかわらず桃を食べられなかった。先に桃を頂戴すべきではなかったのにけじめを欠いていた。彼と一緒に死んでこそ勇士である」

と言つて彼も自刎した。古治子も奮い立つて、

「われら三人は生きるも死ぬも一緒と誓ひ合つた義兄弟で、血を分けた兄弟とかわからない。おれだけ生き残つたのでは義理が立たん」

と叫んで彼も自刎して果てた。

あつという間の事で、景公は急いで引き留めさせたが間に合わなかつた。

魯昭公は驚いて肝をつぶし立ち上がった。

「この三人は天下にもまれな勇士だと聞いていますが、一度に亡くなつて非常に残念です」

景公は言葉も無く、顔色が青くなつた。

晏子は落着いて景公を慰めた。

「彼らは勇猛だと言うに過ぎません。多少の功勞があつたといつても惜しむには足りません」

魯侯は晏嬰にたずねた。

「貴国にはこのような勇將は他にどの位おられるのですか」

「国家の策略を縦横にめぐらし、万里に国威を示すことができる宰相將軍の才のある者が数十人はいます。血気にはやる勇者はわが君の鞭の下で働く道具に過ぎません。そんな者の生死は齊国にとつてはたいした

問題ではありません」

齊侯はそれを聞いてやつと気持ち晴れた。晏子は両君に更に酒を勧め愉快に飲んで散会した。

三傑の墓は蕩陰里（とういんり）（臨淄城南の村）にある。後に諸葛孔明が『梁父吟』の中でその事を詠っている。

齊の東門を歩み出で 遙かに望む蕩陰里

里中に三墓あり 累々として相似たり

問う誰の墓ぞ 田疆古冶子なり

力能く南山を排し 文能く地紀を絶つ

一朝陰謀により 二桃で三王を殺す

誰か能く此謀為せるや 齊相国晏子なり

昭公が帰った後、晏子を呼んでたずねた。

「酒の席で話を誇張して面子を保ったけれど、三傑の後任が難題だ。この問題をどう考えるかね」

「心配はございませぬ、三傑に劣らない人材を推薦申し上げます」

「誰だねそれは」

「その人は田穰苴（でんじょうしよ）（後の司馬穰苴）といい、文武両道の真に大将の才のある人物です」

「田開疆の一族なのか」

地紀：大地を繋ぎとめる綱 文景がその綱を断ほど立派ないう事

※ 景公の言行を集録した説話集『晏子春秋』内篇諫下に見える話 孔明の『梁父吟』の説話が有名になりたといわれる 李曰にも『梁甫吟』がある 同様の部分がある

「力南山ヲ排 三壮士 齊相晏子之ヲ殺 二桃ヲ費ヤス」

「この人は田一族の出ではありますが庶流で身分が低く、いわゆる田氏とは別で今では東海の浜の辺鄙な処に住んでいます。将をお選びでしたら彼の右に出る者はいないでしょう」

「その人物の才能を知っていたのなら、何故もつと前にわたしに言わなかったのかね」

「賢者は主君を選ぶだけでなく友も選ぶのです。田疆、古冶達は血氣

にはやる連中で、穰苴は彼らと比肩されるの潔しとしなかったのです」

景公は口では分かったと言いつながら、田陳（でん）一族を嫌って結局あいまいにして晏嬰の推薦を採用しなかった。

ある日辺境守備隊から報告があった。

「晋国が三傑が死んだのを知って、東阿の国境を侵犯し、燕も北鄙を襲つて来ています」

景公は驚き、晏子に命じ土産を持たせ東海の浜へ穰苴を迎えに遣つた。

穰苴は自らの戦略を詳しく説明し景公と意気投合した。景公は即日將軍を委嘱し戦車五百乗を預け燕、晋軍の侵犯を防がせた。

穰苴は拜命し、あわせて景公に一つ要求した。

「臣はずつと卑賤の身で、突然將帥に拔擢され兵権を授かりましたが、人心は不満な様子です。国人が尊重する人を監軍としてつけていただければ臣の命令が浸透すると思います」

そこで景公は寵臣の庄賈（しょうか）を監軍にした。苴と賈の二人は礼を言つて退出した。

※ 田陳 田氏は、陳公子完敬仲が彦に亡命し田氏と称したので田陳といふ

朝門を出た所で庄賈が穰苴に出陣の日時をたずねた。

「明日の正午に軍門でお待ちしております。時間お間違ひなく」
穰苴はそう言つて分かれた。

翌日の午前、穰苴は先に軍營へ行き、軍吏に木を立てさせて時計にしその影を見て庄賈に催促の伝令を出した。賈は年が若く傲慢で景公の寵愛を笠に著て穰苴など全く眼中になく、自分は監軍で重任だと自慢して時間の事を気にしない。その日は親戚友人を呼んで壮行会のような事をして居座つて飲み続け、伝令が何度催促しても全く意に介さなかつた。

穰苴は日が西に傾く頃まで待った。軍吏が「すでに四時になります」と言つて来たが庄賈は未だ来ない。穰苴は日時計、水時計を倒させ自ら壇上に立つて兵達に戦いの誓を立て、軍の遵守事項を説明した。号令が終つた時はすでに黄昏時刻であつた。その時になつてやつと庄賈が酔眼朦朧としての四頭立ての車でがゆつくりとやつて来た。軍門まで来るとゆつくりと車を下り左右に支えられようよと将台が上がつた。穰苴は立上らずに端座したまま詰問した。

「監軍殿、何ゆえに決められた時間に遅れたのですか」

庄賈は拱手して、

「今日はわしが遠方へ出かけるというので親戚友人が酒を持つて来て壮行会をやつてくれた。それでちよつと遅れたんだ」

と答えると穰苴は顔色を変えて詰め寄つた。

「夫れ將たる者、受命の日よりその家を忘れ、軍律を前にしては親子も忘れ陣太鼓を聴けば矢石を冒しその身を忘れるべきものであります。今、敵国の侵略を受け国境付近では騒動が起きており、ご主君は安眠ままならず食事をゆつくり味わう事もおできになれないほどの危急事態で

あります。そのために三軍をわれら兩人に託され、旦夕のうちに解決して民衆の苦しみを救う事を希望されているのではありませんか。何処に酒を楽しむ暇がありませんうや」

「幸いまだ出陣に遅れたわけじゃない。元帥、まあそう責めなさんな」
庄賈はそれでもまだ含み笑いをしながらそんな事を言うので穰苴は机を叩いて激怒した。

「あなたは君寵をいい事に軍心をないがしろにしました。こんな状態に敵に臨めば大事を誤る事必定です」

と言つて軍政司を呼んでたずねた。

「決められた時間に來なかつた場合軍法ではどういう罪に当るか」

「斬首であります」

庄賈は『斬』と聞いてやつと恐れをなし将台から逃出そうとした。

穰苴は部下に庄賈を縛つて轅門へ引きずり出させ斬首を命じた。庄賈は驚き酔は醒め何度も助命を哀願した。

庄賈の側近は慌てて齊侯に知らせ助命を求めた。景公も非常に驚き急いで梁丘扈に節を持たせて庄賈の助命に急行させた。しかしその時はもう庄賈の首は轅門に架かつていた。梁丘扈はそんな事知る由もなく符節を大切に持ち軍營に車で駆け入ろうとしたが、穰苴は取押えて、軍政司に言つた。

「軍營を車で走ることとは許されぬ。この使者はどういう罪に当るか」

「斬首であります」

梁丘扈の顔が土色に変わった。わななきながら叫んだ。

⑧ 節 昔 君主や將軍の命令を伝える使者が正規の使者である証拠として持てゐた割符符節または杖節杖。

「君命を帯びて来たのです、私事じゃないんです」

「君命とあらば斬首と言うわけにはいかないが、軍法をおさなりにはできない」

と言つて車を壊し馬を切つて使者の斬首に代えた。

梁丘拠は命からがらほうほうの体で逃げ帰った。

これより三軍の上下誰も軍法の威厳を恐れた。穰苴の軍がまだ遠くへ行かないうちに、晋軍はこの噂を聞いてさっさと引揚げ、燕軍も河を渡つて北へ帰つたが、穰苴はこれを追撃し万余の敵の首をとつた。燕は大敗し賠償金を持つて講和を求めた。凱旋の日、景公は自ら郊外までねぎらいいに出て穰苴を大司馬に封じ兵権を任せた（これより司馬穰苴という）。

君寵の節使なお刑を免れず 国法は無私 軍令は必然実行

然らずば穰苴今日受命して 何ぞ闘志を燃し社稷を救い得ん

諸侯はいずれも穰苴の名を聞くと恐れをなした。内政においては晏嬰あんえいあり、外に対しては穰苴ありで、国は治まり兵は強化され四囲の国境も安定して、景公は巻き狩りと飲酒の毎日かんこう かんちゅうで桓公が管仲に任せていた頃に似た状況になった。

ある日、景公は宮中で側女や美女たちと酒を飲んで楽しんでた。いつの間にか夜中になったがまだ興が尽きない。ふと晏子を思い浮かべ、酒肴、楽器などを車に移し晏子の家へ向かった。晏子は前もつて君主が見えるという報告を受けていたので、朝廷に出る正式な服を着て、手には笏板を持ち恭しく門外に立つていた。景公が到着し車を下りようとする

「諸侯に何かあったのですか、それとも国内で何か問題が起きたのですか」

「いやいや」

「ではどうして深夜に殿が臣下の家にお見えになられたのですか」

「相国には国務で苦勞をかけている。いい酒といい音楽があるので独りひとりで楽しむより相国と一緒に味わおうと持つて来たのだよ」

「治国、外交は臣の仕事でございますが、酒を楽しむ音楽に興ぜられるには殿の周りに適任者がたくさんいます。臣はその方面はあまり得意ではございません」

景公は車を返し司馬穰苴じょうしよの家に向かった。穰苴も予め伝言を受けていたので甲冑を身に付け將軍の正装で手には戟げきを持つて肅然と門外に立ち景公を迎え腰を曲げてたずねた。

「諸侯が攻めてきたのでしょうか、それとも国内で謀反でも起きたのでしょうか」

「そうじゃない」

「ではどうして深夜に殿が臣下の家にお越しになられたのですか」

「他でもない、將軍には軍務で苦勞をかけている。いい酒といい音楽があるので將軍と一緒に味わおうと持つて来たのだよ」

「外敵を防ぎ、内乱者を誅する事は臣の仕事でございますが、酒を楽しむ音楽に興ぜられるには殿の周りに適任者がたくさんいます。無粋な臣はそれには不向きでございます」

景公は興が醒めた。

「宮殿に帰りましょうか」

「梁丘大夫の家へ行ってみよう」

予め伝言を受け、梁丘は景公の車が着く前に、左手に琴、右手に箏を持って、小曲を口ずさみながら路地の入り口まで出迎えた。景公は大喜びで帽子も着物も脱ぎ彼と夜通し管弦を楽しみ明け方になってやっと宮中に帰った。

晏子と穰苴は翌日参内して謝罪した。あわせて深夜に臣下の家に行き酒を飲むのは止した方がいと諫言すると、

「わしは卿たち二人がいなければ国家を治める事はできない。同時に梁丘堦がいなければわしはどうしても楽しむ事ができないんだ。今後卿たちの仕事の邪魔はしない事にするから、卿たちもわしに干渉しないほしい」

と景公は答えた。史臣は詩に詠っている。

相国・將軍双柱の功 どうして小臣の阿諛と同列にできよう

景公賢臣を得てこれを信任 広くその芳名を勝ち得たり

この頃中原では多難であつた。晋は結局何もできず昭公は即位六年で亡くなり、世子去疾が即位した。晋頃公である。頃公が即位した年、韓起と羊舌肸が亡くなった。魏舒が政權を担当し食婪で聞えた荀躒と范鞅が権力を握った。祁氏の家臣祁勝が驕臧の妻と私通し、祁盈に捕えられたが、勝は荀躒に賄賂を使って助けを求めると、躒は頃公に中傷し逆に祁盈を捕えてしまった。羊舌食我と祁氏とは氣脈が通じていたので祁氏のために祁勝を殺した。頃公は怒つて祁盈、食我を殺し、祁、羊舌の一族を滅ぼしてしまった。国人はこれを冤罪だとした。その後、魯昭公が強臣季孫意如に追放され晋に亡命しようと思つたが、荀躒はまた意如から賄賂を受取り魯昭公の亡命を受入れなかった。これを聞いた齊景公は

諸侯を鄆陵えんりよう（河南省鄆陵県）に会盟し逆賊を討伐し魯難を救つた。諸侯はその義拳を讃え、齊景公の威名は天下に輝いた。

話し変わつて、周景王十九年（紀元前五二六年）、呉王夷昧は在位四年で重病にかかり、父兄の命に従い位を季札に譲ろうとした。

「わたしは王位を継ぐ気はありません。先君がご存命の時お断りしています。富貴は通り過ぎる秋風のようなものでわたしには無用なものです」季札はそう断つて延陵（現江蘇省常州）季札の封地へ逃げ帰つてしまつた。

大夫たちは夷昧の子州于を王に立てた。州于是僚と改名した。これが王僚である。諸樊（夷昧季札らの長兄）の子光は用兵が得意で王僚は彼を将として使つた。公子光は長岸で楚と戦つた時、楚の司馬公子魴を戦死させ楚人をおどろかせた。そのため楚は州来に築城して呉に対する守りを固めたほどである。

この頃費無極は巧言で取入つて楚王の寵を得ていた。蔡平公廬は嫡子朱を世子に立てたが、庶子の東国が世子篡奪を狙い無極に賄賂を贈つた。無極は先ず邪魔な朝呉を陥れ鄭に追放した。蔡平公が亡くなり世子朱が即位すると、無極は楚王の命だと偽り、蔡人に朱を追放し東国を君主に立てさせた。

「蔡人は何故朱を追放したのだらう」

と平王がいぶかると無極が、

「朱が楚に叛こうとしたので蔡人はこれを嫌い追放したのでしょう」と答えたので平王もそれ以上は聞かなかった。

無極は更に、自分を嫌っている太子建と平王との間を割こうと考えた。しかしすぐにはいい案がみつからなかった。

ある日、平王に、

「太子はご成長されましたのでそろそろ結婚をお考えになられたら如何でしょうか。求婚なさるなら秦がいいでしょう。秦は強国だし楚と友好関係にあります。姻戚になればわが国勢を益々拡大できると考えます」

平王も賛成し、早速費無極を秦国へ表敬訪問方々世子の求婚のために派遣した。

秦哀公は大夫たちを召集し婚姻の是非を諮った。

「昔は秦と晋が代々婚姻関係を結んでいましたが、久しく絶えております。最近楚は力をつけてきておりますから、断る理由はないと思います」

群臣口をそろえて言うので、哀公は表敬訪問の答礼方々、一番上の妹孟嬴を嫁に出すという返事を持たせて大夫を楚に使わした。彼女は今の通俗小説という無祥公主である。公主の名称は漢代に入ってから使われたもので春秋時代にこの称号があったかどうかは分らない。

平王は再び無極に命じて十分な贈物を持たせて秦に嫁を迎えにやつた。哀公は無極が献上した贈物を大変喜び、ただちに公子蒲に命じ、嫁入り荷物を百輜の車に積み込み嫁付侍女数十名をつけて孟嬴を楚に送らせた。孟嬴は兄に別れの挨拶をして楚に向かった。

無極は途中で孟嬴が絶世の美女である事を知り、同時に嫁付侍女の中

に一人容姿端麗な女がいることが分かった。無極はそつと来歴をたずねると、彼女は斉の人で幼い頃に秦に仕官した父親に随いて来て、その後宮中に入り孟嬴の侍女になったという。無極は彼女の詳しい来歴を知り、宿舎に泊まった時彼女を呼んで、

「そなたは貴人の相がある。わしはそなたを引き立てて太子の正妃にしてやろうと思う。わしの計画を他言しなければそなたの将来の富貴は思いのままだ」

と言った。彼女は頭を下げたまま何もいわなかった。無極は一日先行して宮中に入り平王に報告して言った。

「秦の花嫁は現在三舎(36km)のところまでお見えになっていらつしやいます」

「卿は会ったのか、容貌はどうだった」

無極は平王が好色だという事を知っているので、秦女の美しくさを誇張してその邪心をくすぐっていたが、これは彼の計略(父子離間の計)推進にびつたりの質問である。

「臣も女性をたくさん見てまいりましたが孟嬴さまほどの美人には会ったことがございません。楚の後宮だけでなく昔から語り伝えられている姐己(殷紂王の妃)、驪姫(晋献公夫人)のような美女でさえ孟嬴さまの美しさにはとても近寄れないのではないでしようか」

平王は孟嬴が美人だと聞くと顔を紅潮させ暫く言葉もなかったが、

「わしは王にはなったが、そんな美人には出くわした事がない、全くつまらん一生だな」

とぼつんと言つて溜息をついた。無極は人払いを願ひそつと平王に言つた。

²² 無祥公主 不吉な運命を持った王女 この「今は本書が書かれた明清代をい

「王が秦女の美しさにお気持ちがいざしましたら、ご自分のものになされはいじやないですか」

「もう息子の嫁に決めている、人倫に反するではないか」

「大丈夫ですよ、太子の嫁にという事にはなつてはいますが、未だ東宮には入っていません。王が宮中に迎え入れれば文句を言う人は誰もいません」

「家来たちに緘口令は敷けても太子の口は塞げないぞ」

「臣は嫁付侍女の中に才貌非凡な齊女を見つけています。その女なら秦女の身代わりにできます。臣が先ず秦女を王宮に連れて参り、齊女を東宮へ連れて参ります。絶対機密が漏れないように兩人に命じておけば何も問題ありません」

平王は喜んで無極に極秘裏に進めるよう命じた。

無極は秦使の公子蒲に、

「楚の婚礼は他の国と異なり、先ず王宮に入つて舅の王に会つた後東宮で成婚する」

と言つて事前に承知させておいた。無極はカーテン付きの車を用意させ、孟嬴と侍女たちを王宮に送り込み、孟嬴をそつと隠して齊女を王前に出させた。宮中の侍女を秦の花嫁付き侍女にして、齊女を孟嬴という事にし太子に東宮へ連れて帰らせて成婚させた。朝廷の文武の大臣も太子自身も無極のごまかしに誰も気がつかなかった。

「齊女は何処へ行つたのかしら」

「太子にやつたよ」

孟嬴がたずねると、王はこう答えた。平王の行為に対し潜淵は詩の中で次のように詠じている。

衛宣公世子の嫁を奪い新台建て 蔡景公も世子の嫁を取る²⁾
遺憾なり楚平王もまた 人倫犯し太子の嫁秦女を取る

平王は太子が秦女の事を知ることとを心配して太子が宮中に入ることを禁じ、彼の母子対面も許さなかった。朝夕秦女と後宮で逸楽し国政を見なくなった。外部では秦女の事を疑う声が騒がしくなった。無極は太子が知つて禍がふりかぶつて来るのを心配して平王に、

「晋が長く天下の覇者になったのは国が中原にあるという地の利を得たからです。以前靈王が陳、蔡の城を拡張し中華の鎮めとされましたがこれが天下に覇を争う基本です。現在「国に復国を許し再び楚は南方に下がり守備に徹していますが、そんな事で大業が成せましようか。太子を北方の鎮めとして城父（現河南皇豊）に派遣なさり、王は南方に専従なされば天下は座して画策できるのではないでしようか。平王は迷つてすぐには答えなかった。無極はまた王の耳元でささやいた。

「秦との結婚の件はそのうち漏れるでしょう。太子が遠く離れていれば、その時の事を考えても一石二鳥ではないでしようか」

平王は無極の言葉ではつと気付いた。

平王は太子を城父に出し、奮揚を城父司馬に任じて太子の補佐とし、「わしに仕えるつもりで、太子に仕えるように」と申し付けた。伍奢は無極の中傷を見抜き平王に諫言しようとしたが、

無極はこれを事前に察知して伍奢を太子の補佐として城父へ遣るよう平

²⁾ 衛宣公が世子急子²⁾の嫁を横取りし新台を築きそこに困た。蔡景公は楚王の娘平（び）氏を世子般の室として娶たが、景公が彼女に私通してしまひ、世子般は「あんな親は父でもなければ子でもなし」と怒た。

王に進言した。太子が去った後、平王はとうとう秦女孟嬴を夫人にし、蔡姬（太子建の母）と離婚して蔡国の実家郎へ帰した。この時太子はやつと秦女が父親に取り換えられた事を知ったがどうしようもなかった。

孟嬴は王の寵愛は得たけれど、如何せん平王は年老いていて内心非常に不満を持っていた。平王もそれは分かっていたがそれについては彼女に何も聞かなかつた。翌年孟嬴は男の子を生んだ。平王は珍宝のように可愛がり、珍と名付けた。珍が一歳になった時、平王は初めて孟嬴にたずねた。

「そなたは宮中へ入ってからずっと悲しそうで、愉快な様子を見たことが無いがどうしたのだ」

「兄の命を受け王様のもとに参りましたが、わたくしは花婿もわたくしと同じ位の年だと思っていました。宮中に入って王様がお年を召しているで、王様をお怨みするわけではありませんが、子を生むのに遅すぎるのではないかと心配致したのでございます」

平王は笑いながら、

「生まれたのだからもう問題はない、我われは前世からの縁で結婚する事になつていたんだ。そなたがわしと結婚したのが遅いというが、王后になつたのは何年か早いんじゃないか」

と言った。孟嬴はその意味が理解できず詳しい事を宮人にたずねた。宮人も隠し切れず結婚の経緯を説明した。孟嬴は悲しんで涙に暮れた。平王は彼女の涙のわけを知って彼女の機嫌をとるためにいろいろ考え、珍を世子に立てることにした。これで孟嬴も少し気持ちりが治まった。

費無極は太子建が将来王位を継いだらきつと自分に報復するに違いないと思うようになり、太子の間を裂くためにまたもや平王に讒言した。

「噂では世子と伍奢は謀叛を企てているようで、密かに斉、晋に通じて救援の約束を取付けているという事でございます。大王におかれましても十分なご準備をなさいますように」

「太子は日頃から従順な男だ、そんな事あるだろうか」

「秦女の事で以前から恨みを懷いておられます。現在城父で日夜軍備に力を入れていて、昔穆王が大事を決行して楚を安定させ子孫繁栄を図った故事に倣おうと言いつらしているようです。王が何もなさらないのでしたら臣は先にお暇をいただき太子に殺される前に他国へ逃げたいと存じます」

平王は元々建を廃して珍を立てたい気持ちもあつたので無極の説得に動かされ、結局信じてしまった。直に建の廃太子を発表しようとしたが、

「世子は城外で兵を握っています。今廃太子を発表したら激しく反発するでしょう。太子の参謀は太師の伍奢です。先に彼を呼戻しその後兵を差向け世子を捕えれば王のご心配の種を取り除く事ができます」

平王はその意見に従い、伍奢を呼戻し詰問した。

「建に叛心あることをそなたは知っているか」

伍奢はもともと剛直な男で、詰問にきつぱり答えた。

「王は太子の嫁を横取りされたにもかかわらず、さらに小人の話を信じご自分の血を分けた太子をお疑いになり、お心がお痛みになりませんか」

平王は恥部を暴かれ恥かしく、伍奢を捕えて拘禁した。

「奢は秦女の件を咎めています。王を怨んでいる事が明らかです。太子は奢が囚われたと知れば必ず動き出すでしょう。斉晋軍が加われれば容

易ではありません」

「太子を殺すとすれば誰を派遣すべきだろうか」

「誰を遣つても太子にはかなわないでしょう。密かに司馬^{ふんよう}奮揚に命じて殺させるのが一番です」

平王は使いの者を遣つて密かに奮揚に命じた。

「太子を殺せば重賞を与える。太子につけば打ち首とする」

奮揚は命令を受けると直ちに腹心の者に命じ太子に知らせた。

「早々にお逃げ下さい、寸刻も遅れてはなりません」

太子は非常に驚いた。この時すでに斉女が勝を生んでいた。建は妻子を連れてその夜のうちに宋へ出奔した。

奮揚は太子が出奔したのを確認した後、城父の者に自分を縛らせ郢都^{えい}に連行させ平王に会つて、

「太子はお逃げになりました」

と言つた。平王は激怒して言つた。

「わしの口から出て直接そなたの耳に入つたはずの密命だ。誰が建に言つたのだ」

「お知らせ申し上げたのは臣でございます。王は臣に『太子に仕えるに、王に仕える如くにせよ』とお命じになりました。臣は謹んでお言葉を守りましたし、心なく太子にお知らせいたしました。そうすればわが身に罪が及ぶ事の後で気がつきましたがもう間に合いませんでした」

「そなたは勝手に太子を逃がしておいて、わしに会いに来るとは、死ぬのが怖くはないのか」

「王の新しい命令に従がえず、しかも死を恐れて報告に参らなければ二重の罪を重ねる事になります。太子には謀叛のお気持ちにはございませ

んのでお命を頂戴する理由もございませぬ。王のお子の太子のお命をお助けできるのであれば臣は死んでも本望でございます」

平王は憐れに思いまた慙愧の念もあつて、

「奮揚に命令違反はあつたがその忠直^{よみ}嘉すべし」

と言つて赦し城父の司馬に復帰させた。

罪なき世子^{せいし}死地より逃し

自は刑を逃げず茹釜に向かう

讒佞は終には誅戮を受くべし 奮揚の名は千載に語り継がれん

平王は珍を太子にし、改めて費無極を太師とした。無極は、

「伍奢には尚^{しやう}と員^{うん}という二人の子がいます、何れも傑物です。もし呉にでも出奔されれば必ず楚の禍になります。父親を赦すからと言つて呼び出せば、父親を大切に思う連中ですからきつと応じてやつて来る

と思います。来た所をバツサリやれば後顧の憂いを絶つ事ができます」

平王は喜んで獄舎から伍奢を出して来て、紙と筆を与えた。

「そなたは太子に謀叛をそのかした罪で本来なら斬首して見せしめにするところだが、先朝でのそなたの父祖の功績を考えるとそれも忍びない。二人の子に手紙を書いて帰朝させれば改めて官職に封じそなたは放免してやろう」

伍奢はこれが楚王の奸計で呼出して父子ともども斬ろうという事が分かつていたので、

「長男の尚は優しくて正直ですから呼べば必ず参りますが、下の員^{うん}は文を好まずずっと武芸を習つてきています。恥を顧ず我慢をして大事を成すタイプで、先見の明のある男ですから呼んでもきつと来ないと思います」

「わしが言うとおり書いて呼び出せばいい。来なくてもそなたの責任ではない」

伍奢は君命もだしがたく手紙を書いた。内容は概ね以下の通り。

尚、員殿。わたしは諫言により王の考えに逆らい拘禁されて罰を待っている。王は先人の功績を感じてわが一死を免じ、功を以て罪を贖わせるべしという群臣の意見をお聞きになり、改めてそなたたちに官職を封じるとおっしゃっておられるから、二人とも大至急帰朝するように。もし王命に反し遅れた場合は罰せられるから本書届き次第出発されたし。

書き終わり平王の検閲を受け厳封し終わると伍奢は再び収監された。

平王は鄢將師^{えんしょうし}を使者とし封緘した印綬を持たせて四頭立て馬車で棠邑^{たうい}（伍尚の封地）へ急がせた。伍尚はすでに城父へ帰っていたので使者は城父へ行つて伍尚に会い、

「おめでとうございます」

と口頭で言った。

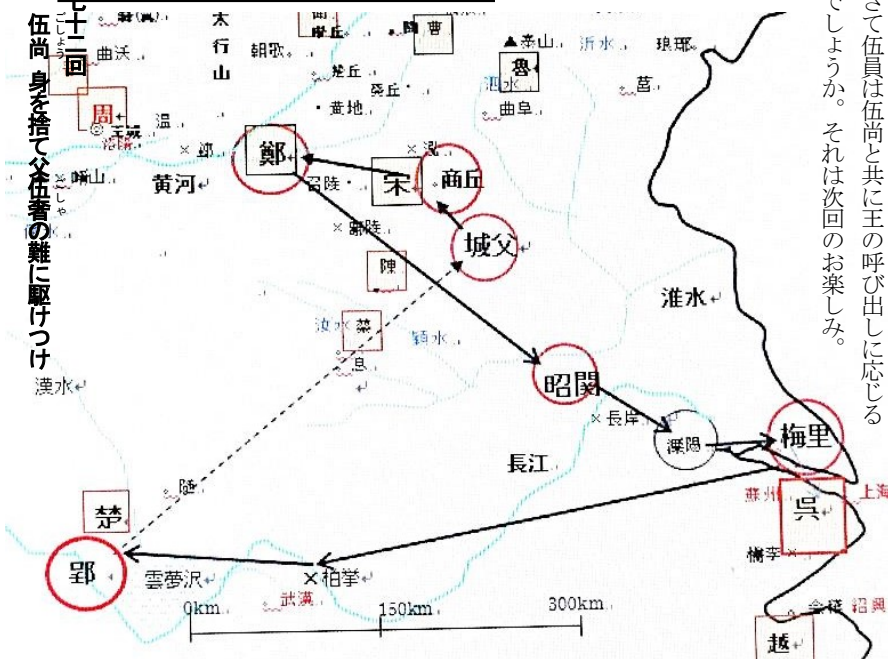
「父上が囚われたというのに何がめでたいのだ」

「王は人の讒言を誤って信じて尊公を収監されましたが、王家三代の忠臣を讃える群臣の擁護によりまして、王は尊公には相国^{さうこく}に、お二人のお子には伍尚殿は鴻都侯に、伍員殿は蓋侯に封じられました。尊公は長らく収監され釈放されたばかりですからお二人にお会いになりたいようでお手紙をお書きになり某をお迎えに遣わされました。早々にご出立になり尊公をお慰めになれますよう」

「父上が囚われた事で胸が裂ける思いでしたが許された事だけで十分です。印綬などお受けする積りはございません」

伍子胥復讐の足跡（次回以降）

「これは王命でございます、お断りはできません」
伍尚は大変喜び父親の手紙を持つて部屋に入り伍員に知らせた。さて伍員は伍尚と共に王の呼び出しに応じるでしょうか。それは次回のお楽しみ。



伍子胥 身をやつして昭関を越える

伍員字子胥は監利（湖北省監利県）の人で、身の丈一丈、腰の周りは十

圍（約1.2m）あり、眉の間は一尺、目は電光の如く輝き、力は鼎を担ぎ山

を抜く。しかも文武に通じた才能を持った人物で、世子の太師連尹伍奢

の子、棠君伍尚の弟である。尚と員は父親の奢に随つて城父に居た。

鄢將師が楚平王の命により二人を誘つて入朝させようと、先ず伍尚に会

つて、員にも会いたいと依頼した。尚は父親の手紙を持つて奥に入り員

と一緒に読んで言った。

「父上は幸いにも死を免じられ、我われは侯に封じられるという。使

者は門にいる。そなたも出て会つたらどうだ」

「父上が死を免じられたのは良かったとしても、我われ二人に何の功

が有つたからといって侯に封じるといふのだろう。これは誘いの罠です。

行けば必ず殺されるでしょう」

「父上のお手紙だぞ、我われを騙すわけじゃないじゃないか」

「父上は国家に忠実な方です。我われが必ず報復する事を知つておら

れるから、楚で一緒に死に国の将来の禍根を絶とうとのお考えなんです」

「そなたはどのように憶測するが、もし父上のお手紙が本当であつた

ら、われらの不孝の罪をなんとする」

「しばらくお待ちになってください。わたしが吉凶を占つて見ますか

ら」

員は占つた結果を伍尚に言った。

「これは凶です。主君はその臣を欺き、父はその子を欺く。行けば直ちに誅殺され、どうして侯に封ぜられる事がありましょう」

「爵位を欲しがっているのではなく父上にお会いしたいんだ」

「楚人は我われ兄弟が外にいるのを危惧しているので、外にいる間は

父上を殺す事はありませんが、兄上が行けば父上の死はきつと早まりま

すよ」

「父上に一目お会いできたら一緒に死んでもそれは望むところだ」

それを聞いて伍員は天を仰いで嘆いた。

「父上と一緒に死んで何になります。兄上がどうしてもいらつしや

るとおつしやつてもわたしは参りません」

「じゃ、そなたは何処へ行くつもりだね」

尚は涙ながらにたずねた。

「楚に報復できる人に仕えたいと思っています」

「わしの知力はそなたには遠く及ばない。わしは楚へ帰り、そなたは

他国へ行く。わしは父上に殉じて孝を成し、そなたは仇を討つて孝を成

す。これからはそれぞれのやり方でいこう。これが最後じゃ」

お互いに挨拶をし、これが永き別れとなつた。尚は涙を拭き鄢將師に

会つて、

「弟は封侯を望まず、それを強いる事もできませんので、容赦願いま

す」

と言うと、將師も仕方なくと一緒に車に乗った。

平王に会つと、王は伍尚をすぐに牢にぶち込んだ。

「わしは員はきつと来ないだろうと初めから思つていたよ」

伍奢は伍尚が一人で来たのを見てそう言った。

無極は平王に更に進言した。

「伍員を大至急捕えなければ、遅れますと逃げられてしまいます」

平王は進言を認めすぐに大夫武城黒ぶじょうくろに精兵三百人を付け伍員襲撃のために派遣した。員は楚兵が自分を捕えに来るという情報を探知し、

「父上、兄上はやつぱり赦されてはなかったんだ」

と泣き崩れ、妻の賈氏かに言った。

「わしは他国へ逃げて他国の兵を借りて仇討ちをしようと思う。そなたの面倒を見ることができなくなったけれど、どうする」

賈氏は伍員の目をしっかりと見て、

「父上兄上の怨みは肺腑を割かれるようなものでしょう、女房の事など考えている暇などないはずだわ。あなた早く逃げて下さい、わたしの事など気にしないで」

と言うと奥へ入って自ら縊死して果てた。伍員はしばらく痛哭して簡単な葬儀を済ませ、すぐに荷物を整理し、白の上着を着て弓と剣を持って家を出た。半日たらずで楚兵がやって来て員の屋敷を包囲し搜索したが伍員を捕える事はできず、きつと東に逃げたのだらうと憶測し御者に追跡を命じた。三百里ほど追って無人の広野で追いついた。員は弓を引き絞り御者を射殺し更に武城黒を射ようとした。黒は恐れて車を下りて逃げようとした。伍員は彼に向かって叫んだ。

「待て、本来なればお前を殺したいところだが、助けてやるから帰って楚王につたえよ。『楚の先祖の祀りを続けたければ、わが父兄の命を助けよ。さもなくばわしは必ず報復する。楚を滅ぼし、楚王のそつ首をこの手で刎ねに行く』とな」

と叫んだ。武城黒はほうほうの体で逃げ帰り平王に報告した。

「伍員は我われが着く前に逃げてしまっておりました」

平王は怒って直ちに費無極に命じて伍奢父子を市中で斬殺にした。刑に臨み、伍尚は無極に、讒言により君主を惑わし忠良な者を殺害したと言つて唾を吐きかけた。伍奢はこれを制止して、

「いざという時に命を捧げるのも臣としての務めだ。忠か佞かは公論が決めるものでそう怒る事もない。しかし員が来なかつたのは楚の君臣のことを思うと心配だな。今後は安心して食事を取ることもできないだらう」

と言うと首を出して従容として斬首を受けた。これを見ていた民衆はみな涙を流さぬ者はなかった。

この日は大風が砂塵を巻き太陽が暗くなり、悲風が激しく吹き荒れた。惨悲惨風天は光を失い 三代の忠臣の裔突如冤罪にあう

是より楚の朝廷讒佞あふれ 呉軍郢城に攻入る引き金となる

「伍奢は刑に臨んで何か怨み言を言ったか」
と平王は無極にたずねた。

「怨み言は特に何も申しませんでした。ただ伍員が来なかつた事で楚国の君臣は安心して食事ができなくなるだらうと申しております」

「員は逃げたとはいってもそう遠くへは行かない。追捕しろ」

左司馬沈尹戌に三千人をつけて伍員の行方を追究させた。

伍員は長江に行き当たると一計が浮んだ。着ていた白い上着を岸辺の柳に掛け、はいていた履くつをこれも岸辺に脱ぎ捨て、草履に履き替え河に沿って下って行つた。沈尹戌は追って河岸まで来て上着と履を見つけ、それを持ち帰り、

「伍員の行方はどうしても分かりませんでした」

と復命した。それを聞いていた無極が提案した。

「臣に伍員の行き先を絶つ案がございます」

「どんな案だ」

「各所に『何人たりとも伍員を捕えてきた者は、粟五万石、上大夫の爵位を与える。隠匿、逃亡幫助は一族皆殺しとする』という立て札を立て、関所、河の渡し口では往来者全員に厳重な検問を行うと同時に、列国諸侯に使者を出し伍員を匿わないよう依頼をします。そうすれば彼は進退窮まり、たとえすぐには捕えられなくても孤立して、大事を成すなどともできなくなるでしょう」

平王はその案を全面的に採用し、似顔絵を掲示し伍員逮捕のために各関所は厳戒態勢を敷いた。

さて、伍員は河岸を東に向かい、呉に亡命しようと思ったが何しろ非常に遠く簡単には行き着かない。その時はつと思いついた。太子建が宋にいる、彼を連れて行こう。そこで睢陽へ道を変えた。途中突然一隊の車馬が前方に現れた。彼は追捕の楚兵だと思い林の中に隠れて様子を見ると知人の申包胥であった。伍員とは非常に親しい友人で、使者として他国へ行っていた帰りであった。伍員は急いで彼の車の左に出た。包胥は驚いて車を下りて、

「子胥君じゃないか。どうして一人でこんなところにいるんだ」

といぶかつて聞いた。伍員は平王が理由もなく父や兄を殺した事件を涙ながらに一通り話して聞かせた。包胥は驚いて聞いた。

「それで君はこれから何処へ行くつもりだい」

「父母の仇は不倶戴天」というじゃないか。おれは他国へ亡命して

兵を借りて楚を討ち、楚王の肉を食い無極を車裂にしなきゃこの恨みは晴れない」

「楚王は無道だが君主だ。君も代々楚の祿を食んで来たではないか。君臣の掟というものがある。臣下であつて主君に仇討つというのはどうかな」

「昔、桀王、紂王が家臣を殺したのが無道だというが、楚王だつて子の嫁を取上げ、太子を廃し、讒言佞言を信じ、忠良な臣を殺したのだ。おれは他国の兵で郢都に攻入り楚の汚穢を掃討するつもりだ。しかも肉親の仇でもあるんだから。おれは楚を滅ぼさなければ天地の間には立たずと誓いを立てたのだ」

「君に楚を討てと言うのは不忠になるし、討つと言えど君を不孝者にしてしまうことになる。君の思うようにやりたまえ。親友の誼でこのことは一切口外しない。但し、君が楚を滅ぼせば、おれは必ず楚を再興させる。君が楚を危くすればおれはきつと楚を救うつもりだ」
二人はそう誓い合つて別れた。一日足らずで宋に着き太子建を訪ねて行き、二人は抱き合つて泣きそれぞれ平王の不満を言い合つた。

「太子は宋君にお会いになりましたか」

「宋は内乱が始まったばかりで君臣は争いの渦中だ。だからまだ会えていないんだ」

ところで宋の内乱というのは以下の通り。

宋君は名を佐という。宋平公の庶子である。平公は寺人尹戾の讒言を信じ太子痤を殺して佐を太子に立てたのである。

周景王十三年（紀元前五三年）平公が亡くなり佐が継位した。これが宋元公である。元公の人となりといえは、容貌はぶ男、性格は軟弱

且つ自己中心的で誠実さに欠ける人物である。代々宋の卿を務めていた華氏の勢力が大きいのを嫌って公子寅、公子御戎、向勝、向行等と謀り華氏を除こうとした。向勝はこの謀を向寧（第一次晋楚不戦協定立会人 向戌の子）に洩らし、寧は華向、華定、華亥と親しいので事前に謀り機先を制した。華亥が偽って病氣だと言うと群臣が見舞いに集り、そこで華亥は公子寅と御戎を捕えて殺し、向勝、向行は捕えて倉庫に監禁した。元公はこれを聞いてすぐに自ら華氏の門を敲き二向の釈放を要求した。華亥は元公を脅迫し世子並びに側近の人質を要求してやつと要求に応じた。

「昔、周と鄭が人質を交換したように昔から質交換はある。わしも世子を卿に質に出すから卿もお子を出してもらいたい」

と元公が言う、華氏は相談して結局華亥は無感、華定は啓、向寧は向羅とそれぞれ息子を公室に質に差し出した。元公も世子欒と母の弟辰及び公子地を華亥の家に質に出した。そこで華亥はやつと向勝、向行を釈放し元公は二人を連れて朝廷に戻った。

元公と夫人は世子欒の事が気になって毎日華氏へ行き世子に会い、世子が食事が終るのを見て帰っていた。華亥はそんなに不便を掛けるのはまずいと思い、世子を公宮へ帰そうとした。元公は大変喜んだ。しかし、

「元公が信じられないから太子を質にしているんじゃないですか。質を帰してしまつたら必ず禍が起きますよ」

と向寧は華亥に猛反対した。元公は華亥が途中で考えを翻した事を聞き激怒し、華氏に攻撃をしかけるために大司馬華費遂を呼出した。

「世子が先方におられる事をお考えになつておられますか」

「世子の死生、それは運命だ。わしはもうこの恥辱を我慢できん」
「殿のお心が決まつておられるのでしたら、この老臣どうしてわが華一族を庇つて君命に違ふような事を致しましょうや」

費遂は早速兵を整えた。元公は遂に受入れている人質の華無感、華啓、向羅を全員斬首し華氏攻撃に入った。華登は以前から華亥と親しかったので急いで華亥の元へ急行しこの事を報告した。華亥は急遽家兵を集め迎撃したが敗れた。向寧は世子を殺そうとしたが華亥は、
「君主から処罰を受け、その上に太子まで殺したのでは人々に何を言われるかわからない」

と言つてその質を帰してやり一族ともども陳国へ出奔した。
華費遂には三人の子があつた。長男は華緇、次男は華多僚、華登はその三男である。多僚はもとと緇と不仲で華氏の乱の原因になっている。

彼は元公に、

「華緇は亥、定と謀り彼らを陳から呼寄せ内応しようとしている」と讒言した。元公はそれを信じて寺人宜僚にその事を費遂に連絡させると費遂はそれに対し、

「これはきつと多僚の讒言です。殿は緇をお疑いになつて追放をお命じになつたのでしょうか」

と言つた。華緇の家臣張勾は密かにその情報を手に入れ宜僚にたずねた。宜僚が口を開こうとしなかったので張勾は抜き身の剣を手にし、

「仰つていただければこの剣がものを言いますぞ」

と脅迫すると宜僚は驚いて本当のことをしゃべった。張勾は華緇に

報告し多僚を殺すように進言したが、華胤は、

「すでに登は出奔しており、司馬である父上（華胤遂に）ご心配をかけている、我々兄弟が傷つけあつて自分だけいいめをするわけにはいかない。仲間割れだけは避けたいものだ」

と言つて父親に別れの挨拶に行つた。張凶も同行した。ちょうど費遂が朝廷から出て来たところに、多僚が御者をしていた。張凶はそれを見ると怒りが爆発して剣を抜くなり多僚を斬り殺した。華胤遂を奪つて盧門（宋の南門）を出て南里に駐屯し、陳に使者を送り華亥、向寧らと一緒に謀叛に加わるよう誘つた。

元公は樂大心を大将に南里を包圍させた。華登は借兵のため楚へ行き平王から大将選越率いる華氏救援軍を出してもらふことに成功した。

て、
こういう宋の事情の中で伍員は間もなく楚軍がくるという情報を得

「もう宋国に住まうことはできなくなりました」

と言つて太子建とその母子を連れて西の鄭国に逃避した。その事を詠つた詩がある。

千里の宋も休む間なく 盧門の天空に再び金鼓轟く
孤臣孽子（けつしん） 艱難絶えず 又も榮陽（けいよう）に向け急ぎ鞭打つ

榮陽：鄭の地名

楚軍が華氏の救援に、また晋頃公が諸侯を率いて宋の救援にやつて来

孤臣孽子 孤臣即ち君から疎遠（そえん）にされた失勢の臣 伍員、孽子即ち失寵の庶子 太子建。

た。しかし諸侯は楚とは戦いたくなかつたので宋に南里の包圍を解くよう説得し、華亥、向寧らが楚に亡命するのを赦して両軍は引揚げた。

さて話し変わつてこの頃、鄭国では上卿の公孫僑（こうそんけい）子産（しさん）が亡くなつたばかりで鄭定公は非常な悲しみの中にあつた。前々から伍員が三代の忠臣の後裔で英雄無比である事をよく知つていたし、晋と鄭は親密で楚を仇にしていたので、太子建が来たと聞くと非常に喜び、公館に入れて厚くもてなした。建と伍員は鄭伯に会うことに冤罪の状況を泣いて訴えた。鄭伯は、

「わが国は兵力が小さくお役に立てません、仇を討たれるなら晋とお謀りになつた方がいいでしょう」

世子建は伍員を残して自ら晋頃公に会いに行つた。頃公は詳細を聞いて世子を宿舎へ届けておいて、六卿を呼出し楚討伐について協議した。六卿とは魏舒、趙鞅、韓不信、士鞅、荀寅、荀躒である。晋はこの六卿が権力を握り実力が拮抗して君弱く臣強しの状況だったから、頃公が自ら決定する事はできなかったのである。

魏舒、韓不信は賢者で聞えているが後の四人は皆権勢に貪婪な連中で特に荀寅は賄賂に目がない。鄭子産が国政を担当していた頃は礼をもつて両国の拮抗を図り、晋の各卿も畏敬の念をもつて彼に接していた。遊吉が代わつて執政になると荀寅はひそかに人を遣つて吉に賄賂を要求した。吉が従わなかつたので荀寅は鄭を恨み、頃公に、

「鄭は晋楚間で二股膏藥のように去就が定まりません。現在楚の世子が鄭にいて鄭は彼を信じていますから、世子に内応させれば鄭を滅ぼす事ができます。太子をその鄭に封じてからゆつくり楚討伐を図る、とい

うのは如何でしょう」

頃公はその案を探り、荀寅に命じて世子建にその計画をそつと話しして協力を要請させると、建は喜んで承諾した。

建は晋の頃公に別れを告げ鄭に帰って伍員と相談した。伍員は諫めて、「昔、秦將杞子と楊孫が鄭襲撃を計画し、失敗して身の置き所を失いました。夫人も我われに忠信をもつて遇してくれています。それなのにどうして陰謀を図れましょう。それは僥倖の計であり絶対やつてはなりません」

「わしはもう晋君に約束してしまつたよ」

「晋と呼応しなくても問題にはなりません、鄭を騙すという事は信・義にもとる事で人間性の面で問題です。実行すればすぐにも禍を招く事になりますよ」

建は国が欲しくて、遂には伍員の諫めを聞かず、家財を投げ打つて命知らずを雇い、鄭伯の側近と交流を持って彼らの助けを期待した。側近は賄賂を受取つたので次々と仲間を広げていった。晋は隱密を建のもとに送り約束の期日を連絡した。その陰謀は次第に漏れ始め、遂にあるものが自首して出た。鄭定公は遊吉と計画を練り、太子建を遊吉の菜園に呼び出した。従者には入場を禁止し、三杯ほど酒が廻つたところで鄭伯が言った。

「わしは好意で太子を鄭に受入れ、十分に厚遇してきたつもりですが、太子はどうしてわたしに謀叛を企もつとするんですか」

「わたしはそんな事考えた事はありません」

と答えたものの、定公が側近に強く詰問させると太子も言い逃れできなくなつた。鄭伯は激怒して席上力士に建を捕えさせて斬り、併せて賄

賂を受取つて黙つていた二十数名も処刑した。伍員は宿舎にいて突然むしの報せが胸騒ぎが止まらなくなつた。「太子が危ない」と思う間もなく建の従者が宿舎へ逃げ帰り太子が殺された事を知らせてきた。伍員は直ちに建の子勝を連れて鄭城を逃出したが、適当な亡命先が思い当たらない。仕方なく呉に避難する事にした。

太子の死は人の行為を無にした自業自得である。詩に言う。

父子金を隔て仇の如く、鄭君の好意を建は謀反で報ゆ
人情がよように量り難く、英雄の義心も冷え切つたり

伍員と公子勝は鄭の追捕を恐れ、昼伏夜行、その千辛万苦は筆舌に尽し難い。陳を通つたが、陳は足を止める处ではないとわかつていたので通過し更に東へ急ぎ数日。昭関（現安徽霍山県の北に近づいた。この関所は小峴山の西にあり二つの山に挟まれ、その間に一本だけ路があり、廬州濠州往来の要衝でもある。この関所を出るとすぐ長江で、呉に通じる水路になっている。もともと地勢が狭く険しいので防衛拠点としてこの地に関所を設け守らせていたが、最近では伍員検問のためにわざわざ右司馬の遠越に大軍をつけてここに駐在させていた。伍員は昭関から六十里程はなれた歴陽山まで来たが、警戒が厳重で不用意に進む事ができず密林の中に身を隠していた。ある時、杖をついた翁がこの林に入つてきてふと伍員に会いその容貌が只者でないので拱手の礼をとつて

81 父子即ち楚平王と太子建。「釜を隔」は魏曹植七步詩「豆を煮ると豆莢を燃やす、豆は釜中に在て泣く」・曹丕曹植兄弟葛藤が引用されている。（北京金盾出版社校注 第31回注記）を参照

82 昭関 春秋時代楚の東部境界の関所で楚呉境界の要衝 南約70 km

挨拶した。員も答礼すると、翁が、

「あなたは伍氏の息子さんではありませんか」と言うではないか。員は非常に驚いた。

「どうしてそんな事をお聞きになるのですか」

「わたしは扁鵲^{へんじやく}の弟子で東皋公と申すものじや。若い頃から医術で列国を歴訪しましたが、今は年をとつて此処で隠居しています。数日前に選將軍にちよつとした病気で呼ばれて行つた時に見た、関所の門に懸かつていた伍子胥^{ごしよ}の似顔絵があなたとそっくりだったのでちよつと尋ねてみたのです。お隠しになることはございません。むさい家ですがわたしの家が山の裏手にありますのでちよつと寄つていってください。ご相談に乗れるかもしれません」

伍員は翁にそこらの老人とは違ふ雰囲気を感じ公子勝と一緒に東皋公に随いて行つた。数里ほど行つた所に一軒の粗末な家があり東皋公は伍員を招じ入れた。草堂に入り伍員は改めて挨拶をした。東皋公は慌てて答礼し、

「此処はあなたに居ていただく所ではございません」

と言つて二人をその建物の西後方に案内した。小さなまがき門をくぐつて竹園を通り過ぎると園の後ろに土屋が三室あつた。その入口は穴のようで頭を下げてにじり入つた。中はベッドと小机があり左右には小さな明かり窓があつた。東皋公は伍員を上座に案内したが、伍員は公子勝を指して東皋公に言つた。

「幼主がいます。わたしはお守り役です」

「どなたですか」

「こちらは楚太子建殿のお子勝殿でございます。某が実は子胥と

申します。某には父と兄を殺した怨み骨髄の仇がございまして報復の誓いを立てております。老先生には隠し立ては致しませんのでどうかご内密に」

東皋公は勝を上席におき、自分は伍員と東西に向かい合つて坐つて員に言つた。

「わたしは人を救うことはできませんが、人を殺すなんてことは考えた事ありません。此処に住んで一年半になりますが誰にも知られていません。昭関は非常に厳しいですが公子はどのようにして越えるお積りですか。よほどの策がなければ無理ですよ」

「先生何とか我われをお救いいただけませんか、将来きつとご恩返しをさせていただきます」

「此処は人里離れています、ゆつくり寛いでください。あなた方が関所を越えられる方法を考えて見ましょう」

東皋公は毎日酒食で款待はしてくるが一週間たつても関所越えの話は一切ないので伍員は東皋公に言つた。

「大きな仇討ちを控え、一刻が一年の思いです。何もできずこんな時間が過ぎてはわたしは死人のようです。どうか我われの気持ちをお汲み取り願います」

「わたしの考えはもう出来上がっています。ある男が来るのを待つているのです」

伍員は疑心で気持ち揺れた。その夜は眠る事ができず、東皋公の家を出ようとも思つたが、それでは関所を越える事ができないし却つて危険な事になる恐れもある。このまま居るにしても何時まで放置されるかわからないし、誰かを待つているというがいったい誰を待つているのか

もわからない。あれやこれやと思ひあぐね不安に何度も寝返りをし、身心にとげが刺さつたようで心休まらない。横になつても不安で起き上がり、落ち着かず部屋の中をうろろして夜が白むのも気がつかなくつた。東皋公が戸を敲き入つて来て、伍員を見て驚いた。

「あなたの髪やひげはどうなさつたのです。突然そんなに変わられて。何かご心配事がありましたのですか」

員は変に思つて鏡を見るとなんと白髪交じりになつてゐるではないか。昭関を越える前のこれからという時に一夜で白髪になつてしまつた。伍子胥が昭関を越えるのに一夜のうちに白髪になつたという言い伝えは出鱈目ではなかつたのだ。

員は鏡を地面に叩きつけて、

「大事に未だ何も手が付いていないのに、もう髪が白髪交じりになつてしまつた、神さま……」

と言つて激しく泣いた。しかし東皋公は、

「これは嘆く事ではありません、むしろいいことですよ」

と言ふ。員は涙を拭つてその訳をたずねた。

「おたずね者の似顔絵は精悍な顔つきですから見分け易いですが、急に白い頭になればすぐには判別しにくく普通の人の目はごまかし易くなりましたよ。それにわたしの友人ももう来てくれますからわが計は成功したようなものです」

「先生の計とはどういうものですか」

「わたしの友人は復姓（ふくせい）二字の姓諸葛（しよかく）司馬等（しまたどう）の皇甫（こうほう）名は訥（とつ）という者で此処から西南へ七十里程のところの龍洞山に住んでいます。この人は背丈が九尺、眉の中が八寸であなたに似てゐるんです。彼をあなた

に扮装させ、あなたは彼の召使になつて、関所を通るとき彼が捕えられたらその取調べの間にあなたは関所を通り抜ければいい」

「先生の計は確かに巧妙ですが、あなたの友人に累が及ぶ事が心配です」

「それは心配いりません。彼を救う妙計があり、彼とは事前に細部の話し合ひをしています。この人も慷慨（こうがい）の士で今回の事は積極的に担当してくれています。ご安心下さい」

そう言うと、皇甫を士部屋へ呼んで伍員に引き合せて、見るとなるほど自分に似てゐる。伍員は非常に喜んだ。東皋公は伍員に薬湯を渡しそれで顔を洗つと顔色が変わつた。黄昏時（くわんごん）を待つて、伍員の白衣を皇甫訥に着せ別の茶色の肌着を伍員に着せて従者に見立て、勝も村の子供のように変装させた。伍員と公子勝は、東皋公に何度もお辞儀をして、

「何時か晴れて世に出られた時は必ずお報いいたします」

と言つと、東皋公は、

「わたしはあなたが冤罪で苦しんでおられるのを気の毒に思つてお助けしているだけです。どうしてお札など望みましよう」

員と勝は皇甫訥に随ひて夜を徹して昭関に向かい、夜明け頃ちようど関所が開いた頃に着いた。

楚將遠越（いんえつ）は嚴戒態勢を敷き、北の者で東に行こうとする者には厳しく検問してから通すようにと嚴命を出していた。関門の前には伍子胥（ごしよ）（伍員）の似顔絵が有りそれと一々突合せ、まさに水も漏らさない、鳥も飛び越えられないほどの厳しさである。

皇甫訥が関門に着くと関卒がその容貌を見て、似顔絵とそっくりだし白い縞の服を着、おどおどしている様子を見てすぐに取押す遠越（いんえつ）に報告

した。越が急いで駆けつけ、

「奴に違いない」

部下どもに命じて訥を関所の中へ抱きかかえるように運び込ませた。

訥はわけが判らない振りをしてただ無実を訴えた。関守たち並びに関所の前後の庶民は伍子胥が捕まったと聞き、みな面白がつて子胥を見ようとした。伍員は関所の門が大きく開いたままになっている隙に公子勝を連れて人だかりに紛れて関門を紛れ出た。捕り物騒動で混乱状態だった事に加え、服装が民衆と同じだった事、顔色が変わっていた事、髪が白く老けるて見えた事などですぐには誰も気がつかず、更には子胥がつかまつたという事で検問が疎かになっていたこともあり、雑踏に紛れる事ができたのである。大鯉はついに金の釣り針をはずし尾を振り頭を振って逃げて行つた。詩がある。

千群の虎豹 雄関に抛るも 逃亡の臣既に下山せり

是より呉に勝気備わり 郢都に戦事絶える事なし

楚將蘧越は皇甫訥を縛り上げ拷問で自白させ郢都へ護送する積りであつた。しかし訥は、

「わたくしは龍洞山の隱士皇甫訥です。知人の東皋公と東方へ遊びに行く予定で何も法に触れるようなことはしていません。」放免願います」と言つと、蘧越はその声を聞いてふと思ひ出した。

「子胥の目は稲光のように鋭く声は鐘のような大声だったが、この者は顔は似ているが声が小さい。放浪の風霜にでこんなに変わったのだらうか」

そう疑問に思っていた時、東皋公が来たとの連絡があつた。蘧越は訥

を下げさせて東皋公を招じ入れそれぞれ客人主人の席に着いた。

「わたしは関を出て東遊するつもりでしたが、將軍が逃亡中の伍員を捕えたと聞きましたのでお祝いに上りました」

「一人捕えたのですが、容貌は子胥に似ているんですが未だはつきりしないんです」

「將軍は子胥父子とは楚朝で一緒にいたのにお判りにならないのですか」

「子胥の目は稲妻のように光り、鐘のような声でしたがこの者は目も声も小さいので、長い間の憔悴でこうなつたのかと思ひちよつと迷っているのです」

「わたしも子胥と面識があります。私に見せていただけませんか、すぐ分かんと思ひます」

蘧越は容疑者を連れてくるよう命じた。皇甫訥は東皋公を見るなり、
「関所を出る約束の時間を決めていたのに、どうして遅れたんです。おかげでわけもわからず犯罪者にされて屈辱を受けたんです」と怒鳴つた。東皋公は笑いながら、

「將軍これは誤認逮捕ですよ。この人はわたしの村の友人の皇甫訥です。一緒に旅行しようと時間を決めて関所の前で会う約束をしていたんですが、彼がちよつと早く来すぎたのです。お疑いでしたら此処に通関許可証がございます。逃亡者のために嘘を言うわけがありません」と蘧越に言つて袖の中から許可証を取り出して蘧越に見せた。越は誤認を恥じて自ら縄を解き、酒を出して慰めた。

「これは担当者が本物を見分けられなかったためで、どうか悪く思わないで下さい」

「国のために法を執行しておられるのですから、どうして將軍のせい
にできませんよう」

遠越は旅行の足しにしてくるようにと金帛（金や絹）を渡し、二人は
感謝して関所を出た。遠越は気持ちを改めて従前どおり嚴重な取締りを
命じた。

さて、伍員は昭関を出る事ができ喜々として呉に向かつていたが、数
里も行かないうちに一人の男に出会った。伍員のよく知っている左誠と
いう男で、昭関の検問役の小吏である。彼は城父の出身で、かつては伍
家父子の巻き狩りの供をしたこともあり員をよく知っているので伍員を
見て驚いた。

「朝廷では公子を緊急捜査していますが公子はどうやって昭関を越
えたのですか」

「主君はわたしが夜光玉を持っているのを知っておられて取り上
げようとなさったが、その時すでに人手に渡っていたので取って来て遠
將軍に報告して、通関を許してもらったんです」

左誠は信じられず、

「楚王は公子を逃がした者は一族斬刑と発表しています。あなたには
昭関に戻って主將の審問を受けていただいてからでないとお通しできま
せん」

「主將に会って、美玉はそなたに渡したと言えはそなたはどう言っ
て申し開きをしますか。今わたしを逃がしてくれば将来会った時かなら
ず恩返しをしましょう」

左誠は伍員が賢才勇猛の士だという事を知っていたので、彼の話を開
きそのまま放免した。昭関に帰ってもそのことは話さなかった。

伍員は路を急ぎ鄂渚にたどり着いた。長江の向こう岸を遙かに望み
茫々浩々波濤万里、でも船は一艘も見えない。大河に前を阻まれ後ろに

は追捕の兵が心配で非常な焦燥にかられていた。ふと見ると釣魚の翁
が舟に乗って下流から遡ってくるではないか。天の助けと急いで呼んだ。

「その釣りの人やーい、河を渡してくれないかー、急いでいるんだ
ー」

釣魚の翁はやつとわかつてゆらゆらと小船を漕ぎ寄せようとしたが、
岸の上に人の動きが見えたので、翁は大きな声で歌を歌った。

明るい日が沈み輝く月が昇るころ

河を下った蘆の洲で会いましょう

伍員は歌の意味を理解して、直ちに下流のほうへ河に沿って急ぎ、蘆
の洲で蘆荻の中に身を隠した。しばらくすると先ほどの釣魚の翁が舟を
寄せて来たが、伍員が見当たらないので、そこでまた歌を歌った。

日はもう沈んだよ、あなたはどこにいますか

月はもう高く上がったよ、さあさあ早く渡りましょう

伍員が公子勝を連れ蘆の中から出てきたので急いで翁は招き寄せた。
二人が船に乗ると棹を差し熟練した櫂捌きで飄々と沖に出た。

一時（2時間）足らずで対岸に着いた。

「昨夜、星がわたしの船に落ちる夢を見ました。きつと然るべき人が
渡河の事を言ってきたのだらうと思つて舟を出したのです。期せずして
あなたにお会いできました。一目お顔を拝見いたしましたただでただのお
人ではない事がわかりました。どなたさまかお教えいただけますか」

伍員は名前を言った。翁は非常に驚いた。そして、

「空腹のご様子ですので食事を取って参りましょう、少々お待ち願ひ

ます」

と言つて、舟を楊の木に係留して、村へ食べ物を取りに行った。なかなか帰つてこない。

「人の心は測りがたい。まさか人を集めて我われを捕えに来ようとしているんじゃないだろうな」

員は勝にそう言つて又蘆の花の飛び交う茂みの奥に隠れた。

しばらくして翁が麦飯、鮑の羹、濁酒を持つて楊の下へ戻つて来たが、伍員がいな。彼は大きな声で、

「蘆中の人。わたしはあなたを売るような者じゃありませんよ」

と呼んだ。伍員はそれを聞いて「こそと蘆の茂みから出て行つた。

「お腹を空かせておられるだろうと思つて食事を用意して来たのです、どうしてお避けになるのです」

「本来命は天任せですが、今はご老体におすがりするのみです。何度も不安が続いて満身びくびくなんです。決してご老体を避けているわけではございません」

翁が進める食事を十分に食べ終え、別れ際に佩剣をはずし翁に渡し、

「これはわが祖父が先王から賜つた三世伝来の物です。中に七星の模様があり百金の価値があります。これでご老体のご恩にお報いしたいと存じます」

と言つと、翁は大声で笑つて答えた。

「わたしは『伍員を捕えた者には粟五万石の外上大夫に封ずる』というお触れを存じております。その上卿になれる賞も捨てているんですから、あなたの百金の剣をいただくわけはありません。しかも『君子無剣で旅をせず』と申します。あなたには必需品でもわたしには必要ないも

のです」

「剣をお受け取り頂けないのでしたら後日お札に伺うためにせめてお名前だけでもお教え頂けないでしょうか」

翁は怒つて言つた。

「わたしはあなたが冤罪で屈辱を受けておられるのを気の毒に思つて河をお渡したのです。あなたは後日わたしにお札をなさると言われるがそんな事されちゃ男がすたれますよ」

「ご老体は礼をお望みではないとおっしゃいますが、それではわたしの心が収まりません」

員はそう言つて重ねて名前を教えてくれるように頼んだ。

「今日偶々お会いしましたが、あなたは楚から逃避して来られたお人わたしは楚賊を逃した者です。お互いに本名で呼び合うことはできません。その上、わたしは舟の櫂をこいで生活をし、波の上で生涯を送る者です。名前などわかつて何時会えることでしょうか。万一運よくお会いする機会がありましたら、わたしはあなたを単に『蘆中の人』と呼びましょう。あなたはわたしを『釣魚の翁』と呼び下さい。こうすればお気持ちに沿う事になります」

伍員は感謝をして別れを告げ、数歩歩いて又振り返り、翁に、

「もしこの後、追捕の兵が来たらわたしの事はご内密に」

と言つた。この振り返つての一言がこの翁の命を奪う原因となつてしまったのである。

さてこの後如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第七十三回

伍員 簫を吹いて呉市で物乞いをし
專諸 焼魚を献上し王僚を刺す

ちようぎよ

ごうん

釣魚の翁は伍員を渡し食料を与えたが伍員が譲ろうとした劍は受取らなかつた。伍員は別れを告げて行こうとしたが振り向いて、翁に自分のことを内密にと追捕の兵の事を怖れて頼んだ。翁は天を仰いで嘆き、「わたしは危険を冒してあなたをお助けしたのに、あなたは未だわたしを疑つておられる。追捕兵が来て又河を渡せと言われたらどうなるかはつきりとは申せません。一死をもつてあなたのお疑いを晴らしましょう」

と云うが早いか、とも綱を解き舟を出して舵を抜き、櫂を捨て舟を転覆させ長江の沖合いで溺死した。

名声逃れ糸を垂らして隠遁数歳 楚の逃亡人を小船で渡す

君の後患無くす為潔くその命絶ち 千載に名を残す釣魚の翁

わいもん

かいけんて

ししよ

現在も武昌（武漢）の淮門外にある解劍亭は当時子胥が劍をはずして漁夫に贈つた場所ということである。伍員は翁が甘んじて溺死するのを見て慨嘆した。

「わたくしはあなたに助けられたのに、あなたはわたしのために亡くなられた。ああ、何という事だ」

ごうん

びしやう

伍員と半勝 半は楚王の姓は遂に国境を越えて呉国に入った。溧陽（現

りつやう

長江を渡したのは昭関の南、長江河岸からであつた。お札の劍を解た地点が武昌近辺とすれば昭関から約350 kmも西に居た事になり不自然ではなかつたか。

江蘇省溧陽県）に行き着いたが飢えて物乞いをして歩いた。弁当を持って瀬水のほとりで洗濯している女性がいたので伍員は足を止めた。

「弁当を少しわけていただけないでしょうか」

「わたしは母と二人暮らしで、三十になつてまだ結婚していません。

見知らぬ殿方に食事を差上げるなどという事はとてもできません」

「わたしは旅の途中金がなくなり、命をつなぐために一飯をお願いしたいのですが」

「容貌を拝見し、あなたさまはただの方ではないとお見受けいたしました。どうしてお困りところをお見捨てできません」

と言つて跪いて弁当とおつゆを差出した。子胥と勝はちよつと食べて箸を置いた。

「遠くからお出でのご様子なのに、どうぞ全部召上つて下さいな」

二人は再び箸を取り全部食べてしまった。別れ際にその女性に、

「お蔭さまで命拾ひいたしました、ご恩は決して忘れません。実は我われは亡命中ですので、我われに会つたことは内密にお願い致します」と言つた彼女が心外という風に悲しそうに溜息をついた。

「ああ、わたしは母の世話を三十まで嫁に行かず貞節を守つて参りました。本来見知らぬ殿方と言葉を交わすべきではありませんが、今日

日は思いもよらずあなたさまに食事を差上げ、話を交わし操を破つてしまったのです。女として失格ですわ。どうぞ先をお急ぎ下さい」

伍員たちは別れて数歩行つて振り返ると彼女は大石を抱えて瀬水に飛び込んで果てた。後の人は彼女の節を讀んで詩にしている。

溧水北岸の洗濯女

母に仕え操を守り男を寄せず

旅人を哀れみ弁当を供す 君は腹満ちわれ節を失う

か弱き身を捧ぐこの婦道 瀬流の尽きぬが如く永く語らん

伍員は彼女の投身入水を見て、哀れに思い指を噛み切り、その血で石の上に二十字をしるした。

尔浣紗 我行乞 我腹飽 尔身溺 十年後千金報徳

（あなたは洗濯女、吾は物乞う旅人。吾は腹一杯あなたは入水。十年後その恩に千金で報いん）

伍員は書き終わると後で他の者に見られるのを恐れ土でこれを覆い隠した。

溧陽を過ぎさらに三百里ほど行くといふ所に着いた。ここで一人の壮士に会った。おでこで目が落ち込み、飢えた虎のようで、声は雷のようである。大男と殴り合いの喧嘩をしていて周りの人は一所懸命に止めようとしていたが止まらない。ところが道端の家から、

「専諸やめなさい」

と婦人の声が出た。するとその男は畏れるようにすぐやめて家に入つた。

伍員は不思議に想つて傍らの人にたずねた。

「あんな壮士がどうしてあの婦人を畏れるんですかね」

「彼はこの町の勇士で、力は万夫に当たり、権門を畏れず、日頃から義に感じる人です。人々が不満に思っている事があればすぐに掛け出て行つて死力を尽くす男です。先ほど家の中から制止した女の人は彼の母親です。専諸と呼びましたがそれが彼の名前です。大変親孝行で母親に仕えて彼女の言う事は絶対服従です。どんなに怒りの真つ中でも母親が止めれば必ず聞きます」

「これこそ真の烈士だな」

員は感心し、翌日衣を着替えて彼の家を訪問した。専諸は彼を招じ入れ、その素性をたずねた。員は名を名乗り併せて冤罪を受けた経緯を話した。

「あなたは大変な冤罪を受けておられるのですね。それでしたら呉王にお会いになつて兵を借りて仇討ちをすべきです」

「推薦者がいないのです。自薦するわけにもいかず」

「おつしやる通りですね。ところで今日わざわざ陋屋へお出で下さったのは何かお話がありなのでしょうか」

「あなたが大変親孝行だとお聞きましたので、尊敬申し上げ友人になりましたくて参つたわけです」

専諸は非常に喜び、奥へ入り母親に話をして母の許可を得てすぐに伍員と義兄弟の契りを交わした。伍員が一歳年上なので兄となった。専諸の母親に挨拶をし、彼の妻子にも会つた。鶏を殺して血族に会つたように歓迎した。伍員と勝は専諸の家で一晩泊まった。

翌朝伍員は専諸に言つた。

「都へ行って呉王に仕官する機会を捜そうと思つていますが」

「呉王は勇猛ですが傲慢な人です、むしろ公子光殿の方が下の者を大切にするという事です。将来きつとあの方が成功なさると思いますよ」

「あなたの忠告、頭に置いておきましょう。後日あなたが必要になったらときは、連絡しますので断らないでくださいね」

専諸は承知し、三人は別れた。

伍員と勝は都へ向かつて歩を進め、呉都梅里に着いた。城郭は劣るが、街は大きく船の発着、車の往来は殷賑である。しかし伍員にとつては何

処にも親しい人がいない。そこで半勝を郊外に隠しておいて、人目を引くように、髪を乱し顔を塗りたくり素足で、斑入り竹の簾（たて簾）を吹き歌を交えて街中物乞いをして歩きまわった。歌は三番まである。

一番 伍子胥よ伍子胥 宋鄭渡り歩き 寄る辺なく

千辛万苦哀れなり

父の仇を討たずして この身を我は如何せん

二番 伍子胥よ伍子胥 昭関の一夜で鬚眉は白く

千驚万恐哀れなり

兄の仇を討たずして この身を我は如何せん

三番 伍子胥よ伍子胥 芦花の渡し場 溧陽溪

千生万死呉境越え 簫吹き物乞哀れなり

父兄の仇を討たずして この身を我は如何せん

街の人は誰も彼を知らなかった。

時に周景王二十五年、呉王僚七年（紀元前五二〇年）のことである。

ところで呉の姫光（公子光）は呉王諸樊（寿夢の長男）の子である。諸樊が亡くなると当然光が継ぐべきであるが、長男から順次継位し最後に季札（末子四男）に譲れという父寿夢の命による継承規則に従って余祭に譲った。余祭（次男）も夷昧（三男）も寿夢の主旨に従った。夷昧が亡くなった時も寿夢が希望していた季札はどうしても継位を承諾しなかったのである。そうならば本来元に戻って諸樊の子が継位すべきであったが、如何せん王僚（夷昧の子）が譲らず自分で王になってしまった。公子光は

内心不満で密かに王僚に対し殺意を持っていた。しかし群臣は皆王僚党で、一緒に策謀を練る者がいないため隠忍し、人相をよく見る被離（ひり）というものを味方にし市の役人に取り立て、自分を補佐する然るべき傑出した人物を捜させた。

ある日伍員はいつものように呉の街を簾を吹いて歩いていた。被離は簾が余りに悲しい音色なのでよく耳を澄ましやうとその主を見つけた。彼は伍員に会って、今まで沢山の人相を見てきたがこんな相は未だ見たことがないといつて非常に驚き、拱手の札をとって彼を誘い上席を与えた。

「楚王が忠臣伍奢を殺しその子子胥が国外に出奔したと聞きました。が、おそらくあなたがその伍子胥殿ですね」

と被離がたずねたが伍員は慎重に直にはそうだとは言わなかった。被離が重ねて言った。

「わたしはあなたを害しようという者ではございません。あなたのご容貌にただならぬものを感じ、富貴の道をご紹介しようと思っているのでございます」

それを聞いて伍員はやつと事実を彼に話した。早くもそれを宮中の者が聞きつけ王僚に知らせた。王僚は被離に伍員を引見すると命じた。被離は密かに姫光に報せておいて、伍員に沐浴更衣させて一緒に入朝し王僚に拝謁した。王僚は員の魁偉な容貌を見、彼と話をしてみても、彼の賢才を知り直ちに大夫に封じた。翌日参内して札を言った後、話が父兄の冤罪に及ぶと切齒扼腕して目から火が飛び出る凄みを見せた。王僚はその気概にうたれ又憐れにも思つて仇討の出兵を認めた。

姫光はもともと伍員の智勇を聞いていたので彼を自分の手許に置き

たかったが、先に王僚に会ったと聞き、僚に取られる事を心配して心中穏やかでなく、すぐに王僚に会った。

「楚を逃亡した伍員がわが国に來たと聞きましたが、どういふ男だとご覧になりましたか」

「賢孝兼ね備えた立派な男だよ」

「どうしてそう思われたのですか」

「非常に勇壯な男で国事について考え方を話し合つたが、一々筋が通つており大変な人材だよ。父や兄の冤罪を晴らす事を片時も忘れた事がなく、わしに軍隊を貸して欲しいと言つてゐる。非常に孝心のある男でもある」

「王は仇討をお許しになつたのですか」

「憐れに思つて承諾してやつたよ」

「万乘の君が匹夫のために出兵されるのは如何でしょうか。呉と楚は長期にわたつて交戦して参りましたが、一度も大勝した事はございません。子胥のための出兵は匹夫の怨恨を助けることで、国辱を重ねる事になりましょう。勝つても彼の溜飲が下るだけで、破れでもしたら益々天下の物笑ひになります。是非中止なさるべきです」

王僚はこの諫言を聞きいれ、楚への出兵は取止めた。伍員は出兵取り止めが光の諫言によると聞き、光には口に出せない秘めた考えがあるのだと思ひ、大夫の職を断つた。

「子胥は王が出兵を取止めたので大夫を断りましたが不満の表れです。お用いにならないほうがよろしいと存じます」

光の言葉を信じて王僚は伍員を避け、陽山（江蘇蘇州の山）付近の百畝の田を与えて王の許から辞去するのを許した。

員は勝と一緒に陽山の麓で田畑の耕作生活に入つた。姫光はそつと米粟綱などの土産を持つて陽山へ出向いた。

「子胥殿は呉楚の国境を越えてこられましたか、途中であなたのような才勇の士にはお会いになられませんでしたか」

「わたしはおつしやられるような者ではございません。ただ專諸という者に会いましたが、彼こそ真の勇士と言ふべきです」

「ご面倒おかけますがその專先生にお会いしたいですね」

「專諸が住んでゐるところはここからそう遠くはありません、直にお召しになれば明朝にも拝謁させる事ができます」

「才勇の士であればすぐにでも行つてお会いしたい。呼び出すなんて事は必要ありません」

公子光は伍員と同乗し直接專諸の家へ向かつた。專諸は街で豚の解体を手伝つて刃を研いでいた。やつて來た公子光らの車を避けようとするのを見て、伍員が車の上から、

「おくい、わたしだ」

專諸はそれを見て慌てて肉きり包丁を置いて伍員が車を下りるのを待った。員は專諸に公子光を紹介した。

「この方は呉国の公子光殿です。そなたの才勇を慕われてわざわざ会いに見えられたのです。お話を聞いて欲しい」

「わたしは何の自慢できるところもない田舎町の小市民です。ご来駕いただく価値のある者ではございませんが」

と言つて公子光に拱手の礼をして家へ案内し粗末なまがき門を頭を下げてくぐつた。公子光が先ず日頃から慕つていた旨の挨拶をし、專諸も答礼した。光は年長者に贈る礼をもつて金帛を差し出したが專諸は固

辞した。伍員が傍らから強く勧め、やつと受取る事にし、これより專諸は公子光の麾下に入る事になった。

光が毎日の粟肉、月々は絹の反物を給し、その他度々母親に挨拶に行くので專諸はその気持ちに感激していた。

ある日、

「わたしは一介の田舎者に過ぎません。公子の庇護をお受けして、何もお返しできていません。どうか用がございましたらお申し付け下さい。何なりとやらせていただきます」

と光に言々と、光は人払いをして王僚刺殺の考えを話した。專諸は、「前王夷昧さまが亡くなられてその子が立つのは当然ですが、公子はどういう名目で王僚さまを害されようとなさるのですか」とたずねた。光は祖父の遺命で四人の父親の兄弟に継承する事になっていた経緯を縷々説明してやった。

「季札殿が辞退したのだから、本来の祖父の遺命がなければ継承すべきであつた嫡子（諸樊）の子に戻るべきで、それは即ちこのわたしなんです。僚が王になる理由は何処にあります。わたしの力だけでは大事を行うには力不足なので有力な人のお力を借りたいと思っているのです」

「前王の命を前面に出してゆつくりと王側を説得して退位を求める事をしないで、どうして刺客など使つて先王の徳に傷をつけるような事をなさるのですか」

「僚は位にしがみつき力を持ち、どんなに事釈を尽くしても退位させる事は不可能です。もし話をすれば却つてこちらが危なくなります。光と僚は不倶戴天の間なんです」

「公子のお話はわかりました。でもわたくしには老母がいますので、死ぬわけには参りません」

「母上がお年を召しておられ、お子さんも幼いという事は承知しています。しかしこの大事はあなたでなくては誰もできないのです。成功すればあなたの母上はわたしの母に、あなたのお子さんはわたしの子にし、必ず誠心誠意面倒を見させていただく事を約束します」

專諸はしばらく考えていたが、納得して答えた。

「全て物事はバタバタやつては失敗します。周到な計画が大切です。深き淵の魚を漁師が手に入れる事ができるのも美味しい餌があるからです。王僚を刺そうと思えば、先ず王の好む餌を投げる必要があります、そうすれば近づく事ができます。王の好きな者は何でしょうか」

「王は食い道楽です」

「食べ物では何が一番好きなのでしょう」

「一番好きなのは焼き魚です」

「それでしたら、わたしにしばらくお暇を下さい」

「何処へ行くんです」

「呉王に近づくために料理の勉強に行つてきます」

そう言つて專諸は焼き魚の技術を学ぶために太湖へ行つた。

おおよそ二ヶ月たち、彼が焼く魚を味わつた者は皆美味しいと感嘆する程の腕になつて、再び姫光に会つた。

光は專諸を屋敷の中へ隠した。髯翁は詩に言う。

子胥公子光のため 專諸を推挙

王を弑すに手始めに 三月湖辺で炙魚を学ぶ

姫光は伍子胥を呼んで相談した。

「專諸は焼き魚をマスターしたが、どうやって王に近づくかだ」

「鴻鵠は翼があるから思いのままにするのが難しいのです。鴻鵠を掣肘するには先ずその翼をもぐべきです。公子慶忌の筋骨は鉄のようで万夫不当、素手で飛鳥を攫み、猛獸を捕えるとも聞いています。王僚の傍に常に彼がいたのでは手のつけようがありません。その上王弟の掩余、燭庸は兵権を握っています。專諸がたとえ竜虎を捕えるほどの力があっても容易に事が運ぶとは思えません。王僚を倒すには先ずこの三人を除かなければなりません。またそうしなければ、幸い王僚を除く事ができたとしても王位は安定しないでしょう」

光はしばらく考えていたが、はたと何か考えが浮かび、

「その通りですね。あなたはしばらく田に戻っていて、好機が来たら相談に乗って下さい」

と言って二人は分かれた。

この年周景王が崩御した。嫡世子猛、嫡次子匄、長庶子朝がいたが、景王は朝を可愛がっていて、大夫賓孟に世子の変更をしろと言っていたが実行前に亡くなった。

劉猷公摯も亡くなりその子劉卷字伯蚡が継いだ。彼は元來賓孟と合わず、單穆公旗と一緒に賓孟を殺し世子猛を立てた。これが周悼王である。尹分公固、甘平公觶、召庄公奭は子朝に仕えていたので三家で上將南宮極に指揮を取らせ劉卷を攻撃した。卷は逃げ出し、單旗は王猛を奉じて皇に駐留した。子朝は鄆伯に皇を攻めさせたが、伯は敗死した。

晋頃公は王室の大乱を聞き大夫籍談、荀躒に命じ晋軍を率いて王猛

を王城に戻させ、尹固も京で子朝を王に立てた。間もなく王猛が病死したので、單旗、劉卷はその弟匄を立てた。これが敬王である。周人は匄を東王、朝を西王と呼んだ。二王は互いに六年間争ったが決着が着かなかった。そのうち召庄公奭が亡くなり、南宮極も落雷で相次いで死んだので人心は動揺した。晋大夫荀躒は今度は諸侯の軍を率いて敬王を成周（洛陽）に守り届け、尹固を捕えて子朝の兵を壊滅した。召奥の子圉は逆に子朝を攻め、子朝が楚に出奔したので諸侯は目的を達しそれぞれ帰国した。敬王は召圉を裏切り者として尹固とともに市中での斬刑に処した。周人はこの処置に喝采した。

さて周敬王即位の元年は呉王僚の八年（紀元前五一九年）に当る。この時楚の故太子建の母親は鄧（湖北省鄧県）にいた。費無極は彼女が伍員と内応することを心配して平王に彼女を殺すよう進言した。建母はこれを耳にして、呉に救助依頼の使者を送った。呉王僚は公子光に鄧へ行って建母を連れて来るよう命じた。鐘離まで行くと楚将遠越が行く手をさえぎり、すぐに郢都へ知らせた。平王は令尹陽谷を大将とし、陳、蔡、胡、沈、許の五ヶ国からも徴兵した。胡の鬃、沈の逞の二君は自ら兵を率いてやってきた。陳は大夫夏囓を遣わし、頓、胡の二国も大夫を助成に出してきた。胡、沈、陳は右側に兵營を置き、頓、許、蔡の兵營は左とし、遠越の大軍は中央にいた。姫光も呉王に急使を出した。王僚は公子掩余と一緒に一万の大軍と罪人三千を率いて鶏父（現河南省固始県東南）まで出て駐屯した（この呉楚の戦いを鶏父の戦いという）。両者対峙したままなかなか交戦しない。おりしも楚の令尹陽谷が急病で亡くなり、遠越が代わって大軍を率いる事になった。姫光はこれを聞きつけて王僚に提案した。

「楚は大将を失つて軍が気落ちしているところで、諸侯たちも数は多いけれど皆小国で楚を畏れて仕方なくやつて来ている連中です。胡、沈の君主は若くて戦争に慣れていませんし、陳の夏嚙も蛮勇のみで無策な男です。頓、許、蔡の三国も長期にわたる楚の命令に疲れ切っていて心服はしてませんからあまり力も出ないでしょう。七国同役ながら気持ちばらばらで、楚の大将遠越も代ったばかりで地位も低く威厳がありませんから、軍を分けて最初に胡、沈、陳の軍に突撃しわざと敗走します。諸国は功を争つてばらばらに隊伍を乱し、楚軍は統制がとれなくなつて全軍壊滅するでしょう。弱点を見せて誘い出し、精兵を以つて攻め込むという策略です」

王僚はその計に賛成し、軍を三軍にわけ自ら中軍の指揮を執り、姫光を左軍、掩余を右軍とし、各軍十分に腹ごしらえをし出陣命令を待った。

まず最初に三千の罪人に楚の右陣營に突っ込ませた。

時は七月の晦日。兵家は晦日を忌み嫌い、胡子髡、沈子逞（胡、沈の君主 および陳の夏嚙は誰の戦いの準備をしていなかった。呉兵が来たと聞き陣門を開き迎撃した。呉兵は罪人の集団だから或は奔り或は止まり軍としての規律がない。三国（胡、沈、陳）は呉軍を蹴散らし味方同士で功を争つて追い回り全く隊伍をなさなくなつた。姫光は左軍を率いて三国の乱れに乗じて進撃し、ちょうど出遭つた夏嚙を一戟で刺殺した。胡、沈の二君も慌てて逃げ出したが、公子掩余の右軍に出遭い飛鳥が網にかかるように逃げ場を失つて一緒に呉軍に捕えられ、兵士の死者は数えられず捕虜も八百余に上つた。姫光は胡、沈両君の斬首を命じた。逆に捕虜は放して帰し、楚の左軍に胡、沈の二君と陳の大夫は皆殺された事を報告させた。許、蔡、頓の三国の将士は驚いて胆をつぶし、出て戦

うどころか皆逃げ道を捜し始めた。王僚は左右二軍を合わせ泰山のように殺到して行つた。中軍は遠越が陣を作り上げる前に兵士の大半が逃げ散つてしまつた。呉軍は逃げる楚兵を追い上げ、死体は野辺をうめ尽し、血は川を成した。

遠越は大敗を喫して五十里ほど逃げてやつと呉軍を脱した。姫光はすぐ鄖陽へ行き楚夫人（太子建の母）を奪つて帰つたが、蔡人は何も抵抗できなかった。遠越が敗残兵をまとめると半分しか残つてなかつたが、姫光が自分の部隊だけで鄖陽へ楚夫人を取りに来たと聞き、急遽夜を徹して鄖陽に向かつたが、楚軍が蔡に着いた時は呉兵はもう二日も前に鄖陽を去つていた。追撃が不可能と知り、

「ああ、昭関の守りを命ぜられ功無く逃亡者を逸し、今また七国の軍を失い夫人まで奪われ、これ大罪なり。一功無く二罪を負い何の面目あつて楚王にまみえん」

遠越は天を仰いで慨嘆し自ら縊死して果てた。（鶏父の戦い）

楚平王は呉の大勢力に恐れをなし、囊瓦に陽句の後任の令尹を命じた。瓦は、郢城が狭いのでその東側に以前より七尺も高い城壁で二十余里も広い大規模な城市を築き、従来通り郢と呼んで国都とし、旧城を紀山の南にあるので紀南城と呼び代えるよう献策した。更に西側に右腕となるように新城を築き麦城と名付け、三城は『品』の字形に並んで強力な連絡体制ができた。楚人の多くはこれを瓦の功績としたが、沈尹戌は、「子常（囊瓦）は徳政を行わず徒に工事ばかりやっているが、もし呉軍がやつてくれば十の郢城があつても何にならう」と嘲つて言つた。囊瓦は鶏父の戦いの恥を雪がんと操舟、水軍の訓練に力を入れた。

三月になり、操舟に習熟したので、のうげ囊瓦は水軍を率いて長江を下つて呉の国境に迫り、威を見せつけて帰った。呉の公子光は楚軍の侵犯を聞きつけ夜を徹して救援にやつて来たが、国境まで来ると囊瓦は引揚げた後であつた。

「楚は力を見せつけて帰るのがやつとというところだから、楚の国境ではきつと防備が抜けているはずだ」

光はそう言つて、そう隱密裏に巢を襲撃して滅ぼし、ついでにしやうり鐘離も滅ぼして凱歌を挙げて引揚げた。

楚平王は二邑が取られたと聞いて驚き、心配の余り長く寝込んでしまつて回復しなかつた。周敬王四年、ついに危篤になり、のうげ囊瓦と公子申（平王の庶長子）を枕元に呼び太子珍（建）を廢して立てた太子を頼むと言つて亡くなつた。けいふん囊瓦は卻宛と相談し、

「太子の珍殿は年が幼いしその母親（秦哀公の妹）は太子建殿に嫁ぐはずだった人で問題がある。子西（公子申）殿は長男だし立派な人だ。長男を立てれば名分が立つし賢人なれば国は治まる。子西殿ならきつと頼りになる」

と言つた。卻宛は囊瓦の話を公子申に伝えた。

申は烈火のごとく怒鳴つた。

「もし太子を廢せば王の醜い行為が明らかにになるじゃないか。しかも太子の母親は秦の出だし、すでに夫人に立てられてゐる。それ故太子はつきり嫡子である。これを廢嫡すれば秦という大きな味方を失う事になり、内外からも憎まれる。令尹はわしに禍を吹かけようというのか。狂気の沙汰だ。二度と口にしたら生かしておかん」

のうげ囊瓦は恐縮して珍を奉じて葬儀の主事者とし王位を継がせた。珍は名

を軫と改めた。すなわち楚昭王である。

れいふん囊瓦はそのまま令尹となり、はくけきん伯卻宛を左尹、えんしやうし鄢將師を右尹とし、ひわきよく費無極にも師傳の恩を感じ一緒に国政に参加させた。

ところで鄭定公は呉が楚夫人を連れて帰つたと聞き、太子建を殺した恨みを解くために、人を遣わして珠玉、かんざし耳飾りなどを贈つた。楚夫人が呉に来ると呉王は西門外に屋敷を下賜し、びしやう芈勝を彼女に仕えさせた。伍員は平王の死を聞いて胸を叩いて大声で泣き、終日泣き止まなかつた。公子光は変に思つてたずねた。

「楚王はあなたの仇じゃないですか。仇が死ねば万々歳のはずなのに、どうしてそんなに泣くんですか」

「わたしは楚王を泣いているんじゃないんです。彼の首を鼻首にできず、量の上で死なせたのが悔しいのです」

それを聞いて公子光も伍子胥に同情した。胡曾先生の詩がある。

父兄の冤恨未だ報いざるに 淫狐すでに故郷に葬らる
我手で報復の宿願成らず 霜鬢悲し又も一年が過ぐ

伍員は平王が生きている間に仇討ができなかつた事が恨めしく三日

三晩眠れず、ついに一つの策を考え付き、翌朝彼は姫光を訪ねて言つた。

「公子、大事決行のお気持ちはおありでもなかなか乗する隙が見つからないのではないでしうか」

「そうなんだ、昼夜思わぬ時は無いがいいチャンスがなくて」

「今楚王が死んだばかりで腕のある大臣は誰もいません。呉王に、葬儀の混乱に乗じて楚に出兵すれば覇を称える事も可能だと進言されたら

如何です」

「わしが大将に命じられたらどうする」

「車から落ちて足を怪我すれば王は諦めるでしょう。代わりに掩余えんよ、燭庸しよくようを推薦し、さらに公子慶忌けいきを楚討伐協力依頼の使者として鄭と衛へ派遣するよう進言すれば、この一網で三翼を除くことができます。そうすれば呉王をやるのは簡単です」

「三翼はいなくなっても延陵えんりようの季札きさつがいる。わしが篡奪しようとしているのを見ると許さないだろう」

「呉、晋は友好関係にあるのであの方を晋へ使者に出し中原諸国間のほころび状況を觀察させるように進言なさったらどうです。あの方は気位は大きいけれど策に疎いところがありますのできつと承認されますよ。遠方から帰って来た頃は高位はもう定まっています。廃立問題が議論になることはありません」

光は思わず頭が下った。

「あなたを味方にできたのは天の賜物です」

翌日、楚を葬儀に乗じて討つ策を王僚に進言した。僚は喜んで了承した。

「当然本件はわたくしが尽力しなければならいのですが、なにしろ車から落ちて足を怪我をし治療中ですので申し訳ありませんが任に当たることができません」

「然らば誰が大将として適任であろうか」

「この大事には十分に信頼おける者でなければ任せられません。王がご自分でお選び願います」

「掩余、燭庸はどうかね」

光はいい人選だと賛成し、更に加えた。

「晋楚が争っていた頃は呉は属国のようでしたが、今は晋はすでに衰微しており、楚も数次の敗戦で諸侯も離れていっております。南北から離れた者は今後東に随いてくるでしょう。慶忌けいき殿を使者として鄭、衛に派遣し両国を説得して楚を攻める連合体制を整え、同時に、延陵の季札きさつ殿に表敬訪問の名目で晋への使者になつて頂き中原の帰趨状況を視察して頂きます。王は水軍を訓練なさつてその後の事を謀れば覇業も夢ではありません」

王僚は非常に喜び、掩余えんよ、燭庸しよくようを楚討伐に出し、季札きさつは晋へ表敬訪問に派遣した。ただ慶忌けいきだけは出さなかった。

それはさておき、掩余えんよ、燭庸しよくようは二万の軍を率いて水陸両面から進軍し楚の潜邑えんゆうを包囲した。潜邑の大夫は堅守して出ず、楚へ危急を告げた。楚昭王は即位したばかりの幼君。取り巻きは誹謗を得意とする連中ばかりで、呉軍が潜を攻めていると聞くと皆慌てて何の対処もできない。

公子申しせい（子西）が進言した。

「呉は葬儀に乗じて攻めてきましたが、出て戦わなければ弱腰と見られどんどんつけ込んできます。早々に左司馬沈尹戌しんいじゆつに陸兵一万で潜邑救援にやり、更に左尹卻宛げきんに水軍二万を与え、淮水、汭水ぬいすいを下つて呉軍の後方に回らせ、前後から挟撃すれば呉將は坐して捕える事ができますよう」

昭王は喜び公子申の策をとり二將に水陸両方から進軍させた。

一方掩余えんよと燭庸しよくようが潜邑を包囲攻撃しているところへ諜報から楚の救援軍がやって来たと連絡があった。二人は驚いて軍を二手に分けて、一手は城攻めを継続し、あとの一手は迎撃に向かった。沈尹戌はあいかわ

らず守りに徹し戦わず、あたりの樵道や水汲み用の小道には石を積み遮断した。二将が驚いているところに諜報からさらに、

「楚將卻宛の水軍に沙汭から江口までを遮断されています」

との連絡が入り、呉軍は進退ここに窮まった。そこで二つの砦を築き、三拠点体勢で楚軍に対し同時に呉の国元へ救援を求めた。

「臣が鄭、衛の軍と連合を組もうと申し上げたのは正にこのような時のためだったのです。今であれば未だ間に合います」

と姫光がいうと、王僚は慶忌に、鄭、衛軍と連合し救援に出るよう命じた。結局四公子は皆出て行き姫光だけが国元に残った。

伍員は姫光にたずねた。

「鋭利な匕首はございますか。專諸を使うのはこの時です」

「あります。昔、越王允常が欧冶子^③に五本の名剣を造らせ、その内『湛盧』、『盤郢』、『魚腸』という三本をわが国に献納してきて、その内の魚腸剣が匕首なんです。短くて細いけれど鉄を切る事泥の如いです。先君より賜わり今まで宝剣として非常用に枕元にしまっておいた物です。この剣は毎夜光を発していましたが、あるいは王僚の血を吸いたかったのかもしれませんね」

光は剣を取り出して員に見せた。員はその素晴らしさに感歎しきりであつた。光は專諸を呼び出し剣を渡した。彼は光が口を開く前にその意図を感じ取り快く言った。

③ 欧冶子 春秋時代の鍛冶師。越王の依頼で、湛盧、たんろ、巨闕、きけつ、勝邪（しょうじや、魚腸、ぎょちやう、純鉤、じゆんこう）の五剣を造った。他に楚王のために龍淵、りゅうえん、泰阿、たいあ、工布、こうふの三本を作っている。何れも天下の名剣である。

「王は正に今がやるチャンスです。第一人は遠征しており、公子は使者とし出かけていて王は孤立無援です。まさにわたしの出番です。しかし、わたしの生死は自分だけで決めるわけには参りません、母に報告してからご命令をお受け致したく存じます」

專諸は帰って母親を見て何も言わずに泣いた。母親は、

「諸や、何をそんなに悲しんでいるんだい、公子からご用を頼まれたんじゃないのかえ。公子はわが家によくしてくれました。恩を受ければ必ずそれに報わなければなりません。忠孝両全と言う事はありません。すぐにお行きなさい。わたしの事など考えてはいけません。おまえがやるべき事をやり遂げれば名は後世に残るし、わたしも死んでも名誉だよ」と励ましたが專諸はそれでも恋々と別れを惜しんだ。

「冷たい水が飲みたくなつた、ちよつとすまないが河へ行つて汲んで来てくれないか」

母親の頼みを聞いて河へ水を汲みに走った。帰つてくると部屋に母がいない。妻に聞くと、

「お母さんはさつき眠くなつたとおつしやり戸を開めてお休みになりました。けつして起こさないようにとおつしやつて」

專諸は気になつて扉を開いて入つてみると、老母はベッドの上で自ら縊死していた。

子に名を成さんと身を捨てて 孝子を換えて忠臣に
世間に多き貪生の愚者 市井の老婦人に及ばず

④ 專諸は泣き崩れた。葬儀を行ない西門外に葬つてから、
「公子の大きな恩を受けているのに死を引き延ばしたのは老母がいたか

らだ。母は亡くなった。公子は急いでいるから行かなきゃならん。わし
が死ねばそなたたち母子は公子が面倒を見てくださる事になっている。
わしの事は心配するな」

と妻に言つて、姫光の許へ駆けつけ母親が亡くなった事を話した。光
は非常に申し訳なく思い同情して十分慰めてやつた。

しばらくして王僚わうりやうの件に戻つた。

「公子が呉王を供応する場をセツトなさつて、王がお見えになれば大
事は十中八九成功です」

と專諸が言つと、光はさつそく参内して王僚に、

「魚の焼き方を習得したという太湖たいこから来た料理人がいます。非常に
美味く他の者の焼き物とは一味違います。お出かけいただいて、賞味い
ただきたく存じますが如何でございましょうか」

王僚は焼き魚が大好きだから、

「兄上（王僚と光は従兄弟）に散財させて申し訳ありませんね」

と、喜んで招待を受けることにした。

光はその夜予め地下室に武装兵を隠しておき、伍員に命じて屋敷の外
に百名ほどの武士を待機させた。

翌朝、もう一度王僚に声を掛けた。僚は内宮へ母親に挨拶をしに行つ
た。

「公子光から酒宴の招待を受けましたが、何か計略うがありましようか」

「光はいつも何か気が塞いでいるようで不満な色が見えますよ。今回
の招待もどうも好意とは思えないわね、辞めたほうがいいんじゃないか
い」

「断れば彼との間に隙間が生じます。嚴重に警戒すれば恐れる事はな

いでしょう」

そこで王宮から光の屋敷まで道には三重にくまなく甲冑を着けた兵
を並べた。僚の車が門につくと光が迎えて挨拶をした。みな席につき、
光は王の横の席についた。部屋中に僚の親戚、腹心が居並び、百名の力
士が席にはべつて皆長戟を持ち利刀を佩いて王の側を片時も離れないと
いう物々しさである。

料理人が料理を運んできた。皆堂の外で衣を着替え身体検査を受けて
から王前に膝行し、十人余りの力士が剣を持って両側から挟むように進
んだ。料理人は料理を置いて王の顔を見ることなく再び膝行して退出し
た。光は酌をして敬意を示していたが、突然くじいた足が痛むぞぶりを
見せ王に言つた。

「例の足の怪我が痛み出しました。絹で強く縛ればきつと痛みは止ま
りましょう。どうか王にはしばらくごゆつくりおくらしてください、処
置が終わりましたらすぐまた参ります」

「どうぞ氣をつけて、こちらは氣にしないでください」

光はびつこを引きながら奥へ入り密かに地下室に下りて行つた。

しばらくして專諸が焼き魚を持ってきた旨を告げた。例によつて検査
を受けた。しかしあの魚腸ぎようの短剣がこの魚の腹に隠されているとは誰
が知りえよう。力士に両脇から挟まれて專諸は膝行して王前に出た。手
で魚の身を小分けして王に差上げようとした時、いきなり匕首あいくちを取り出
し王僚の胸を刺した。手の力も強かつたので三重の堅固な鎧も通して背
中に貫通した。王僚は一声叫んで息絶えた。侍衛の力士が一斉に上がつ
てきて專諸を滅多切りにし、堂中は大混乱となつた。姫光は地下室で成
功したことを知り武士たちを突撃させた。両者混戦となつたが、專諸が

うまくやつたため相手に対する精神的ダメージが大きく、しかも王僚がすでに死んでしまっているので、王側の勢は大幅に落ちていて、半数は殺され、半数は逃げ散った。王が用意した軍隊も伍員の率いる武士に壊滅された。伍員は姫光を奉じて入朝し群臣を集め、王僚が約束事を無視して勝手に王位についた罪を国人に明確に発表した。

「わたしは自分の欲で王となろうとしたものではありません。実は、王僚は不義のため自滅したのです。わたしは一時摂政となり季子（季札）殿が帰国されたら元に戻り季札殿にお仕えするつもりであります」

そう言つて王僚の遺体をかたづけ正式に葬儀を行なった。更に専諸を厚く葬りその子専毅を上卿に任じた。伍員は臣下としてではなく客の札を以てて遇する事にして特別に尊敬の意を示した。市吏の被離は伍員を推薦した功績により大夫に任じられた。国庫を開き財、穀を払い出して窮民救済を図つたので国人はほつとした。

姫光は慶忌が国外にいるのが気がかりで、腹心に帰国の時期を探らせ、姫光自ら大軍を率いて江上に駐屯し慶忌の軍を待った。慶忌は帰国途中で変を聞き、ただちに逃げた。姫光は四頭立てで追つた。慶忌は車を捨てて逃げだし、逃げ足早く馬も間に合わない。矢で集中射撃を命じたがそれも効果なく、追撃を諦め西鄙に警戒態勢を敷いて帰国した。

数日後、季札が晋から帰つて来て、王僚の死を知り直接墓へ行き喪服を着て哀悼を捧げた。姫光は自ら墓所に詣り季札に王位継承を勧めた。

「これはお祖父さまやお叔父さま方のご遺志でございます」

「そなたが力を尽くして得たものをどうしてわしなどに譲る必要があろう。先祖の祭りを絶やさず、且つ国民の支持を受けた者であれば誰でも国王になる事是可以」

光は季札にそれ以上強要できず、結局呉王となり、自ら闔閭（こうりや）は闔廬（こうりや）と呼んだ。季札は退つて臣位についた。

周敬王の五年（紀元前五一年）の事である。

札は内紛を恥じて老齢を理由に延陵に引きこもり、終生呉には行かず、呉の政事にも関与しなかった。当時の人は彼を高尚な人と讃えた。季札は亡くなると延陵に葬られた。孔子は自らその碑に『有呉延陵季子之墓』と題した。史臣の賛辞がある。

貪夫利に殉じ小利に喜怒表す 春秋の弑逆骨肉を顧す

誰か知る季子の如き国譲る人 恥じよ僚光、見よ泰伯^{たいはく}を。

宋儒は季札が継位を断つて内乱を起こす原因を作ったことを、賢者の玉の瑕と言っている。

継位を断りし故群争起き 前人継承の遺志に背けり
季札父の遺志継ぎしなば 蘇台^{そだい}は鹿走る野に変ぜしや

ところで掩余、燭庸は潜城で行き詰まり、頼りの救援軍はなかなかやつてこない。逃げ出すかどうか迷っていた時、突然姫光が王を弑逆し王位を篡奪したという情報が入った。二人は大声で泣いた。

「光が王を殺して位を篡奪したという事はどうしても許すことはできない。楚に逃げたいが楚が信じるかどうか心配だ。国には帰れず亡命すべき国もない。どうしよう」

⑧ 泰伯 太伯ともいふ 周太王古公亶父の長男 太王は三男の季歴に位を譲ろうとしたので、荊蛮に身を避け江南に呉国を立てた。僚光は王僚と姫光

⑨ 蘇台 姑蘇の事 闔閭が呉の都とした蘇州の姑蘇山に建築した豪華な建造物 後に越に焼かれ荒地に戻りました事を言っている。

と今後を話し合ったが、結論が出ない。

「このまま此処で苦しい戦いを続けてもきりがありません。夜陰に紛れて小国へ逃げ延びて後図を計るべきじゃないでしょうか」

燭庸が提案した。

「楚兵に前後を囲まれて籠の鳥だ。どうやって抜け出すんだ」

「いい考えがあります。両砦の将士に、明日楚と交戦しようと思うと嘘を言つて、夜中に兄上と一緒に目立たない服に着替えてそつと逃げ出すのです、楚も疑わないでしょう」

掩余もその案に賛成した。両砦の将士は準備万端整えて軍令を待った。

掩余と燭庸は腹心数人と見回りの小隊に扮して本営を逃げ出し、掩余は

徐国へ、燭庸は鐘吾（現江蘇省宿遷県の小国）へ出奔した。夜明けになつて

両砦では主将がいなくなったので士卒は大混乱になった。それぞれ呉へ帰ろうと舟を奪い合い、捨てられた兵たちは数知れず皆卻宛の水軍に捕えられた。諸將はこの混乱に乗じて呉を討とうとしたが、卻宛は、

「奴等はわが葬儀に乗じて攻めて来たのだが、我われはそんな奴等を真似る事はできない」

と言つて沈尹戌と一緒に引揚げ、楚王に呉の捕虜を献じた。楚昭王は卻宛の功を認め捕えた捕虜の半分を賜わり、事毎に相談し非常に敬意を示した。費無極は益々嫌つて一計を案じ卻宛を殺そうとした。

いったい費無極は如何なる策謀を使つたのであろうか。それは次回のお楽しみ。

第七十四回

燭瓦 誹謗を恐れ無極を誅殺
要離 名声を貪り慶忌を刺す

費無極は伯卻宛を非常に嫌い鄢將師と相談して一計をめぐらし、囊瓦に嘘を言つた。

「子愚（卻宛）殿が相国を招待申し上げたいとわたくしにご意向を伺うよう頼まれましたが如何でございましょうか」

「彼が招待してくれるというなら喜んで参りましょう」

無極は一方卻宛に向かって別なことを言つた。

「令尹から、あなたの家で一杯やりたいがご都合は如何か聞いて欲しいと頼まれました。如何でしょう」

卻宛は計略とは知らず喜んで承諾した。

「わたしは部下ですから令尹がお越しになられるのは大変光栄です。あす酒宴の用意をしてお待ちいたします、よろしくお伝え下さい」

「あなたは令尹に表敬として何をお出しになりますか」

「令尹が何を好みなのか存じ上げないんですが」

「令尹は武装兵が非常にお好きです。あなたの家でお飲みになりたいというのは呉の捕虜の半分はあなたの所にいるので、お酒をだしにご覧になりたいのではないですか。あなたの家兵を全部出してみてください、わたしは選抜して差上げましょう」

卻宛は言われたまま楚王から下賜された兵士およびもとの家兵全てを無極に見せた。無極はその中でしつかりした者を五十人を選び、「これでいいでしょう。正門に幔幕を張つて隠しておきます。令尹が

見えたらこれは何かと聞きますから幕を開けてご覧に入れて献納なされば、令尹れいゐんはきつとお喜びになるでしょう。他のものでは喜ばれないと思います」

郢宛はそれを信じて、正門の左に幔幕を引きその中に武装兵を置き、家にはたくさん料理や果物を用意し、費無極に囊瓦を呼びに行ってもらった。

囊瓦が出かけようとする、

「人の心は測りたいものです。わたしは先に行つて準備の様子を見てまいりますからそれからお供いたしましたしょう」

費無極がそう言つて出掛けて行つた。しばらくしてよろしなながら帰つてきて息を切らしながら囊瓦に言つた。

「非常に危ないところでした。子悪が今日相国をお誘ひしたのは好意からではなく、相国にとんでもない事を考えていたのです。幔幕の後ろに武装兵を隠していました。不用意に相国がいらつしやるとその毒牙にかかつていたでしょう」

「子悪とわしは日頃から何の問題もないのに、どうしてこんな事になつたのだらう」

「彼は王の寵愛をかさにきて、あなたの令尹を狙っているんです。しかも彼が呉に通じているという情報も得ています。潜城救援の役で呉軍の大將が逃亡し軍が乱れて逃げ出した時、諸將は呉を討とうと言いました。子悪は密かに呉から賄賂を受け、『乱に乗じるのは不義』などと言つて左司馬に無理に撤兵させました。もともと呉が我が葬儀に乗じて攻めて来たのですから、こちらが呉の乱れに乗じてもやられた事をやり返すだけで、何も引き揚げる事はなかつたんじゃないですか。呉の賄賂がな

ければ皆の意見を聞かないで引き揚げる必要がありません。子悪の思うようになれば楚は危険です」

囊瓦は未だ信じられず側近に探りにやると正門の幔幕の中に武装兵が潜んでいる事がわかつた。囊瓦は激怒し、すぐに鄢將師を呼びにやり本件を話した。

「郢宛と陽令終、陽完、陽化、晋陳の三族は仲間だ楚政を乗っ取ろうとしており、これは昨日今日の事ではありません」

と將師が答えた。

「異国の匹夫め、内乱を企むとは。この手で八つ裂きにしてくれん」遂に楚王に報告し鄢將師に命じ伯氏（伯郢宛）を攻撃させた。伯郢宛は無極に謀られた事を知り自刎して果てた。その子伯嚭（後に呉に出奔）はわざわざを恐れ郊外へ逃げた。囊瓦は伯氏の屋敷を焼くよう命じたが誰もこれに従おうとしなかつた。瓦は益々怒り、『伯氏の屋敷を焼かざる者も同罪也』という命令を出した。国人はみな郢宛が賢臣である事を知っており誰もその家を焼きたがらず、囊瓦に焼けと迫られた者は仕方なくそれぞれ藁を一束持つて伯氏の門の前に投げて逃げ帰つたものである。囊瓦は自ら家の者を引き連れ、前後の門を包圍し火をつけた。哀れ左尹の屋敷はたちどころに灰燼に帰し、郢宛の遺体さえ焼けてなくなつてしまった。伯氏一族は滅び去つた。陽令終、陽完、陽化、晋陳も呉に通じていると誣告され皆殺された。國中誰も冤罪だとわかつていた。ある日、囊瓦が高殿に上り月を眺めていると、街から歌声が聞えてきた。

③ 郢宛父は晋の伯州犁である。犁の父伯嚭は郢氏の勢力が大きくなるのを懸念して厲公に直言し逆に郢氏の恨みを罵て殺され、犁は禍を避け楚に出奔してきて楚の太宰になつたのである。此処では怒りの余り本来他国者の彼をこう言つたのである。

はつきりした歌声でよく聞こえる。耳を澄ますと、次のように歌っている。

郤大夫をまねるなよ 忠臣は殺され骨も残らず

楚国に王なく令尹は木偶 いるのは佞臣費と郢のみ

天道様のご照覧ありて 報いはたちまちに現われよう

瓦は側近を使つて歌の主を捜したが見つからなかった。しかし街の家々では神を祭り香火を焚いていた。

「お祭りしている神様は何という神様ですか」

「楚忠臣伯郢宛様です。無実の罪で殺されたので天に訴えたいのです」側近たちは帰つて街の人々の話を囊瓦に報告した。瓦が大夫たちにこの事をたずねると、公子申たちは皆

「それは郢宛が呉に通じていなかったということをやっているのです」

と言うので瓦は内心後悔していた。沈尹戌が郊外の神主から令尹を呪詛する人が多いという事を聞き、囊瓦に言った。

「国人は皆恨んでいます。それが聞えないのは相国だけです。費無極

が元凶の讒言者で郢将師とぐるになつて楚政を不透明にしています。朝

呉、蔡侯朱を追放し先王の人倫を踏み外させたのも、太子建が外国で亡

くなる原因を作つたのも、伍奢父子の冤罪も、今回の左尹および陽 晋

二家の件も皆この二人の仕組んだ事で、人々は徹底的に二人を恨んでいます。しかも相国が彼らの悪行を放任しているという理由で、国中いた

るところで相国に対する呪詛が行われているのです。誹謗によって人を

殺すような事はまともな者のすることではありません、いわんや讒言を

聞いて人を殺すなど。あなたは令尹でありながら讒言悪口を放任してすでに民心を失っています。他日国外の敵に、国人が内応すれば相国の立場は非常に危険です。彼らの讒言を聞いていれば身の破滅となりましよう。讒言者を除き身の安全を図られたほうがいいのではないのでしょうか」

囊瓦はこれ聞いてぞっとした。

「わしが悪かった、そなたに協力してもらつて二人を始末しよう」

「これは社稷（国、国民）のためです（命令に従います）」

沈尹戌は早速部下に、

「左尹を殺したのは費 郢の仕業だ。令尹は彼らの悪行に気がつかれて彼らを討伐に行く。ご一緒したい者は来たれ」

と都中にふれ回わせた。民衆はあつという間にそれぞれ手に武器を持ち駆け出した。囊瓦は費無極、郢将師を逮捕し、罪状を挙げ斬首して市中に梟首した。国人は令尹の命令が出る前に両家の屋敷を焼き尽く

し、皆殺しにして一族を滅ぼした。これによってやつと悪口讒言はなくなった。史臣は詩に言う。

伯氏焼くなら郢費を焼け 国人に公論公心あり

郢費の誅殺早かれば 忠臣を讒言で失う事なかりしに

また、郢、費が讒言を行い自滅した馬鹿な行為が詩に詠われている

順風に火を放ち人を焼く 忽ち風は反転己が身を焼く

毒計奸謀かくの如し 報復を受けざる悪人幾許ぞ

さて呉王闔閭の元年は周敬王の六年（紀元前五一四年）である。

闔閭は国政について伍員にたずねた。

「国を強化して覇を称えるにはどうすればいいでしょう」

伍員は叩頭し涙を浮かべて答えた。

「臣は楚国のおたずね者です。父兄の冤罪も晴らせず、葬儀もできておらず、父兄の魂も浮かばれないまま、恥を忍んでまいりました。大王に帰服致し命を助けられただけでも幸せでございます。どうして呉の国政にまで関与できましょう」

「あなたがいなければわたしは人の下に屈していなければならなかったのですが、あなたのご教示のお陰で今日があります。まだまだ国の事をあなたにお願いしなければなりません。それなのに何故途中で退こうとなさるのです。何かわたしに足りないところがあるのでしょうか」

「大王に不足などあるわけがございません。『疎不間親、遠不間近』他人は身内を、遠き者は近き者を差し置いてではいけないと申します。居候の身でどうして呉国の謀臣の上に居座ることができましょう。それに仇討も未だできていません。自分の事もできない者が国の策謀に関与できるわけがありません」

「呉の謀臣でああなたの右に出る者はいません。引き受けてください。国がいくらか安定すれば必ず一緒に仇討ちを致しましょう」

「王のお考えはどんな事でしょうか」

「わが国は東南の僻地に位置し、地は險阻で湿っぽく、海に近く潮の心配もあります。蓄えもなく、田の開墾は進んでおらず、国防体制も十分ではありません。民は意欲に欠け、隣国に対する威厳もない。これらの諸問題をどう解決するかをこれから検討しなければならぬのです」

「治民の要諦は民の生活の安定にあると申します。霸王の道は身近なことを固め将来に備える事です。先ず、城郭を見直して防衛体制を整備

し、穀倉を満たし、兵器を調べて内には守備能力を高め、外には攻撃能力を高める事です」

「わかりました。あなたに任せますから計画してください」

伍員は地勢の高低、水質調査を行い、姑蘇山の東北三十里を適地と判断し周囲四十七里、八ヶ所の城門と八ヶ所の水門を持つ大城を築造した（これが現在の蘇州城の前身である）。その八門とはそれぞれ、南は盤門、蛇門、北は斉門、平門、東は葵門、匠門、西は閶門、胥門という。各門の名の由来は、盤門は水盤のように曲っており、蛇門は巳の方向にあり十二支の蛇からとっている。斉門は斉国がその北方にあり、平門は水陸の水準が同じだからである。葵門は葵江の水が集まるところであり、匠門は大工が集まっているところ。閶門は閶闔（西風、北京語即辭源）が抜ける門であり、胥門は姑胥山に向いているからである。越は東南方向にありちようど巳の方向だから、蛇門の上に木彫りの蛇があり、その首が内側に向いている。これは越が呉に臣服している事を表わしているのである。南向きに周囲十里ほどの小城を造っている。南北西の三方に門があり東だけが門がない。これは越の将来を断ち切りたいという意味がある。呉は東方に位置し辰の方向で龍に当るので小城の南門の上には二頭の鯢を置いて龍の角になぞらえた。城が完成すると閶閭を迎え梅里から遷都した。城中には前に宮廷、後に市街、左に廟堂右に土地の神社、穀倉や国庫など全て揃っている。更に庶民を選抜し戦陣で必要な技術を訓練した。別に鳳凰山の南に城を築き越に備え、南武城と名付けた。閶閭は『魚腸』剣を不吉な物として箱に厳封して使う事はなかった。牛首山に『冶城』（鍛冶屋街）を造り数千本の鋭利な宝剣を造らせ、これを『扁諸剣』と呼んだ。

更に越国の欧治子^{うやし}と同門の、兄弟弟子である呉人の干将^{かんしょう}という刀師を訪ね、特別に利剣を打たせた。干将は五山の中で最高の鉄鉱石を選び各地から最高の諸材料を集め、吉日を選んで天地百神照覧の下、炭を丘のように積み上げ三百人の童子童女を使ってふいごを操作させた。ところが三ヶ月たつても鉱石が溶けず干将にはどうしてもその理由がわからない。

『神物^{じんぶつ}』が変化^{へんげ}する時は『人の氣』が必要だと言わね。あなたが三ヶ月努力してもできないのはこの鉱石が人の氣を必要としているのかもしれないわ』

妻の莫耶が突然そう言うと、干将は思い出した。

『昔のことだが、師匠が鉱石を熔^とかしていた時、どうしても熔けないので夫妻と一緒に炉に飛び込んだら熔けたという事があった。今まで山ほどこの仕事をやってきて、その都度炉のお祭りをしてからはじめている。今回どうしても熔けないのもしかしたらお前が言うそれかもしれないな』

『お師匠様は身を焼いて神器になったのね。わたしにだってできないことはないわ』

莫耶はそう言って沐浴し断髪し爪を切って炉辺に立ち、童たちにふいごで風を送らせ炭火が真つ赤になったところで自ら火中に飛び込んだ。するとたちまち鉱石は熔けて液状になって流れ出し、二本の剣に成った。先にできたものが陽となり『干将^{かんしょう}』と名付け、後からできたものが陰となり『莫耶』と名付けた(干将莫耶劍^{かんしょうばやけん})。陽には亀甲模様があり、陰には全体にぼんやりとした模様が浮いていた。干将は妻の思い出として陽剣を隠し莫耶剣だけを呉王に献上した。王が石を試し切りすると思ひ通

りに二つに分れた。現在蘇州虎丘山の麓に在る試劍石はこの時の石だと言われている。王は干将に百金の賞を与えた。その後、呉王は干将が陽剣を隠し持っているのを知り、部下に取りに遣らせた。出さなければ殺してもいいから奪い取って来いと厳命したのである。干将が妻を思いながら涙ながらに剣を取出そうとすると、剣を収めた箱が自然に開き、干将剣が自ら箱から飛び出し、突然一頭の青龍に変身し干将がまたがると空中を旋回しながら天に昇っていった。きつと剣作りの仙人になったのであろう。使者が帰って復命すると呉王は嘆息して、その後益々莫耶剣を大切にしました。

莫耶剣は何時の頃までか呉国にあったがその後の行方は杳^{よう}としてわからない。時代が下つて六百余年後、晋朝張華丞相が牛斗山の峰の間に紫色の氣が立つたので氣象に詳しい雷煥^{らいかん}をよんで訊ねた。

『あれは宝剑の氣です。場所は豫章豊城^{よしょうほうじょう}です』

華は煥を豊城の県令に任命した。彼は赴任して獄舎の下を掘ると、長さ六尺を超え、中三尺の石の箱が出てきて開けてみると中に二本の剣があった。南昌西山の土でこれを磨くと艶やかな光芒を發した。その一本を華に届け一本をそつと手元に留め自らこれを佩いた。華は煥に言つた。

『劍の紋をよく見るとこれは干将である。もう一つ莫耶剣があるはずだ。神物は必ずいつかは一緒になるというがそれはどうしたんだろう』後に煥と華がその剣を佩いて延平の津を通りかかると突然剣が飛び出して水に沈んだ。急いで部下に潜らせて捜させたが、水中で二頭の龍がひげを張つて向かい合い五色の光を放っていた。潜つた連中は恐れて

② 豊城 地名 現在の江西省豊城 後に晋朝雷煥がこゝで宝剑を見つけたという伝説がある 干将 莫耶剣の結末。

逃げた。その後二本の剣は再び姿を消した。結局二本の神剣は一緒になつて天上へ戻つていったのだろう。現在江西省豊城県（現在は豊城市）に剣池（現在剣匣湖）がある。池の前に石箱が半分埋まつていて俗に石門と呼ばれ、雷煥が剣を見つけた所だといわれている。これが干将、莫耶の結末である。後の人の宝剣の銘がある。

五山の精 六氣の英 神器を煉成 閃光輝き霜凍る
虹彩放つ龍紋亀紋 断金切玉 威は三軍を動かす

闔閭は宝剣莫耶を手に入れた後、また金鉤を百金という懸賞をつけて募集した。国中の多くの人が鉤を作つて献納してきた。ある鉤師が王の重賞を目当てに二人の子を殺しその血で鉇石を溶かし二本の鉤を作りそれを呉王に献じた。数日後その男は宮門へ賞金の受取りに來た。

王は彼に訊ねた。

「鉤を献納する者は多いが賞金を取りに來た者はそなただけだ。そなたの鉤には何か特徴はあるか」

「わたくしは王の賞金のために二人の息子を殺して鉤を作ったのです。他の人の物とは比較になりません」

王は官吏に彼の鉤を持つて來るよう命じた。その官吏が帰つて來て、「たくさんの中に紛れ込んでいてみな形が似ていますからとても見分ける事はできません」

と復命した。それを聞いて鉤師が王に言った。

「わたくしに見させてください」

官吏が鉤を全部鉤師の前に置いた。同じような鉤がたくさん有つて鉤師もやっぱり見分けがつかない。

そこで鉤の山に向かつて二人の名前を呼んだ。

「呉鴻や、屠稽や、お父さんだよ。大王様の前で靈驗をお見せしなさい」

と言うが早いか二本の鉤が飛び出して鉤師の胸にくつついた。

「そなたの言うとおりだ」

と呉王は非常に驚き彼に百金の賞を与え、莫耶劍と共にそれも身に付けた。

その頃、楚の伯嚭は伯卻宛の連座を恐れ郊外に逃げ出していたが、伍員が呉で重く用いられていると聞き呉に亡命し先ず伍員を訪ねた。員はかれと抱き合つて泣き、すぐに闔閭に謁見させた。

闔閭は伯嚭に訊ねた。

「此処は東海のはずれです。あなたは千里を遠しとせずお越し下さつたがわたしに何をお望みですか」

「臣の祖父は楚のために尽くして亡くなり、父は冤罪で焼き殺されました。臣は流浪して未だ行く先も定まつておりません。大王が義のある方で子胥殿の窮状をお救いになられたとお聞きいたしまして千里を遠しとせず投降してまいりました。どうか臣に起死回生の機会をお与え下さい」

闔閭は哀れに思い大夫に任じ伍員に協力して国政に当るように言つた。

呉大夫被離はそつと伍員に言った。

「どうして伯嚭を信用するんです」

「わたしの仇が伯嚭と同じだからです。よく言う『同病相哀れむ、同

憂相救う』というやつですよ、どうかしましたか」

「あなたは外見しかご覧になっておらず、彼の内面をご覧になっていません。わたしは人相見です。伯駁殿は寧猛で貪婪、奸佞、功利的で讒言を好む性格です。絶対近づけてはいけない人物で、重用すれば必ずあなたに禍が及びます、くれぐれも重用なさらないように」

伍員はそうは思わなかった。結局伯駁と一緒に呉王に仕えることになった。伍員は賢人で伯駁が佞人であることをこの時既に看破していた被離の能力を後の人は神業だと評した。員が被離の意見を信じなかったのも天意であろうか。詩がある。

何れが忠勇か奸佞か 被離の神相まさに異才

子胥に被離の才あらば 蘇台に鹿を容れる事なし⁵⁹

（神相＝神技の如き人相を見る能力）

話変わって公子慶忌は艾城^{けいき}に逃げ、決死隊を募り隣国と結んで隙あらばと王僚の仇を討つ機会を窺っていた。闔閭はそれを聞きつけ心配になり伍員に相談した。

「以前専諸の件では全面的にあなたに助けていただきました。いま、慶忌は呉を狙っているようで食事ものを通らず、じつとしていられません。もう一度助けていただけませんか」

「あの時は王僚討伐が天意でありそれが忠義だと思いましたが大王と密に計画を練りました。今度はその子です。天意とはいえないんじゃないですか」

「しかし昔、武王が紂王^{ちゆうおう}を討った時、その子武庚も殺しました⁶⁰が周

⁵⁹ 蘇台に鹿を容れるとは呉都を荒野に変えるという事、呉滅亡を意味する。

⁶⁰ 武庚 殷紂王の子 名曰禄父 周武王が紂王を滅ぼした時 殷の祀りを維持させる

人はそれを認めました。王が天命で廃された場合は問題はないと思います。慶忌と王僚一人が生きていれば、我われは結局二人を成敗したはずです。放っておくと大禍に発展する可能性があります。専諸のような者がいればいいんだが、すぐにでもそういう勇士を捜してもらいたいのですがどうでしょう」

「難しいですね。でも小さくて力はないのですが適当な男が一人います」

「慶忌は万夫不当なのに小さい男で大丈夫だろうか」

「その男は体は大きくありませんが勇氣は誰にも負けません」

「その男の話を聞かせてくれませんか」

伍員は勇士の名と出所を詳しく説明した。

話し出すと華岳を揺がし 長江の水は逆流す

一たび子胥の推挙を受け 要離の名春秋に知れ渡る

「姓は要名^{よう}は離^りといい、呉の人です。以前彼が壮士椒丘訴に屈辱を与えるのを見て、彼が勇氣ある男だとわかったのです」

「それはどういう事ですか」

伍員はその話を語り始めた。話の概略は以下のとおりである。

椒丘訴というのは東海の土着の者です。呉国の官吏だった親友が亡くなったので、彼は葬儀のために呉に駆けつけました。準津^{しゅんじん}の渡しで、車の馬に水を飲まそうとすると、

「この河には水神がいて、馬を見ると取って食うから河では馬に

ため武庚を殷の故地に封じたが、後に反乱を起したため滅ぼされた。

水を飲まないように」

と渡しの役人が注意した。椒丘訴は、

「壮士これに在り。水神何するものぞ」

と副え馬そ三頭立ての馬車の両側の馬をはずして水を飲ませた。すると果せるかな馬はいなくなきながら水中に引きずり込まれた。役人は水神に持っていかれたんだという。椒丘訴は怒って、上着を脱いで剣を持って河に飛び込み水神に闘いを挑んだ。波は逆巻き湧きかえり、勝負がつかないまま丸三日たち、彼は何と片目を失っただけで水から出て来たのである。そのまま呉へ行って葬儀に参加した。

彼は水神と闘った自慢話を得意そうにしゃべり、傍若無人に士大夫たちを小馬鹿にして言葉も不遜であつた。この時椒丘訴と向かい合つて坐つていた要離ようりが突然不満の色を表わし椒丘訴に言つた。

「たくさん士大夫方の前で、あなたは大きな顔をして自分を勇士だと得意がつておられるようですね。勇士の闘いというものは灼熱の太陽と闘つても上着を脱がず、鬼神と闘つても後ろを見せず、人と闘つても声を出して騒がず、死んでも人から辱はづかしめを受けないといひます。それなのにあなたは水神と水中で闘つて、失つた馬を取り返すこともできず片目を失う辱めを受け、死ぬまで闘おうともしないで恋々と生きながらえようですが、そんなのでは全くものの役に立ちませんね。みんなの前でしゃべるのは何とも不遜じゃないですか」

椒丘訴は反論もできず、満面恥じ入つて出て行つた。

その夜要離は家へ帰つて妻に言つた

「わしは今日大家たいけの葬儀の席で、たくさんの士大夫の面前で猛士

椒丘訴を侮辱してしまつた。彼は恨んできつと今夜わしを殺しに来る。寢室で寝た振りをしてゐるから決して門を閉じないように」

妻は要離が勇気のある人だとわかつてゐるので彼の言う通りにした。椒丘訴は案の定夜半に利刀を手挟んで要離の家へやつてきた。大門は閉じておらず、建物の扉もいづばいに開いたままだつたので、しめしめと入つて行くと窓側のベッドに人が寝てゐた。要離である。椒丘訴が来てもびくとも動かず、全く畏れる様子もない。剣を要離の首にかけ、要離を殺す理由を三つ挙げた。

「お前には三つの理由で死んでもらわなきゃならん。わかつてるか」

「さあ、わからんな」

「一つには、大家の葬儀の席で衆人の面前で俺を辱めた事。二つには、門の扉を開けつ放しにしてゐた事。三つには、おれが来ても起きて逃げようとしなないことだ。これじゃ殺してくれと言つてゐるようなものじゃないか。お前のやつてゐる事は自殺行為だ。おれを恨むなよ」

要離はそれに答えて、

「あんたの言う三点はわたしが死ななきゃならん過失には当たらんが、あんたには勇士らしくない恥すべき点が三つある。わかつてますか」

「わからん」

「先ず最初に、わたしが千人もの人の前であんたを愚弄したけれど一言も反論しなかつた事。第二にあんたは他人の家に入る時挨拶もせず、部屋に入るときも黙つて入つて来た。これは明らかに卑怯

な不意打ちだという事。第三に劍をわたしの首に掛けて大口を叩いている事。あんたはこの三つの愚を犯しながらわたしにとにかく言つてますが勇士として恥ずかしいと思いませんか」

椒丘訴は劍を収め、ため息をつきながら、

「世の中に勇者としてわしの右に出る者はないと思っていたが、離はわしの上を行く本当の天下の勇士だ。殺せば人の笑いものになるし殺さなければ勇者とは言えなくなる」

そう言つて劍を捨て頭をドアにぶつけて死んだ。

以上が伍員が闔閭に述べた要離についての話である。伍員は続けて、「ちょうど要離が椒丘訴に恥をかかせた葬儀の席にわたしも在席していましたので要離の事を詳しく存じているのでございます。大変な勇者です」

「それじゃその者と呼んでもらえませんか」

伍員は闔閭の要請に応え要離に会いに行った。

「呉王があなたの噂をお聞きになり一目お会いしたいとおおせです」

要離は驚いて、

「わたしは呉の小庶民で何の能力も有りませんので呉王のお召しに応じる自信はございません」

と尻込みしたが、伍員が更に呉王が強く希望している旨を説得したので結局伍員に随いて参内し呉王に謁見した。呉王は伍員から聞かされた要離が非常に立派な勇者だという印象が強かったので、目の前の離を見て思ひの外体は五尺そこそこで腰周りの小さな小男だったので内心がっ

かりした。

「子胥が言っていた勇士要離とはあなたですか」

「臣は体は小さく力もありません。風が吹けば急いで伏せて動けなくなるほどで、とても勇気がある者とは申せません。でも大王さまから何か指示があれば力をお尽したい所存です」

闔閭は黙つて答えなかった。伍員は呉王の気持ちがあわかつていたので、「良馬というのは高さや大きさの外見で評価されるのではなく、大切なことは荷重に耐えうる力があるか、遠くへ走り続ける足があるからです。要離は見かけは良くありませんが彼の智謀は大変なもので、彼でなくては今回の計画は難しいでしょう。彼を是非お用いなられますよう」と強く説得したので、結局闔閭は要離を後宮へ招じ入れ席を与えた。要離は闔閭に言った。

「大王のご心配は、亡くなつた王の公子が捕えられていない事でございましょう。臣にお命じ下さい」

簡単に言うので、闔閭は無謀な話と小馬鹿にして笑つた。

「慶忌は体は強健で身軽だし、走れば馬を越すかと思うほど速いし、敏捷勇猛で万夫不当の男だ、そなたが相手にできるとはとても思えないが」

「人を倒すのは力ではなく頭です。慶忌殿に近づいて刺す位の事は鶏をひねるようなものです」

「慶忌も頭のいい男だ。あちこちの亡命者を集めていて国内の者を容易には信じないぞ。どうやって近づくのかね」

「亡命者を集めて呉を討とうとしていますから、臣も罪を得て出奔したように装うのです。王に妻を殺され右手を斬られて出奔すれば、慶忌

殿は必ず臣を信じて近づけます。そうなれば事は簡単です」

闔閭は余りに凄惨な手段なので気が進まず、躊躇して言った。

「そなたに罪がないのにそんなひどい事ができるわけがないじゃないか」

「君に忠義であろうとすれば妻子との安逸など考えてはいられせん。忠義によって名を成す事ができれば、たとえ家族が全滅してもそれは飴のように甘く臣の本懐であります」

「要離は国のため家を顧みず、殿のために身を捨て滅私奉公を申し出ているのです。これぞ真の豪傑です。成功の暁には妻子を含め彼の業績を後世に残るよう顕彰してやりましょう」

伍員が傍らから闔閭にこう声を掛け、闔閭も要離の案を採用することにした。

翌日、伍員は要離と参内し、要離を将に推薦し楚討伐を願い出た。闔閭は貧相な要離を見て、

「見たところ童子の力にも及ばないようなあんな男にどうして楚が討てるといふのだ。それに国事は未だ安定しておらん、戦争どころではないわ」

と罵倒したが、要離は闔閭にきつぱり言った。

「子胥殿は大王のために呉国の安定を謀ってこられたのに、王が仇討に協力なさらないのは仁義にもとるのではないでしょうか」

「無礼だぞ、これは国家の大事、貴様のような野人に何がわかるというのだ。この朝廷の場でわしを愚弄する気か」

闔閭は要離の発言に激怒し、力士に命じ要離を捕えて彼の右腕を斬って牢にぶち込み妻子を逮捕した。伍員は嘆息して退出した。群臣は誰も

その経緯を知るわけがない。

数日後、伍員は獄吏に要離の監禁を緩めるように指示し、要離はその隙を見て逃げた。闔閭は要離の妻子を殺し市中で焼き棄てた。

宋儒はこの件を、仁者は罪なき者を殺してまで天下を得ようとはしないというのに、故なく人の妻子を殺し詭計を弄する闔閭は残忍極まりない男である。また要離は要離で王から日頃全く恩を受けていたわけでもないのに勇侠の名を得るためにわが身を傷つけ家族を害した行為は良識ある人間のする事ではないと非難している。詩に言う。

忠義の名を求め 無辜の妻子を殺したり

彼を国士と誇る勿れ 残酷無道これ呉人なり

要離は国境を脱出し、道々遭う人毎に自分の冤罪を訴えながら、慶忌を訪ね衛に向い遂に衛にたどり着いて慶忌に会った。しかし慶忌は最初は嘘じゃないかと疑って取り合わなかったが、着物を脱いで見せるとなると右肩が切り落とされていたのでやっと思つて要離にたずねた

「呉王がそなたの妻子を殺し、そなたに刑罰を加えた事はわかった。だがわしに会いに來たのはどういう理由だ」

「呉王が公子の父上を弑逆して王位を篡奪し、公子が諸侯と交流を図つてその仇を討とうとされている事を耳にしましたので、余命を捧げんとやつてまいりました。臣は呉国の国情はよくわかっておりますので、公子の勇をもつて臣がご案内申し上げれば呉を取ることは可能であり、大王は父上の仇を討たれ臣は妻子の恨みを雪ぐことができます」

しかし慶忌は未だ十分には信じられなかった。ほどなく腹心が呉の状況を探つて帰つて来て、要離の妻子が彼の言う通り殺されて市中で焼か

れた事を報告したので慶忌は完全に疑いを解き、要離にたずねた。

「呉王は子胥に国事を全面的に任せ、伯嚭を策謀担当として、将を選抜し軍を鍛え国が良く治まっていると聞く。わが方の兵は微力だがどのようにして胸の思いを実現すべきだろう」

「伯嚭にはいたした智謀はありませんからご心配はございません。呉の諸臣の中で子胥だけは智勇が備わっていますが、今呉王との間に隙ができています」

「子胥は呉王の恩人ではないか。隙間があるというのはどういう事だ」

「公子は一部分しかご存じないようですね。子胥殿が闔閭に尽くしてきたのは、父親や兄の仇を討つために楚の兵を借りるためです。目あての平王は亡くなり、費無極も死んでしまいました。闔閭は王位を得て富貴に安んじ、子胥殿の報復の事は考えようとしません。臣は彼のために王に進言して逆鱗に触れ、このようにひどい刑を受けましたが子胥殿も心中呉王を恨んでいる事は明らかです。臣が幸いにも脱獄できたのも彼の周到な力添えがあったからです。子胥殿は臣に『脱出したら必ず公子にお会いしどんなお考えかをお聞きして、もし伍氏の報復に協力する意行なつた罪償いをしたいと申しております。このチャンスに呉に出兵しないで、呉王と子胥殿の仲が戻つてしまえば臣も公子ももう報復する機会はなくなつてしまいます』」

要離はそう言つて大声で泣き出し、柱に頭をぶつけて死のうとしたので、慶忌は慌てて引きとめ、

「わかつた、わかつた」

と言つて要離と一緒に艾城へ戻つた。そして彼を腹心にして士卒の

訓練、兵船の整備に当らせ、三カ月後、流れに乗つて呉に攻め下つた。

慶忌と要離は同じ船に乗つて中流に出て後の舟とは少し離れた。要離は、公子に自ら船頭に立つて水軍を指揮してくれるように頼んだ。慶忌は船頭に腰掛け、要離が短い矛を持つて後ろに立つた。突然川面に一陣の怪風が吹いた。要離はさつと風上に移り風の勢いを借りてサツと慶忌を刺した。心臓を貫通した。慶忌は要離を捕まえて、一三度水の中に頭を抑え込み膝の上に抱き上げ、要離を見て笑つた。

「天下にこんな勇士がいたのか。わしに刃を刺すとはなあ」

周りの者が戟で要離を刺そうとしたが、慶忌は手を振つて、

「これは天下の勇士だ、一日で天下の勇士が二人も死ぬ事はない」

と言ひ、更に部下たちを戒めて、

「要離を殺してはならん、呉に帰してやりその忠を顕彰せよ」

と言ひ、要離を膝元へ下し、自ら戈を抜いた。血がどくどくと流れ息切れた。

さて要離の命は如何なりますか、それは次回のお楽しみ。

第七十五回

孫武 演習で呉王の寵姫を斬り

蔡昭公 質を出し呉師を乞ふ

慶忌は死に臨み部下たちに要離を殺さずにその名を成さしめてやるようにと命じたので釈放しようとしたが、要離はそれを拒み、

「公子はそうおっしゃって下さったが、わしは三つの理由があつて生きていくわけにはいかないんだ」という。彼らは不思議に思つてその理由を聞くと、

「これを成功させるために愛する妻子の命を犠牲にしたがこれは『仁』に悖り、新君のために先君の子を殺めてしまった事は『義』に悖り、人のために身はかたわになり家もつぶしてしまつた。これは『智』なき所業だ。こんな三悪をひつ提げて何の面目あつて世に永らえらよう」

そういうなり止める間もなく河に身を投じてしまつた。水夫があわてて彼を河から助け出した。

「どうしておれを助けるんだ」

「あんたは帰国したら爵禄が待つてゐるのに勿体ないじゃないかね」

「おれは愛する妻さえも殺してしまつたのだ、爵禄など欲しくもない。あんたたちおれの死体を持つて帰つたら重賞がもらえらるぞ」

要離は彼らに笑いながらそう言つて側の者の佩剣を取つて自分の足を切り喉をはねて果てた。彼を讀えた詩がある。

古人死の軽き事羽毛の如し 妻子の命も又輕し

全家滅びて一人に殉じ

專諸は死すとも継嗣あり

その一人死し初志を貫く
哀れ要離に形影残らず

人のため何故に己を愛せざる 功名成れば死も又嘗れ
義侠は呉風となりて今もなお 呉人義に走る事鵠の如し

また別な詩あり。力で万夫不当の慶忌が片腕の匹夫の手に掛かつた事を取上げ、力を持つ者の戒めとしてゐる。

天下に稀なる慶忌の驍雄 匹夫の片腕須臾の間
力自慢の戒めにすべし 牛角も傷つきや鼠の餌食なり

兵士たちは投降して要離と慶忌の亡がらを呉王に献納した。呉王は喜んで彼らに重賞を与え軍隊を撤収した。そして要離を上卿の礼を以つて、

「あなたの智勇で我が門を守り給え」と言つて闔門（呉城の西北の門）の城下に葬り、彼の妻子にも称号を

与え、專諸と一緒に廟を建て、定期的に祭祀を行うことにした。また慶忌を公子の礼を以て王僚の墓の側に葬つた。一連の事を終え闔閭は群臣を集め大宴を催した。その席上、伍員は泣いて闔閭に訴えた。

「王のご心配の種は全て除きましたが、臣の仇討は何時の事でしよう」伯嚭も涙を流して楚への出兵を願ひ出た。

「明朝相談しよう」と闔閭は約束した。

翌朝、伍員は伯嚭と一緒に宮中に闔閭を訪ねていった。闔閭は、「あなたの方のために出兵しようと思うが大将は誰がいいだろう」

「大王のご指示があれば、我々二人が死力を尽くします」

と声を揃えて言つたが、闔閭は内心二人とも楚の人だから仇討が終わつた後、呉のために働くかどうかかわからないのでそれには答えず、そ

知らぬ顔をし溜息をついた。

「王は楚が兵も将軍も多い大軍であることを心配されておられるのでしょうか」

と伍員が闔閭の気持ちを察知して、そう訊ねると王はそうだと云う。

「必勝のために一人、推薦いたしたき者がいます」

「その人はどういう人ですか」

「孫武と申す呉の者です」

闔閭は、楚の者ばかりではと懸念していたので、呉の者だと聞いて大いに喜んだ。^{伍員は続けて説明した。}

「この者は六韜三略に通じておりまして、鬼神も測り知れない機微にも通じ、天地の理も深く理解していきまして、自著に『兵法』十三篇があります(孫子の兵法)。⁸⁸ 誰も彼の能力を知らず、現在浮山の東方で隠棲しています。この者を軍師にすれば楚など問題ではありません」

「それじゃその者呼び出してみてくれませんか」

「この者は尋常の事では仕官しないでしょう。札を厚くして招聘しなければ承諾しないと思います」

闔閭は承知し、黄金十鎰、^{いっぺん}白璧一對をみやげにして員に浮山へ迎えにやった。

伍員は武に会い、呉王が敬慕している事を縷々説明し一緒に山を出て

⁸⁹ ◇六韜三略 中国古代の兵法書六韜と三略のこと。六韜は文選竜虎豹の六

巻、韜は弓や剣を入れておく袋即ち秘策の意。三略は上中下略三巻ともに太公望品別作といわれる。

◇孫子の兵法 孫武と後の孫臏(88回)の両兵法書は一九七二年に従来の「孫子」と孫臏の「孫臏兵法」の竹簡が出土し、種ある事が確認された。漢書藝文志には孫武の『呉孫子兵法』、孫臏の『齊孫子兵法』と両書は異なる著作だとしている。

闔閭に会った。

闔閭は自ら階下まで降りて歓迎し、席を与え早速兵法をたずねた。孫武は自作の兵法十三篇を献上した。闔閭は伍員に最初から一通り朗読させた。一篇が終わるたびに賞賛しきりであった。十三篇とは、『始計篇』、『作戰篇』、『謀攻篇』、『軍形篇』、『兵勢篇』、『虛實篇』、『軍争篇』、『九變篇』、『行軍篇』、『地形篇』、『就地篇』、『火攻篇』、『用間篇』である。聞き終わると、闔閭は言った。

「この『兵法』は正に天地に通じる素晴らしいものです。しかしわが国はまだ小国で兵力不足のきらいがありますがこれの対策はどうですか」

孫武が答えた。

「臣の『兵法』は、兵士だけではなく女性でもわたしの軍令を遵守させれば使えます」

闔閭はこれを聞くと、手を叩いて笑って言った。

「先生のお言葉とも思えない現実離れた事をおっしゃる。女性に武器を使った訓練などできませんか」

「王は臣の申し上げる事が現実離れとおっしゃいますが、後宮の女性をお借りできればやってお見せ致します。うまく行かなければ王を欺いた罪を甘んじてお受けいたします」

闔閭は宮女三百人を召して孫武に訓練させることにした。

「大王の寵姫お二人を隊長にさせていただければ命令が浸透しやすくなります」

と孫武がいうので、闔閭は右姫、左姫という二人の寵姫を前に呼んだ。

「この二人はわしが愛している妃だ、これを隊長にして下さい」

「わかりました。ただし、軍隊の事ですから、命令は厳しく賞罰は厳

格に行います。試みであるとはいえこれをいい加減にはできません。そこで執法官を一名、伝令係の軍吏を二名、陣太鼓を打つ者を二名、他に力士を数名准将として武器を持たせて指令台に立たせていた。だき軍威を高めたいと存じます」

呉王は承諾し軍中から選出した。孫武は宮女たちを左右二隊に分け、右姫に右隊を左姫を左隊を受け持たせ、全員に鎧よろい甲かぶとをつけ武器を持たせ、軍法を説明した。一つ、隊列を乱すべからず。二つ、私語並びに騒動を起こすべからず。三つ、約束違ふべからず。そして、翌日五鼓に全員教練場に集合し訓練を開始すると指示し、王も樓台に登って閲兵する事になった。

翌朝五鼓、宮女は二隊に別れ各々鎧甲を身につけ、右手に劍左手に盾を持つて教練場に集合した。二姫は房の着いたかぶとを被り将官として両サイドに分かれ孫武の前に整列した。

孫武は自分で陣形区画の線を引いた。そうして伝令を呼び、隊長の二姫に黄色い旗を持たせ隊員を先導し、宮女たちを五人を伍とし十人を総という単位にし太鼓に合わせ一糸乱れず進退左右旋回させるよう命じた。伝令が指示を終わると二隊全員に腰を落とし号令を待つよう命じた。早速号令があった。

「最初の太鼓が聞えたら両隊一斉に立ち上がり、二つ目の太鼓が聞えたら左の隊は右に旋回し右の隊は左に旋回する。三つ目の太鼓が鳴れば皆剣を構え戦いの姿勢をとり、鉦が鳴れば兵を集めて元に戻る事」

号令があると宮女たちは皆口をおおって笑いこけた。

「最初の太鼓を打ちました」

と太鼓係が孫武に報告したが、宮女たちはある者は立ちある者は坐つ

たままで全く不揃いであつた。孫武は席を立ち、

「軍令が不明確あるいは誤つた命令の場合は將軍の罪である」

と言つて伝令にもう一度先ほどの命令を伝えさせた。再び太鼓が打たれた。宮女たちは全員立つには立つたが本気ではなくお互いよりかつて先程と同じように笑いこけている。孫武は両袖をまくり上げ自らばちを持つて太鼓を叩き、同じ号令をだした。二姫及び宮女たちはやはり皆キャッキヤ笑つたままである。孫武は目を三角にし、怒髪は冠を突いた。

「執法官は何処だ」

執法官が前に出て跪くと、孫武はたずねた。

「軍令が不明確あるいは誤つた命令の場合は將軍の罪である。再三同じ軍令を出しているが命令を聞かない、これは兵の罪である。執法官軍法によればこれは何の罪に当るか」

「斬首であります」

「兵を全員斬首はできない、罪は隊長にある」

と言つて力士を振返り、

「女隊長を斬つて兵たちの見せしめにしろ」

と命じた。彼らは孫武の怒りの様子がただものではなかったので命令に従わざるを得ず、左右の二姫を縛り上げた。

闔閭は望雲台から孫武の演習を眺めていたが、突然二姫が縛られたのを見て、急いで伯嚭せつに節せう（主の使者の証の割符）を持たせて救いにやつた。

「將軍の用兵能力はよくわかりました。ただこの二姫は身の回りの世話をしてくれ、大変重宝に思っている。彼女らがいなければ食事も美味くないほどなのでどうか許してやつて欲しい」

「軍中に戯言ざれごとはありません。臣は君命を受けて将となつております。」

これは軍中ですのでたとえ君命であつてもお受けする事はできません。君主の命令に従つて軍令違反を赦していたのでは、この後どうして大勢の兵を取り締まることができましょうか」

そう言つて、

「速く二姫を斬れ」

と命じ、其の首を軍前に梟首した。左右両隊の宮女たちは軍法が如何なるものかがやつとわかり足がガタガタ振るえて色を失つた。孫武は軍中より二人選抜し左右の隊長とした。再び号令の大鼓が打たれた。第一の大鼓で起立、第二の大鼓で旋回、第三の大鼓で戦闘態勢となり鉦が鳴ると兵を収め、左右進退、旋回行動は規則どおり皆書かれた線の中で全く乱れる事がなかった。しかも終始静かに無駄口を叩く者はなかった。そこで執法官に命じ呉王に報告にやつた。

「操練は終わりました。王のお役に立つかが検分願います。この隊はたとえ火の中水の中であろうとも決して引下る事はありません」

髯仙は孫武の練兵の様子を詩にしている。

争覇は兵の強化にあり 孫武の軍配を試みる

兵士は皆美女にしてなお 実戦の如し

戈を揮い袖をまくり 粉黛紅顔甲に映る

笑いを抑え二軍に別れ 羞らい含み隊中に立つ

命令一下肅然たる行動 軍法違反何ぞ赦されん

寵姫の首を見て 初めて知る上將の厳しさを

湯火に向うも恐れず 百戦敗れることなし

こつりよ

闔閭は二姫を悼み横山（太湖に臨む）に厚く葬り、愛姫の祠と名付けた

祠を立てて祭つた。闔閭は二人を思う余り孫武を使う気がしない。伍員は王にゆつくり説得した。

「『兵は凶器なり』と申します。決して冗談は許されません。違反者の誅殺を果断に行わなければ軍令は徹底しません。大王が楚を倒して天下に覇を称えようとお考えであれば良將を得る事が重要です。將の大切な能力は果断な決断力であります。孫武でなければ誰が將として淮河を渡り泗水を越え、千里の先まで進軍して戦える者がいましょうか。美人は得易いけれど良將は得難いものです。二姫のために賢將を捨てるといふのはエノコロ草（ねこじらし）を愛して大切な稲を捨てるのと同じです」

闔閭は初めて悟つた。そして孫武を上將軍に封じ、軍師として楚討伐を任せた。

「何処から手を付けたらいいでしょう」

伍員は孫武にたずねた。

「凡そ軍を動かす場合は先ず内憂を除いておいてから外征に向かうべきです。王僚の弟掩余が徐に、燭庸が鍾吾にいと聞いています。二人とも報復を狙っています。先ず二公子を除いておいてから南伐すべきです」

伍員もそうだと思い呉王に言った。王は、

「徐も鍾吾も小国だから、使者をやつて逃亡中のわが国の臣を出せといえはいやとは言えないだろう」

と言つて、二人の使者を、徐、鍾吾へそれぞれ掩余、燭庸逮捕のため派遣した。徐の君主章羽は掩余を殺すに忍びなく、そつと使いの者をやつて逃がしてやつた。逃げる途中同じように逃げ出して来た燭庸とばつ

たり逢い相談しあつて楚に亡命することにした。楚昭王は喜んで、二公子は呉を非常に恨んでいるからこれを機会に關係を強くしておこうと考^{じよう}え舒城に配置し、対呉防衛のための練兵を命じた。闔閭は二国の命令違反を怒り、孫武に徐討伐を命じた。武は徐を滅^{めつ}ぼし、徐君章羽は楚に逃げた。更に鍾吾も落とし君主を捕えて帰国した。間もなく再び出兵し舒城を打ち破り掩余、燭庸を殺した。闔閭は勝ちに乗つて郢都にまで攻入ろうと思つたが、孫武が、

「民は疲れています、休みなく兵を使うのは良策ではありません」

と云うので呉王も納得し撤兵した。伍員は呉王に献策した。

「およそ寡で衆に、弱で強に勝つためには、先ず兵の戦いと休養のバランスを取る事です。かつて晋悼公は四軍三分の策即ち以逸待勞の計（60回注）で楚軍をくたくたにさせて鄭を臣服させた蕭魚での実績があります。自軍だけ休息を取り敵を疲れさせるものです。楚の執政は皆功を貪り困難を回避する連中ばかりです。三軍を編成し、こちらは一の一軍だけを出し楚は全軍で對抗してきます。楚が出て来たらわが軍は引き揚げ、楚が引き揚げればこちらがまた出るのです。敵が疲れて兵がだらけてきたところを一挙に攻めれば必勝間違いなしです」

闔閭は了解し、呉軍を三分し、交互に楚の国境を侵し、楚が救援に来れば呉軍は引き揚げる戦法を取つて楚を苦しめた。

呉王に勝玉という愛娘がいた。内々の宴で料理人が蒸魚を出してきたのを王が半分を食べて残りを彼女に与えた。彼女は怒つて、

「残り魚を下さるなんて大王さまはわたしを馬鹿になさつてゐるわ、私は何のために生きて来たのかしら」

と云つて退出してそのまま自殺してしまつた。闔閭は非常に悲しみ、懇篤な葬具とともに西の閭門外に葬り、池を掘り樂山を作つた。掘つた所は大きな湖になり今の女墳湖がそれだといふ。

また石櫃を作り、金の鼎、玉杯、銀の酒器、真珠の上着等宮殿の宝の半ばを傾け、宝剑を添えて其の櫃に入れみな彼女に送つた。そして呉の町に鶴を放ち鶴を見た者は墓に参詣するよう命じ、墓の中に仕掛けを作り、人が入れば仕掛けが働き門が閉まるようになっていて死者は一人にのぼつたと言われる。

「娘も一万人もの殉死者がいれば寂しくはなからう」

と闔閭は言つた。現在葬儀場の上に白鶴の置物が置かれる呉の風習はこの遺風である。この殉死は闔閭の無道の極みといえる。

昔秦三良の殉葬にも批判あり 呉はなぜ鶴を放ち万人を殉葬す²³

夫差の死を待たずとも 今日すでに闔閭の脳裏に民は無し²⁴

話変わつて、楚の宮中に戻る。楚昭王が夜中にふと眠りから醒めると、枕元に冷たく光る物があつた。一本の宝剑である。朝、劍相を見る風胡子を呼び其の劍を見せた。彼はその劍を見てびつくりして王にたずねた。「これを何処から入手されたのですか」

²³ 三良 穆公死去時当時の西戎の習慣であつて百七十七人を殉葬し、その中に子車氏²⁵の三人三良も入つてゐた。『三良を殉死させた事は非難を受ける事になつたが三良は自ら殉死を選んだといふ』

²⁴ 夫差 闔閭の太子 闔閭が越戦で負傷して死に、夫差が呉王となり越を討ち報復するが越句踐を赦し、後に逆に呉夫差は越句踐に滅ぼされる。夫差の死は呉国の滅亡を意味する。ここでは、無辜の民を殺す闔閭の行動の中に呉の滅亡が見えいといふと云つてゐるのである。

「目が覚めたら枕元にあったんだよ。なんという剣かね」

「これは欧冶子作の湛盧の剣です。昔越王は彼に名剣を五口作らせました。呉王寿夢の要求によって越王はその内魚腸、盤郢、湛盧の三本を呉王に献納しました。魚腸は王僚を刺すのに使い盤郢は亡くなった娘に贈り、あるのは湛盧の剣だけです。この剣は大変な神威がありますが、これを持つ君主が人道に反した場合は直ちにそこから出て行ってしまう、この剣のある国には福が回って来て勢いが盛んになると申します。すなわち今、呉王は王僚を弑逆して自立し、娘のために良民を二万人も殉死させ、呉人は非常に恨んでいます。ですから湛盧剣は無道の主を去り、徳のある主に就いたというわけでございます」

昭王はこれを聞いて大変喜び早速その剣を佩いて至宝とし、天瑞だと皆に知らせた。

闔閭は湛盧剣を失い、人をやつて捜させたとこ楚にあることがわかった。闔閭は怒つて、

「これは楚王がわが部下に賄賂をやつて盗み出されたに違いない」と言つて、数十人の部下を誅殺し、遂に孫武、伍員、伯嚭に楚討伐を命じた。越にも出兵要請の使者を出したが越王允常はまだ楚と友好關係が切れないのでそれには応じなかった。孫武らは六と潜の二邑を抜いたが兵力が続かなかつたので一旦帰国した。闔閭は越が楚討伐に協力しなかつた事を怒りこれを討伐しようとしたが、

「今年は越に歳星さいせいがありますから、出兵は好ましくありません」と孫武は引き止めた。しかし闔閭は聞かず、越討伐に出て檣李すうりで越を

② 歳星 木星 木星はほぼ12年で天を一周するから別名太歳ともいう。古代から歳星は大事業と呼応すると見られ、歳星との関係で色々な禁忌事項があった。

負かし大掠奪をして帰った。

「四十年後は越は必ず強国になってわが国を脅かす事になるでしよう」

孫武はそつと伍員にそう予言した。伍員は黙つてその言葉を心に留めた。

闔閭五年（紀元前五〇九年）のことであつた。

翌年、楚は令尹囊瓦が水軍を率いて潜六の報復のため呉を攻撃した。闔閭は孫武、伍員に迎撃させ果て楚軍を打ち破り、楚将半繁ひはんを捕えて帰つたが、闔閭は、

「楚軍を負かしても郢都を落さなければ勝つたとはいえないぞ」と言つ。員はそれに答えて、

「臣も郢都を忘れてゐるわけではありませんが、楚は天下無比の強国ですから軽視はできません。囊瓦は民心を失つていますがまだ諸侯に嫌われている訳ではありません。でも賄賂を好んで要求するようですからその内きつと諸侯の中に変化が現れるでしょう。その時がチャンスです」そこで孫武に江口で水軍の訓練をさせ、子胥は毎日人を出し楚の動静を探らせていた。

ある日、突然唐国と蔡国が呉と友好を図りたいと使者を送つて来た。子胥はこれを知くと非常に喜んだ。

「唐も蔡も楚の属国だが、突然呉と友好を図ろうというのはきつと楚に強い不満があるからだろう。これは天が吾に楚を打てという事に違いない」

話はこうである。

楚王が『湛盧』の剣を手に入れたと言つので、諸侯は祝いに来た。

唐成公と蔡昭侯も一緒に楚を朝見した。蔡公は持っていた家宝の一对の羊脂の玉佩ぎくへいと一枚の銀貂の裘かわずものそれぞれ一佩と一裘を楚王に祝いのみやげとして献納し、残りの一佩と一裘は自分の身に着けていた。囊瓦が横で見えて残りのを欲しがったが、蔡公は断つた。唐侯には『肅霜』という名の天下屈指の二頭の馬がいた。肅霜とは雁の名でその羽は練り絹のように純白で背が高く首が長く、馬の形状がその雁に似ているのでこの名がある。唐侯はこの宝馬に引かせた馬車でやって来た。速くて穏やかな走りである。囊瓦がまたこれを欲しがって唐侯に要求したが唐侯は断つた。一君が朝見の挨拶を終わると、囊瓦は昭王に讒言した。

「唐、蔡は呉に通じています。このまま帰すと呉の先導となって楚へ攻めてくるでしょう。留置しておくに限りません」

二人を宿舎に留めて千人の兵に守らせた。体のいい監禁である。この時、昭王は若かったので国政の実権はみな囊瓦にあった。二君は三年間拘禁され帰るたくても何ともならない。唐の世子は唐侯があまり帰らないので大夫公孫哲に様子をみにやっつた。公孫哲は拘禁理由を聞きつけ唐侯に進言した。

「二頭の馬と一国とどちらが重要でしょうか、馬を与えてでも帰してもらった方がいいのではないのでしょうか」

「この馬は世にも稀な至宝だ。手放すには惜しい。楚王にだって譲りたくないのに令尹なんかに。しかもやつは飽くなき貪婪で力づくでわしを脅しているんだ。死んでもあいつなんか屈したくはない」

羊脂玉佩 羊油色で半透明な玉の帶飾。

そこで公孫哲はそつと従者に言った。

「殿は馬を手放そうとなさらないから何時までも楚から帰れないんだ。どうして国より畜生の方を重視なさるのだらう。我われで肅霜を盗み出して令尹に献じよう。殿が唐にお帰りになる事ができれば、たとえ馬泥棒の罪をかぶつても本望だ」

従者も了解して、馬役人を泥酔いさせて二頭の馬をそつと盗み出し囊瓦に献上した。

「主人は令尹を尊敬申し上げておりまして我われに良馬を献上するように命じられました。どうかお受取り下さいませよう」

囊瓦は大変喜んで受取り、翌日昭王に会って、

「唐侯の国は狭く大事を起すには兵も少ないので赦して帰国させたいと思います」

と進言したので楚王は放免した。唐侯が帰国すると公孫哲と従者たちは皆自ら手を縛り殿前で罰を待っていた。

「諸卿がああ貪婪な男に馬をやってくれてなければわしは帰国できなかった。これはわしの罪だ。そなた達わしを恨まないでくれ」と言つて厚く賞した。

現在の徳安府隨州城北にある肅霜陂しゅそうへい（陂は坂の意）はこの話にちなんだ名である。

行行けば西方に一荒陂あり 唐侯の機を見ぬ恥の驗なり
令尹に肅霜を惜まざりせば 早々漢東の城に帰れしを
また髯仙の詩あり。

三年の辱め堪え難くも 何ぞ貪吏に名馬を譲れよう
馬盗む応急の策なくば 唐侯荆南を出国できたや

蔡侯も唐侯が馬を獻じて帰国できたことを聞き、彼も残りの一佩一裘を囊瓦に献上した。

すると囊瓦はやはり早速昭王に、

「唐、蔡は同じですから、唐を帰し蔡だけを残す事はできません」

と進言し楚王は進言に従って、蔡侯も帰国させた。

蔡侯は郢都を出ると胸が張裂けんばかりに怒気が込み上げて来て、白壁を漢水に沈め、

「もし楚を討たずして再びこの河を南に渡らんとせば、大川となつて我を拒み給え」

と楚討伐を誓つて帰国した。帰国の翌日、早速世子元を晋に質に出し、楚討伐のための借兵を願ひ出た。晋定公はこれを周に訴え、周敬王は卿士劉卷に命じ王軍を派遣した。宋、齊、魯、衛、陳、鄭、許、曹、莒、邾、頓、胡、滕、薛、杞、小邾子と蔡を合わせて十七の諸侯が、それぞれ囊瓦の貪婪を憎み軍を率いて集まつた。晋は士鞅が大將、荀寅が副將となつて諸軍を召陵に集合させた。荀寅は蔡のために出兵したのだからといつて蔡侯に高額の要求した。

「あなたは宝の玉佩と裘を楚の君臣にやつたそうですね。わが国には何もありませんか。我われが千里の道をやつて来たのは全てあなたのためです。どのように軍を勞つていただけなのでしょう」

「わたしは楚の令尹囊瓦が貪婪で仁義に悖つていたので楚を捨て晋についたのです。大夫が盟主の義というものをお考えあつて、強き楚をくじき我われ弱小をお助けくだされば、荊襄（楚一帯をいう）五千里は軍をねぎらうのに十分ではございせんか」

荀寅はこれ聞いて深く恥じた。

時は周敬王十四年三月、偶々大雨が十日以上も続き、劉卷がマラリアにかかった。荀寅は士鞅に言つた。

「昔、齊侯が諸侯を牛耳つていた頃に召陵に兵を集めたけれど楚に殆ど損害を与える事はできませんでした。先君文公が僅かに一勝しただけでその後両国の戦が絶えませでしたが、両国会盟後は晋楚に軋轢はありませんので、こちらから溝を作るのは如何なものでしょうか。しかも雨が降り出しマラリヤが各所で発生しています。進軍しても勝利はおぼつかないし退けば楚に乘じられる恐れがあり、ここは十分考慮を要します」

士鞅も貪婪な男で蔡からの礼が期待できそうにないので雨を理由に蔡に人質を帰し撤兵してしまつた。諸侯たちは晋を盟主として頼りにはできないと見てそれぞれ解散して帰国した。

堂々たる兵力を擁し 楚を抜く力に余裕あり

只中原に義士あらず 囊瓦と同じく賄賂を求む

蔡侯は諸軍が解散するのを見て大いに失望した。帰国途中沈国に寄り、楚討伐に加わらなかつたのを咎めて公孫姓に命じ攻め滅ぼし、沈君主嘉を捕えて殺し鬱憤を晴らした。囊瓦は怒つて蔡討伐軍を出し蔡城を包圍した。

「晋は当てになりません。東の呉の救援を求めるべきです。子胥、伯嚭は楚に大変恨みを持っていますから力になってくれるはずです」蔡侯は公孫姓の進言に従い、直ちに姓を使者として唐侯を誘つて呉に派遣し、次子の公子乾を質にして借兵を依頼したのである。

以上が突然唐、蔡両国が呉と友好を図りたいと言つて来た経緯である。伍員は闔閭に会つて進言した。

「唐、蔡は楚を大変恨んでいて、先駆を希望しています。蔡を救うと言う大義名分は対楚戦には有利です。王が郢都陥落をお考えでしたらこの機会は逃すべきではありません」

闔閭は蔡の人質を受取り出兵を許可し、先ず公孫姓を報告のため帰国させた。出兵のため軍備を調えようとしていたところへ孫武が江口から帰つて来て謁見を願ひ出たので、闔閭は早速招じ入れて話を聞いた。

「楚が難攻だというのは属国が非常に多く直接楚に攻入る事ができないからです。ところが最近晋が一声掛けると十八ヶ国が集まり、その中には陳、許、頓、胡というような昔から楚に付いていた国々までが楚を離れ晋に付いたようで、恨んでいるのは唐、蔡だけではありません。すなわち今楚は孤立しているという事があります」

闔閭は非常に喜び、被離、專毅に太子波を補佐して留守居を命じ、孫武を大将、伍員、伯嚭を副将、王弟夫概を先鋒とし、公子山（闔閭の子に食料輸送責任を担当させた。呉軍六万、発表は十万と号し、淮河を渡り直接蔡国に入った。囊瓦は呉の勢力を見て蔡城の包囲を解き逃げ出した。呉の追撃を恐れ漢水を渡ったところで駐屯し郢都に急報した。

蔡侯は呉王を迎え、楚の君臣のひびきを訴えた。間もなく唐侯も到着し二君は左右の翼を希望し呉に従つて楚討伐に加わった。出発に際し孫武は、兵士に陸に上がつて兵船を全て淮河の湾曲点に係留するよう伝令を伝えた。伍員は孫武にそつと船を捨てた理由を聞いた。

「流れが逆ですから船だと遅くなって、楚が徐を取る余裕を与え、破

るのが難しくなります」

それを聞き、なるほどと伍員も感心して納得した。大軍は陸路を江北から章山を通り漢陽に急いだ。楚は漢水の南に、呉は北に駐屯した。囊瓦は日夜呉軍が漢水を渡るのを心配していたが呉の兵船が淮河に係留されているのを見て内心ホツとしていたのである。

楚昭王は呉軍が大挙して攻めて来ていると聞き自ら大夫たちを呼んで考えを聞いた。公子申が進言した。

「子常（囊瓦）は大将の器ではありません。早々に左司沈尹戌に兵をつけて派遣し呉が漢水を渡るのを阻止すべきです。呉は遠方から来ますから後が続かず長くは持たないはずです」

昭王は彼の意見に従ひ沈尹戌に一万五千の兵を預け令尹と協力して呉を食い止めるよう命じた。沈尹戌が漢陽に到着すると囊瓦は喜んで彼を迎え入れた。

「呉軍は何処から来たのでしょうか、こんなに早いのは」

「淮汭（淮河の湾曲点の地名）で船を下りて陸路豫章（から来たんだ」

「はつはつは、孫武の用兵は神業だと人は言いますが、これを見ると大した事はないですな」

「それはどういふことだ」

「呉人は船の扱いに慣れているから水上での戦いには有利ですが、船を捨て陸を来たのはただ急いだけで、万一敗れたら帰る方法がないじゃないですか」

「呉軍は漢水の北に陣取っているがこれを破る策はあるか」

豫章 呉と楚の間の現安徽省河南省湖北省を含む一帯をいふ

第七十六回

楚昭王 郢都を捨て西に奔り

伍子胥 墓を掘り屍に鞭打つ

「兵を五千お分け致しますので、令尹殿には漢水沿岸に兵を配し船を全て南岸に係留して輕舟で朝夕漢水を上下させて監視し、呉軍に舟を取られて渡られないようにお願いいたします。わたくしは新息から近道し淮汭に出て呉軍の舟を焼きつくし、漢東の小道を木や石で遮断しておきます。その後令尹殿には兵を率いて漢水を渡り正面から呉の大寨を攻めていただき、わたくしは後ろから攻めます。呉軍は水陸両路が絶たれ前後から挟撃され呉君の運命はわが手の内と言う事になります」

「司馬の高見、わしの及ぶところではない」

囊瓦は喜んで彼の意見に従った。沈尹戌は大将武城黒を残し彼に五千の兵を分け与えて囊瓦軍と協力するよう命じ、自らは一万を率いて新息に向け出発した。

さてこの勝負如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

さて沈尹戌が新息に向かって出発した後も、呉、楚両軍は漢水を挟んで数日対峙した。或る時武城黒が令尹の機嫌を取つて、

「呉が船を捨てて陸上戦を取つたのは、自ら長所を捨てた事になり、しかも地理に不案内ですから、必らず勝てると司馬殿（沈尹戌）はおっしゃっているのです。もう両軍対峙して数日が立つのに渡江できていないというのは呉軍の怠慢といえましょう。早々に攻撃にかかるべきではありませんか」

と進言すると、囊瓦の愛將史皇も、

「楚人の多くは令尹殿に不満を持っていて司馬殿寄りです。もし司馬殿が呉の船を焼き隘路を塞げば彼が呉軍を破った第一の功労者になります。令尹殿は何度もしくじっており、今度もこの功を譲ってしまつてはどうして百官の上に立つことができますよう。結局、司馬殿に朝廷での首位の座を明け渡すことになってしまいます。武城將軍の言われるように渡江して勝負を決するのが上策です」

と言うので、囊瓦はその言葉に惑わされ、遂に全軍に漢水を渡るよう伝令を出し小別山で陣を張った。史皇が出て呉軍に戦いを挑んだ。孫武はこれに先鋒の夫概をあてた。夫概は勇士三百人を選抜しみな槓の棒を持たせて楚兵を見ればやみくもに殴りかかった。楚の史皇軍はこんな戦法を見た事がなく、打つ手なく呉兵に打たれつばなしで大敗し逃げ帰った。

「そなたわしに河を渡れと 唆^{そそのか}しておいて戦いになつたらすぐ逃げ帰つて来て何の面目あつてわしに会おうというのだ」

「戦つて将を斬れず、攻めて王を捕らざれば、大勇ある兵家にあらずといひます。呉王は今大別山の下に陣營を構えていますので今夜夜襲をかけて呉王を捕え大功を立てたいと思ひます」

襄瓦はこれに同意した。精兵一万を選抜し枚をふくませ、間道を通つて大別山の後方へ出た。諸軍は命令を得て、計画通り進行した。

一方孫武は夫概が緒戦に勝利を得たと聞き、皆で祝つていた。

「襄瓦は知識があまりない男で僥倖をたのむところがある。史皇もつまずいたとはいへたしいした損害ではない。今夜あたりきつと夜襲をかけるかと思ふ。十分に備え置くように」

武はそう言つて夫概と専毅^{せんぎ}にそれぞれの部隊を率いて大別山の左右に隠し、角笛の音を合図に一斉に攻め掛るよう命じ、唐、蔡^{さい}両君には二手に分かれてその後詰を命じた。更に、伍員には五千の兵を預け、近道をして小別山へ行き逆に襄瓦の本陣を襲撃するよう命じ、伯嚭をその後詰とした。また、公孫山^{くんさん}に呉王を保護して漢陽山^{かんようさん}へ本陣を移し敵の突撃を避け、大寨には見せかけの旗を立て老弱數百に守らせた。三鼓頃、襄瓦は精兵を率いてそつと山の後方に出た。大寨の中は静かで何の用意もないようなので喊声を挙げ寨に突入した。しかし呉王は見えず伏兵がいるようだったので慌てて逃げ出そうとした。すると突然角笛が一斉に鳴り響き専毅、夫概の両軍が左右からとび出し挟撃してきた。襄瓦は戦つ

ここに専毅がゐるのは矛盾がある。専毅は今回の出兵では被離と一緒に太子波を捕佐して留守を命じられる。しかも次の第77回夫概が謀反を起し帰国した時、専毅は国語で世子波と共に城を固め入城させなかつたといふ。

ては逃げ兵の三分の一を失つてやつと逃げ延びたところで又もや大砲声が響き右から蔡侯^{さいこう}、左から唐侯が現われ行く手を遮つた。

「わが肅霜馬を返さばそなたの命だけは赦してやろう」

と唐侯は大声で叫び、蔡侯もまた大声で威嚇した。

「わが 裘^{かわころも}と玉佩を返さばそなたの命だけは赦そう」

襄瓦は恥ずかしいやら腹が立つやら、しかしまた恐怖にも駆られた。危機一髪のところ武城黒が駆けつけ混戦の中で襄瓦を救出した。やつと數里逃げてきたところで本営を守つていた小隊が駆けつけてくるのに出遭つた。彼等から

「本営は呉將伍員に攻め取られました。史將軍は大敗して行方がわかりません」

という報告を聞かされた。襄瓦は心胆を引き裂かれる思いで敗残兵を引きつれ夜を徹して柏拳^{はくけん}まで逃げ延びやつと兵を休めた。しばらくすると史皇も残兵を連れてやつてきた。その後他の兵たちも次第に集まつてきたので陣營を立て直した。しかし襄瓦が弱音を吐いて、

「孫武の用兵は噂どおり臨機心変だ。一旦陣を払い帰国して兵を増強して再起を期そう」

と言つと、史皇は、

「呉軍を撃退するために大軍を率いてやつて来たのです。陣払いして逃げ帰れば呉軍は漢江を渡り一挙に郢都に攻め込んできます。そうなれば弁解のしようがありません。ここは力の限り戦い、戦場で死ねば名を後世に残せます」

襄瓦が躊躇^{いしや}しているところへ突然、楚王の救援軍が来たという報告があつた。大將は遽射^{いしや}であつた。

「主上は呉軍の勢いが強大だという事をお聞きになり、令尹が敗れてはと心配されわざわざ小職に一万をお預けになりましたので、王命を奉じて参上いたしました」

と言つて、それまでの戦いの状況をたずねた。囊瓦は一通り詳しく説明しながらその顔には羞恥の色がにじみ出ていた。

「もし、沈司馬の意見をお聞きになつておられたらこういう事にはならなかつたでしょうね。今となつては深く溝を掘り塁を築いて呉と戦わず司馬の兵が来るまで待つて、両軍を併せて攻撃すべきです」

「軽兵で襲つたために却つて逆に襲われてしまった。もし両軍で當つておれば呉軍に負けるわけはなかつたのだが。今回將軍が来てくれたので氣を取り直して決戦しよう」

遼射は囊瓦の意見には従わず、結局二人は別々に犄角の体勢をとるといふ名目で十数里も離れて陣營を張つた。囊瓦は自分が爵位が高いことを恃み遼射に敬意を払わず、遼射は遼射で囊瓦の無能を馬鹿にしてその下に付こうとはせず互いに考えが違つてで相談しようとしなかつた。

呉の先鋒夫概は楚將が不和だと探知し呉王に言つた。

「囊瓦は貪婪で仁義にもとり元々人心を失つていますし、遼射は救援に來たけれど令尹の軍令を守ろうとせず、三軍は闔志を失つています。追撃すれば完勝です」

闔閭はこれを許さなかつた。夫概は退つて、

「君主は命令を出し、臣はその意を帶して行動するものだ。わしは一人で行き、幸い楚軍を破る事ができれば郢都へはいる」

と言つて、翌早朝自分の部隊の五千を率いて囊瓦の陣へ突つ走つた。孫武はこれを聞いて急いで伍員に救援させた。

夫概は囊瓦の本營に討ち入つた。陣中は何の準備もなく大混乱となつた。武城黒が懸命に敵を支えた。囊瓦は車に乗るまもなく歩いて本營の裏へ出たところで肩甲骨に矢を受けたが史皇が自分の部隊を率いてやつて來て囊瓦を車に乗せ、

「わたしは此処を死に場と致します。令尹はご自分でいいようになさつてください」

と言つた。囊瓦は令尹の上着と甲を脱ぎ捨て車を急がせ郢都へは帰らず、なんと鄭国へ逃げて行つた（柏挙の戦い）。

裘を着て玉佩き名馬に跨りて 郢都に千年住まむとす
戦い破れその身一つの逃避行 誰か貪夫を笑わざる

伍員の部隊がやつてきた。史皇は彼らが囊瓦を追撃するのを阻止しようとする自分の部隊を率いて呉軍に突入した。右に左に大奮闘し呉の將兵一百人を殺したが、楚兵も同じ位の死傷者を出し、史皇は重傷を負つて戦死し、武城黒も夫概と戦い一步も引かず遂に夫概に斬られて死んだ。

遼射の子遼延は前の本營が破れたのを聞き、父親に知らせた救援に行こうと思つたが、遼射はそれを許さず、自ら陣前に立つて命じた。

「妄動する者は斬る」

囊瓦の敗残兵はみな遼射の下に集まり、数えてみるとまだ一万余あつた。これらを併せ軍勢は再び勢いづいた。しかし遼射は、

「呉軍が勝ちに乘じて不意を突いて來たらとても支えきれない。來ない内に隊を整え郢都に引き上げ後事を謀る」

と言ひ陣払いを命じ、遼延を先行させ遼射は自らしんがりとなつて退却を開始した。夫概は遼射が陣を移動したのを探り當てその後を追ひ

清発（漢水に注ぐ河名）までやって来た。楚軍はちようど船を集めて渡ろうとしてるところであつた。呉の兵たちはすぐに襲撃しようとしたが、夫概はこれを制止して、

「窮鼠猫を噛むというではないか。あまり急いで迫ると強い抵抗にあらう。ここはしばらく様子を見て、やつらが半分くらい渡つたところで攻撃を仕掛けた方がいい。そうすれば渡つてない者は先を争つて渡ろうとしてみな闘争心をなくしてしまうから必勝間違いないだ」

と言ひ、二十里下つて陣を張つた。中軍の孫武たちが着いて夫概の話聞きみなそのやり方を誉めた。

「こないだ弟がいるから郢都（えいど）進攻は全く心配要らん」

闔閭も喜んで伍員にこう言つた。しかし伍員は、

「以前被離が夫概殿の相を見て、背国叛主の相があるので英勇ではあつても大将にしてはならないと申しております」

と注意したが闔閭は納得しなかつた。

さて、遽射は呉軍が追いついてきたと聞き陣形をたて防御体勢を作ろうとしたが、その後また呉軍が引いたと聞こえてきたので喜んで、

「さては呉軍は怯んだと見える、追いつめるのはよしだよだな」

と言ひ、五鼓に食事を済ませ一斉に渡江を再開した。三分の一程渡つた頃を見計らつて夫概は攻撃を開始した。楚軍は争つて渡ろうとして大混乱となつた。遽射は混乱を抑えきれず仕方なく車で逃げた。渡れていない兵士はみな主将について逃げた。呉軍はそれを追撃し無数の旗や武器を略奪した。孫武は唐、蔡二君に楚の渡江用の船を奪つて沿岸一帯の後詰めを命じた。遽射は雍渚（河名。清発の西、漢水に注ぐ）にたどり着いたが将兵みな腹をすかせて走れない。幸い追つ手は振切つたのでしほら

く休憩するつもりで食事の用意をしていたが、飯がやつてきた頃、呉軍がまたやつて来て食う事もできずまた逃げ出した。呉兵はそこできたばかりの飯を食ひ、腹ごしらいをして又追つた。楚兵は混乱に陥り味方同士踏みつけあつて死者が更に増加し、遽射は車が転倒して夫概の一撃で刺殺された。子の遽延も呉兵に取り囲まれ懸命に奮闘するが包囲を脱出できない。その時突然東北の方から大喊声が上がつた。

「呉軍が又来たか。ついに万事休す」

しかしそれはなんと新息へ行つていた左司馬沈尹戌ではないか。囊瓦軍が敗れたという情報が入り兵を返して来てちようど雍渚で呉軍に包囲されていた遽延に出会つたというわけである。沈尹戌は部下の一万を三軍に分けて夫概軍に突入した。夫概は度々の勝利に酔つていたのでそんな事に注意を払つておらず、突然三方から楚軍がやつて来たので敵がどの位の兵力かわからず、全く抵抗もできずに包囲を解き逃げ出した。沈尹戌は大暴れし呉軍はこゝで千人余りの死者を出した。更に追撃しようと思つたが呉王闔閭の大軍が来ていたので、両軍陣營を構え対峙する事になつた。

沈尹戌は家臣の呉句卑に言つた。

「令尹が功を急いだため我が計は駄目になつたが、これも運命だ。既に戦況は容易ならざる状況である。わしは明日決戦するつもりだ。勝てれば呉軍が郢都へ入ることはなく楚国の幸せであるが、万一破れた場合はわしの首はそなたに任す。呉に取られないようにしてくれ」

また遽延に、

「そなたの父上は国のために犠牲になられた。あなたはもう死ぬ事はない。急いで帰国して公子子西（公子申）殿に至急郢都の防衛準備を行う

よう伝えてほしい」

と言った。遼延は拝命し沈司馬の武運を祈りつつ涙ながらに別れた。翌朝、両軍それぞれ布陣し戦いが始まった。沈尹戌は昔から日頃の部下の育て方が適切で兵は命じられると誰もが懸命に戦った。夫概は勇猛ではあるが危なくやられそうになった。そこへ孫武が大軍を率いて突入してきた。右翼に伍員と蔡侯、左翼に伯嚭と唐侯、前面に飛び道具、その後ろに刀槍などの白兵隊といった布陣で楚軍に一齐に殺到していった。沈尹戌は懸命に重囲を抜け出したが身には数本の矢を受け車に倒れこんだ。もう闘う事はできず呉句卑を呼び、

「わしはもうだめだ、早くわしの首を取って、楚王に届けてくれ」

と言ったが呉句卑はそれでも躊躇していたので戌は大声で一喝しそのまま目を閉じた。句卑は仕方なく主人の首を切り、着物を脱いで包んで懷に入れ、土を掘って死体を生めて郢都へ帰った。

楚善無きを謀り

賢者を害し佞臣昇進

伍氏既に無く

郢氏も又滅ぼされたり

卓越せる沈尹戌

一木で館を支えんと

敵を掌中に弄するも 囊瓦の貪功に敗れた

功を失い身は亡び

凌霜暴日

天は忠臣を哀れみ

首級を国に帰したり

一方遼延は先に帰国し昭王に会い、囊瓦が敗れて敵前逃亡し、父親が殺された事を涙ながらに訴えた。昭王は驚いて子西(公子申、平王庶長子、子期(公子結、平王の子)を呼びもう一度救援軍を出すそうと相談した。まもなく呉句卑も帰ってきて沈尹戌の首を王に捧げ、

「こうなったのは全て令尹が司馬の計を用いなかったことが原因で
す」

と敗戦の様子を詳しく報告した。

「司馬をもっと早く使わなかったわしが悪かった」

と昭王は痛哭し、また囊瓦を痛罵した。

「国を誤らせた奸臣め、それでも命を惜しがるとは。犬畜生でも奴の肉は食うまい」

「呉軍が迫ってきています。大王、速やかに郢都の保全策をお決め願います」

と呉句卑が言うと、昭王は一方で沈諸梁を呼び父親の首を返してやり、手厚い葬儀費用を与えて葉公に封じた。

そして同時に郢都を放棄して西方へ避難したいと提案した。

「民も陵墓も全て郢都にあります、もしここを棄て去れば再び帰ることはできなくなります」

と子西は大声で泣いて諫めた。

「長江、漢水の險を恃むところだが、今はそれも失った。呉軍が旦夕にも迫ってくるのです。手を束ねて捕えられるのを待つわけにはいかんでしょう」

と昭王が言うと、子期は籠城を提案した。

「城には壮丁がまだ数万はいます。宮中の食料を全て出し、将士を激励して城を固守し、漢東諸国に使者を出して連合して来援するよう頼めば、呉はわが国に深入りしていますので食料がたがらず長くは居られないと思います」

「呉は食料等をわが軍からまかなっている。食料に困ることなんか

いでしよう。それに、晋が一声掛ければ頼も胡も駆けつけたと言うじやないですか。呉軍の東下に唐、蔡が道案内しているし、楚の傘下だった国は皆離心してしまっている。そんな奴等をあてにはできませんよ」

「臣らが全員であたつてそれでも敗ればそれから逃げて遅くはないんじゃないでしょうか」

と子西は郢都にこたわった。

「国家の存亡は兄上お二人に懸かっています。やるべきとお考えでしたらなさって下さい。わたしは一緒にする事はできません」

と言って昭王は涙を浮かべて内宮へ帰って行つた。

子西と子期は協議して大将闔閭に五千の兵で麦城を守らせて北の備えとし、大将宋木に五千の兵で紀南城を守らせ西北の備えとした。子西は自ら精兵一万を率いて魯沱江（漢水）に布陣して東への渡河路を押えた。西路の川江と南路の湘江はどちらも楚の地だし遠回りで險阻だから呉から楚に入る道ではなく備えは不要である。子期は王孫綰子、王孫圉、鐘建、申包胥を督励して郢都城内を厳重に警邏させた。

さて呉王闔閭は諸将を集め、郢都攻撃を何時にするか相談した。

「楚軍は連敗していますが郢都は無傷で強い勢力を保っています。しかも三城が連絡しあつて容易には落ちないと思われまふ。西の魯沱江は楚に入る要路ですからきつと重兵で守っているはずだ。むしろ北に迂回して攻めた方がいいと思います。軍を三分して一軍は麦城を、二軍は紀南城を、大王には大軍で直接郢都を突いていただき、疾風迅雷の同時速攻に敵がど胆を抜かし、二城が落ちれば郢都は守りきれないでしょう」

と伍員か進言すると孫武も名案と賛同した。そこで伍員と公子山は一

万を率いて蔡侯軍と伴に麦城を攻撃し、孫武は夫概と伴に一万で唐侯軍と伴に紀南城を攻め、闔閭は伯嚭と大軍で郢都を攻めることにした。

伍員軍が数日進軍すると諜報からの連絡があつた。

「この先一舎（^{12km}）ばかりの所に麦城があり、大将闔閭が守つています」

伍員は軍を止め、目立たない服に着替え二人の腹心と一緒に付近の地勢の視察に出かけた。ある小さな村に行くところを走つて村人が麦をひいていた。鞭でロバを打つと動き出して石臼が回わり、麦の粉がざらざらと落ちていた。伍員はそれを見てはたとある考えが浮かんだ。

「そうだ、よし、麦城の攻め方がわかつたぞ」

直ちに陣営に帰り、密に兵に『明朝五鼓までに一人土囊一つと草一束の準備を厳守すべし』と厳命した。翌朝五鼓になると更に車に石を積み込むよう厳命した。夜が明けると、軍を三隊に分け蔡侯には一隊を率いては麦城の東へ、公子乾はもう一隊を率いて麦城の西へ向かわせた。各将に持つて来た土石と草の束で小城をつくらせて砦とし、伍員はそれを自ら指揮した。東の城は細長くロバに似ているので『驢城』、西の城は丸くて磨に似ているので『磨城』と名付けた。蔡侯はその意味が解せない。

「東はロバ、西はひき臼。麦をひくのは簡単だ」

と伍員は笑つて言つた。

闔閭は麦城にいて、呉軍が東西に城を築いていると聞き、急いで妨害に出たが、なんと二城ともすでに出来上がつていて堅塁が屹立しているではないか。闔閭は先ず東城へ行つた。見ると出来上つた城の上には旗がいっぱい立ち並んでいて鋭気盛んである。闔閭は怒つてすぐ攻撃を仕掛けようとする、轅門が開いて一人の若い将軍が兵を引連れ挑戦し

てきた。名を問うと、

「われは蔡侯の末子姫乾なり」

と名乗った。鬬巢はそれを聞いて子供では相手にならないから伍子胥を出せというと、

「すでにそなたの麦城をいただきに行つたわ」

という。鬬巢は益々怒つて長戟を構え姫乾と渡り合つた。両者打ち合つて二十余合。突然早馬が飛んで来て麦城が呉に攻められているから至急帰城して欲しいと知らせて来た。鬬巢は城を失つては大変と急遽撤収の鉦を打つたが軍は混乱し、姫乾は勢いに乗つて攻め込み適当なところで引き揚げた。

鬬巢が麦城に帰つて来ると、軍を指揮している伍員にばつたり出遇つた。鬬巢は戈を横にして拱手の礼をとつた。

「子胥どのその後おかわりございせんか。あなたが先君から受けた冤罪はみな無極のやつた事です。讒言した連中はすでに誅殺され、あなたには報復すべき冤罪はございせん。まさか楚国の三世の恩をお忘れになつたわけではないでしょう」

「わが先人は楚に大功がありましたが、楚王はそれを考慮せず無実のわが父兄を殺し、更にわたしの命もねらいました。幸い天佑があり難を脱する事ができ、冤罪の恨みを懷いて十九年。そして今日があります。ご理解いただいて早々にわたしから離れていただいた方がお互いのためです」

鬬巢は大声で、

「おまえは主君に背く賊だ、お前なんぞを避けたのでは男がすたれるわ」

と罵倒し戟を構え伍員にかかつてきた。員も戟で応戦した。数合渡り合つて伍員が言つた。

「そなたは今日はいぶ疲れているようだ、勝つても自慢にならない。今日は城へ戻りたまえ。明日もう一度挑戦しようじゃないか」

「よし、それじゃ明日決着をつけようぞ」

そう言つて両者それぞれ兵を引き揚げた。夜中になって、突然城の上に喊声が上がつた。すでに呉の兵が城に入つていたのである。

どういう事かという、もともと伍員の軍中にはたくさん楚の投降兵がいたので、わざとそれを逃がして鬬巢の城へ帰した。その中の数人に言い含めて楚兵として混入させて、昼間隠れておいて夜になって城から縄を下し呉兵を吊り上げたのである。わかつたときには城の上にはすでに呉兵が百人あまりがいて一斉に喊声を上げ城外の大軍がこれに呼応したのである。城を守つていた兵たちは混乱して逃げ回り、鬬巢も逃げるより仕方なかつた。伍員も深追いはせず麦城を手に入れ呉王に捷報を伝えた。

西磨東驢で麦城陥落 偶然の閃き功奏す

子胥の無敵の智勇 荆蛮の右腕傾けり

孫武は虎牙山を通つて当陽阪に入つた。漳江が北に見え滔々と流れており、紀南の地勢は低く、西に赤湖があり湖水は紀南を通つて郢都城下にまで伸びていた。孫武は一計を案じた。兵たちを丘の上に駐屯させ、各自スコップを持たせて一晩の内に深い壕を掘らせ、漳江の水を赤湖に通し、長い堤を作つて入つてきた江水を堰き止めた。その水は何処へも漏れ出すところがなく水かさが平地で二三丈にもなつた。冬になり、強

い西風が起こり紀南城まで水につかった。守将宋木は仕方なく城中を廻り民衆に郢都に避難するよう呼びかけた。しかし水の勢いは強く郢都も一面河か湖のようになっていた。孫武は山上の竹を切つて筏を作らせ呉の兵士を乗せて城に近づいた。城中ではこれを見て初めて、この水が呉軍が漳江を決壊させた結果である事を知り、みな恐れおののき命からがら逃げて行つた。

楚王は郢都が防ぎきれなくなつた事を知り、急いで大夫箴尹固に西門に船を用意させ妹の季芊を助けて一緒に船に乗つた。子期は城の上で兵を督励して水を防ごうとしていたが楚王が城を棄てたと聞き、仕方なく王の車を守るために百官と伴に城を出た。それぞれ身一つで出て来たため妻を顧みる事ができなかった。郢都は主をなくし攻撃を受けない内に自壊してしまつた。史官は詩に言う。

虎方城に盤踞し漢水を守るも 呉軍の掃討速き事飛烟の如し
賢臣遠ざけ佞臣貪夫の国ならば 天突く城も何かは懼れん

孫武は遂に闔閭を奉じて郢都城に入つた。早速堰を切つて漳江に放水し、兵を統合し城外四囲の守備を固めた。伍員も麦城から闔閭に挨拶に来た。闔閭は楚王の宮殿に昇り、百官の拝賀が終えた後、唐、蔡両君も祝賀の挨拶に来た。闔閭は大変喜び群臣を集めた大酒宴を開き、その夜闔閭は楚王の内宮で泊まつた。周囲の者は闔閭に楚王夫人を進めた。

闔閭はその気もあつたが躊躇していた。伍員は

「楚はまだ滅びたわけではありません。王の妻はまだ王夫人です」

とは諫めたが、王が泊まれば女を抱くのはごく一般的な事である。周囲の者がまた言つた。

「楚王の母親伯嬴はもともと太子建の妻だったのを平王が美人だったから自分のものにしたわけで若くて色香も未だあせていません」

闔閭はその気になって伯嬴を呼びにやつたが彼女は出てこない。闔閭は怒つて引張つて来いと左右に命じた。伯嬴は扉を開め剣を扉に刺して言つた。

「諸侯間には、男女席を同じくせず、食すに器を共にせずという礼儀があると聞いています。大王がその礼をお捨てになり、王に陵辱された事が人に知られるくらいなら、命に従わずむしろ剣に伏せて死んだほうがましでございます」

闔閭は彼女の話の聞き、大いに恥じて謝つて言つた。

「夫人を敬慕いたしております。ちよつとお顔を拝見いたしたかっただけで、乱に及ぶ積りはございませんでした。どうぞお休み下さい」

夫人の内侍に扉をきちんとお守りするように言い、自分の従者には妄りに入らないよう厳重に注意した。

伍員は楚昭王を捜したが見つからないので、孫武、伯嚭等に楚の大夫たちの邸宅に分居させその妻妾を凌辱させた。唐侯、蔡侯、公子山は囊瓦の屋敷を探した。囊瓦に取られた裘佩は箱に入つたままであつたし宝馬肅霜も既にいた。二君はそれを取り戻し呉王に献上した。その他囊瓦の屋敷には宝が満ち溢れていて従者たちが好き勝手に持ち出し狼藉の限りを尽くした。貪婪な彼は一生うちにどれほど賄賂を巻き上げたことだらう。公子山は囊瓦の夫人を取ろうとしたが夫概に取られてしまった。この時の郢都城中はさながら禽獣の群れであつた。

乱行は楚の君臣を選ばず 私心のままに大倫を冒す
ただ伯嬴は晩節を堅持し 未亡人に一陣の清風を見る

と言つて闔閭は許した。

伍員は平王の墓を訪ね歩いた。東門外の寥^{りようだいこ}台湖にあることがわかり自分の部隊を引き連れそこへ行つた。そこは枯れかかつた草の平原で湖水が茫々と広がり、何処に墓があるのか全くわからない。部下にそこらじゅうを捜させたが影も形も見つからなかつた。子胥は胸を叩いて天に向かつて叫んだ。

「神さま、わたしには父上兄上の仇を討たせていただけないのでしょうか」

その時、突然一人の老人が目の前に現れ、拱手^{きやうしゆ}の礼をとつて彼に話しかけた。

「將軍、どうして平王の墓をお探しになつて居るのですか」

「彼は息子を追放しその妻を奪い、忠臣を殺し奸臣を重用し、わが一族を滅ぼしてしまつたのです。この手でやつ^{やつ}の首を落とせなかつたのが悔しいが、死んでいてもさらに死体を殺して父兄の仇を討ちたいのです」

「平王は自分が多くの人に恨まれて居る事を承知して居て墓を暴かれるのを恐れ、湖中に葬らせたのです。將軍がどうしても棺を手に入れようとお思いでしたら湖水を干すしかありませんし干せば見つけることができるでしょう」

そう言つて寥台に登りその場所を指した。員が潜水の得意な者に潜つて捜せると、彼が言つた通り台の東方に石製の外棺を発見した。そこで兵士一人に一つづつ土囊^{どふ}を持たせて墓の傍に投げ込んで堰を作り水を遮断して汲み出すと石の外棺が現れた。それを開けるとやつとひつぎが出てきたがこれがとても重い。引き揚げて開けると中は楚王の衣冠があるだけで後は数百斤の鉄くずばかりであつた。

伍員は呉王に楚の宗廟も毀してしまおうと言つた。しかし孫武は、

「兵を動かすには大義名分が必要で。平王は太子建を廢して秦女の子を立て、讒言貪婪を近づけ忠良な臣を殺し、外に對しては諸侯に暴虐を行つて来たから、呉がその報復を行つたわけです。楚の都城はすでに破れましたので太子建の子^{びしやう}半勝を召し昭王に代えて王位につけ宗廟を守らせるべきであります。楚人は罪無き故太子を憐れんでいますからきつとしまく行きます。それに呉に對する恩も感じ将来呉のためにもなることでしょう。王がここで楚を許しても楚を得た事に違いはなく、むしろ名実両全です」

と闔閭を強く説得したが、闔閭はどうしても楚を滅ぼしたくて遂に孫武の忠言を聞かず宗廟を焼き壊してしまつた。

唐・蔡二君は挨拶をして帰国した。

闔閭は章華台に酒を置き樂隊に音楽を奏させ群臣と大宴会を行つた。群臣は皆大喜びしたが、伍員だけは泣いて止まなかつた。

「卿は楚に報復して志を遂げたのに、何を悲しんでいるのです」

と闔閭が聞くと、員は涙ながらに答えた。

「平王は死んでしまつていて、楚王も逃げ、父兄の仇はまだ万分の一も報復できていません」

「卿はどうしたいのです」

「お願いでございます、臣に平王の墓を掘る事をお許し下さい。棺を開いてその首を斬つてこそ恨みを晴らした事になります」

「卿には大変な恩があります。それであなたの気持ちを慰めることができるのなら反対などできるわけがありません」

「それは擬棺ぎかんです。本当の棺ひつぎはその下です」

と老人が言うので更に石板の下を見るとなるほど別なひつぎが出てきた。員がひつぎを壊し死体を引き出すとそれは紛れもなく平王であつた。水銀で処理されていたので皮膚も肉も生きた時のままであつた。員はその死体を見ると恨みが極に達し、手に持った九折の銅鞭で狂つたように三百回も打つた。肉はただれ骨は粉々になつた。腹を足で踏みつけ右手で目をくりぬき、

「あなたの目は節穴だ。忠臣か佞臣かの見分けもつかず佞臣の讒言を信じて我が父兄を殺してしまつた。あれが冤罪でなくて何だと言ふんだ」と言つて平王の死首を斬り、ひつぎと一緒にしかばねを原野に棄てた。

怨みは重ねるべからず 冤は極むべからず

冤極むれば上下なく 怨念積れば死人も殺す

男一匹死を逃がれ 遂に凌辱は朽骨に及ぶ

血と涙鞭にこぼれ 怨気は日を暗くす

孝心は忠心を奪い 家の仇は国に及ぶ

壮烈なり子胥 千載になお涙をささう

伍員は平王の死体に鞭打つた後、われにかえり老人に聞いた。

「あなたは どうして平王の墓の場所とそのトリックを知つていたのですか」

「わたしは他でもありません、あの墓を作つた石工です。平王は我々五十数名の石工に命じてこの複雑な墓を作りましたが、我々が将来こ

の機密を漏らすことを心配して墓が出来上がった後、墓の中で全員殺してしまいました。その時わたし一人幸いにも逃げる事ができたのです。今日は將軍の誠の孝心に感じてお教えいたしました。またあの時罪なくして死んだ五十余人の仲間の石工のための報復でもあつたのです」

員は金帛を取り出して老人に厚く酬いた。

さて楚昭王であるが、船で沮水そすい（漳水の支流）を西に渡り、更に長江を南に渡つて雲中うんちゆう（雲夢沢、武漢荊州の間の広大な湿地帯）に入つた。

その夜数百人の追い剥ぎが昭公の船を襲い、昭王に斬りかかった。この時王孫綰おうそんが傍にいて王を背にかばつて大喝した。

「この方は楚王なるぞ、おまえたち何をしようというのだ」

と言つたが賊の矛が肩を突き綰は氣を失つて倒れた。

「俺らは金さえあればいいんだ。王かどうかそんな事はどうでもいい。

令尹れいいんでさえ賄賂で動く。ましてや俺ら小庶民、金だよ」

と言つていきなり彼らは船中くまなく金帛財宝類を捜し出した。

箴尹しんいん固は急いで昭王を助け岸に上がり難を避けた。

「誰か妹を助けてやってくれないか」

と昭王が叫ぶと、下大夫鐘建しやうけんが季半きはんを背負つて王に随いて岸に上が

つてきた。振返ると群盜が放つた火で船は燃えていたので、仕方なく夜中を数里歩いて逃げた。

夜明けになると、子期しき、宋木そうぼく、鬬辛とうしん、鬬果とうかが続いて後を追つてきた。

「臣の家が鄭ていにあります。ここから四十里足らずです。どうかそこま

で辛抱願います。そこで後事を謀りましょう」

と鬬辛が言つた。まもなく王孫綰もやつてきた。昭王は驚いて、

『屍に鞭打つ』は伍子胥のこの故事から成る。「史記」伍子胥伝

「そなた重傷を負っていたのにどうやって逃げてこられたんだ」

「傷が痛くて起きられなかったのですが、火が近づいて来た時、突然誰かが臣を陸に押し上げてくれたのです。ぼんやりとした頭の中でその人の声で『わしは楚の故令尹孫叔敖である。我が王に伝えよ、呉軍は近く勝手に引き揚げ、楚の社稷は永遠である』と言って臣の肩に薬を塗ってくれました。目が覚めると血はとまり痛みも治まっていました。ですからここへ参る事ができたのでございませう」

「孫叔は雲中の生まれだから、その魂は消えていないんだな」

昭王はしきりに感心していた。
闕果が櫓を出して箴尹固が瓢から水を出して王に進めた。昭王は闕辛に成臼の港で船を探すよう命じた。辛が船を捜していると、一隻の船が東から上ってきた。妻と子供が乗っている。よく見ると大夫の藍尹亶である。辛は彼に呼びかけた。

「王がここにおわす。乗せてもらえないか」

「亡国の君を乗せる舟はない」

と言ってなんと無視して行ってしまったのである。闕辛はその後かなり待つて漁船を見つけ、しかも着物を脱いで与えてやと岸につけさせた。王は季聿と一緒に渡つて郢邑にたどり着いた。闕辛のすぐ下の弟闕懷が王を出迎えた。辛は食事の用意を命じた。闕懷は食事の途中何度も王を睨みつけていた。闕辛は変に思つて末の弟闕果と王の寢室の警護をしていた。夜中に刀に焼きを入れる音がしてきた。闕辛が外に出てみると闕懷ではないか。手に利刀を持って激しい怒気で顔色が変わっていた。

「今頃刀に焼を入れて何をしようというのだ」

「王を殺すんだ」

「逆心を起す原因は何だ」

「父上は非常に忠実な人だったのに費無極の讒言を信じた平王に殺されたではないですか。平王が我が父上を殺したのだからわたしは平王の子を殺して仇を討とうと思うのです。どうしていけないのです」

辛は怒鳴った。

「君は天子である。天子に人が禍を与えられたからと言って人が天子に仇を討つものではない」

「王が国にいれば君主と言えますが国をなくした現在、天子でも何でもなくただの仇じやないですか。仇を見てこれを討たなければ人じやないですよ」

「昔から『怨みは引継ぐな』と言う。王もまた前人の過ちを悔いられて我われ兄弟を使つて下さっている。王の危機に乗じて殺すというのは天がお許しにならない。もしそなたがどうしてもやると言うなら、わしが先ずそなたを斬る」

闕懷は刀を手挟んで恨めしそうに門を出て行つた。昭王は戸外で叱責する声がしたので着物を着てそとに盗み聞きをした。事情を全て聞いて、結局郢に留まるのをやめた。闕辛、闕果、子期は相談して王を奉じて北の随を頼ることにした。

さて子西は魯汭江を守っていたが郢都が敗れて昭王は出奔した事を聞き、国人が散りじりになるのを心配して、王の服を着て、王の輿に乗り王を自称し、脾泄（現湖北省江陵付近）に国を立て人心を鎮めた。民衆は呉の乱脈を避けて頼つてきた。その後王が随ににいるというのがわかり王の在所を民衆に教え、彼らを説得して随へ行くことにした。

伍員は昭王をとり逃がしたのが恨めしく、

「楚王を捕えなければ楚を滅ぼした事にはなりません。臣は一軍を率いて西に渡り馬鹿王の後を追って捕えて帰りたいと思います」

と闔閭に言つて許可をもらった。

伍員は昭王の後を追ひ、遂に隨にいる事をつきとめた。早速隨へ行き、隨君に書簡を送り楚王を出すよう要求した。

楚王はこの後どのようにして逃れたのであろうか、それは次回のお楽しみ。

第七十七回

申包胥 秦庭で泣いて借兵を乞い

呉軍 撤退し楚昭王復讐

伍員ごうんは隨の南に駐屯し使者を送つて隨侯に書簡を出した。内容の概略は以下の通りである。

漢川にいる周の子孫はすべて楚に吞み込まれてしまっている。今、天佑を得て呉が楚君の罪を問うている。もし楚珍（昭王）を提出して呉と友好を図ろうとするなら漢陽の土地は全て隨侯のものとし、我が君と君侯は将来にわたり兄弟として一緒に周室を助けていきたい。

隨侯は読み終わると群臣をあつめて相談した。楚の臣子期は顔が昭王と似ているので、

「事は急を要します。わたしが王になつて呉に出頭すれば王はまぬがれられましょう」

と隨侯に申し出た。隨侯はさっそく太史を呼んでその吉凶を占わせた。太史の占いの結果は、

平あれば必ず坂あり 行けば必ず戻る

古きを棄てるなかれ 新しきを欲す勿れ

西隣は虎となり 東隣は肉となる

と出た。隨侯は、

「古きとは楚であり、新しきとは呉である。神はわれにはつきりと示された」

と言つて使者を帰し伍員に返答した。

「わが国は代々楚を宗主国とする事を誓つて参りました。楚君に対する侮辱をとて受ける事はできません。しかし楚君は追撃を恐れずでにここにはおられません。どうかお調べになつて下さい」

伍員は囊瓦が鄭国に逃げているので楚王も鄭に逃げた可能性が強いと思つた事と、鄭には太子建を殺されているがその仇の報復も終つていない事もあり、結局軍を鄭に移し鄭を包囲した。鄭では賢臣遊吉が亡くなつたばかりである。鄭定公は事態を非常に恐れて、囊瓦を自殺させ死体を呉軍に差出し、楚王はまだ来ていないと説明した。しかし呉軍は鄭を滅ぼして太子の仇を討とうと攻撃を緩めなかつた。大夫たちは城を背にして存亡をかけ一戦すべきだと願ひ出た。鄭伯は、

「現状の軍では楚にさえ及ばないのでその楚を破つた呉に向かつても螳螂の斧だぞ」

と言ひながらも仕方なく国中に「呉軍を撃退したら国の共同統治権を与える」という懸賞を出した。三日たつた。丁度この頃、あの鄂渚の『釣魚の翁』の息子が兵禍を避け鄭城に逃げて来ていた。彼は呉の大將が伍員であると聞いて鄭君に謁見を求め、呉を撤退させる事ができると申し出た。

「呉軍を撤退させるのにどのくらいの兵力が必要か」

「兵隊も食料も全く要りません、船の櫂を一つ頂戴して歌を歌ひながら呉軍の前に出ると、それだけできつと呉軍は撤退いたしましょう」

鄭伯は信じられなかつたが、今は打つ手が無いので、

「うまく行けば褒美は思ひのままだ」

と言つて權を与え、とにかくやらせてみる事にした。彼は縄にすがつ

て城を下り、呉軍の陣前で櫂を叩いて歌を歌つた。

蘆中の人よ蘆中の人 腰の宝剣七星紋
君忘れしや渡江の時 麦の飯と鮑の羹

兵士は彼を伍員の前へ連行した。彼の『蘆中の人』には聞き覚えがある。

「あなたはどなたですか」

員は驚いて席を下りてたずねた。彼は櫂を挙げて、

「將軍にはわたしがつ持っている物が何をする物かお判りでしょうか。

わたしは鄂渚の『釣魚の翁』の息子です」

「おお、あなたの父上はわたしのために亡くなりました。かねがねご恩返しをしたいと思いますのですが残念ながらその方法が見つかりませんでした。幸い今日、懐かしい歌をお聞きしお会いする事ができました。どういふ用でいらつしやつたのですか」

「他でもありませんが、鄭国は將軍の兵力を恐れ、『呉軍を撃退したら国の共同統治権を与える』という懸賞つきの命令を出しております。

臣は父と將軍とのあのあわただしい出会いを思い出し、將軍に鄭をお許しただけですようお願ひし上げようと参つた次第でございます」

伍員は天を仰いでため息をつき、

「ああ、員が今日あるのはみなあの時の『釣魚の翁』のお陰です。どうして忘れる事ができませんよう」

と言つて、即日包囲を解き引き揚げた。

鄭伯は釣魚の翁の子の報告を受け非常に喜び、かれに百里の地を封じた。人々は彼を『漁大夫』とよんだ。今も溱、洧（ともに鄭を流れる河）

の間に丈人村というのがある。これがその封地である。

蘆洲の密語が死生を隔てり 棹歌（舟歌）は楚歌よりも強し
呉軍去り翁の息子鄭地を給う 昔江上の情 何ぞ忘れ得べけん

伍員は鄭の包囲を解いて楚に帰り、軍を分けて各所の守備を固め、大
本営を麇に置いた。四囲に使者を送り楚の属国に投降を呼びかけ、同時
に楚王の搜索を急いだ。

さて、申包胥は郢都陥落後夷陵（現湖北宜昌）の石鼻山中に逃避して
いたが、子胥が墓を掘って屍に鞭打ち、更に楚王を捜していることを聞
き、子胥に手紙を書いた。

あなたは元々平王の臣で北面して仕えていたではありませんか。
それなのにその遺体を陵辱したのは、仇討とはいえあまりにひどく
はないでしょうか。物事は行き過ぎると反動があります。早々に引
き揚げられるよう忠告いたします。さもなくば小生、何時かの『君
が楚を滅ぼせば、われ必ず楚を再興させん』という約束を実行する
ことになります。

伍員は手紙を読んでしばらく考えていたが、ようやく使者に言った。
「軍務繁忙で返書が書けないがあなたの口から申君にお礼の言葉を
伝えて欲しい。忠孝両全は難しく、『日暮れて道遠し』の感が強い。それ
ゆえ正義に逆行した事を敢えてやつたのです」

（吾日莫遠遯） 史記伍子胥列伝

使者は包胥に報告した。

「子胥がその気になれば楚は必ず亡ぶだろう。これを座して待つ事は
できない」

楚平王夫人は秦哀公の娘であり、楚の昭王は秦公の甥である事を思い
出した。楚の困難を救う道は秦に頼む以外にはない。そこで昼夜兼行で
西へ向った。ひたすら走り踵が裂け血が流れるので着物を引裂きしば
つてなお走り続けた。やつとの事で秦都雍州に着き、秦哀公に謁見し
呉の横暴を訴えた。

「呉は豚の如く貪婪かつ蛇蝎の如き残忍で、以前から諸侯併呑をもく
ろんでおりましたが、今回手始めに楚に攻めて来ました。我が主君は残
念ながら守りきれず国を失つて流浪しております。それで貴国に危急を
お知らせして、婿舅の情におすがりし借兵をお願いするようにと、小職
に特命を下された次第でございます」

「秦は西の端にあつて兵力は小さく自分の守りに精一杯で、人の面倒
までは見る力はないですよ」

「秦国と楚国は国を接していますので楚を滅ぼせば呉は必ず秦に攻
込んで来るでしょう。楚を助けることは秦の固めにもなります。秦にと
つて楚がいれば呉を畏れる事はありません。もしお助けいただき楚が存
続できましたら子々孫々秦国に北面しお仕えいたします」

秦哀公はそれでも態度を決めかねていた。

「大夫、しばらく宿舎でご休憩下さい。家臣と相談いたしますので」
「わが君は零落して荒野をさまよい、未だに安居できておりません。
わたしがどうして宿舎などで安閑としておれましょう」

この頃秦哀公は酒に溺れ、国事には関心がなかった。包胥がどういっ
ても哀公は出兵するとは言わなかった。そこで包胥は衣冠を脱いで秦の
朝廷の広間で昼も夜も大声で泣き続けた。七日七晩泣き続けその間水を
一滴も口に含むことはなかった。哀公はこれを聞いて驚いた。

「楚の臣は主人をここまで思うのか。こんな忠臣がいても呉は楚を滅ぼそうとしているのに、こんな賢臣がいないわが国を呉が許すわけがない」

と言って涙を流して、『無衣』の詩（詩経 秦風）を賦して彼を讃えた。

豈衣無しと言わんや あなたと袍（長い上着）を共にせん

王ここに師を興す あなたと仇を共にせん

（詩経 秦風） 秦風『無衣』 平凡社東洋文庫 白川静訳注参照

哀公は救援を承知したのである。包胥は叩頭の礼をしてはじめて食事
に手を付けた。

秦哀公は大将子蒲、子虎に戦車五百乗を預け包胥と一緒に楚救援に向
かわせた。

「わが君は現在随にいて旱魃に雨を待つように救援の知らせを待
ちしておられますので、胥は一足先に帰って知らせます。元帥は商（現陝
西省商鞅、後に商鞅が封じられた商）に出て道を東にとつていただければ五
日ほどで襄陽で、そこを南に折れるともうすぐ荊門（郢都の北）です。
胥は楚の残兵を集め石梁山の南から参ります。再びお会いできるまでに
二月はかかりますまい。呉は勝利に酔ってきつと準備ができていないで
しょうし、呉の兵たちも国外で長いので帰心が募っておりましようかた
りたがっているでしょうから、一軍でも破れば自然に瓦解すると思いま
す」

「我われは道に不案内ですから楚軍の案内が必要です。大夫、期日を
違わないようお願いしますよ」

包胥は秦軍と別れて随へ急ぎ昭王に謁見し報告をした。

「秦の救援依頼に成功しました。すでに秦軍は国境を出ています」

昭王は大喜びで随侯に、

「占いが言っていた『西隣は虎となり、東隣は肉となる』とは西の秦が
虎で東の呉が食われる肉、その通りになりましたね」

この頃遽延、宋木達も残兵を集めて隋にやってきた。子西、子期は随
の軍も合わせ一斉に進發した。秦軍は襄陽（現湖北省襄陽市）で駐屯し
楚軍を待っていた。包胥は子西、子期らを秦軍に紹介した。楚軍が先行
し秦軍がこれに続いて進軍を開始し、胥（現河南省正陽県）を前にして

呉の先鋒夫概とぶつかった。子蒲は包胥に、

「あなたの方で楚軍を率いて先ず呉軍と戦ってください、我われは後
詰いたしますから」

と言うので包胥は夫概と闘った。夫概は自分の力に自信があるので包
胥など眼中になかったが、十余合打ち合っているうちに子蒲、子虎の兵
が突入してきた。見るとその旗には秦と書いているではないか。

「どうして西の秦軍がいるんだ」

と驚いて急遽撤兵したが、大半は壊滅し子西、子期は勝ちに乘じて五
十里ほど追撃した。

夫概は郢都に逃げ帰り呉王に会って、秦軍の勢いが鋭く大変な敵であ
る事を説明すると闔閭は非常に心配になった。そこで孫武は次のように
進言した。

『兵は凶器なり』と申します。一時的には実力以上の事もできます
が、長期的な手段には成り得ません。楚は土地は広く、民衆は呉に心服

兵は凶器なり『史記』越王勾踐世家で范蠡が勾踐を「兵者凶器也争者逆徳也」と
聞くと諫めています。これは兵書尉繚武議篇に同文がありここからの引用であ
る（著者尉繚は105,106回参照）

していません。以前半勝を王に立て楚を保護するべきだと申し上げたのは、今日の事態を危惧したからであります。事態がここまで来れば、秦に使者を送り修好を図って、楚君の復位を認め、それを条件に楚の東方を割譲させれば十分といえます。郢都に未練を持って対峙する事になりますと、楚軍は怒りと力、呉軍は驕慢とたるみ、この差に加え、楚には虎狼の秦が加わります。そうなるに臣も呉軍の万全を保障できなくなります」

伍員も楚王を捕える事が困難だとわかったし、孫武の話も納得できた。闔閭も仕方なくそうしようと思ったところへ伯嚭が口を挟んだ。

「わが軍は東呉を出てからずっと破竹の勢いで、五回の戦いで郢都を落とし遂に楚を平らげました。一度秦軍に出遭ったからといって慌てて引き揚げるといふのは何とも竜頭蛇尾で意気地の無い事ではありませんか。一万の兵をお預かりできれば必ず秦軍を打ち破り一人も秦へ帰しません。もし敗れるような事があれば甘んじて軍令に服します」

闔閭はかれの気概に動かされそれを許した。孫武も伍員も懸命に引き止めたが伯嚭は聞かない。遂に軍を率いて城を出て行き両軍は軍祥（現湖北省隨縣）で出遭い布陣した。伯嚭が見たところ楚軍の陣列は整然としていない。すぐに陣太鼓を打ち戦軍を突入させた。ぱったり子西に出遭ったので大声で罵倒した。

「死に損ないめ、消えていた灰からまた火がついたのか」

「何を言うか売国奴め、どの面をかけてやって来たんだ」

それを聞いて伯嚭は激怒し戟を構えて子西と渡り合った。どれほども打ち合わないうちに子西が偽って逃げた。伯嚭は追った。二里も行かない内に左から沈諸梁の一軍が、右の方から遷延の一軍が跳び出してきた。

さらに秦将子蒲、子虎が新戦力を率いて中央から呉軍に突っ込んできた。三方向からの将兵が呉軍を三分し、伯嚭は左右を突いて出るが脱出できない。そこへ伍員の兵が救援に入り大混戦の中、やっと伯嚭を救出した。一万の軍馬のうち残ったのは精々二千人というところであった。伯嚭は罪を自覚し自ら縛り上げて呉王にま見えた。孫武は彼を見て伍員に言った。

「伯嚭の性格は功を貪り自分勝手です。将来必ず呉の禍となるでしょう。この際敗戦の責任を取らせ軍令により斬るべきです」

「敗軍の罪はありますが彼のこれまでの功績も小さくはありません。しかも敵を目前にして大将を斬るのはどんなものでしょうか」

伍員はそう言って結局呉王に彼の罪を許すよう進言した。

秦軍は郢都に迫って来た。闔閭は夫概と、公子山（闔閭の子に郢都を守らせ自らは大軍を率いて紀南城に駐屯し、子胥と伯嚭には夫々磨城、鹽城に詰めさせ、犄角の構えを取り秦軍と対峙し、唐、蔡にも救援を依頼した。

楚将子西は秦将の子蒲に、

「呉は郢を大本営にしていますから非常に固く、もし唐、蔡が援助することになればとても勝てません。機を見て唐を攻め唐を破れば蔡は必ず恐れをなして自己防衛を計ります。そうすれば我われは呉だけに専念すればよくなります」

子蒲はその計に賛成した。そこで子蒲は兵を分け唐城を攻めて唐成公を殺し唐国を滅ぼした。蔡哀公は恐れて呉救援の兵を出そうとしなくな

この孫武の心配は不幸にも現実化し伯嚭賄賂を受け越王を生かす79回以降。

った。

さて夫概は楚を破った第一の功は自分であるとうぬぼれていて、沂水きすいの一敗で呉王に郢都えいとの共同守備を命ぜられた事が内心面白くない。呉王が秦と対峙して膠着状態だと聞き、ふと気持ちが動き、

「呉の制度では兄のあとが弟が継ぐことになっており、本来わしが継ぐべきであるが、王は子の波を太子に立てわしを無視している。大軍が出征し国内は空になっているから、この機に乗じて国へ帰って王位を奪えば後の争いには絶対勝てる」

と考え、自分の部隊を率いて郢都えいとの東門をそとと抜け出し漢水を渡って帰国した。

「闔閭は秦に破れ行方がわからないからわしが継位する」

と言って呉王を自称し、子の扶臧ふさうに全軍を率いて淮水わいすいに配置し呉王の帰路を抑えた。世子波せいはは謀反を知り専毅せんきとともに城に登って守備を固め夫概を入れなかった。夫概は使者を三江經由で越に遣り、五城割譲を成功報酬として呉を挟撃するように説得させた。

一方闔閭は秦が唐を滅ぼした事を聞いて、驚いて諸将を集めて対策を協議しようとしたとき、突然公子山から報告があった。

「夫概殿が理由はわかりませんがご自分の部隊を率いて勝手に本国へ帰ったようです」

「夫概殿の帰国はきつと謀叛だと存じます」

と伍子胥は言った。

「そうだったらどうする」

「夫概殿は勇士ではありますが思慮に欠けます。心配な点は変を聞いて越が動く事です。早々にお帰りになって内乱を鎮めるべきです」

闔閭は孫武と子胥に郢都えいとを守らせ、自ら伯嚭と共に水軍を引連れ流れに乗って下った。漢水を渡った所で太子波の使者に遇い急報を聞いた。「夫概が謀反を起こし王を名乗って越と結び、越が攻め込んできました。呉都の危機は旦夕に迫っています」

「子胥の言うとおりだ」

闔閭は驚いて直ちに郢都えいとに使者を送り孫武と伍員に引き揚げを命じた。帰国を急ぐと同時に河沿いの将士たちに諭告した。

「夫概を離れ帰順する者は現職を保証、遅れたものは誅殺する」

淮河の岸で守っていた兵はみな武器を投げ出し帰順してきた。扶臧ふさうは谷陽に逃げ帰った。夫概は民衆を武装させようと思ったが、彼らは呉王が健在だと聞いてみな逃げ隠れてしまった。夫概は仕方なく自分の部隊だけで城を出た。

「わしはそなたを手足の如く任せてきたのに、何故謀叛など起したのだ」

と闔閭は夫概に訊ねた。

「おまえが王僚を殺したのが謀反でないというのか」
これを聞いて闔閭は激怒し伯嚭に命じた。

「賊を捕えろ」

闔閭は大軍を指揮して夫概軍を攻めた。夫概が勇士といえども多勢に無勢、大敗を喫し敗走した。扶臧が船を用意して夫概を渡し宋を頼って逃げて行った。闔閭は民衆を慰撫し呉都へ帰って対越対策の検討に入った。

さて、孫武の方では、呉王の撤退の詔を聞き伍員と対策を練っていた。その時、はからずも楚軍申包胥しんほうこから手紙が届いた。概略次の通り。

貴国が郢都えいとに入ってからすでに三季節が過ぎましたが、楚を固める事はできていないようです。天には楚を滅ぼす意志がないと考えられます。君は『楚を滅ぼさん』の言を実践され、吾もまた『楚を再興させん』の志があります。朋友の義により互いに和を結び傷付け合うのはよしでしょう。君が撤兵するのであれば吾もまた秦軍を引き上げさせましょう。

伍員はこの手紙を孫武に見せて、

「そもそも呉は数方の兵で長駆楚に入り宗廟を焼き社稷しゃしやくを倒し、死者に鞭打ち、生者には妻を罰し、なかなかできない快挙でした。しかも秦が我が軍の一部を打ち破ったといつてもたいした損害ではありません。兵法に、『司と見れば進み、難と知ればすなわち退く』といいます。幸い楚は未だわが方の危急を知らないようですからただちに引き揚げましょう」

と言うと、孫武は、むさむさと引下るのでは天下の笑い者になるから半勝ひしょうの件を要請したらどうだろうかという。伍員も賛成し早速返書を書いた。

平王は罪無き子（太子建）を追放し罪無き臣を殺したため、小生はその憤りを禁じきれずこのような事になりました。昔、斉桓公は邢けい衛を復国し秦穆公は晋の三君の立君を助け、何れも土地を取らなかった事は今に語り伝えられており、小生不才ながらこの義拳を仄聞しております。現在太子建の子勝殿は呉にいて糊口をしのいでおられますが、未だに寸土も有しておりません。楚が勝殿の帰国を許し故太子の祀りをさせていただけるのでしたら、小生も兵を引き揚げ

あなたのお気持ちに沿いたいと存じます。

申包胥は返書を受取り子西に見せた。子西は、

「故太子の子孫を封じるのは私も賛成です」

と言って早速呉に半勝ひしょうを迎える使いを出した。しかし沈諸梁しんしりやうは諫めて、

「太子はすでに廃されていて、勝は仇人です。どうして仇人を養い国を害しようとなさるのです」

と反対すると子西は、

「勝は匹夫に過ぎない。何もできやしないよ」

そう言って楚王の命で勝を呼び出し大邑を封じた。楚使が帰ると孫武と伍員は帰国の途についた。楚の国庫の宝玉は全て車に満載して持ち帰り、楚国境近辺の一万户を呉に移した。

伍員は孫武に河を下って先に帰るように言い、自分は陸路歷陽山を通って東皐公とうかうこうを訪ね礼をしようと思つたが、人も家も見当たらなかった。龍洞山に使いの者を遣つて皇甫訥こうふとつを訪ねさせたがやはり跡形も無かつた。

「正に真の高士だ」

と嘆息を漏らして何度も頭を下げその地を去った。昭関へ行つてみたがすでに楚兵は守つていかなかった。伍員は関所の取り壊しを命じ、次に深陽しんやうの瀬水のほとりへ行つたが、ここでもため息をついて部下たちに話した。

「わしはここで腹をすかせて一人の女性に飯を頼んだんだ。するとその女性是我に汁と飯を食わせてくれ、河に飛び込み亡くなったんだ。わしはその時石に字を書いて埋めておいたのだが、未だ有るだろうか」

と言つて土を掘らせるとその石が出てきて字がはつきり読めた。千金で恩返しをしようと思つたがその家はどうしても見つからなかった。

「あなたの恩は決して忘れていないよ」

伍員はそう言つてその金を瀬水に投げ入れた。

それから一里足らず行つたところで、路傍で老婆が兵が通り過ぎるのを見て泣いていた。兵士がどうして泣いているかをたずねた。

「わたしには三十歳になつても嫁に行かずに家を守つてくれていた娘がいたんだ。ずっと以前に瀬水で洗濯していたら腹をすかせた立派な人が通りがかつてな、その人に飯を食わせてやつて、その事が漏れないようにと自分で瀬水に飛び込んで死んじまつたんだ。その人は楚の人で逃亡中の伍君だったということじゃつた。その伍君は戦争に勝つて帰国したという事じゃがわしやまだお札をいただいてないんじや。娘を思うて傷心のうちに空しく死んで行くのが悲しゆうてう」

「わし等の主将が正にその伍君なのだ。そなたに千金のお礼をしようとなさつたが家がわからなかつたからその金を河に投げてしまわれた。それを取りに行きなさい」

老婆はそれを拾つて歸つた。現在その河の名は投金瀬とうきんせと呼ばれている。

投金瀬の水さらさら流る 今猶忘れ得ぬ逃亡の時の報恩を

三十歳まで嫁がざりしも 芳名は子胥と伴に永遠なり

越の君主允常いんじょうは孫武の軍が帰国したと聞き、武が戦争上手だから勝利は難しいと判断し兵を引き揚げ、

「越呉は宿敵である」

と言つて自ら王を名乗つた。

さて、闔閭こうりやうは楚を破つた功の一番に孫武を挙げた。孫武は官に留まる事を好まず山に戻ること強く願ひ出た。王は伍員に慰留させたが、

「あなたは天地自然の道理というものを存して下さい。暑さ過ぎれば則ち寒さ来たり、春が過ぎなばそのうち必ず秋になります。王は軍の強き待み近隣諸侯を畏れず驕慢になりましよう。功成つて身を退くこれが身を全うする道です。わたしは自分の安全だけを言っているのではなくむしろあなたにもそうお勧めします」

と武は伍員ひそがに密にそう言つた。員はどうもそれには賛成できなかった。武は一人飄然と去つて行つた。王から贈られた教輶の金帛は沿路の貧しい民衆に分け与えてやり、その後彼がどうなつたかは誰も知らない。

孫氏の才 伍員により彰顯しょうけんさる

軍法を二嬪ふるに行い 威を三軍に揮う

衆を御す事一つの如く 敵を予見する事神の如し

楚に大勝利を得るも 秦に小挫あり

智の中に拙を残し 謀は完全を期さず

爵禄に拘らず 亡を知りて存を知る

出でて道明らかにし 去りて名を成す

兵書十三篇 兵家はこれを尊用す

闔閭は伍員を相国に任じ、斉の仲父ちゅうふ、楚子文の先例にならつて名の員を使わず字の子胥ししよと呼び尊敬の意を表わし、また伯嚭はくひを太宰に任じ一緒に国政を任せた。さらに閭門しやうもんを破楚門と改名すると同時に、南の国境に石壘をつくり兵士を置いて越に備えこれを石門関と名づけた。

越の大夫范蠡も浙江（钱塘江）の川口に築城し呉に備え、固く守るの意味で固陵と称した。

周敬王十五年（紀元前五〇五年）の事である。

話変わつて、楚のその後であるが、子西と子期は再び郢城に入り、平王の遺骨を葬り宗廟を立て直し、同時に申包胥に水軍を率いて昭王を迎えに随へ遣わした。昭王は随君と不可侵条約を結び、随君は昭王が船に乗るところまで見送った。昭王は大江を航行している間、欄干にもたれ回りを見ながらこれまでの苦しい日々を思い起こし、今日再びこの河の真ん中に自分がある事が感慨深そうであった。突然水面に一斗升ほどの大きさの真つ赤なものが見えた。水夫に掬い上げさせて何かを群臣にたずねたが誰も知らない。切り開いてみると中は瓜に似て食べると大変甘い。この果物の名前がわかったら博物士にしようと言って皆に分け与えた。

一日足らずで雲中に入った。昭王はため息をつき、

「ここは強盗に襲われた所だ、忘れる事はできない」

と言って船を岸に停泊させて、鬪辛に命じて雲夢沢周辺を旅行した時に宿泊するためのこじんまりした建物を建てさせそこに投宿した。現在雲夢県に楚王城と言う地名があるがその故跡である。

子西、子期らが郢都から五十里のところまで出て昭王を迎え、君臣は互いにねぎらい合った。郢城まで来ると城外には白骨が散らかっており、城中の宮城の半分は壊されているのを見て思わず涙をこぼした。宮中に入り母親の伯嬴（はくえい）に会って互いに泣いた。

「不幸にもこんなに大きな事変に遭い、宗廟、陵墓が陵辱され、この

恨みは何時になつたら晴らせるでしょう」

と昭王が言うところ伯嬴は、

「今日復位したばかりです。先ず賞罰を明らかにし、それから民衆を慰問救済し、そのあと力の回復を待つて、次の計画を考えればいいでしょう」

と諭した。昭王は母親に感謝し、その日は寢室では寝ず、齋の宮で泊まった。翌日宗廟と土地の神を祭り陵墓を廻り、それから昇殿して百官の祝賀を受けた。

「わしは奸臣、佞臣を重用し、危うく国を滅ぼすところであつた。卿らがいなければ再び日の目を見ることはなかつたであらう。国を失った責任はわしにあり、復国は卿たちの功績である」

昭王はそう言うて皆に心から感謝し、大夫たちも昭王の気持ちをありがたく謝した。そして先ず宴を開き秦將、秦軍を厚く勞つて帰した。その後論功行賞を行い子西を令尹に、子期を左尹に任じ、申包胥の秦軍を要請した功績を大きく評価し右尹に任じようとした。しかし申包胥は、「臣が秦軍を要請したのは殿のためでありまして、自分のためではありません。殿はすでに復国されましたので臣は志を遂げることができません。これで十分であります」

と言って右尹を固辞した。昭王が強く言うので、包胥は妻子を連れて逃げる事にした。

「あなたは身心を尽くして秦師を乞ひ国の復興に貢献したのですから、賞は応分のものではないですか。何故逃げようとなさるのです」

「最初、友達（しよ）の誼で子胥の陰謀を黙っておいたため、楚は子胥に滅ぼされてしまった。これはわたしの罪だ。罪ある身で大功を食ふというの

はわしにはできないことだ」

そう言つて深山に逃げ込み生涯出てこなかった。昭王は人を遣つて彼を捜し求めたが見つからず、申包胥しんほうこがもと住んでいた場所に『忠義の門』という表彰門を立て旌表せいひょうとした。そして右尹には雲中で王の身代りに賊の戈を受けた王孫綰ようを任命した。その他沈諸梁、鐘建、宋木、闕辛、闕巢、遽延等にそれぞれ爵を進め封地の加増があった。また、闕懷を呼んで賞を与えようとしたが、

「闕懷は殿を弑逆しようとした男です、罰しても当然ですのに賞を与えるのは如何でしょう」

子西はそう言つて引き止めたが、

「彼は父親の仇を討とうとしたので孝子といえる。孝子であれば忠臣になれるはずだ」

昭王はそう言つて彼を大夫に任じた。

藍尹亶らんいんひんが昭王に目通りを願ひ出た。王は成臼せいきゅうの津で船に乗せてくれなかった事を恨んで捕えて誅殺しようと思った。

「わしを棄てて行つた男が今更何をしに来たのか」

「亶は徳を棄て恨みを植えたため、柏拳はくけんの戦いで敗れましたが、王は何故これを真似られるのでしょうか。成臼にいた船に郢都の宮の安否がわかるわけがありません。臣が成臼で王をお乗せしなかったのは王への警告だったのです。今日お伺いいたしましたのは王がご自分の誤りを承知されているかどうかを知るためでございます。王が失国の非の反省なく、臣がお乗せしなかった罪だけを覚えておられるようでしたら、

旌表 忠孝節義などの模範たるき行為功勞有た人にそのの家前門や碑を建て表彰すること

臣の死は惜しむに足らずむしろ惜しむべきは楚の宗廟社稷そしやくです」

「亶の直言をお赦しいただき先の敗戦をお忘れなきようお願いいたします」

子西はそう言葉をはさんだ。昭王は亶の謁見を許し元通りの大夫に復させた。群臣は昭王の度量の広さを非常に喜んだ。一方昭王夫人は闕閭に犯されたため夫に会うのを恥かしく思い縊死してしまつた。

この頃越は呉と陰悪な関係にあつたので、楚王が復国したと聞き祝賀の使者を送り宗室の女性を王の妃に出し王はこれを王妃にした。越姫は大変賢徳な人で王に礼を尽くした。

また王は季平が困難を伴にしてきた事を思つていい婿を捜してやろうと彼女の希望を聞いた。

「女の道として殿方は殆ど存じておりません。ただ、鐘建しやうけん殿に背負われたことがございます（雲中で強盗の難に遇つた時）のでわたしの夫としてはあの方以外にはございません」

昭王はこれ聞き季平を鐘建に嫁し、建を司樂大夫に任じた。また、故宰相の孫叔敖の霊を思つて雲中に祠を立てて祭つた。

子西は郢都が呉に蹂躪じゆくされていたし、呉人が永くいたので土地勘もできてゐるのを懸念して、都（現湖北省宜城県の東南）に城を建設し宮城、宗廟を建て遷都して新郢と名付けた。昭王は新宮殿に酒を用意し群臣を集めて飲んだ。宴たけなわの頃、樂師の扈子こが、昭王が今の状況に安んじあの苦しみを忘れて平王の轍を踏まないようにと思い、琴を抱えて御前に出た。

「臣が『窮岨』（岨は敗戦の意）の曲を演じますので大王には鼓をお願

いできましようか」

「おお、聴こう」

扈子は琴と鼓に合わせて非常に物悲しい声で歌った。歌の意味は次の通り

王さまのまづかったのは何でしょう

宗廟祀らず任用誤り讒言信じて多くの無辜を殺せしこと

二子東方呉へ奔り 呉王哀れみ義兵を挙げて西征す (子子胥・伯嚭)

子胥伯嚭孫武 果断に五戦で郢都を落す

楚王は出奔 呉軍留まり楚城を取る

先王の墓暴かれて遺体に鞭受く雪ぎ難き恥

存亡危うし宗廟社稷 楚王は必死の逃避行

卿士の悲痛 民の血涙 呉軍去るも安心無用

願わくは忠士をねぎらい 讒言誹謗を聞く勿れ

昭王は琴曲の気持ちちを理解し涙が止まらなかった。扈子が琴を収めて退ると昭王は宴を終りにした。これより昭王は朝早くから夜遅くまで国政に励み、刑の簡素化、税の軽減、兵の訓練を充実し、閔所を修復し、厳重に守りを固めた。

半勝は帰国し昭王は白公勝に封じた。城を築き白公城と名付け、

その後(昭王の後の恵王の時)白を氏の名にし、一族をそこに集めた。夫概

は楚王が昔の怨みに拘らない人だと聞いて宋から出て来た。王は彼が勇士である事を知っていたので、堂溪に封じ、堂溪氏を名乗る事になった。

子西は唐、蔡が禍の元凶と見て、唐はすでに滅ぼしたが蔡は未だ生き残

っていたので蔡討伐を申し出た。しかし昭王は、

「国事は未だ粗あら固まつてきた段階であり、まだ民をいたわる時期であらう」

と言って時期を待つよう諭した。

『春秋伝』によると楚昭王十年に出奔し十一年に復国し、それから二十年まで出兵したのは頓を滅ぼして頓君主牂を捕虜にした時だけである。二十一年に胡を滅ぼし胡君主豹を捕え、二十二年蔡を攻め呉に付いて郢都に攻め入った罪を問うた。蔡昭公は投降を願ひ出て、江水(長江)と汝水の間に国替えとなった。その間の約十年間民衆に休息を与え、その後は軍が動くたびに成果を上げたので、楚は復興し活力を回復した。

さてこの後如何になりますか、それは次回のお楽しみ。

第七十八回

孔子 夾谷の会盟で斉の野望を退け
聞人 三都の城壁問題で誅殺される

斉景公は晋に楚を討つ力がなく人心がばらばらなのを見抜き、これに代わろうという意欲をいよいよ強くし、衛、鄭を糾合し盟主を自称した。

一方魯国を見てみよう。

魯昭公が以前 季孫意如に追放された時、斉景公は昭公を受け入れようとしたが、意如の強い抵抗にあつてしまった。昭公は仕方なく晋へ行くとしたが晋荷 躒も意如の賄賂を受け取り、昭公は受け入れを拒みまれ結局客死した。意如は太子衎を廃し庶子宋を擁立した。これが魯定公である。季氏は荷躒の賄賂を受け取り、斉を離れて晋につく事にした。斉侯は怒つて国夏に度々魯の国境を侵犯させたが魯は報復できなかった。間もなく季孫意如は亡くなり子の斯が継いだ。これが季桓子（桓子は斯の諡名）である。

魯の季、孟、叔三家（三桓と呼ばれた三天去）は昭公が在位の時から、魯国の政治を三分していてそれぞれの家臣（魯君の陪臣）に政務を執らせていたから、魯君には実質的には直臣もいなかった事になる。そして三家の家臣たちは又、三大夫の政権を実質的に乗っ取つていて下克上の様相を呈してきた。現在季孫斯、孟孫何忌、叔孫州仇の三大夫が鼎立しているが、それぞれの邑宰（大夫の封地の長）がその邑の城市をわが物として三家（主家の大夫）の命令など聞こうとしないのである。季

下剋上 魯政の実権 国主→三大夫→邑宰			
魯侯国主	主邑	大夫三桓	邑宰
定公	費	季孫斯	公山不狃
	成	孟孫何忌	公斂陽
	郈	叔孫州仇	公若藐
			侯犯

氏の宗邑は費（現山東省費県）で邑宰は公山不狃、孟氏の宗邑は成（現山東省寧陽）で邑宰は公斂陽、叔氏の宗邑は郈（現山東省東平）で邑宰は公若藐である。（表参照）

この三城はみな三家が勝手に堅固に改修し国都曲阜の都城とほとんど変らなくなつていた。三家の邑宰の中では季氏の公山不狃が一番力があつたが、もう一人家臣に陽虎、字を貨という者がいた。いかり肩で額が広く身長は九尺余りもあり、人並みはずれた力も勇氣もあつて智謀百出の男だったから、季斯は最初腹心にして家宰を任せていた。しかしその後次第に季氏の家政を専断し権威をほしいままにするようになったので抑えようとしたがその時はもうどうにもならなくなつていた。季氏は内には陪臣たちに牛耳られ、外からは斉の侵略を受け全く打つ手がなかった。

この頃、少正卯という博覧強記且つ能弁で評判が高い男がいた。別名『聞人』（有名人という意味といい、三家は彼を重視していた。卯は裏表のある男で、この乱れきつた魯侯、三大夫、陪臣たちを火と水のように挑発しながら口では周旋するようにみせかけ、益々国政を混乱させていたのだが、誰もその悪に気がつかなかった。

ここで三家の内の季孫何忌について述べよう。

彼は仲孫纘の子で仲孫蔑の孫である。纘の生前、孔仲尼（孔子）の名を慕つて息子に彼につけて礼を学ばせた。この孔仲尼の名は丘、その父親は叔梁紇でかつては鄒邑の大夫であり、偃陽攻めるとき落ちてくる懸門を手で支えたあの勇士である。紇は魯の施氏と結婚したが女の子ばかりで息子がいなかった。妾が孟皮という一子を生んだが足を患つて廢人となつたので顔氏に結婚を申し込んだ。顔氏には五人の娘がいて

誰も結婚してなかったが、紇の年が年なので娘たちの気持ちを氣遣つて彼女たちに尋ねた。

「誰か鄒大夫の処へ嫁に行こうと思う者はいないか」

娘たちは誰も「はい」とは言わなかったが、一番末の娘徴在が父親の前に出て答えた。

「女の道は、家においては父上に従うことです。わたしたちの意見などお聞きにならずに命令下さい」

顔氏は思いがけない言葉を聞き、結局彼女を嫁にやる事にした。

紇と結婚し夫婦が生まれるようにと一緒に尼山（現山東省曲阜東南の山）に祈願した。徴在が山を上るとき草木の葉は全て上に向いていたが、祈願を終えて山を下る時は皆下に垂れていた。その夜徴在は夢の中で黒帝（北方の神）に呼び出され、

「そなたに聖人の子を授けよう。必ず『空桑』の中で生みなさい」と啓示があり夢から醒めると彼女はみごとになっているのに気づいた。

ある日、ぼんやりと夢の中で、五人の老人に会った。五人は庭に並んで『五星の精』だと言い、角が一つで龍の鱗模様がある子牛のような獣を連れていた。その獣は徴在に向かって伏せて口から玉を吐き出した。

玉には、『水精之子、継哀周而素王』と書いていた。徴在は不思議な事と思い飾り紐でその獣の角を括って帰った。夢の話をする叔梁紇はそれは麒麟だと言った。

出産の日が近づき徴在は夫に聞いた。

「『空桑』という名の場所を、存知かしら」

「南山に洞窟がある。石門があつて中は水がない空洞で、世間では『空桑』と呼んでいるが」

「じゃ、わたしはそこへ行つて出産してまいります」

紇が理由を聞くので、夢の話をして寢具を持つて洞窟に入った。その夜は二頭の青龍が天から下りて来て山の左右から守護し、二人の神女が空中でしばらく香露をふりかけて徴在に沐浴させて去つて行つた。徴在はこうして孔子を生んだ。石門の中に突然清い温泉が湧き出た。産湯として使い終わるとすぐに又涸れてしまった。現在、曲阜の南二十八里の処に女陵山と呼ばれるところがある。これがその空桑である。

孔子は生まれながらに異相であつた。牛のような唇、虎のような手、鳶のような肩、亀のような背、口が大きく頭の頂がくぼんでいる。父親の紇は、

「この子には尼山の霊が宿っている」と言つて名を丘、字を仲尼と命名した。仲尼が生まれて間もなく紇は亡くなり徴在の手で育てられた。成長すると身長は九尺六寸（^{1m}2.2）にもなり『長人』と呼ばれた。聖徳を備え、向学心にあふれていた。列国を周遊し弟子は天下の各所にいて、各国の君主はみな彼を尊敬しその名を慕つたが、権門に仕えるのを嫌つたので彼を用いる事ができなかった。

周遊中ちやうど魯にいた時、孟孫何忌が季斯（季孫斯）に、内外の諸問題の解決に孔子を登用すべきじゃないかと相談した。季斯は孔子を呼んでまる一日彼の話聞いてみた。すると彼の話は大河が大海に流れ込むように無限の広さを感じ敬服した。

季斯が朝起きて着物を着替えていた時、突然費邑からの報告があつた。「井戸を掘っていましたら瓦の甕が出てきまして、中に羊が一頭入っ

ていました。どういう事でしようか」

季斯は孔子の学問を試そうと、使者に何も言うなと言いつけておいて一緒に部屋に入って孔子に訊ねた。

「井戸を掘っていると土の中から犬が出てきましたがこれはどういう事でしようか」

「それはきつと犬じゃなくて羊でしょう」

季斯は驚いてわけをたずねた。

「山での怪物といえは夔^き魍^{りゅう}魍^{もつ} 水中での怪物と言えは龍^{りゅう} 罔象^{もうしやう}、土中の怪物と言えは墳羊^{かみやう}だと聞いています」⁸ お話のものは井戸を掘る時

という事でしたから、土中すなわち羊という事になります」

「墳羊の特徴はなんですか」

「雌雄の区別が無い事です」

季斯は費人に確認すると果たして雌雄の見分けがつかないと言う。季斯は驚いて、

「仲尼の学は噂どおり大変なものだ」

と言って中都（現山東省梁山県東阿）の宰^{ちやうと}長官^{ちやうと}を委嘱した。

この事が楚に伝わり、楚昭王は使者に土産を持たせて孔子に、長江を渡るときに河で拾った果物が何だったかをたずねさせた。

「それは萍^{ひんし}美^びです。割って食べます」

「それをどうしてご存知ですか」

「以前楚の港で、

王さまが河を渡って萍^{ひんし}美^びを拾^しう

⁸ 夔魍魎は伝説上の山林に住む牛の精、龍罔象は伝説上の水に住む怪竜、墳羊は泥土の中の怪羊、雌雄不分 この部分史記 孔子世家にある

一斗升のように大きくて

お日さまみたいに真赤^{まっか}つか

割って食べたら蜜^{みつ}のよう

と子供たちが歌っているのを聞いた事があるので分かったのです」

「これは何時でも手に入るのですか」

「これは水に浮かんでる根無し草で、千年たつても実を結はないというなかなか手に入らない物です。これは一度ばらばらに散って又集まる性質があり、衰えた後復興する予兆といわれ、楚王におかれてはおめでたい事でございます」

使者が復命すると昭王はしきりに感心した。

孔子は中都をよく治めたのでその政治のやり方を観察する使者があちこちの国々からやって来た。魯定公は孔子が賢者である事を知って司空^{しこう}を委嘱した。

周敬王十九年（紀元前五〇一年）陽虎^{やうこ}は魯国を混乱させて政治を独占し

ようとした。叔孫^{しゅくそん}輒^{れつ}が叔孫氏には疎外されているが、費の邑宰^{きやう}の

公山不狃^{こうさんふたう}とは親しいことを知って、この二人と相談し、先ず季孫を殺し

次に仲叔^{しゅくそん}（叔孫）を除いて、公山不狃が季孫斯に代わり、叔孫輒が

叔孫州仇^{しゅくそんしゅうきゅう}に、自分は孟孫何忌^{もうそんかき}にそれぞれ主人の大夫に取って代わろ

うと計画した。

陽虎も孔子が賢人だと知り心を寄せて使いの者を遣わして仲間に入れようと説得したが孔子にはその気がなかった。陽虎は再び孔子に蒸した豚肉を届けさせて敬重の礼を表した。孔子は自分を謝礼に來させて会おうという誘いの計略だとわかっていたが、相手の礼に答えないのは失

礼なので弟子に陽虎の不在時を調べさせておいて訪問し、門で名刺を届けて帰った。でも虎はそんなことで諦める男ではない。そこで孔子はそつと何忌に言った。

「虎はきつと謀反を起こします。手始めは恐らく季氏でしょう。あなたも予め準備しておいたほうがいいですよ」

それを聞いて、孟孫何忌は都城の南門外に屋敷の建築に見せかけ木材を集めて柵を作り、精銳三百人を選抜しこれも建築要員に見せかけ乱に備えた。さらに邑宰の公斂陽に成邑に十分な甲冑兵器を用意させ、連絡があれば直ちに救援に駆けつけるよう命じておいた。

その年の八月魯の禘祭があつた。陽虎はその翌日、季孫を蒲圃へ食事に招待していた。何忌はこれを知ると危険を感じ、すぐに公斂陽にその日の正午までに兵を率いて東門を通つて南門へ来るよう指示しておいた。招待の日、陽虎は自ら季氏の門まで迎えに行き季斯を車に乗せた。陽虎が先導し陽虎の従弟の陽越が季斯の車の後ろにつき、左右すべて陽氏の党ばかりで、御者の林楚以外腹心は誰もいない。季斯は謀叛ではないかと心配になりそつと林楚に、

「この車、孟氏の屋敷へ行けるか」

と言つと、林楚は季斯の意を解し領いて、八方に伸びる大通りに出ると突然馬の方向を南に変え激しく鞭を打った。馬は鞭に応え全速力で走った。陽越はこれを見て止まれと大声で叫んだが、林楚は無視して更に鞭を加えた。陽越は怒つて弓を取り出し林楚を狙つたが矢は外れた。再び馬に鞭あてて追跡しようとしたが焦つていたので馬の鞭を落としてしまい、

拾い上げているうちに季斯は遠く離れ、南門を出て孟氏の屋敷に入つて柵を閉じた。

「孟孫、陽虎の手に追われている、助けてくれ」

と叫んだ。何忌は三百人の壮士に弓矢を持たせて柵門内に待機させた。やがて陽越がやつて来て柵を攻めようとしたが柵の内側から三百人が放つ矢で次々倒れ、陽越も数本の矢を受け死んだ。

陽貨(陽虎)は東門まで行つて振り向いたが季孫が見えない。車を返してもと来た路を大通りまで戻つて路行く人に聞いた。

「相国の車を見なかつたか」

「馬を急がせ南門の方へ行きましたよ」

そうこうしている間に陽越の敗残兵が帰つて来て、越は矢に当たつて死に、季孫は孟氏の新しい屋敷に逃げ込んだ事を知つた。虎は激怒し軍を率いて公宮へ急ぎ定公を強奪し、途中叔孫州仇に出会つたので彼も一緒に捕えた。公宮の兵並びに叔孫氏の家兵を合わせて南門の孟氏を攻撃した。何忌は三百人を指揮してこれを防いだ。陽虎が柵に火をつけるよう命じたので季斯は非常に危惧したが、何忌は太陽が南中に差し掛かるのを指し、

「成邑の兵が間もなく来ますから心配はありませんよ」

そう言っているうちに東の方に一人の猛将が一軍を率いて指笛を吹きながら現れ、

「我が主人に手を付けるな!公斂陽ここにあり!」

と呼ばわつた。陽虎は怒つて長戈を振るつて公斂陽に向かった。二将は力を尽くし五十余合渡り合い、陽虎は益々力が入り、公斂陽は次第に怯んできた。この時叔孫州仇が突然、

「陽虎敗れたり」

と叫び、自家兵を率いて定公を擁して西へ走った。公宮の兵もこれに従った。これに陽虎の兵は動揺した。何忌は壯士を率いて柵からとび出し突撃し、そこへ季氏の家臣苦越も兵を率いて救援に駆けつけた。

陽虎は孤軍となり援軍もなく仕方なく戈を倒して逃げ、謹陽関を拠点に抵抗した。三家は兵を合わせてこれを強攻したので陽虎はこも支えきれず、萊門に火をつけ魯軍が火に怯んでいるうちに火をくぐって逃げ出し齊国に出奔した。齊侯に会って、自分が拠点にしていた謹陽の地を献じる事を条件に魯を討つ兵を貸して欲しいと頼んだ。

大夫鮑国は齊侯に進言した。

「魯には孔丘がいるので敵対するのは好ましくありません。むしろ陽虎を捕え土地と一緒に返して彼に恩を売っておく方がいいのではないのでしょうか」

景公はその意見に従い、陽虎を西鄙で捕えた。しかし看守を酔わせてその隙に輜重の車で宋国へ逃げ去った。宋は彼を受け入れ匡に住ませた。陽虎は匡人を苦しめたので匡人は彼の殺害を謀った。仕方なくまた晋国へ亡命し、趙鞅に仕えた。陽虎謀反の話はここまで。

宋儒は、陽虎が陪臣の身分でその主人を謀殺しようとした事は大罪であるが、季氏が君主を追放し、かなり以前から魯政を専断した事を家臣たちが横で見えており、いま彼等がその所業をまねたに過ぎない。『やればやられる』は天理であり、特別驚くにはあたらないという。

むかし季氏が孤主を凌辱　いま家臣が主君に叛く

忠善奸詐結果は自が受く　前車の響は後車に聞こゆ

又次のようにも言われている。魯は恵公の時から天子の札楽を借用してきた。その後、魯の三桓家では八佾の舞を行い、雍徹の歌が歌われている。大夫の目に諸侯が無いが故にその家臣もまた大夫を無視するのである。この順送りの正道に反する風潮はすでに久しい。

九成干戚の舞　最初に僭用せしは誰なのか

國中反逆なかりせば　礼法を周官に問い直す事も無し

齊景公は陽虎を逃がしてしまったので、謀反人隠匿と思われるよう魯定公に、陽虎が宋に逃げた事情の説明をすると共に、今後永く友好を図り停戦するために夾谷山で「乗用車の会」(戦車を伴わない平和会議)を提案する手紙を送り届けた。魯侯は手紙を受け取り三家と相談した。孟孫何忌は齊は嘘が多いから軽々に応ずるべきではないといい、季孫斯は齊に再々侵攻されているから修好を図ろうというのを拒む理由はないじゃないかという。

「行くとしたら誰を連れて行ったらいいだろう」

「孔丘以外にはいないでしょう」

定公の質問に何忌が即座に答えた。定公は早速孔子を召して相礼を委嘱した。行くに当って孔子は定公に進言した。(相礼は第70回注を参照)

『文事にあたるも必ず武を備うべし』と申します。文武は一体であ

※ 八佾舞 雍雩歌 八佾舞 古代楽舞は8人を一倍し八佾は64人 規定は天子8佾 諸侯6佾 大夫4佾 孔子は季氏邸で8佾舞が行われたのを批判している。雍雩歌 天子が客を送る時或は膳を片付ける時歌われる歌であると決められているのに三桓の使用は僭越たといっているのである。(北京金盾出版社校注)

※ 九成干戚の舞 干戚は剣舞の様な武の舞で虞舜時の政治舞踊の一つで周朝でも行われた。九成は舞の回数。周王が僭行すべき事を魯が僭越した事を批判。周官 周礼 周の律令。

り、昔は諸侯が国境を出る時は必ず文武の官を従えました。宋襄公の孟の会盟を鑑とすべきで、どうか有事のために左右の司馬を同行されますよう」

定公はその意見に従い、大夫申句須を右司馬に、楽頎を左司馬に任命しそれぞれ五百乗を率いて定公に従った。更に大夫茲元還に三百乗を預け会場から十里の処に駐屯させた。

夾谷に着くと齊景公は先に來ていて土階段で三層の簡単な壇を築き、齊侯は壇の右に、魯侯は壇の左にテントが用意されていた。孔子は齊が非常にたくさん軍隊を連れて來ていて聞いたので申句須、楽頎に主君のそばについて離れないように注意した。時に齊の大夫に黎弥という謀略が得意で、丘梁据の没後齊侯の寵信を得ている大夫がいた。その夜、黎弥が景公のテントにやつて來て目通りを願った。

「この真夜中に何事だ」

「齊と魯はずっと仇敵同士です。ただ現在魯は孔子を重用して国力をつけているので将来を心配して今日の会合となったわけですが、あの孔子は礼に関しては達人ですが武力に関してはからきし駄目で戦争の経験はないという事です。明日両君主会見の後各地の音楽を演奏し魯侯を楽しませておいて、三百人の萊夷を樂員に変装させ適当なときに魯侯と孔子を捕えます。その後將兵に魯軍を蹴散らせば、魯の君臣二人の命は殿の意のまま、人質にして魯に攻入れれば魯は掌中にあるようなもの

五男会盟 齊桓公の衣裳の会をまねて軍を連れずに参加し楚と盟主を争捕えられ大いに恥辱をうけた。

萊夷 商周の頃山東半島一帯に分布していた古族 独立国であたが後に齊に併呑された。

です」

「それは当然相国（晏嬰）と相談する問題だ」

「それは駄目です、相国は以前から孔子とは親しく、これを彼に知らせるとうまく行くものも駄目になってしまいます。私に手配させていたきたいのですが」

「わかった。よきにはからえ」

黎弥はそつと萊夷と手はずを調えた。

翌早朝、両君は壇の下に集まり挨拶を交わし壇に登った。齊は晏嬰を相礼とし、魯は孔子を相礼とした。両相は拱手の礼を交わしそれぞれ主君に随い登壇した。太公、周公の友好の故事を話し合いそれぞれ玉帛献納の儀式を終えると、景公は

「各地の舞樂を準備しておりますので一緒に楽しみましょう」

と言って、先ず樂人を前に呼び地元の音楽を演奏させた。すると壇の下で大きな太鼓の音がして萊夷三百名ほどが旗や羽毛、矛、劍、盾等を持って蜂のようにドドツと指笛を鳴らしながら壇上上がった。階段を半ばまで上がってくると定公は顔色が変わった。孔子は全く驚いた様子も無く、すぐに景公の前に出て挨拶をし、

「今日は我々両国君主の友好のための会ですから中国（中原）の礼をもつて行ふべきで、こんな萊夷の舞樂を出すとはどういう事でしょう。壇下へ下げるようご指示願います」

晏子はこれが黎弥の計だとは知らず、

「孔丘殿のおっしゃる事は礼にかなっておりません」

と景公に言ったので景公も恥ずかしくなつて急いで萊夷を下げさせた。

黎弥は壇下に身を隠し壇上で首尾よく進めば一斉に兵を飛び出させようと待っていたが、突然齊侯に追い出されて下りてきたので内心非常に頭にきて、齊国の樂員を呼び寄せて、

「宴席にそなたたちを呼んで演奏させるから『敝筭（へいし）（ぼろ籠）』の歌を歌つてできるだけ魯君をからかってくれ。魯の二人が笑ったり怒ったりしたら十分な褒美を取らずに」

と指示した。元来この歌は文姜の淫乱の故事を歌ったもので魯を侮辱しようというものである。黎弥は壇を上がって齊侯に奏上した。

「両君の長寿を祈つて宮中の音楽を演奏させたいと存じます」

「宮中の音楽ならば蛮夷のものではないから良からう。早くやつてくれ」

黎弥は齊侯の命令を伝え、二十数人のこびとの道化師に顔に色々な色を塗り奇抜な服を着た男女の二組に扮装させて、魯侯の前で跳んだり舞ったり、歌う歌は齊の歌だがすべて淫らな歌詞で、それを笑いながら歌うのである。孔子は手に剣を握り目をむいて景公に言った。

「こんな下品な連中が国主を愚弄するとは、その罪死罪に当たります。齊国の司馬に法に照らした処置を指示願います」

景公はそれには応じず、連中は相変わらず愚弄して笑っている。

「齊国と魯国は既に修好の儀を終え兄弟同様になっていますから、魯国の司馬は齊国の司馬でもあります」

孔子はそう言つて壇下に向かつて、申句須、樂頤の二人を呼んだ。二将は飛ぶように壇上に駆け上がり男女各隊の頭になる者を一人づつ捕えてその場で斬首した。他の連中は驚いて逃げた。

景公は内心非常に驚いた。魯侯も立ち上がった。黎弥は始めはまだ魯

侯を壇下で斬ろうと思っていたが、一つには孔子がこのような凄腕を持っていること、二つには申、樂の二将が英雄である事、更には探らせたところ十里付近に魯軍が控えているのがわかったので、仕方なくあきらめた。

会が終わわり、景公はテントに帰つてきて黎弥を呼んで叱った。

「孔丘は相礼であり、彼のやった事は全て古人の道にかなっている。おまえはわしを夷狄の仲間にしてしまった。わしは本当は魯と修好を図りたかったのだ。それがいまは逆に仇敵にさせてしまったではないか」

黎弥は恐れ入つて謝り、一言の反論もできなかった。

晏嬰はしかし景公に進言した。

「小人は誤りを知つても適当な弁解をするだけです。君子に過失があった場合は実質的な謝罪をしなければなりません。現在領有する汶陽の三ヶ所の土地は一つは灌で陽虎が献納した不義の土地であり、二つ目の鄭は昔魯昭公の住まいだったのを取上げたものですし、三つ目の土地龜陰は晋が魯から取ったものをもらい受けたものです。この三地は元來魯国の領土で、先君桓公のとき曹沫との約束（柯の会盟18回）を果たさず返してなかったものもあり、今回魯に返還して魯侯を喜ばしたほうがいいし、それでこそ両国の修好の目的が達成されます」

景公は喜んで晏嬰を使者として魯に遣わし三ヶ所の土地を魯に返した（この齊魯の会合を夾谷の会盟という）。

周敬王二十四年（紀元前四九六年）の事である。

騒がしき太鼓と萊夷の戈も 壇前の一言で如何するなし
知礼の人はまた凄腕の人 斉は三田返し講和を求む

また、齊景公が虚心に過ちを謝した事を賢君と讃える詩がある。

黎弥の奸計で盟壇を失うも 忠臣の諫言に従い回復す

深く三田を返還謝罪して 齊公の英名永く中原内外に聞えたり

この汶陽ばんようの土地は元々魯僖公きこうが季友きゆうに与えたもので、魯に帰ったといえ実は季氏に帰ったわけである。だから季斯は孔子に感謝して魯陰に謝城という城を築き孔子の功を顕彰して、定公に彼を大司寇だいしこうに昇進させるよう進言した。

この頃、齊の南の国境に、大きさが三尺もあり、全体が黒くて首の辺りが白く、くちばしが長く足が一本という珍しい鳥が突然舞い降りてきて、翼を打ちながら田の間を舞うという奇妙な事があった。村人が追いつたが逃げもせずそのうち北の方へ飛んでいったという。季斯はこれを聞いて孔子にたずねた。

「その鳥は商羊しょうようという鳥で北海の浜で生まれ、大雨になる時に舞い立つてこれが下りたところでは必ず大雨になり災害をもたらすといいます。齊と魯は隣接していますので十分に備えておく必要があります」

季斯は孔子の意見に従い汶水ぶんすいの岸辺の人々に堤を改修するよう指示した。彼の言うとおり三日もしないうちに大雨になった。汶水は水かさが増したが事前準備ができていたので心配はなかった。その事が齊にも聞えてきて景公は益々孔子を神のように思うようになった。この事があって孔子の博学は天下に知られ人みな彼を『聖人』と呼ぶようになった。詩がある。

五典三墳ごてんさんぷん遍く極め 萍実商羊へんしの事など誰か知ろう
多能將に天賦の聖人 芳名四海に知れ渡る

季斯きしは人材を求めて孔子の門を叩き、仲由ちゆうゆう、冉求ぜんきゆうを推薦され二人を家臣にした。ある日季斯が孔子にたずねた。

「陽虎ようこは追放したけれど、不狃ふじうがまた力をつけて来ました。どう抑えればいいでしょうか」

「これを抑えるためには先ず礼制を明らかにすべきです。昔は臣下は私兵を持たず、大夫は百雉ひやくち（長さ3百丈の城壁）第4回注の城を持たずとしました。邑宰ひやくさいが乱を起こす拠点をなくしたのです。城の規模を落として武器を撤収すれば上下互いに永く平安を保てます」

季斯は同感でそれを孟叔向氏に話した。当然国のために協力しようとして孟孫何忌も賛成した。

しかしこの頃少正卯しょうせいぼう（蘭人は孔子師弟の言動を嫌って孔子を陥れようと画策していた。彼は叔孫輒ちゆうそくを使ってそつと公山不狃こうさんふじうに連絡をつけた。不狃は謀叛を企てていて、孔子が以前から魯の人々に尊敬されているので彼の力を借りようと手厚いみやげをつけて手紙を届けた。

魯は三桓が国政を専断するようになり、君主は弱体化し逆に臣が強く人人心に憤りが鬱積しております。不狃は季氏の家宰ではありますが、実は公儀をお慕い致しております。鋤を以て一暴れし公を援け魯国を周公の昔に返したいと考えております。もし同意いただければ

たら、費までご来駕いただき直接計画をご相談させていただきたく存じます。

「不狃が謀反を起こせば兵を出さざるを得ません。臣が軽身で出向いて過ちを改めさせて回心させたいと存じますが如何でございましょうか」孔子は手紙を見て定公にこう言う。と定公は、

「国家の重要事項が山積していますが全てあなたが頼ります。とてもあなたを行かせるわけにはいけません」

と言うので孔子はその手紙とみやげを使者に返した。孔子が来ないとわかると公山不狃は、成の宰公斂陽、邱の宰公若藐に共に兵を起こそうと持ちかけたが、陽、藐どちらも同調しなかった。

邱邑の馬正ばせい 職名 侯犯は武芸が優れ弓を善くするので邱の人たちは彼を畏れていた。元々臣下に就く考えのない男で以前から上へのし上がろうと考えていて、遂に既係に公若藐を殺させて勝手に邱宰になり、邱の人々に叛意を發表した。州仇は邱が謀反を起こした事を何忌に会って話した。何忌は、

「よし、あなたに協力する。一緒に謀反人を始末しよう」

そう言つて、孟、叔二家は兵を合わせて邱城を攻めた。しかし侯犯は懸命に守り、攻撃側に多数の死者が出て攻めきれない。何忌は州仇に斉の救援を要請させた。この時叔氏の家臣駟赤が邱城にいて、偽って侯犯について侯犯は彼を信じきっていた。赤は犯に提案した。

「叔氏は斉に救援軍を頼みにいきます。斉と魯が連合すれば勝ち目はあります。邱をみやげに斉に投降したら如何です。斉は外向きには魯と親しくしていますが実は嫌っています。邱を手に入れ、魯に迫ること

ができれば斉はきつと喜ぶはずです。きつと斉はあなたに倍の土地をくれるでしょう。つまり土地を手に入れた上に安全が得られるという事じやないですか」

侯犯はこの案を聞いて非常に喜んで、早速斉へ使者を送り、邱を献上するといふ条件で斉へ投降をしたいと申し出た。

斉景公は晏嬰に相談した。

「叔孫氏は謀反の邱の侯犯討伐の救援軍を要求しているし、侯犯は邱をみやげに投降するという。どちらを取るべきだろうか」

「魯と講和をしたばかりですから、犯臣からの贈与はうけるべきではありません。叔孫氏を救援するのが当然です」

晏嬰の答えに景公は笑つて、

「邱は叔孫の私邑で魯侯とは関係ない。しかも叔孫氏の君臣は味方同士、喧嘩で魯の不幸は斉の幸いだ。よし、わしにいい考えがある。両方の使者に承知するんだ」

と言つて、司馬穰苴に魯との国境あたりに兵を駐屯させ、魯の両者の成り行きを眺めさせた。もし侯犯が叔孫を防げそうになつたらすぐに兵を分けて邱に残し侯犯を迎えて斉に帰国し、叔孫が侯犯に勝ちそうになつたら助成に來たといつて邱城を攻め、臨機応変に対応するつもりである。こういう処が斉侯が奸雄といわれる所以である。

さて、駟赤は斉に使者を出したのを見て、又侯犯に言った。

「斉は魯と修好の会を持つたばかりですから魯を救援しないとは限りません。門にできるだけたくさん甲冑兵器を用意しておけば万一の場合に自衛できます」

侯犯は勇士だからその通りだと思つて精選した武器甲冑を門下に置

いた。駟赤はその後城外へ矢文を送った。魯兵がそれを州仇に届けた。そこには、

「臣赤は反逆者に対し七八割りは手配をつけました。近日中に城中で内変が起きますからご心配なく」

と書いてあり州仇はそれを見て大変喜び何忌にも連絡し警戒態勢をとって待った。

数日後侯氏の使者が斉から帰って来て復命した。

「斉侯は承知され、他の邑で償おうとおっしゃいました」

駟赤は侯氏に祝いを言つて、その後担当者に次のように発表させた。

「侯氏は邱民を斉に移す事に決めた。使者の話では斉軍は間もなくやつて来るぞうだ。どうするか」

人々は騒ぎ出して大半の者が駟赤の処へ確かめに来た。赤は、

「わしも聞いた話だが、斉は魯と友好条約を結んだばかりで土地をふやすには問題があるので、しばらくそなたたち魯の密集した人口を斉の過疎地に移そうというのであらう」

と説明した。昔から『安土重遷』(故郷の土地から動きたくない)とい

う。故郷を離れると言われて嫌がらないものはいない。聞いた者から噂は伝わりみな恨みを懷いた。

ある夜、駟赤は侯氏が酒に酔払っているのを見て腹心数十名に命じて、「斉軍が城外まできている。早々に荷物を整理して三日以内に出発しなきやならんらしいぞ」

と泣きながら叫んで城内を廻らせた。邱の人々は驚いて侯氏の門に集まり、年寄は泣き、壮年の者は歯嚙みをして侯氏に憤懣をぶつけた。ふ

と見ると門の内側に非常にたくさん甲冑が使つてくれとばかりに置いてある。集まつた連中はそれを奪つて着用し手に手に武器を持つて喊声を上げ侯氏の屋敷を包囲した。城を守っていた兵もみな侯氏を裏切り大衆側についた。駟赤は急いで屋敷に入り侯氏に事情を報告した。

「邱の人々は斉に付くのを嫌つて暴動が起こつています。兵器がありましたらわたしが彼らを蹴散らかしたいと思いますが」

「皆暴徒に取られてしまつた。こうなればもう避難するしかない」

「それでは命を掛けてお送りしましょう」

駟赤はそう言つて大衆に向かって叫んだ。

「道を開けて侯氏を逃がしてあげてくれないか。侯氏がいなくなれば斉軍もここへは来なくなる」

人々は駟赤の話に従い道を開けた。駟赤が先に立つて、侯氏とその家族百余人、車十余乗がその後に続き、彼らを東門から送り出し、それから魯軍を邱城に入れて民衆を安心させた。

何忌は侯氏を追おうとしたが、駟赤は逃がしてやるという約束がある何忌を説得し追わなかった。その後邱城は城壁を三尺壊して下げ、駟赤を邱宰に任命した。侯氏は斉軍に逃げ込み、穰苴は魯軍が邱の紛争を鎮めてしまつたので斉に引き揚げ、州仇、何忌も魯に帰つた。

公山不狃は侯氏が邱で謀叛を起こした時、叔孫州仇、孟孫可忌両家が討伐に行ったので、

「魯(曲阜)には季氏しかない。その隙に乗じて襲えば魯国は俺のものだ」

とほくそ笑んで、費の兵を全員駆り出し曲阜に殺到した。この時叔孫輒が内応し城門を開き不狃を入れた。

定公は慌てて孔子を呼び出し策を問うた。

「公徒 謹侯の親衛隊」は弱くて使い物になりません。季氏の屋敷へ行つて守つていただきますよう」

と言つて季氏の屋敷へ車を走らせた。季氏の屋敷は高台にあり堅固で守りに適しているので定公はそこにいる事にした。しばらくすると司馬の申句須、樂頤もやつて来た。孔子は季斯に家兵を全司馬の指揮下において高台の左右に隠し、公徒を高台の前に並べるよう指示した。

公山不狃は叔孫輒と相談し、

「我われは自分のためではなく公室のための挙兵だという事にして、魯侯を錦の旗にすれば絶対季氏に敗れる事は無い」

と言つて一緒に公室を訪ねたが定公を手に入れることはできず、しばらくうろうろしていたがすでに季氏の屋敷に移っていることがわかり、直ちに兵を移し季氏を攻めた。先ず公徒と戦つたが公徒はすぐ破られて逃げてしまった。突然大喊声が上がリ申句須、樂頤の両将が精銳を率いて跳び出して来た。孔子は定公を助けて台上に立つて費の人達に言った。

「我らのご主君はここにおられる。そなたたち順逆の理がわからぬ事はなからう。既往の事は問わないから早々に武装を解除しなさい」

費の人達は孔子が聖人だと知つていたので、彼の説得を聞き入れみな台下に拝伏した。公山不狃、叔孫輒の勢はしぼんでしまい、結局呉国へ出奔して行つた。

叔孫州仇は魯に帰還し、郕の城壁を低くした事を話すると季斯も費の城壁を当初の規定通り下げるよう命じた。何忌もそうするつもりでいたが、成宰の公斂陽は少正卯（聞人）に相談した。少正卯は、

「郕、費は謀反を起こしたから城壁を低くしたのであり、成の城まで

一緒に下げたらあなたは叛臣と何ら代わらないではないですか。『成は魯の北門の守りであります。成の城壁を下げて斉軍が北から攻めて来たらどう防ぐのですか』とはつきりと言えば従わなくても命令違反と言われることはないでしょう」

と言つたので公斂陽はその意見に従い、部下に甲冑を着せ登城させて叔孫氏に言った。

「我われは叔孫氏を守るのではなく魯の社稷を守るのです。斉軍が突然攻めて来て何も守備態勢がないと心配です。命を掛けて城と玉砕するつもりですので城壁のレンガ一つなりとも動かすつもりはありません」

「それは陽が言つたのではないな、『聞人』が教えたのだらう」

孔子は笑つて言つた。

季斯は孔子が費の事件を解決した功を讃え、彼の能力にはとても及ばないとわかり、魯の相国の代理のように事毎に孔子に諮るようになった。孔子の言う事を少正卯がいちいち難癖をつけ聞く者を惑わせるので孔子はそつと定公に言つた。

「魯の不振は忠臣佞臣をはつきり見分けないで、信賞必罰を厳正に行わない事が原因であります。良き苗を保護し雑草を取り除かなければなりません。姑息な手段はやめ、太廟の斧鉞（武器としての斧）を出して両観（公宮南の左右の城壁）の下に備えるようお願いいたします」

定公は承知した。翌日群臣を集め成城の城壁を低く修築する事の利害を議論させ孔子に裁決させた。或る者は是といい或る者は非と言う。少正卯は孔子の意見に迎合しようとして城壁を下げる六つのメリットを挙げた。すなわち一つ、国主は最尊である事。二つ、都城に最も重きをおくべき事。三つ、私門を抑える事。四つ、家臣が跋扈する拠り所を与え

ない事。五つ、三家を安心させる事。六つ、隣国に魯の改革を知らしめる事だという。

孔子は定公に、

「卯の言う事は^ごまかしです。成はすでに孤立しており何ができません。しかも公斂陽は公室に忠勤であり、跋扈の心配はありません。

卯は国政を混乱させ君臣の離間を謀ろうとする者で、法に照らして誅殺すべきであります」

と報告した。群臣は皆、卯は魯の『聞人』だから、たとえ言う事に不当な面があっても殺すほどの事はないと弁護したが、孔子は更に定公に、

「卯の言う事には偽りが多く、やる事も偏見が多く頑固で、虚名だけで人々を惑わせるものです。彼は誅殺しなければ国のためになりません。臣は司寇として斬首と決裁いたします」

と言って遂に力士に命じ卯を縛り上げ両観の下で斬った。群臣はみな顔色を変え、三家もみな肅然とした。

昔太公望志操高き華士を誅し 今孔子偏將少正卯を除く^{しやうせいまう}

これ聖人の正眼というべきか むしろ兩人を知る世論なるべし^せ

少正卯を誅殺した後、孔子の考えがスムーズに通るようになり定公も三家も虚心に彼の意見を聞くようになった。孔子は綱紀を肅正し礼を教育し恥を知らしめた。これによって人々は混乱することなくそれぞれの仕事にいそしめるようになった。三カ月後には風俗は大きく変わった。

※ 孔子が少正卯を、太公望が華士を誅殺した件は、松尾 善弘「誅少正卯」私論
鹿兒島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 29: 135-145 1978/3/15 URL
<http://hdl.handle.net/10232/7536> を参考願うこと。

市中の肉屋でもいい加減な値をつけることはなくなり、男女が路を歩く時もきちんと左右分かれて行くようになり、路に遺失物があっても拾得を恥と感じるようになった。どこからの客も一旦魯に入れば、物さえ有れば誰でも手に入れる事ができるので自分の国に帰ったような気がしたという。

人々はこんな歌を歌っている。

礼服礼冠必要ならば わたしの家へいらつしやい
誰でも使ってください わたしはとつても嬉しいよ

この歌が斉に伝わると斉侯は大変驚いて、
「わが国はそのうちきつと魯に呑み込まれるぞ」と言ったという。

み。

さて斉景公はどんな手段を講じたのであろうか、それは次回のお楽し

第七十九回

齊黎弥 魯公に歌姫を送り孔子を追出し

文種 呉の太宰伯嚭を買収

夾谷きやくくの会から帰国後晏嬰あんとんが病没した。景公は数日泣き続け、朝廷に人がいなくなつたと心配しているところへ、魯では孔子が宰相となり国がよく治まつてきたと聞き、驚いて、

「魯相の孔子はきつと覇主をねらっているだろう。覇の争いは必ず土地の争いになり、わが国は隣だから一番にねらわれる心配がある。どう対処したらいいか」

「殿は孔子を心配されていますが、なぜ彼を阻止なさらないのです」と大夫の黎弥れいびが言つた。

「彼は魯の国政を担当したばかりで阻止のしようが無いではないか」「治安の後には驕慢と安逸が生じる」と申します。美女の歌舞隊に盛装させて魯君に贈つたら魯君は喜んで受け取り、必ず政務が怠慢になつて孔子を疎んじるようになります。孔子は疎んじられれば、きつと魯を棄て他国へ出て行くでしょう。そうなれば殿は枕を高くしてお休みになれるというものです」

景公は大喜びで、早速黎弥れいびに色町で二十才以下の美人を八十人選ばせ、それを十組に分けてそれぞれ刺繍の錦を着せ歌舞を教えた。舞曲の名は『康楽こうらく』と名付け、歌も振り付けも新作で今までにない非常に艶やかなものであつた。教育が終わると、彼女らの他に更に、毛色が様々で遠くから見ると錦のように見える良馬百二十頭に豪華な鞍をつけて魯侯に献納させた。使者は魯の都城の正門外に錦の小屋を二箇所作り、東の小屋

には馬を放し、西の小屋には美女たちを並べておいて、先ず定公に会い国書を届けた。

杵臼しきう 斉景公 頓首して魯賢侯殿下に書を呈します。以前夾谷で君侯に失礼致しました事、その恥はとても忘れる事ができません。幸い賢侯のご寛大を得て会を終える事ができました。その後国内で色々問題が多くご接接ができておりません。ここにお酒を召し上げる際のお楽しみとして歌女を十組と、お車用の良馬三十駒し（4頭立ての車30台分即ち120頭）をお届け申し上げ、いささかでもお慕い申し上げる気持ちと致したく、伏して一筆を呈上申し上げます。

相国しやうこくの季斯は太平な日々慣れ、やるべき事を忘れ、贅沢ぜいたく三昧な気持ちに心に住み着いてしまつたようである。ふと斉が美人の舞姫を贈つてきたというのを聞きつけ、我慢できず目立たない服装に着替えて腹心数人と車で正門を出てそつと見に行つた。女たちは歌や舞の練習中だったが、歌声は雲の流れを引き止め、舞い姿は風を誘うようで、動きの一つ一つの艶やかさに目を奪われ、天上に遊び仙女を見るようでとても人間とは思われない。季斯はしばらく見ていて、その美貌と服装の華麗さに、思わず手足がなえたように身も心もぼんやりと呆けたようになった。定公が一日に三度も呼び出したが季斯は女に氣を取られてそれに応じず翌日になつてやつと宮中に参上した。定公が斉国の国書を見せると、季斯は

「せつかくの斉君の好意ですから断る事はないと考えます」と答えた。定公も女たちに興味を持っていたので彼に訊ねた。

「女たちは何処に居るのだ、ちよつと見てみることはできるか」

「正門の外にいます。車でいらつしやるのでしたら臣もお供致しましょう。ですが家臣たちが騒ぎ出すと面倒ですから平服でいらつしやつたほうがいいと思います」

そこで君臣は正装を脱ぎ捨て、小型の車に乗って正門を駆け抜け西の小屋へ行つた。早くも誰かが連絡していたようで、

「魯君が平服で見えたぞ、心して技をお見せするように」

と言って使者が女たちに注意した。すると歌い方があだつぽく、舞う袖もますます艶かになり、十組の美女が交代に出て来ると、定公も目を奪われ、魯の君主と相国しょうこくが二人して思わず手足が女たちに合わせて踊り出しそうになるほど心を奪われてしまった。

一曲の艶歌 一塊の金 一番の妙舞 一盆の珍宝

果たせるかな十組の美貌 君臣の心を呑み込んだり

従者は東小屋の良馬も自慢したが、定公は余り興味を示さなかった。その夜、定公は宮中に帰っても寝られない。美人たちが枕元にいるように彼女らの声が耳について離れない。群臣たちの意見が分かれるのを心配して翌早朝季斯だけ呼んで返書を書かせた。返書には喜びの気持ちを縷々述べ、使者には黄金百鎰いっぴやくを与えた。早速女たちを宮中に入れ、そのうち三十人を季斯に与え、馬は担当役人に飼育させた。定公と季斯は女を手に入れて昼は歌舞に、夜は夜の遊びに耽り、三日間も朝廷に出でこなかった。

孔子はこの事を聞き長い溜息をついた。

「魯君が政務を放擲ほうてきするのでしたら先生も退任なさって他国へ行かれたほうがいいですね」

と傍らから弟子の仲子路しょうしろう（仲由字子路）が進言すると、
「郊祭こうさいが近づいている。もしこの大礼を実施するようならまだ可能性はある」

と孔子はそれに望みをかけた。祭りの日になった。定公は祭礼が終わると内宮へ帰って行き相変わらず朝廷には出て来ない。大典の後はずいぶんひまふ、昨きのう（神に供えた肉）を大臣たちに分け与えることになっているが定公にはもうその気が全くなく、担当責任者が何度もこの事を願ひ出たが、定公は季孫に押付け、季孫も家臣にまかせるという状態だった。孔子は祭場から帰り昨が分配されるのを待っていたが、夜になっても肉は届かなかった。

「我々の考えは実行できなくなった。これは天命だね」

孔子は子路に言つて琴を爪弾き歌を歌つた。

女の声など聞きたくもない 出て行こう

女の顔など見たくもない 死んだ方がまし

旅の空で死ぬまで気楽に暮らそうよ

歌い終わると旅支度を整え魯を去つた。子路も冉有ぜんゆうも官を棄て孔子に従つた。この日より魯国は再び日増しに衰微さいゐしていった。

紅粉は往々にして利刀に勝る これ黎弥れいみの功にはあらず
衰微瓦解は天命なり 人材陶冶何ぞ魯にのみ許されよう

孔子は魯を去り衛へ行つた。衛靈公は喜んで迎え戦陣のことを訊ねた。

郊祭こうさい 郊天祭地の略 君主が天地を祭る儀式 冬至に天を南郊に祭り夏至に地を北郊に祭つた。

孔子は戦陣の事は言えるほど学んでいないと言つて翌日すぐに衛を去つた。

宋の匡邑きやういふを通つたとき、匡人はずつと陽虎を恨み続けていたので、たまたま孔子の容貌が陽虎に似ていたため、又来たのかと思われて彼らに取り囲まれた。陽虎は宋へ出奔し匡にいたが恨みを買ひ晋へ再出奔。子路は闘おうとしたが孔子が制止して、

「わたしには匡人に恨まれる事は何もない。何か理由があるはずだからその内わかつてもらえる筈だ」

と言つて、坐つて静かに琴を爪弾いていた。ちやうどそこへ衛靈公の使者が孔子を呼戻しに來たので、匡の人々も誤解とわかり謝罪して帰つて行つた。孔子は衛國に戻り、賢大夫蘧瑗きやうえんの屋敷に居候した。

ところで衛靈公夫人は南子なんしといひ宋公の娘である。美人だが淫らな人で、宋にいた時、公子朝と通じていた。朝も大変な男振りで、美男美女は夫婦以上に愛し合つていた。靈公に嫁して嗣嬪きうひんを生み、その子が成長して世子せいしに立つているのにまだ旧情が続いていた。また衛に弥子瑕びしかという美男子がいた。以前から靈公の寵愛を受けていて、桃を食べる時も半分食つた余りを靈公の口に入れるほどである。靈公は喜んでこれを食べ、

「子瑕は美味い桃があれば一人で食わずわたしに分けてくれるほどわしの事を思ってくれる可愛いやつだ」

などとひけらかして言うのだが群臣は白けて失笑を禁じえない。子瑕は寵を恃み權力を弄もてあそび、やりたい放題である。靈公は外宮では子瑕を寵愛し、内宮では南子を怖れ彼女に媚び、しばしば宋の公子朝を呼び寄せて夫人にあわせ、悪評が立つのを恥とも思わなかつた。嗣嬪きうひんはこれを非常に嫌つて家臣に命じ南子を殺して悪評を除こうとした。南子がこれ

を知つて靈公に文句を言うと靈公は嗣嬪を追放した。嬪は宋へ出奔し更に晋を頼つて行つた。靈公は嗣嬪の子輒りやくを世子せいしにした。

孔子が帰つて來たので南子は彼に面会を求め、孔子が聖人だと分かつていたので十分礼を尽くして接した。

ある日靈公と南子が同じ車で出かける時孔子も同乗させた。街に入る

と街の者が車を見て、

「色と一緒にのお出かけに、徳が家来か」

とはやしたてた。孔子はがっかりして、

「殿はやはり徳より色なんだ」

と嘆息し、衛を去つて宋へ行き、大樹の下で弟子たちに礼の講義を行つた。

宋の司馬桓魋かんたいは男色で景公の寵を得て權力を握つていたので孔子が來たのを嫌つていた。部下に命じその大樹を切つて孔子を殺そうとしたので、孔子は目立たない服装に替へ宋を去つて、鄭へ行きすぐに晋へ行つた。黄河を渡ろうとした時、趙鞅ちやうえうが賢臣竇犢とうしゅう、舜華しんがを殺したと聞き、

「鳥獸でさえ仲間を傷つける事はないのに」

とがっかりして又衛に引き返した。

まもなく衛靈公は亡くなり、輒りやくがを君主に立つた。これが出公である。嗣嬪きうひんも晋の援けを借りて陽虎と共に威を攻め取り戚城を拠点にした。この衛の父子の争いに、晋が嗣を、齊が輒を支援した。孔子はその不条理を嫌い又衛を去り陳へ行き、さらに蔡へ行つた。

楚昭王は、孔子が陳、蔡辺りにいると聞き、使者を出して招聘しようとした。陳、蔡の大夫は、楚が孔子を用いたら自分たちの国が危ういと

相談し合つて、互いに兵を出し合つて孔子を原野で包囲した。孔子は三日で食料がなくなつたが琴と歌は止めなかった。現在開封府陳州郊外に桑落そうらくという地名がありそこに厄台やだいという楼台があるが、それが孔子がこの危難に遭つたところだという（現在とは本書著作の明清代の頃）。

宋代の劉敞りゅうしょうの詩がある。

四海（天下）を栖すみかとする一旅人 食料絶え三日死生が相隣す

これより天 孔子を木鐸ぼくどくとす 何ぞ陳蔡の愚臣を問題とせん

〔劉敞 北宋中期代表的な科舉官僚。政治家・歴史学者・文人〕

ある晩、身の丈九尺余りある黒衣に高冠、甲冑を着け戈を持った大男がやってきて、孔子に向かい大声で怒鳴つた。子路が庭へ連出し挑戦したがすごい力持ちで危険になった。孔子はしばらくじつと見ていて、子路に、

「脇をやれ」

と声をかけ、子路が脇を攻めるとその人は力尽きて手が下り倒れて大きな鮎あゆに変わった。弟子たちは不思議に思った。孔子は、

「全てのものは老いて衰えると色々な精がそれに付くのだ。殺してしまえばどうということはない」

と言つて、弟子たちにこれを調理させ空腹にあてた。弟子たちは天からの授かりものだと言んだ。

楚の使者が兵を連れて孔子を迎えに來た。孔子が楚に着くと昭王は非

常に喜んで孔子に千社せんしやの地を封じようとした。令尹れいいんの子西は昭王を引き止めて、

「昔文王は豊に、武王は鎬におられ、共にその地は僅かに百里そこそこでしたが、徳を修めて終には殷に取つて代り変わりました。今の孔子の徳は文王、武王に劣らず弟子も大賢ばかりです。もし拠点とする土地が手に入れば楚に取つて代わる事も難しくないかもしれません」

と言つたので昭王もそれは中止した。孔子は楚に採用されそうにないので又衛へ歸つた。衛出公は国政を任せようとしたが孔子は断わり、魯相国季孫肥が弟子の冉有を迎えに來たので孔子も魯へ歸つた。魯は孔子を老齡で退官した大臣に対する礼で待遇した。結局弟子のうち子路しこう、子羔が衛に仕え、子貢、冉有、有若、宓子賤は魯に仕えた。

さて、吳王闔閭こうりやは楚に大勝し中原を震撼させたが、その後太平樂をきめこみ、都に長樂宮を建て、城外の姑蘇山こそさんに高台を築いた。姑蘇山は都城の西南三十里の処にあり別名姑胥山とも言う。春と夏は姑蘇山で秋冬は都城で政務を執つた。ある日ふと越が呉を攻めてきた恨みを思い出し、報復を考えていた。ところが突然斉と楚がさかんに友好の交流を行なっているという情報に耳にし大變怒つて、

「斉楚の友好は我方にとって北方における心配の種になる恐れがある」

と言ひ、先に斉を討つてそれから越に向おうと考えた。しかし相国子胥しよが、

※ 木鐸 舌が木製の鈴。政治や教育に関する事柄を人民に知らせる時に振り鳴らしたという。世人を導く指導者の事（論語八佾 天下無道也久矣 天將以夫子孔予為木鐸）

※ 社 古代地方行政單位 25家を1社いふ

「友好を図るのは隣国としては当然の事です。斉に出兵するのは楚の呉への報復討伐軍を助ける事になりますので急いで兵を出すのは考えものです。太子波殿の奥方が亡くなり、まだ後の方が決まっておられませんか。斉に求婚の使者を出してみたら如何でしょう。嫌だと言ったらそれから討伐に出ても遅くはありません」

と進言したので闔閭はその意見に従い、大夫王孫駱を太子波の求婚のために斉に遣わした。この頃、景公はもう年で耄碌もうろくしていて気力も衰え気も弱くなっていた。宮中に一人だけ未婚の幼い娘がいたがこれを呉に遣るに忍びない。斉の朝廷には良臣も良将もおらず（晏子、穰苴ともにあなし、じょうしよ）すでに死去、呉の要請を断れば呉軍に楚と同様にやられてしまうと心配するだけであつた。大夫黎弥は呉を怒らせるべきではないと景公に呉との結婚を説得した。景公は仕方なく娘小姜の結婚を許した。王孫駱は呉王に復命すると王は彼に結納の品を斉に届けさせ齊女を迎えに遣つた。景公は『娘は可愛い呉は怖い』で気持ちが乱れ思わず涙して、

「もし平仲、穰苴のどちらかでもいてくれたら呉などを心配する事はないのだが」
と嘆息し大夫鮑牧に言つた。

「卿を煩わして申し訳ないが、娘に随いて呉へ行つて呉王によりしく頼んでほしい」

出発の時景公自ら小姜をたすけて車に乗せてやり南門まで見送つた。

鮑牧は小姜を奉じ呉へ行つて齊侯の命を伝え、子胥が賢人なので親しく話し合える仲になつて帰つた。

小姜はまだ幼くて夫婦の営みがないので、太子波との結婚後も父母の

ことを思い続け日夜泣いていた。太子が何度も慰めたが悲しみは治まらずとうとう病に臥せつてしまつた。闔閭はかわいそうに思つて特に北の城門を明るく豪華に改造して『望齊門』とし、小姜が毎日上つて楽しめるようにしてやつた。上つて欄干にもたれ、いくら目を凝らして北を見ても夢寐にも忘れえぬ齊国は見えない。

悲しみは高じて病は益々悪化し、死に臨み太子波に、

「虞山の頂から東海がみえると聞いています。わたしが死んだらそこに葬つてください。そこからなら齊が見えるかもしれませんから」

波は父親に言つて虞山の頂上に葬つてやつた。現在も、常熟県虞山に齊女の墓と望海亭がある。張洪の『齊女墳』と言う詩がある。

南風は強く北風弱し 諸侯争覇で齊女を娶る

結納納め齊女迎え国境を越ゆ 道中幼女万行の涙

望郷憚らず楼台に登り遠望し 葬るに塚低きを嫌う

止めどなき泣露は蔓草の如く 誰に託さんこの望郷の思い

太子波も妻齊女を痛惜し、彼も床に伏し間もなく亡くなつてしまつた。

闔閭は公子たちの中から後継者を選ぼうとしたがなかなか決めきれず、子胥と相談して決めようと思つた。前太子と前の妃との間に生まれつた夫差がこの時二十六才で、体は大きく意気軒昂で風采も堂々としていた。彼は闔閭が後継者を検討していると聞き、まず子胥に会いに行き、

「わたしは嫡孫です。太子としてわたしを措いて誰がいましよう。

相国の一言にかかっています」

子胥は了解した。しばらくして闔閭は太子を誰にするか相談するため子胥を呼びにやつた。

「嫡子を立てれば内乱の心配がありません。太子は亡くなりましたが嫡孫の夫差殿がおられます」

「わしの見たところでは、夫差は頭の切れも良くないし思いやりに欠けていて、呉を統べる能力はないように思われるが」

「夫差殿は信も礼もわきまえています。父が亡くなれば子が継ぐのは当然の事で、何をお迷いになっておられるのですか」

「わかった、あなたの言う通りにしよう。よく補佐してやってください」

という事で夫差が太孫となった。夫差は子胥の屋敷を訪ね札を尽くして感謝した。

周敬王二十四年（紀元前四九六年）、闔閭は年老いて性格が益々せっかちになってきた。越王允常が亡くなり、子の句踐が立った事を聞き、葬儀に乗じて越を討伐しようとした。

「越は呉を攻めてきた罪はありますが大喪の時に攻撃するというのは好ましい事ではありません。少しお待ちになった方がいいと存じます」

と子胥は諫めたが、闔閭は聞かず、子胥を太孫夫差とともに国を守らせ、自ら伯嚭、王孫駱、専毅等を率いて精兵三万を選び南門を出て越に向い進発した。

越王句踐は防衛のため諸稽郢を大将にし、靈姑浮を先鋒、畴無余胥犴を左翼右翼の将として自ら大軍を率いて出陣し、檣李で呉軍に出遭った。両軍十里ほど離れて陣地を設営して戦鬪が始まったが勝負がつかない。闔閭は怒って全軍五台山に陣を移し、妄動を禁止し越兵の懈怠を待ちそれに乗じようと考えた。

句踐は呉軍の陣の各部隊が整然とし、武器も立派なので諸稽郢に、

「敵の軍勢は非常に盛んである、軽く見てはならん。計をもってこれを乱す必要がある」

と言って、畴無余と胥犴に命じて決死隊を作り左翼から五百人それぞれ長槍を持たせ、右翼から五百人それぞれ大戟をもたせて、一斉に呐喊し呉軍に突撃させた。呉の陣では全く相手にしないで、陣頭で皆弓を構え鉄壁のような固さであった。三度突撃したが三度とも陣を打ち破る事はできず句踐は手の打ちようがなくなった。諸稽郢がそっと句踐に言った。

「この時こそ死刑囚を使う時です」

越王ははっと気がつき、翌日密かに軍令を出した。各陣中に連れてきていた合計三百人の死刑囚が三行に分かれ、全員肌ぬぎになり剣を首にかけゆつくりと呉軍の陣前へ近づき、その頭になるものが前に出て挨拶をした。

「わが主人越王は実力無きにもかかわらず貴国に挑み自ら恥辱を受けました。我われは敢えて死を選び越王に代わりお詫び申し上げます」

と言いつ終わるや剣を横に引き順次一人づつ自刎して果てたのである。呉兵は見たこともないこの光景に大変驚き、何事なのかよくわからずだんだんそちらに気がとられ互いにざわざわ騒ぎ出した時、突如越軍中に太鼓と喊声がとどろいた。畴無余、胥犴が大盾と短剣を持った決死の二隊を率いて笛吹き鳴らし飛び出してきたのである。呉軍は慌てて錯乱し統制を失った。句踐が続いて中央から大軍を率いて攻め込み、右からは諸稽郢、左からは靈姑浮が呉軍を突き破った。王孫駱は懸命に諸稽郢と闘った。靈姑浮は長刀を振り回して左右に切り込んでいるうちに呉王闔閭に出遭った。彼はいきなり長刀で斬りつけた。闔閭はさっと

身を躲したがその切つ先が右足にあたり親指を切り片方の靴を車から落とした。そこへ專毅がやってきて彼も重症を負いながら死物狂いで呉王を救出した。王孫駱は呉王が傷ついた事を知り戦いを諦め急いで兵を撤回したが、越軍に嵩にかかって攻められ呉軍は大敗し死傷者は半数を超えた。闔閭は傷が重く、即刻引き揚げて本営に戻った。

呉王は年老いて傷に耐えられず七里ほど戻ったところで一声叫んで亡くなった。伯嚭が柩を守って先行し、王孫駱がしんがりを務め肅々と引き揚げた。越軍も追撃はしなかった。史臣は詩の中で闔閭が用兵を急ぎ過ぎたためこの不幸を招いたと言っている（この戦いを槁李の戦いという）。

楚を破り斉を侵犯意気軒昂 更に越をも呑まんとす
好戦者は終に軍中に死す 心すべし順流に棹さすべからず

呉太孫夫差は柩を迎え、喪服を着て王位を継承し、破楚門外の海涌山（現在の蘇州虎丘）に葬った。山を穿って穴を掘り、專諸が使った魚腸剣をはじめ、剣甲六千副のほか金玉の遊戲など所狭しと殉葬し、最後に墓の工事人全員を殉死させた。三日後ある人が墓を見ると白虎が墓の上で蹲っていたといい、それに因んでこの山を虎丘山と言った。識者はそこには埋められた金属の気が現れたのだという。後に秦の始皇帝が山を穿って闔閭の墓を開け剣を捜させたが手に入らなかった。その後そこは深い谷に変わってしまった。現在の虎丘の劍池がそれである。專毅も重傷のため亡くなり、山の裏側に葬られたというが今はわからない。

夫差は葬儀を終え、長子の友を太子とした。

内侍十人に順番に庭に立たせ自分が通るたびに大声で、

「夫差よ、お前は越王が祖父を殺した仇敵だという事を忘れたか」と言わせ、それを聞くとすぐに泣いて答える事にした。

「いいえ、決して忘れてはいません」

こうして自分の心の戒めとした。子胥、伯嚭には太湖で水軍の訓練を、靈岩山では弓の訓練をさせて、三年の喪が明け報復の挙兵の日を待った。周敬王二十四年（紀元前四九六年）の事である。

この頃晋景公は政権を失い六卿（范、中行、智、趙、魏、韓）の間で党を組み権力争いが行われていた。荀寅（中行氏と士臼射（荀氏）は親しく婚姻関係もあるが、韓不信と魏曼多は彼らを嫌っている。荀躒（智氏）は卿にしてやりたいと思っている梁嬰父という寵臣がいる。荀躒はまた范氏、中行氏と仲が悪いので、嬰父は荀躒の寵愛を得んで荀寅の位に取って代わろうと思っている。上卿趙鞅の一族に邯鄲を封地に持つ午という者がいる。午の母は荀寅の妹で、このため午を甥と呼んでいる。先年、衛靈公と晋景公と一緒に晋に反旗を翻したが、晋の趙鞅が衛討伐の兵を出したので、衛は畏れて五百戸を献納して謝罪した。鞅はそのまま邯鄲に留まってしまった。これを『衛貢』という。間もなく鞅はその五百戸を晋陽に移そうとした。午は衛人が承服しない事を心配し命令を出していなかった。鞅は午が反抗した事を怒って晋陽に呼びつけ捕えて殺してしまった。荀寅は趙鞅が勝手に甥を殺したのを怒って、士吉射と示し合わせ趙を討ち邯鄲午の報復をしようとした。趙氏には董安子という謀臣がいる。当時趙氏の晋陽城を守っていたが、両氏のは

※ 晋の六卿は以下の争いで四卿となり、約40年後の453年智氏が滅び三卿となる。376年三卿は晋公を廢し趙魏韓独立し諸侯となり戦国七雄内の三雄となる。

かりごとを耳にしたのでわざわざ絳州へ出向き趙鞅に報告した。

「范、中行両氏は親しいので共謀されたら抑え切れない恐れがあります。どうか前もって準備されますよう」

「晋国には必ず先に問題を起したほうが誅される決まりがあるから相手の出を待つてそれに応ずるといふかたちにしなければならぬ」

「それでは多くの庶民が被害を蒙ります。むしろわたし一人で死んだほうがましです。有事の時はわたしにやらせて下さい」

鞅はこれを許さない。安于はそつと戦備をととのえ変を窺っていた。荀寅と士吉射は大衆に向かつて、

「董安于が軍備をしている、我われをねらっているんだ」と宣伝し連合軍で趙氏の屋敷を包囲した。しかし董安于に防備の用意があつたので血路を開き趙鞅を晋陽城に保護し、荀寅（中行氏）と士吉射の追撃に備え壘を築き守備を固めた。荀躒（智氏）は韓不信と魏曼多に不満を述べた。

「趙氏は六卿の長であるのに、吉射は君命もなく彼を追放し、国政を自分たちのものにしてしまつてゐる」

「先に事を起した者が罪に問われるべきです彼らを追放しましょう」韓不信がそう提案し、三家で定公を奉じて三家を攻めた。寅、吉射両家は懸命に応戦するが勝負がつかない。吉射は定公を奪おうと考えた。韓不信は急いで部下に市中に宣伝させた。

「范、中行両氏が謀反を起しし君主を強奪に来た」

國人はそれを信じ手にてに武器を持ち定公を助けに来た。三家は國人の力を借りて范、中行両氏の軍を破つた。寅、吉射は朝歌へ逃げ込んで立てこもつた。

「范、中行両氏が最初に事を起こしたのでこれを追放いたしました。趙氏は代々晋に大功がありますので趙鞅の復位をお願いいたします」

韓不信が定公に言うとき定公も嫌とはいえず趙鞅を晋陽から呼び寄せ元の爵録に戻した。梁嬰父は荀寅に代わつて卿となる事を主人の荀躒を通じて趙鞅に頼んだ。鞅が董安于に相談すると、

「晋は多頭政治ですから内乱が絶えないのです。もし嬰父を立てれば又荀寅を一人作るのと同じ事になります」

と言うので、鞅は断つた。嬰父は怒り、董安于が邪魔をしたのを知つて荀躒に言つた。

「韓、魏は趙と同じ仲間だ。智氏だけ孤立しています。趙氏が頼りにしているのは謀臣の董安于ですから奴を除いたら如何です」

「いい方法があるか」

「安于は密に武装し、范、中行両氏の変をけしかけたわけですから、もし先に事を起こした者が問題という事になれば安于の方です」

荀躒は嬰父の言い方で趙鞅を責めた。鞅は怖れたが董安于は、

「臣は事を進める時は常にその時が死に時と覺悟しています。臣が死んで趙氏が安泰になるのであれば、生より死を選びます」

と言つて退出し、縊首して果てた。趙鞅はその遺体を市中にさらし、荀躒のもとへ使ひのものを遣り、

「安于は罪に服しました」

と報告させた。荀躒は趙鞅と相互不可侵の盟約を結んだ。鞅は密に董安于を家廟の中に祀つてその労に答えた。

寅、吉射は朝歌を拠点にして久しくなり、晋に反旗を掲げる諸侯はみな両氏の力を借りて晋をうとうと考へている。趙鞅は何度も軍を出して

これを攻めるが、斉、魯、鄭、衛は使者を出して食料を供給し援兵も出して両氏を助けるので軼は朝歌をどうしても落せない。周敬王の三十年（紀元前四九〇年）になって趙軼は韓、魏、智の三家と連合し朝歌を落した。寅、吉射は邯鄲に逃げ更に柏人（河北省隆堯県）へ逃げた。間もなく柏人の城も破れ、范皋夷、張柳朔は共に戦死し、豫讓は荀躒の子荀甲に捕えられ、甲の子荀瑶の助命願いで助けられ結局智氏の家臣となった。寅、吉射は斉を頼って行った。哀れにも、荀林父の五代目になる寅（中行氏）、士蒍の七代目の吉射（范氏）は先祖は共に晋室の股肱の臣であつたが子孫は粗暴のため遂に滅びてしまうことになった。晋の六卿はこれより趙、韓、魏、智の四卿になった。

六卿の提携存亡 各々自家の都合あり

四氏の切取り益々急 范中行の時以上

さて周敬王二十六年（紀元前四九四年）二月、呉王夫差は喪が明けてしばらく経つたので、太廟に報告して、国の存亡をかけた兵を興し、子胥を大将、伯嚭を副將にし、太湖から水路を取つて越に攻め入つた。越王句踐は群臣を集め迎撃の対策を謀つた。大夫范蠡、字少伯が進み出て意見を述べた。

「呉は君主を失つた恥を思いその報復を誓つて三年になります。気力も力も充実しており、当るべからずです。兵を引き締め堅守に徹するべきと考えます」

つづいて大夫文種、字会が発言した。

「（こ）は辞を低くして謝罪し和を乞い、撤兵させてから後の事を計るべきと考えます」

二卿の意見は何れも守

備に徹し和を乞う話であり、そんなのは策略でも何でも無い。そもそも呉はわが代々の仇敵だ。敵が来て戦わないのでは軍事能力がない事になる」

句踐はこう言つて国中の壮丁を三万人を椒山に集め迎撃体制を敷いた。（この橋李敗戦の報復戦を夫椒山の戦いまたは会稽の戦いという）

初戦では呉軍が少し押し込まれ、殺傷者百十名を出した。句踐は有利な情勢に乗じて攻め込んだ。数里攻め込むと夫差の大軍に出遭い、両軍布陣して大戦となった。夫差は船頭に立つて自ら櫓を取つて太鼓を叩き激励したので将士の気力は十倍した。突然北から大風が吹きはじめ波濤がわき返り、それぞれ子胥、伯嚭が乗つた軍艦は順風に帆を揚げ下つていった。呉軍が放つ矢は風を受けて強弓となつて蝗のように飛んで行き越軍は支えきれず大敗潰走した。呉軍は三路に分かれて追ひ、越將

靈姑浮は船が転覆し溺死し、胥犴も矢を受けて死んだ。勝ちに乗りなおも追撃し越軍の死者は数えきれない。句踐は命からがら固城に逃げ込んだが呉軍はこれを何重にも包囲し水汲み道もなくした。

「十日もしない内に越軍は干上がつてしまうだろう」

と夫差は喜んだが、山の頂上に霊泉があり、そこには魚もいるというのを誰が知ろう。句踐は魚を数百匹捕えて呉王に贈つたので呉王は非常に驚いた。句踐は范蠡を残して固城を堅守させ、自らは残兵を率いて隙を見て会稽山（現浙江省嘉興東南）に逃げ出した。ここで点呼すると僅か五千余人しか残つておらず、悔恨のため息をついた。

「先君からわしの時代まで三十年、未だこんな惨めな敗戦を味わつた事がない。范蠡、文種の意見を聞かずにこんな事になつてしまったことが返す返すも口惜しい」

呉軍は固城を益々攻め立てた。子胥は右に、伯嚭は左に陣を取った。范蠡は一日三回も危機情報を伝えたので越王は非常に恐れた。

文種は王に進言した。

「事は急を要します。今なら講和を求める事ができると思います」

「だめだと言つたらどうする」

「呉の太宰伯嚭は物欲が強く好色でもあり、人の功を嫌い能力を妬む性格ですから、子胥と国政を共にしていますが考え方が合うわけがありません。呉王は子胥を恐れ伯嚭のほうに親しみを感じています。臣が太宰の陣営へ行つて彼の歛心を得て講和の約束を取り付け、彼が呉王に言えれば必ず許可します。子胥が反対してもきつと聞かないでしょう」

「太宰への賄賂は何がいいだろうか」

「軍中にかけているのは女です。美人を献納すれば、天がまだ越を見捨てていなければ嚭は必ず承諾します」

句踐はその夜のうちに都城に遣いを出し、夫人に命じて宮中の美人を八人選び美しく着飾らせ、二十対の白璧、黄金千鎰といっしょに、夜、文種に伯嚭の陣をたずねさせた。

太宰伯嚭は最初は拒絶する気だった、使者の来意を探っているうちに贈物があると聞くと、横柄な態度で招じ入れた。文種は跪いて挨拶をした。

「わが主君句踐は年若く世間知らずで、貴国に対し正しい対応ができず罪を得る事になってしまいました。今になって後悔いたしましたも間に合いませんが、国を挙げて貴国の臣下にならんと願っております。呉王にはお許し頂けないのではないかと心配でありますが、太宰はお心広く徳のおありになる方で、外には呉国の盾になっておられる大功ある方

でありますし、内には呉王のご信任を得ておられる方だと存じ上げております。小職はわが主君より先ず太宰にご挨拶申し上げ太宰の門下に入らせていただいて、よろしく王へのおとりなしをお願いしよう命じられて参つた次第でございます。これは誠に軽少ではございますがどうかお納め願います。尚これからも度々お伺いさせていただきたいと存じております」

と言つて目録を呈上した。しかし伯嚭は色をなして言つた。

「越国の運命は旦夕に迫っている。越都を攻略すれば全ての財宝は我々のものだ。こんな物でわしを釣ろうというのか」

「越国は負けたとはいえないお会稽に五千の精兵がいますので一戦は可能です。その一戦に勝てなければわが君は倉庫を焼き尽くして他国へ逃げ、楚王のように復国を図るつもりです。どんなに慌てても呉のために残すわけがありません。たとえ残つたとしても大半は呉の王宮に入り、太宰や諸将にはほんのおこぼれが入る程度でしょう。もし貴国との講和に尽力いただければ、わが君は名目的には呉王に臣従することになりますが実質的には太宰に臣事することになり、毎年の貢献は王宮へ行く前にまず太宰の門に入る事になりますので、越とのうまみは諸将には関係なく全て太宰の思いのままということになります。いわんや追い詰められた者の必死の反抗で、窮鼠猫をかむの不測の事態がないともいえません」

この話は伯嚭の心を動かし、彼は思わず頷いて微笑んだ。更に文種は目録にある美人たちを指して、

「この八人はみな越の宮殿にいた者です。わが君が生還できれば民間からもっと美しい者を捜しまして太宰に掃除婦としてお届けいたしますし

よう」

伯駘は立ち上がった。言った。

「あなたが右陣の相国へ行かず左陣のわたしの所へ見えたのはわたしが人の困難につけ入る男でないかと見ての事でしょう。明日あなたをお連れして大王にお引き合わせし、話を決めることにいたしましう」

翌朝、中軍に同行して夫差に会いに行った。伯駘が先に入り句踐の使者文種の講和要請について縷々報告した。夫差は突然怒鳴った。

「越は不倶戴天の敵だ。講和などんでもない」

「王は『兵は凶器だから、止むを得ない時にのみ使うもので長く使うものではない』という孫武の言葉を『記憶で』ございますか。越はわが国に大変な罪を犯しましたが、すでにこれを下し、越王自身呉の臣となりその妻を呉の妾とすると申しております。越国の宝物は全て呉に貢納し、越王の希望は先祖の祀りを細々とでも続けたいということであり、越の投降を受け入れることは大きな恵みを与える事であり、越の罪を許せば殿の恩徳の評判は天下に広がり、名と実をともに手にすることができ霸王も夢ではありません。窮した越を無理に追い詰めようとすると、句踐は宗廟を焼き妻子を殺して金玉を長江に沈め、決死の五千の残兵を率いて玉碎してきます。呉軍も傷を受けざるを得ないでしょう。殺し合

つて国のためになるでしょうか」

「文種は今何処にいるのか」

「アントの外で待つております」

夫差は文種を入れて接見した。

文種は膝行し、へりくだって伯駘に言った事を繰り返した。

「そなたの主君夫妻はわしの臣妾となつて呉に行けるのか」

「臣妾になりましたからには死生は王の意のままに」ございます。当然お側でお仕え致します」

「句踐夫妻は呉へ行つてもいいと言っているのですから越を許したとはいへ実質は取つた様なものです。これ以上何をお求めになりますか」と伯駘がひと押しすると夫差は結局講和を承知した。

この事はすぐに子胥の陣営に知らされた。子胥は急いで中軍へ駆けつけ王の傍に立つている伯駘と文種を見て、怒気を満面に見せて呉王に言った。

「王は講和をお許しになったのですか」

「許してやることにした」

「だめです、それはなりません」

文種は驚いて数歩退つて黙つて子胥の話を聞いた。

子胥は夫差を諫めて言った。

「越は呉の隣です。両方が並び立つ事はありません。呉が越を滅ぼさなければ越が必ず呉を滅ぼします。西国の秦や晋を攻略しても距離が遠いので管理できませんが、越国はすぐ隣ですからその土地も水運も利用でき国家として大きなメリットがあります。決してそれを放棄すべきではありません。それに大王は先王の仇がお有りになります。何のために内侍を庭に立たせて誓をたてて来られたのですか」

夫差は答に窮し、目で伯駘に助けを求めたので伯駘は子胥に答えた。

「相国のお言葉にはおかしい点がございます。国にはそれぞれ水陸の自然条件があります。呉越は互いに水に恵まれ、秦晋は陸地に恵まれています。もし呉越の土地が共に水運が利用できるから共存できないとい

うのであれば、秦晋齐鲁はみな陸地の国で陸軍は共用できますが併呑したとは聞きません。先王の仇があるから許せないとおっしゃいますが、相国の楚はもつと酷い仇ではないですか。どうしてその楚を滅ぼさずに急に講和してしまわれたのでしょうか。越王夫婦は呉に服役したいと言っています、楚が僅かに半勝を受け入れたのとは大違いです。相国はご自分の事では情けあるご処置をお取りになりますが、呉王を酷薄の人にしようとなさるのですね。忠臣というのはそういうものでしょうか」

「太宰の言う事もつともである。相国まずは下がられよ。越国が財宝を献納してきた時は、あなたにも応分の物は差上げましょう」

夫差がそういうと、子胥は怒りで顔面土色になつて、

「ああ、被離の意見を聞かず、この佞臣と一緒にやってきたことが悔やまれる」

と憎々しそうにつぶやいて、数歩足を踏み鳴らして本宮を出て行き、

大夫王孫雄に、

「越国はこれから十年休息をとり十年軍事訓練し二十年后は呉の宮殿は沼沢に変じているだろう」

と言った。雄はそれを余り気にしなかった。子胥は憤慨しながら自陣の右宮へ歸つて行つた。

夫差は文種に越王を赦し呉軍に挨拶にくるよう命じ、越王夫婦が呉へ来る時期をたずねた。

「わが主君は、大王の不殺のご恩を蒙りましたので、とりあえず帰国させていただき貴国への献納品の整理等致したく若干お時間をいただきたく存じます。もし約束を破りご信頼を失った場合は今度はお許しいただけない事は十分承知致しております」

呉王はそれを許し、文種と五月中旬を約して勾踐夫婦を呉国に連行する事を決め、王孫雄に文種を護送して越国に返し、勾踐の出発を催促させた。さらに太宰伯嚭には呉山に軍隊を駐屯させ、もし越王が期日までに来なければ越国を滅ぼして復命するよう命じ、夫差は自ら大軍を率いて一足先に呉都へ凱旋した。

さて越王は呉国でどうなったであろうか、それは次回のお楽しみ。

夫差 伍子胥の諫言を聞かず越王を救し
句踐 懸命に呉に仕える

越の大夫文種は呉王夫差の講和の許可を得てそれを越王に復命した。

「呉王はすでに兵を引き揚げました。大夫王孫雄が臣を伴つてここへ来ておりまして王が呉へ発たれるのを催促しています。それに、太宰が長江岸に兵を駐屯させていて王がお渡りになるのを待つております」
句踐は思はず涙を流した。

「五月の期日が迫っています。早々にお帰りになつて国事の手配を済ませる必要がありますから、むやみに悲しんでいるお暇はございませぬ」
越王は涙を収めて直ちに越の都に戻つた。市井は以前と変わらないが、若者が悄然としているのを見て慙愧に震えた。王孫雄を宿舎に入れて、蔵の宝物を整理し車に積み込み、又国中から三百三十人の美女を集め三百人を呉王に、三十人を太宰に送る事にした。約束の日までまだ時間はあつたが王孫雄がしきりに催促してくる。句踐は涙ながらに群臣に言つた。

「わしは先人の遺されたものを受継ぎ怠慢なくコツコツと努力を重ねてきた。しかしこの度夫椒の一戦で呉に破れ遂に国を滅ぼす事になり千里の遠きに俘囚となつて行かなければならなくなつた。再び帰つて来る日はないかもしれない」

群臣皆涙せぬ者はいない。文種は句踐に言つた。

「昔、湯王は夏台に囚われ、文王は羑里に監禁されましたが終には王

になりました。斉桓公は莒国に逃げ、晋文公は翟国へ逃げましたが後に覇を称えました。この艱難は天が与えた霸王の道でありましょう。王はこれを天意と受け止め復興を期して、徒に悲しみ高き志を損なう事なきようお願い致します」

句踐は宗廟の祀りを終え、王孫雄は一日先行し、句踐は翌日夫人と共に出發した。群臣は全員で浙江の岸まで送つた。范蠡は固陵で船を用意して越王を迎え、河辺で壮行会を開いた。

文種は前へ進み出て杯を挙げ祝つて歌つた。

皇天の佑助あり 先に沈むも後には浮かばん

禍は徳の本 災難は福の糧

奢れる者終には滅び 従う者いつか栄えん

王は今停滞あれど 後には禍晴れるべし

君臣の生別は 必ず上帝を動かさん

みな悲哀を感じ 感傷にひたらぬ者なし

さあ殿肉をどうぞ 酒をもう一杯

句踐は天を仰ぎ溜息をついて杯を挙げ涙を流し言葉もなかった。

『志有るものは密やかなり、遠き慮り有るものは憂いあり』と申します。昔の聖賢は皆困難に遭つて大変な恥を受けています、何も王に限つた事ではございませぬ」
と范蠡も激励した。句踐は、

「昔堯は舜、禹に任せて天下を治めると洪水があつても大被害にはならずにすんだという。わしはこれから呉へ行き、国をそなたたち大夫の皆に任せる事になる。皆はわしにどんな希望を与えてくれるのか」

と聞いた。范蠡は居並ぶ大夫たちに言った。

『主君の心配は臣の恥辱、主君の恥辱は臣の死なり』という。今、殿には国を去られるについて大変心配されておられ、呉に臣従するといふ大変な恥辱を蒙っておられる。我われは浙東の士だ。殿のご心配、恥辱を分け合う事ができる豪傑がいけないというわけではなからう』

大夫たちはこれを聞くと声を揃えていった。

「我々はみな王の臣です。王の命に従って忠義を尽くす所存です」
そこで句踐は皆に言った。

「皆がわしを支えてくれると言ってくれて本当にうれしい。そこでこの難局に対しどのように対処し国を守るか各人の考えをちよつと話してほしい」

文種が一番に答えた。

「国家管理、民衆保護は臣が担当し、殿のお世話をし臨機応変な処置に関しては范蠡殿のほうが勝れておりますの彼に任せます」

范蠡が続いた。

「文種殿の言うとおりです。国事は彼にお任せください、彼なら民衆と親しみ、耕作と戦闘準備をきちんとやらせる事ができます。臣は困難に至った時殿を補佐し、汚れも恥じも耐え忍び必ず呉から帰ってくる任務を担当いたします」

その後、諸大夫もそれぞれやるべきことを述べた。

太宰の苦成は、

「民に王の徳を広く知らしめ、煩雑な問題を的確に処理し、民にはそれぞれ分を理解させる事が臣の役割と考えております」

外交担当の曳庸は、

「諸侯とは疑義 紛糾が拡大しないよう交流をはかり、他国から恨みを買わないように計ることが臣の務めと考えております」

司直の皓進は、

「過誤を摘発し、疑義は正否を明らかにし、直心不撓不屈、身内に甘くならないよう注意する事、これが臣の使命であります」

司馬の諸稽郢は、

「敵を見れば直ちに陣を構え、矢を放ち兵を鼓吹し、血が川を成すも前進あるのみ。これが臣の務めです」

農業担当の皐如は、

「民を親しくいたわり、死者があつた時は急いで駆けつけ、食事は質素にし、貯蓄を推進する。これが臣の仕事であります」

太史の計倪は

「天地の変化をよく調べ、陰陽の暦法と照らし合わせ吉凶凶兆を知る事が臣の責務であります」

大夫たちの考えを確認して句踐は、

「これから、北の呉へ虜囚となつて行くがそなたたちが立派に各自の能力と長所を発揮して国を治めてくれておれば、わしは何の心配もない」と言つて諸大夫を国の守りに残し、范蠡だけを連れて君臣河口で涙のうちに別れた。

句踐は天を仰ぎ、大きく息を吐き、

「死は人の最も恐れるものだが、わしの腹は据わつた。死ねと言われどももう恐くはないぞ」

と言つて船に乗りこんだ。送る者は皆岸に立つて泣いたが、句踐は終に振返る事はなかった。

斜陽山に掛り船帆を開く 風巻き春濤地を揺るが如し
今日河辺の分れの宴 何時の日か渡り来て再会せん

越夫人は船べりによつて泣いていたが、ふと見ると 鵲が岸边の渚で
エビをつつき、飛んで行つては又飛んで来てのどかに奔放にしている。
これを見て涙ながらに歌った。

仰ぎ見れば果なき大空 鳥は悠然と舞う
気ままに渚に集まりて 又羽ばたいて雲間に去る
えびをつつき水を飲み 心のままに往きまた帰る
われ何の咎ありて 天地の責めを受けるらん
風は飄々と西に流れ 再び帰る日は何時の日か
心は鬱勃割かれる如く 涙燦然と両の頬を伝う

越王は夫人の歌を聞き、胸が張り裂けるほど傷むが、わざと笑つて、
「わしには六枚の翼があるから雄飛する日は必ず来る。何を心配する
ことがあろう」
と言つて彼女を慰めた。

越王は呉に入ると先ず范蠡を呉山に遣つて太宰伯嚭に会わせ、又金帛
美女を献納させた。

「文大夫はどうして来ないのだ」

「主君の変わりに国を管理させていますので一緒には参れませんが
した」

伯嚭は范蠡に随いて越王に会いに来た。越王は庇つてくれた恩を深謝
した。伯嚭は全力を尽くして越国へ帰れるようにしてやろうと引受けた

ので越王は少し安心した。伯嚭は越王を推送して呉王に謁見させた。
句踐は肌脱ぎして階下に伏せ、夫人もこれに従つた。范蠡に宝物と女の
目録を呈上させると、越王は叩頭して挨拶した。

「東海の臣句踐は身の程知らずに、国境で貴国に大変な迷惑をかけて
しまいました。大王よりその罪をお赦しいただき、しばらく命を永ら
える事ができました事、誠に感謝に耐えません」

「先君の仇を思えばそなたの首は無いところだ」

「臣は首を落とされて当然のところ、只々大王の憐れみのお陰でござ
います」

句踐が再び叩頭して言つと、子胥は傍らから目を火焰のように怒らせ
て、雷のような声で夫差に進言した。

「大鳥は高く青雲の上を飛んでいても弓で射落としたく思うもので
す。まして庭まで下りてきているものを生かしておくとはどういう事で
しょう。句踐は非常に危険な人物です。今は釜中の魚で料理人に命を握
られていますから、諂いと媚で命乞いしていますが、一度助かった
ら、山に放した虎、海に逃がした大鯨のようで、その時は悔やんでもも
う間に合いませんぞ」

『投降してきた者を殺すとその禍三代に及ぶ』と聞いている。わし
が越を恨んでいるのに殺さないのは天の咎めを心配しての事なのだ」

太宰伯嚭が更に焚きつけた。

「子胥殿の考えは短期的なもので国を長期的に安定させる大計では
ありません。王のおつしやる事は誠に仁者の言葉です」

子胥は呉王が伯嚭の佞言を信じて諫言を聞く耳を持たないとわかる
と憤懣やるかたなく退出した。夫差は越からの献上の品を受け取り、王

孫雄に命じて闔閭の墓の傍に石室を作り句踐夫婦をその中に放り込み衣冠を脱がし、ぼさぼさ髪と汚れた服のまま馬の世話をさせた。伯嚭がそつと食事を与えていたのでなんとか飢餓は避けられた。呉王は車で外出するたびに句踐に馬の鞭を持たせ車の前を歩かせた。越王は呉人に指さされ恥ずかしさにずつと首をうなだれて歩いた。

英雄失意の嘆きに堪えんも 平素は気概も尽き果てて
魂魄故苑を離れて帰り難し 恨みは長江に満ち涙止まず

句踐は石室に住んで二ヶ月になるが范蠡は一日中傍に仕え教歩も離れる事は無かった。ある日夫差が勾踐を召すと、勾踐が前に跪き後ろに范蠡が立っている。ふと夫差は范蠡に言った。

『折婦（聡明な女）は破滅の家には嫁がず、賢者は滅びた国には仕えず』という事を聞いたことがある。勾踐は自ら道をはずして越国を滅ぼしたのだ。そなたも一緒に奴隸になって囚人部屋に繋がれているが、どうだね、心を入れ替えてわしに仕えないかね。必ず重用して富貴を与えようではないか』

このとき越王は地に伏して涙を流し、只ただ范蠡が呉に帰順する事を恐れた。范蠡は叩頭の礼をして呉王に答えた。

『亡国の臣は政を語らず、敗軍の將は兵を語らず』と申します。臣は越で越王を輔佐することができず大王に罪を得てしまいました。幸い大王に一命をお助けいただき君臣余命を保つ事ができましたので、大王のために掃除をし走り遣いができましたらこれに越した幸せはございません。どうしてこれ以上の富貴を望むことができますか』

「その氣が無いなら仕方が無い、石室へ帰りなさい」

夫差は立ち上がり宮中に入り、句踐と范蠡は石室に戻った。越王は前垂れ掛け姿で、櫛のように髪を乱して飼葉を切つて馬の世話をした。夫人は縁のない粗末な衣裳で水を汲み馬の糞の掃除をした。范蠡もやつれた顔で薪を拾つて飯を炊いた。夫差は時々そつと人を遣つて観察させたが三人ともがんばつて仕事をしており誰も恨み言を聞いた事が無かったので、彼等にはもう大志も国へ帰る気持ちも無くなったものと思い、気にしなくなつた。

ある日夫差が姑蘇台に登り、遠くから勾踐を見ると夫婦は馬糞の傍で端坐し范蠡はその左に立っていた。身分は奴僕だが夫婦君臣の礼儀は少しも疎かにしていない。夫差は振返つて伯嚭にいった。

「越王は小国の君主に過ぎず、范蠡は一介の士に過ぎないのに、この環境の中で君臣の礼を忘れない姿を見るとわしは尊敬を禁じられない」

「それに哀れでもあります」

「太宰が言うようにわしも見るに忍びない。彼が過去を悔いて心を入れ替えるのなら許してやってもいいのではないか」

「聖王のみ心で彼らをお赦しになればきつと彼らも心から恩に感じるのでしよう。」決意願います」

「太史に吉日を選ばせて越王を国に帰してやろう」

伯嚭はそつと句踐にその朗報を報せてやった。句踐は喜んで范蠡に言う

「それを占つてみました。今日は戊寅で卯の刻限にこの事を聞きまし

た。戊は捕えられた日で卯は戌とは相性がよくありません。卦の詞は『天網四圍に張りつめ、万物全て傷つく、祥反つて禍となる』と出ました。この報せは喜んではいられません」

と答えた。句踐はこれを聞いてがっかりした。

さて、子胥は呉王が越王を赦すという話を聞き、慌てて夫差にあって諫言した。

「昔、夏の桀王は湯（殷湯王）を捕えましたが殺さず、殷の紂王は周文王を捕えてこれも赦してしまいました。そのため天道は逆になり、禍は福に転じました。その結果夏桀王は湯に追放され、殷紂王は周に滅ぼされてしまいました。今、大王は越王を捕えて誅殺しなければ夏、殷の二の舞になってしまふ恐れがあります」

夫差は子胥の話を聞き又越王を始末する気になって呼び出した。伯嚭は事前に句踐に情報を流した。句踐は驚いて范蠡に相談した。

「心配には及びません呉王が殿を捕えてすでに三年になります。三年間でできなかったことが一日で変わるはずがありません。いらつしやつても大丈夫です」

「わしが死なずに来たのは全て大夫の策のお陰だ」

そう言つて呉王に会いに行つた。しかし三日待つても呉王は朝廷に出てこない。伯嚭は呉王の命を受けて句踐を石室に帰した。句踐は変に思つて伯嚭にそのわけを聞いた。

「王は子胥の話に惑わされあなたを殺そうと呼び出されたのですが、偶々風邪を引かれて寝込まれました。病氣見舞いのついでに、王に厄払いを勧め、越王が来て匍匐して誅殺を待っているが、今は養生に専念されどおりあえず彼を石室に帰し、回復の後処置を検討されるようにと申し上げましたら、王は承知されたわけです」

句踐はこれを聞いて伯嚭に感謝して帰つて行つた。

たちまち又三ヶ月が過ぎたが夫差の病はまだ回復しない。句踐は居て

も立つてもいられず范蠡に吉凶を占わせた。占つた結果を見て句踐を説得した。

「呉王は死ぬ事はありません。まもなく己巳の日になればよくなり壬申には全快するでしょう。殿には宮中へ呉王の病氣見舞いにお出かけいただき、彼の大便をなめ顔色を観察して、呉王に『まもなく快癒します』と祝いを述べ全快の日をおしやつておけば、その日になって病氣が治れば大王は感激するでしょうから、赦される可能性が出てまいります」

句踐は涙を流しながら、

「わしは不肖ではあるがかつては君主として南面してきた。どうしてこんな屈辱を忍んで人の排便をなめなければならんのだ」

と言つて范蠡は、

「昔紂王は西伯（周文王）を羑里に拘束しその子伯邑考を殺し煮て西伯に食わせました。西伯はわが子の肉を食わされる苦しみを耐え忍びました。大事を為すためには些事にこだわつてはいられません。呉王は婦人のような優しきで男の決断ができない人です。すでに赦しておきながら忽ち氣が変わる人です。彼の憐れみを誘うにはこの策に限ります」

句踐はすぐ太宰に会いに彼の屋敷へ行つた。

「臣下として主人の病氣は心配です。未だ平癒されないとお聞きし寢食の間も心休まりません。どうか太宰からわたしのお見舞いの気持ちをお伝え下さい」

「あなたのお気持ちはきつとお伝えいたしましよ」

そう言つて伯嚭は呉王に会い句踐の気持ちを輪をかけて伝え見舞のために入室させる許可を求めた。夫差は氣弱になつており、句踐の氣持

ちに同情して許可した。

伯駱は句踐を連れて寢室に入った。

「句踐も見舞いに来てくれたのか」

「臣は王がご不予とお聞きし胸が裂かれる思いで、どうしても一度お見舞い申し上げたく存じておりました」

そう言っているうちに夫差は腹が張つてきて便意を催したので内侍に指示した。内侍が便器をベッドの傍に用意し夫差を助けて用便をすませ外へ持つて行つた。

「臣は以前東海におりました頃、医師から便を見て病氣の様子を知る方法を学んだ事がございます」

句踐はそう言つて便器のそばへ行き拱手して跪き、おまるの蓋を開いてその便を手にとつてなめた。周りの者はみな鼻をつまんだ。句踐は戻つて夫差に叩頭の挨拶をして言つた、

「謹んで大王にお祝いを申し上げます。大王のご病氣はまもなく己巳の日になればよくならぬ三月壬申には全快されるでしょう」

「どうしてわかる」

「臣が医師から聞きましたところでは、『便は基本的には穀物の味で、上昇時の氣であれば生、下降時の氣ならば死』という事であります。大王の便を味わわせていただきましたところ、苦く酸っぱい味が致しましたこれは春、夏に發生する氣であります。そういう点から判断いたしましたわけでありませう」

「句踐は仁徳のある人だ。家来であつても子供であつても誰が糞をなめて病氣の判断をしてくれようか」

太宰伯駱が傍にいたので、夫差はそなたはできるかと聞いた。伯駱は

首を振つて、

「臣は大王を非常にお慕い申し上げますが、申し訳ありませんがこれはできません」

「太宰だけでなく太子でもできないことだ」

直ちに句踐を石室から開放して休息させ、病氣が平癒すればすぐ帰国させようと言つた。句踐は礼を言つて退出しそれからは民家に借家し、引き続き馬の世話が続けた。

夫差の病氣は段々よくなり、期日もいよいよ句踐がいつたとおりだったので、夫差は句踐の忠義を信じ、朝廷に出ると文台に酒を用意させ句踐を招いた。句踐は知らないふりをしていつもの通り囚人服で現れた。夫差はそれを聞いて沐浴させ衣冠を改めさせた。句踐は何度も謝絶したあと命に従い、衣を換え拜謁し謹んで叩頭して謝恩した。夫差は慌ててたすけ起こしすぐに皆に命じた。

「越王は仁徳の人だ。これ以上辱める事はできない。わしは彼を赦し国へ返してやることにした。今日は越王のために客人の席を設けた。皆越王を客人の礼で接するよう」

と言つて拱手をして越王に客人の席に着かせ諸大夫は傍に居並んだ。子胥は呉王が仇敵を忘れてしまつているのを見て席に着かず衣を払つて出て行つた。

「大王は仁者の心で仁者の過ちを赦されました。『同声相和す、同氣相求む』といいます。この席には仁者が残り仁者にあらざる者は去りましたね。相国は剛勇の人ですからこの席にいない事を恐らく恥ずかしく思っていることでしょう」

伯駱がそう言うのと夫差もその通りと云つて笑つて頷いた。酒が三回ほ

ど回った宴たけなわの頃、范蠡と越王は一緒に立つて、呉王の長寿を祈念して酌をし、祝いの言葉を述べた。

皇上に坐しまし 恩沢陽春に広がる

其の仁比べる無く 其の徳日に新たなり

素晴らしき動と静 王の徳遍く広がる

王の長寿万歳 呉国永遠なれ

四海は悉く靡き 諸侯皆敬服す

さあ酒を盃上げ 永く万福を受けんことを

呉王は非常に喜び、この日はすっかり酔って解散し、王孫雄に句踐を迎賓館に送り届けさせ、三日後に越国に送ると約束した。

翌日早朝、子胥が呉王に会って諫言した。

「昨日大王は仇人を客人の礼で待遇されましたがいったいどういうお考えですか。句踐は外見は恭順を見せていますが本心は虎狼です。一時の諂いを喜ばれて将来の禍を、覧になっておられません。忠直な意見をお聞きにならず讒言をお聞きになり、小仁に溺れて大仇を育てているのです。例えて言えば、暖炉の炭の上に置いた毛が焦げない幸運を待つようなものであり、千鈞の重りの下に置いた卵が無事である事を祈るようなもので、そんな事はありません」

「わしは三ヶ月病気で臥せていた間、相国は一度も慰めてくれることが無かった。これは不忠ではないか。見舞の品も全く届けてくれなかった、すなわち仁がない。不忠、不仁の家臣に用はない。句踐は国を捨ててここへやってきて物は献納してくるし、奴僕になってわしに仕えてきたこれは忠だ。わしが病氣の時、恨みなど全く持たずわしの便をなめ

てくれたがこれこそ仁ではないか。相国の勝手な意見を聞いてこの善人を殺せば、わしは天佑を受けることができなくなる」

「王が仰っておられるのは逆です。虎が身を伏せ、狐が身を縮めるのは攻撃のためです。越王が身を落として呉へ来て怨恨が無いわけがありません。大王にははどうしてそれがお判りにならないのでしょうか。大王の便をなめたというのも大王の歛心を買う苦肉の策です。王がどうしてもお判りになろうとなさらず、彼の謀計にはまれば、呉は必ず越の擒になつてしまします」

「相国 あなたのご高説はもう結構。わしはもう決めた」

子胥は諫止できないと判り鬱々として引下った。

三日目の日が来た。呉王は蛇門外に酒を置いて親しく越王を送り出した。群臣はみな杯を挙げ送別の宴を張った。ただ子胥だけはいなかった。

別れ際に夫差は句踐に念を押した。

「わしはあなたを赦して越国にお返しするが、どうか呉の恩を忘れず、呉に対する恨みは忘れてもらいたい」

「大王はわたしを哀れに思召して、生かして故国へ帰る事をお赦し下さいました。当然子々孫々にわたってこのご恩に報いるつもりであります。青空がわたしの心を映しております。もし呉に背くような事があれば皇天がお赦しになりません」

「あなたの一言よくわかりました。そのようにお願いします。頑張ってください」

句踐は跪いて挨拶し満面に涙を流し分かれがたい様子であった。夫差は自ら句踐をたすけて車に乗せ、范蠡が御者となり、夫人も何度も感謝の挨拶をし、一同南に向け帰って行った。周敬王二十九年（紀元前四九一

年」の事である。

越王既に釜中の魚 どうして会稽への生還が考えられ得よう
深慮なき呉王夫差 網を開きて大鯨を逃がす

句踐は浙江の河岸まで帰ってきて、河向この山川の美しい重なり、天地の爽やかなるを見て溜め息をついた。

「わしは越の民衆とは再び会う事はできず異境の骨になると覚悟していた。まさか帰国して先祖の祀りができるとはなあ」

と夫人と目をあわせうれし泣きにむせび、周りの者もみなもらい泣きした。文種は早くも越王の帰還を知って、国を守ってきた群臣や城中の民衆を引き連れて浙江の岸まで迎えに来て地をとよますような歓声を上げた。句踐は范蠡に入国の日を占わせると、彼は指折り数えて、

「不思議なことでございます。王が選ばれた日が最良の吉日です、早々にご入城願います」

と言つて急ぎその夜の内に都城に帰った。宗廟に詣り朝廷に臨んだが感無量で言葉ならなかった。

句踐は「会稽の恥」⁸を忘れないよう会稽に城を立てそこに遷都し自ら戒めようとし、それを范蠡に任せた。范蠡は天文を見、地理を調べ会稽山を包み込む新城設計画を立てた。西北には臥竜山に飛翼楼をたて天門に模し、東南には漏石寶（石の出入口）をつくり地戸に模した。城壁は西北だけ開けて、『呉の臣として貢献の道を塞がず』と外には発表したが、実は呉を取るという意図が隠されている。城が完成すると突然城中

に山ができた。周囲は数里で亀のような形をしていて草木が繁茂している。この山を知っている者がいて琅琊の東武山だというが、どうして一夜のうちに飛んできたのかわからない。

「築城の完成に天帝が感じられ崑崙に降臨され越が覇王となるとおつしやつておられるのでしょうか」

と范蠡が言うと越王は大変喜こんでその山を怪山、飛來山、龜山などと呼び、頂に天地の気を見るための三層の靈台⁹を建てた。

諸制度も整え、新城に移り住んで句踐は范蠡に言った。

「わしは徳が足りなかったために国を滅ぼし身は奴隸にまで成り下がった。もし相国や諸大夫の援けが無かったら今日の日を見る事はなかったよ」

「これは我われの功ではなく大王の福德です。大王があゝ石室の苦しみをお忘れさえしなければ、越は榮え呉の仇を討つことも可能です」

「その言葉を大切にしよう」

そこで文種に国務を任せ、范蠡には軍事を担当させ、賢者を大切に士には礼を以て接し、年寄りを敬い貧者の救済に当ったので民衆は非常に喜んだ。

越王は呉王の糞をなめて以降、何時も口臭を気にした。范蠡は城北の山に藪^{しゅう}ひくたみという少しきつい臭いがある野菜があるのを聞きつけ、それを取って来させて朝の食事に出して口臭を散らした。後世の人はこれにちなんでその山を藪山と呼んだ。

句踐は仇討の意欲を燃やし日夜刻苦勉強した。自分の意思をより強固

⁸ 会稽の恥 敗戦の恥辱や堪え難ほどの辱めを意味する故事成語となっている。

⁹ 靈台 古代帝王が天地の気を望み見た高台

にし報復を忘れないようにするために、眠くなれば蓼^{たで}の刺激で目をさまし、足が寒く縮むようだと水に浸し、冬は水を夏はコタツを抱いた。また、布団を使わず薪の上に臥^ふせ、居間寝室には胆を吊し寢食の都度これを嘗^なめた（臥薪嘗胆「十八史略」春秋戦国。夜中にひそかにむせび泣く時も『会稽』の二字を口にして会稽の敗戦の恥辱をはつきりと胸に刻みつけた。敗戦による減少人口を増加させるため若者が老妻を娶る事、老いた者が若い妻を娶る事を禁止し、女十七才で嫁に行かず男二十才で嫁を取らない場合は父母も罰する事とした。妊娠した場合は官に届出させ医師につける事、男を産んだ場合は酒一壺と犬一匹、女を産んだ場合は酒一壺と豚一頭を下賜し、三人産んだ場合はその二人に、二人産んだ場合はその一人に官が養育費を出す。死者が出た場合には王自らお悔やみに行き、外出する時は必ず後の車に飯と羹^{あつあ}を積んで出かけ、子供にあつたら食わせて名前を聞いた。耕作しているところに出遭つたら挨拶をして鋤を取った。王夫人も庶民と苦勞を共にして布を織った。そうして七年間は庶民から税を取らなかつた。食事に肉は食わず柄物の服は着なかつたが、呉への表敬訪問は一月も欠かす事はなかつた。呉王に献納しようと山から葛を取つて来させ黄地の絹織物を作らせた。それを聞いて献納がある前に呉王は句踐^{こうせん}の従順な態度を喜び越に加封した。その結果、東は句甬^{くよう}、西は橋李^{きょうり}、南は姑蔑^{こさつ}、北は平原までの縦横八百余里が全て越の土地になった。句踐^{こうせん}は葛の絹織物十萬匹、蜜百瓶、狐の皮五対を封地の礼とした。夫差は喜んで越王に羽毛の飾り（采^{さい}の印）を与えたのである。子胥はこれらの事を聞いて言語追断とあきれて病氣と称して朝廷に出なくなつた。

呉王夫差は、勾踐^{こうせん}はもう背く事はないと判断し伯嚭^{はくひ}の發言を深く信じ

るようになっていた。ある日伯嚭にたずねた。

「目下天下は無事太平だから宮室を拡張して少し楽しみたいのだが、何処がいいだろうか」

「呉の都下で高台の景勝地といえは姑蘇に勝る所はありません。前王が造られています但少し狭いのでこれを改造し、高さは百里が望めるように、広さは六千人を収容できるように拡張し、歌童や舞姫を集めて楽しむのは如何でしょうか」

夫差は賛同した。早速懸賞を出して大木を求めた。

文種^{ぶんしゅう}はこれ聞いて越王に提案した。

『大空の鳥は美食で死し、深泉の魚は芳餌で死す』と申します。呉に報復をお考えでしたら、先ず敵の好餌を投げておいておもむろに料理をするのがいいと思います」

「好餌を与えても死命を制するのは大変だぞ」

「呉を破るのに七つの方法が考えられます。すなわち、

第一、財宝を送り届けて呉国の君臣を喜ばす

第二、食料を高価で買上げ彼等の蓄えを減らす

第三、美女を送り彼等を籠絡する

第四、名工と良材を送り建築中の大宮殿を支持し資金を消耗させる

第五、佞臣を送り込み国を混乱させる

第六、諫言する忠臣を殺させ補佐力を削ぐ

第七、軍資金の蓄積を図り軍事教練を強化し時機を待つ

という七つの方法であります」

「よし、わかつた。じゃ、先ずどれから手を付けるか」

「今、呉王は姑蘇台を改築中ですから、銘木の献納が一番でしょう」

越王は樵夫きこり三千余人を深山に入れ、かつて伐つたことがない神木を伐採するために捜させた。一年たつても見つからず、彼らは帰心に駆られ恨みの歌《木客の吟》（きこりの歌）を歌った。

神木探して朝から日暮れ

朝朝暮暮山深く入り断崖絶壁跋涉す

神木は天も生まず地も育てず

われら樵夫が酷使されるは何故ぞ

毎深夜これを歌い、聞く者をぞつとさせた。

ある晩、天が生みし神木一対が見つかった。太さは二十抱え、高さ五十尋ひろ、山の北斜面の木は梓あすきで、南斜面の木は楠であった。樵夫は今まで見ることがない大木に驚いて急いで越王に報告した。これを聞いた群臣は揃って越王を祝った。

「これは大王の誠が天に届き、天から授かった神木でございましょう」越王は喜んで自ら山に入り、木の精を祀ってから伐り出した。削つて磨きをかけ、丹、青を使つて五色の龍を描かせ、文種ぶんしやうを使者として呉王に献納させた。

「東海とうかいの賤臣句踐くせつは、大王のおかげで小殿を建てさせていただきました時、偶々巨材が手に入りまして、自分で使うのは憚られましたので、大王にご利用いただくようお届けに上がりました」

文種ぶんしやうの口上を聞きその木材の異常な大きさを見て、驚きと喜びを隠せなかった。子胥は引き止めた。

是尋はひる 古代の長さの単位「尋は8尺 仞仞じんと同じ 千尋 仞 非常に高い」と（千尋の海原 千仞谷）

「昔、桀王は臺台たいたいを紂王は鹿台ちゆうたいを築き民力を疲弊させ遂には滅亡してしまいました。句踐くせつは呉を滅ぼそうとしているのです。この献木はお受けにならないほうがいいです」

「句踐はこの良材を手に入れたのに自分では使わずわしに献納してきたんだ、何処に叛心があるというのだ」

と言つて子胥の諫言を聞かずこの木を使つて姑蘇台を改築した。三年かけて木を集め五年かけてやつと完成した。高さ三百丈、巾八十四丈、台に上ると二百里が一望でき、旧姑蘇台よりずっと広大なものである。民衆は昼夜を分かたず酷使され疲労で死ぬ者が続出した。梁伯龍りやうはくりゆうの詩がある。

千仞の高台太湖に面し 姑蘇台は朝な夕な鐘鼓の宴

威名は遠く三千里 雄抱す江南第一の都

（梁伯龍 梁辰魚字伯龍 明代の著名な戯曲作家）

「巧匠良材を贈つて宮殿を作らせ散財させるといふ卿の案はうまく行つたな。現在高台では素晴らしい歌舞が絶えないようだが、美人がいないと聞く。絶世の美女を与えて腰拔けにさせなきゃならん。いい案はないか」

越王は噂を聞いて文種に言つた。

「呉国の運命はすでに天帝がお決めになつており、すでに神木をいただいておりますので美女くらしいの事は何でもありません。しかし民間に捜し求めると民心を動揺させる恐れがありますので、臣にいい考えがあります。国中の女子の中から王にお選びいただきます」

文種ぶんしやうの次の策は如何なるものか。次回をお楽しみに。

第八十一回

吳王 美人の計に陥ち西施を寵愛 能弁の子貢 列国を説く

越王句踐は吳王に献上するための美女を求めるようにと文種に指示すると、彼は早速一案を出してきた。

「王の近侍の若者で美人を見分けることができる者を百人ほどお借りして国内を回らせ、美人がいればメモさせておいてその中から選ぶようにすれば必ず見つかります」

その案が採用された。半年探して美女の報告は二十余人に厳選され、それを更に何度も審査にかけ二人に絞り、絵にして王に見せた。その二人とは西施と鄭旦である。

西施は苧夢山の麓の薪取りの娘である。その山の東西に二つの村があり施という姓は多く、彼女は西の村なので西施と呼んでいる。鄭旦も同じ西の村で西施と隣り合わせで河に面していて、毎日一緒に河に出て洗濯をしていた。花のような紅顔、緑の黒髪、まさに一輪の芙蓉のようであった。句踐は范蠡に命じてそれぞれに百金を与え、華麗な服を着せ豪華なカーテン付きの車に乗せて迎えた。都の人は美人と言う噂を伝え聞いて、一目見ようと次々と郊外まで迎えに出たので、このため道路が混雑したという。范蠡は西施と鄭旦を別館に留め、

「美人を見たい者は一文支払う事」

と達しを出して料金を置くところを見ると見るうちに箱は満杯になった。美人が朱楼に登り欄干にもたれて立っているのを下から眺めると、あたかも天女がそよ風に吹かれているようであった。美人を郊外に三日置いて

集まった金は大変な額で車で国庫に納め国費に当てた。句踐は自らその美人を土城（現浙江省紹興）に送り届け、老楽師に歌舞と立ち居振るまいを教育させ、教育が終わると吳王に届けた。周敬王三十二年（紀元前四八九年）、句踐在位七年目である。

この一年前、斉景公杵臼が亡くなり、幼子荼が継位した。

同じ年、楚昭王軫も亡くなり世子の章が王位を継いだ。この頃、楚は国内に問題が多発し、晋は再び政治が乱れており、斉、魯はそれぞれ晏嬰が死に、孔子が去った後両国ともふるわず、一人呉だけが天下に威を振るっていた。夫差はその兵力を頼み山東地区⁸を次々と蚕食しようとしたので諸侯は非常に恐れていた。

とりわけ斉景公は、夫人燕姬に子があつたけれど夭折し公子は皆庶子で六人いた。陽生が一番上で茶が一番下である。茶の母親の鬻奴は出は卑賤だが景公の寵愛を受け、母への愛が子にも及び茶を大変可愛がり安孺子と呼んでいた。景公は在位五十七年、七十才をすぎても世子を立てず、安孺子が成長したら世子にしようと思っていたのである。ところが思いがけず病に倒れ、重臣の国夏、高張に茶を補佐して後継君主とするよう頼んだ。大夫の陳乞はもともと公子陽生と親しかったので彼が殺されるのを心配して避難を勧めた。陽生は陳乞の忠告に従い、子の壬と家臣の闕止を連れて魯へ出奔した。景公は案の定、国、高両氏に命じ公子たちを追放し萊邑に移した。景公が亡くなり安孺子茶が即位し、国夏、高張が政務を補佐した。陳乞は表向きは従順であつたが実は茶を嫌

⁸ 山東地区 当時の山東地区は現在の山東省ではなく、華山、洛陽、西方河南省の西端より東、函谷関以東をいつた。即ち秦以外の広範囲の地域である。

つていたので、

「高、国は旧臣を追放して安孺子党と入れ替えようとしている」

と諸大夫の面前で出まかせを言つた。大夫たちはそれを信じてその対処の相談に集まつた。陳乞は鮑牧と謀つて大夫たちの家兵を率いて高、国両氏を攻撃し、高張は殺され、国夏は莒へ出奔した。その結果鮑牧が右相、陳乞が左相となり、国書、高無邳にそれぞれ国、高二氏を継がせた。安孺子はまだ数才だから言われるままである。陳乞は公子陽生を擁立しようと思つていたので、密に使者を出し魯から呼戻した。陽生は夜奔の郊外に戻つてきて、闕止と子の壬を郊外に残して単身入城し陳乞の屋敷に匿まわれた。陳乞は先祖の祭りと称して大夫たちを集め直会の宴（祭儀の後の宴）を張つた。大夫は全員集まり鮑牧は他所で飲んで最後にやつてきた。陳乞は皆が席に着くのを待つて、

「わたしは新たに素晴らしい味方を得ました。お会いになつていただけますか」

大夫たちがぜひ会いたいと言つと、力士が大きな袋を担いで堂の前に現れた。陳乞が袋を開くと中から人が出てきた。なんと公子陽生ではないか。みな非常に驚いた。陳乞は陽生を導いて南面させ、大夫たちに言つた。

『長子継承』が古今の通則です。安孺子は幼すぎて君主は無理です。鮑相国のご命令を奉じて長公子にお仕えすることに致したいとぞんじます」

鮑牧は目を丸くして、

「わたしにはそんな考えは無い。どうしてそんな嘘をつくのだ。わしが酔払っているから馬鹿にするのか」

と言つと、陽生は鮑牧に向かつて拱手の礼をして言つた。

「廢立は何処の国にもある事です。但し義が必要です。大夫はこの事が道理になつていと思いませんか。何故そんな事をおつしやるのですか」

陳乞は公子の話が終わる前に鮑牧の頭を無理に下げさせた。大夫たちも仕方なく皆北面して叩頭して挨拶した。陳乞は諸大夫と血を啜り陽生擁立の盟約を結んだ。早速車を用意して全員入朝し陽生を君主に奉戴した。即ち悼公である。その日の内に安孺子を宮城外に移して殺してしまつた。悼公は鮑牧が自分の即位をよく思つていないのではないかと疑つて陳乞に相談にいつた。陳乞も鮑牧が目の上のたんこぶでだったので、悼公に鮑牧は他の公子たちとつながりがあるから彼を消さなければ国が治まらないと讒言した。それを聞いて悼公は鮑牧を誅殺し、鮑息を立てて鮑叔牙の祀りを継がせ、陳乞は計画通り斉の政治を独占する事になつた。罪無き人々を殺したとして国人は悼公に恨みを抱くことになつた。

ところで悼公には妹がいて、邾国の君主益の夫人となつていた。益は傲慢無礼で魯としつくり行つてなかつた。魯の上卿季孫斯は哀公に進言して、邾を攻撃し益を捕えて負瑕（山東省兗州）に拘禁した。斉悼公はこれを知いて、

「魯め、邾君を拘禁するとはこの斉を馬鹿にしておるな」

と激怒し、陳乞を呉に遣わし魯攻撃に協力して欲しいと依頼した。夫差は喜んで、

「山東地区へ出兵したかったところだ、ちようどいい名目ができた」と斉の要請を承諾した。魯哀公は怖れてすぐ邾の益を放免し国も復国させ、斉に謝罪の使者を出した。斉悼公は大夫公孟綽を使者として呉

へ出兵の断りにやった。

「おかげさまで魯は謝つてきましたので大王の軍を煩わすこともなくなりました」

と言うと夫差は怒つて、

「出兵しろと言つたり止めろと言つたり、まさか呉が斉の属国だと思つてゐるのじやあるまいな。わしは二度の命令のわけを自分で出かけて行つて聞かせてもらおうと思つ」

と使者を叱り飛ばして歸した。魯は呉王が斉に対し怒つてゐると聞き、呉に「機嫌取りの使者を出して、逆に呉と連合して斉を打ちたいと話しをもちかけた。夫差は喜んですぐに出兵し、魯と連合して斉を攻め南鄙を包囲した。斉は国中が驚きうろたえ、悼公が無意味に侵略者を呼び込んだことを非難した。この時すでに陳乞は死んでいて子の陳恒が政權を担当していたが、誰も彼に従わないので鮑息に、

「呉の怒りを解き、ご自分の家門の仇を討つためにも、あなたが大事を決行なさつて下さい」

と言つたが弑逆はできないと断つた。陳恒は、

「それじゃわたしがあなたのためにやりましょう」

と言つて、悼公が軍を觀閲した時鳩酒を飲ませて毒殺し、すぐに呉軍に訃報を届けた。

「貴国が天帝の命をお受けになられたからでしょうか、貴軍がお見えになる前に天誅が下つたようで、わが君は急死しました。どうか斉国に憐れみを賜りますよう。社稷を保たせていただけたら代々貴国にお仕え申し上げます」

夫差はそれを聞き軍を引き揚げ、魯も帰国した。国人はみな悼公が非

業の死だとわかつていたが、陳氏の威厳と呉軍を引揚げさせた功もあるので何も言わなかった。陳恒は悼公の子壬を君主に立てた。これが簡公である。簡公は陳氏の権力を分散させようと陳恒を右相、闕止を左相にした。

当時の人はこの斉の内乱の原因は皆景公に原因があるとした。

古来溺愛は盲目にす 繼位に長幼の序を何故乱す

権臣侵略者を怨む勿れ 正に自業自得なり

さて、越王は三年間美女を教育し、歌舞の技術も立ち居振る舞いも完全に習得したので、相国范蠡を使者にして、飾り車に乗せ、旋波、移光ほか六名の美しい世話女をつけて呉王に献納した。車が通つた街中にかくわしい香りが辺りに漂つたという。夫差が斉から歸つて来ると范蠡は謁見を求め挨拶をした。

「東海の賤臣句踐は、常々大王のご恩に感謝いたしておりますが、自の妻妾をお側にお仕えさせるといふ事もできませんので、国中を捜し二人の歌舞ができる者を見つけまして陪臣がお届けにあがりました。掃除婦にでもお使いいただければありがたく存じます」

夫差は二人の女に目をやると、なんと、仙女が下りてきたような美しさではないか。彼はその美しさに酔いしれてしまった。

この時も子胥が諫言した。

『夏は妹喜で滅び、殷は妲己で滅び、周は褒姒で亡んだ』と聞いています。美女というのは亡国の道具です。どうかお受け取りになりませんように」

「色を好むのは人皆同じはずだ。句踐はこの美女を手に入れ自分のも

のにせずわしに寄越した。これは呉への忠義の証だ。疑う必要はない」

夫差はそう言つて受取つた。どちらも絶世の美女であつたが中でも夫差は西施の方を特に愛した。だから西施が歌舞においてはいつも主人公となり、姑蘇台での夫差の夜の寵愛も独占して殆ど妃后と同じ扱いであつた。鄭旦は呉宮に居て西施が寵愛されるのをねたみ鬱勃と不満の日々を送り数年で亡くなつた。夫差はこれを哀れんで黄茅山に葬り祠を立てて祀つた。

夫差は西施を寵愛し王孫雄に命じて靈岩山に豪華な装飾で贅を尽くした館娃宮かんえききゆう(美人の館という意味)を建てさせ彼女の遊びと休息の場所とした。さらに響屨廊きやうじろう(歩けば靴音が響く廊下という意味)を作つた。屨

は靴の意味で、廊下の下を中空にして大きな甕を平らになるように敷きその上に厚い板をかぶせたもので、西施や宮女たちが上を歩くと廊下がカンカンという音がするのでこの名がある。現在の靈岩寺四照塔の前の小さな斜めの廊下がその跡である。

高啓の詩『館娃宮』がある。(高啓 明代初期の詩人 呉中四傑の一人)

館娃宮の館娃閣 華麗なる頂き雲峰を突くも

なお恨めしきは高さ及ばず 越軍の来襲見えざりし

又王禹偁は詩『響屨廊』で次のように言う。(王禹偁 北宋初期の文学者)

廊は壊れ響屨の名のみ空しく残る 西施が渡りし故ならん

哀れ伍相終に諫死す 当時越の靴音を誰か知る

(伍相 伍子胥)

山上に玩花池、玩月池という池がある。二人で花月をめめた池である。呉王井という井戸がある。水は青く澄んでいて、西施がこれに映して化

粧をし、夫差が傍で自ら髪を調えた井戸である。また、西施洞という洞がある。夫差と西施二人がこの辺りでよく腰掛けたという少しくぼんだ石があつて、いま俗に西施跡といわれている。また、よく山頂で西施と琴をひいたという琴台も残っている。香山に香草を植えさせ、西施と美人たちに船を浮かべてこれを取らせた。今靈岩山の南に箭溼という矢のよまにまつずぐな湖がありここが香草を取つた所だと言われており、群城の東南の采蓮溼は二人が蓮を取つたところである。また城中に南から真直ぐ北へ大きな濠を開削し錦の帆船を浮べて遊んだのでこれを錦帆溼といつた。

高啓(前出)は詩に言う。

呉王が居れば百花開き 楽を奏で華麗なる船が洲に来たる

呉王が去れば百花落ち 寂寞として洲に歌楽の声はなし

年々春花開き花落ち 此の間花を見る人幾許ぞ

枝々は流水に映えるも 落ちて塵となりゆく運命を知らず

年々風雨楼台を荒し 日暮れは鶯の断腸の声

今は花を見る人も無く 以来此地に見る花とても無し

城南にはお狩り場として長洲苑ちやうしゆえんがあつたし養魚場、鴨の飼育場、養鶏

場、酒造りの工場もあつた。また西洞庭の南湾を西施との避暑地とした。

湾は十余里あつて三方山で南だけに宮城のように門がある。呉王は夏を消す処だといつて湾の名を消夏湾と名付けた。

張羽は『蘇台歌』を作っている。

張羽 明初期の詩人 高啓 揚基 徐賁とと共に呉中四傑に数えられた。

館娃宮に百花開き

西施暁に姑蘇台を登る

風は吹きて霞の裳翠の袖を上げ 身は軽く羽のよう

遙に望む三江の水

仄かに見える洞庭の樹々

首を巡らし瞳を凝すも

未だ帰らず狩場の王

城頭の日は落ち鴉は埒へ

階を下り戯れに棠梨花手折るも

対岸の人此方を見ず

干将莫耶の光芒が見えるのみ

夫差は西施を手に入れてからは、姑蘇台を家として伯嚭と王孫雄の二人だけを左右に従え、西施とあちこち遊びほうけ、子胥が何度謁見を求めても避けて会おうとしなくなつた。

越王勾践は呉王が西施にうつつをぬかしている情報を聞き、文種を呼び次の計画を相談した。

『国は民が本、民は食が第一』と申します。今年は穀物が凶作で粟米の価格が上がりますから、呉に借用を申し出て民の飢えを救えばいいでしょう。もし呉がこれを承諾すれば天は呉を見放したという事です。勾践は直ちに文種に命じ、多額の賄賂を伯嚭に贈り呉王に会いに行かせた。呉王は姑蘇台の宮で文種に接見した。

「越は元来土地が低くて洪水干ばつの調整が難しいところでございまして、今年は穀物が大変な凶作で人民は飢餓に苦しんでおります。つきましては大王に穀物をお貸し出し願ひ、当面の食糧不足をお救いいただきたく伏してお願ひ申し上げます。明年收穫あり次第返済申し上げます所存でございます」

「越は呉に臣服しているのだから越人の飢えは呉の人民の飢えでもある。越人を救うのは当然の事である」

子胥は越の使者が来たと聞き姑蘇台へ行き、呉王に会つて借米の件を聞き又強く反対した。

「それはなりません。こんにちの情勢は呉よりむしろ越の方が優位に立っています。使者が言うように、本当に飢餓に苦しんで借米を申し込んできたのではなく呉の粟の蓄えを消耗させようとの魂胆だと思います。越に親しんで仇討を援けるような事が無いようにこの借米は断るべきです」

「勾践がわが国に捕えられてわしの馬の前を歩いていた事は諸侯は皆知っているのに、その越を復国させてやった。しかもまた新たに恩を与えるのだから、越に絶えざる貢獻をする事になるではないですか。それなのにどうしてまだ越が呉に背く心配があるというのですか」

「越王は朝早くから夜遅くまで国政を見て、民を救済し士を養い目標を呉への報復においていると聞いています。大王が粟を送つて越を助ける事によって、将来姑蘇台に鹿が遊ぶような荒地に変貌してしまうことを心配致します」

「勾践はすでに呉の臣だと言っている、臣が主君を討つなどありえないじゃないですか」

「そんな事はありません。湯王は桀王を討ちましたし、武王は紂王を討ちました。何れも臣が主君を討っております」

伯嚭が傍らから口を挟んだ。

「相国の話は極端じやないですか。どうして桀王や紂王のような亡国の君主と比較しようとするのです」

そして呉王に次のように進言した。

「葵丘の会盟での決議事項に『米穀の流通を阻害するべからず』があ

つたと聞いておりますが、これは隣国は助け合うという主旨です。まして越はわが国へ進貢して来ている国です。しかも来年それを帰して来ると言っているのですから特に損になる事ではなくむしろ越国に恩を与えることになり、断る理由がありません」

そこで夫差は越に一万石の穀物を貸し与える事とし文種に、

「家臣たちの反対を押して貴国に粟を送ることにした。来年收穫したら必ず返すこと、違背なきよう」

と念を押した。文種は叩頭して礼を言い、

「大王が越に同情いただき飢餓をお救いいただきました事、肝に銘じ決して約束を違えるものではありません」

文種がそれを持ち帰ると勾踐は大変喜び群臣も万歳を叫んだ。勾踐は直ちに國中の飢民に分け与えた。民衆は越王の徳を讃え大いに感謝した。翌年越国は大豊作だった。勾踐は文種に相談した。

「呉へ粟を返さなければ信用を失ってしまうし、返したら呉が有利になつてしまう、どうしたらいいかね」

「いい米を選び蒸してから呉国へ送つたらいいでしょう。彼等は喜んでそれを種に使うでしょうからそうなればまんまと計略にかかります」

越王はその案を採用し、蒸した粟を耳を揃えて呉に返した。呉王はそれを見て、

「越王は本当に律儀な男だな」

と感心した。更にその粟を見ると非常に粒が大きいので伯嚭に言つた。

「越は土地が肥えているんだな。非常にいい粟だ。これを蒔かせよう」国内全て越の粟の種を使用した。しかし全く発芽せず呉は大飢饉になつた。夫差はそれでも土地が合わないためだと考え、まさか蒸した粟だ

つたとは思ひもよらなかつた。まんまと文種の計略にはまつたのである。周敬王三十六年（紀元前四八四年）の事である。

越王は呉が飢饉で苦しんでいると聞き早速呉討伐軍を出そうと思つたが文種が諫止した。

「未だ早いです。呉にはまだ忠臣が健在です」

越王は范蠡にも聞いた。

「もうそんなに遠くはありません。軍事教練を強化していい時機を待ちましょう」

「武器が足りないのか」

「戦争を有利に進めるには精兵が必要です。精兵には力のあるものは剣や戟、力の無い者は弓や弩、というふうには技術を持たせなければなりません。そのためにはいい教師が必要です。臣は南林（現浙江省紹興付近）へ行つて剣戟を善くする処女と、弓矢をよくする楚人陳音という者に話をつけています。是非招聘願います」

越王は手厚い土産を持たせて二人の使者をそれぞれ処女と陳音の処へ呼びに遣つた。

先ず処女であるが彼女の名前はわからない。人気がない深林の中で生まれ成長し師匠はなく自然の中で剣戟の技術を身につけたのである。使者は南林へ行つて捜し当て越王の命を伝えた。彼女はすぐに使者について北に向つた。途中白髪の翁が車の前に立ちはだかつた。

「あなたは南林の処女じゃないか。越王の招聘を受けるとはたいした度胸だな、どんな剣の技があるというのかね。わしが試してやる」

「何も隠すような技はありませんわ。どうぞご教授願います」

翁はすぐに枯れ草を払うように竹を切つて彼女に向けてさつと刺し

た。一瞬のうちに竹は先が折れて地に落ち、彼女はすぐその竹を取って翁を刺した。翁はぱつと木の上に跳び上がり白猿に変身しキーンと叫んで逃げて行つた。使者はこの不思議な様子を見て驚いた。処女は越王に謁見した。越王は席を与えて彼女に劍の道の真髄をたずねた。

「内には強い精神力を持つ事、外には平然とした態度を見せる事です。見かけは優しい夫人の如く、闘う時は猛虎の如く。準備怠らず機を待ち、神の擁護を頼み、行動は脱兎の如く俊敏に、追う時は影の如く、動きは縦横無尽に。これらを習得した者は一人で百人力、百人いれば万夫も当るなしです。お疑いであればちよつとやらせていただいても結構です」

越王は百人の勇士に戟を持たせて彼女を刺させた。彼女はその戟を次々受けては投げ棄てた。越王はこれには感服し兵の教練を任せ彼女の教えを受けた者は三千人に達した。彼女は一年余で職を辞し南林へ帰って行つた。越王がその後再び招聘の使者を送ったがその時はもう彼女を見つけることはできなかった。或は、天が呉に変わつて越を興させるために、わざわざ神女に劍術を教えさせ越を援助したのかもしれない。

次に楚人陳音^{ちんおん}であるが、彼は人殺しをしてその報復を避けて越に逃げてきたのである。范蠡^{はんらい}は彼の弓の能力を見て越王に弓の師として招聘するよう進言した。越王は彼を呼び出して質問した。

「弓弩の歴史についてお聞きしたいのですが」

「弩は弓より生じ、弓は弾から生じたもので弾（バチンコ）は昔の孝行息子が考案したと聞いております。昔は人々は質素で、腹をすかせるとう鳥獸を食ひ、露露で喉の渴きを癒し、死んだら茅で包んで原野に棄てました。ある孝行息子が亡くなった父母の亡骸^{なきがら}が禽獸に食われるのに耐えられずこれを防ぐために弾を作ったという事です。神農皇帝の時代にな

つて木製の弓が考案され、そのため四方に威を示す事になりました。弧父^{こほ}という人がいまして、楚の荆山に生まれて直ぐ両親を失ひ、子供のころに自分で弓矢の使用を勉強して狙った物は逃がさない腕前になりました。それを羿^いに伝え、羿は逢蒙^{ほうもう}に伝え、逢蒙は琴氏に伝えました。琴氏は諸侯の戦争には従来の弓矢では威力が弱いので弓を横にして腕にセツトし威力が増強する発射装置を工夫しました。これを弩^{きう}といいます。琴氏はこれを楚の三侯^{ゆうきよ}（熊渠の三子）に伝え、楚は桃弓棘矢^{とうきよくきし}（桃の木、棘の木の矢）今は魔除けに使われるのを代々伝え防衛の武器としていました。臣の先人が楚から技術を受け、わたしで五代目になります。弩を使えば鳥も獣も逃げることはできません。どうかお試し願います」

越王は又兵士を三千人を預け、北郊外で陳音に教習させた。音は連弩法を教えた。三矢連射でだれも防げない。三ヶ月で皆習熟したところで陳音は病死した。越王は厚く葬りその山を陳音山と名付けた。

劍弓の教練全てを呉を討たん為、臥薪嘗胆幾度か涙枯れた

姑蘇台将に歌舞に沸き 隣国に問題有りや無しや問う暇もなし

子胥は越王が軍事教練を強化している事を聞き夫差に涙を流して進言した。

「大王は越が臣として従順だと信じておられますが、范蠡^{はんらい}を使つて日夜士卒の訓練に励んでおります。劍戟、弓矢の技術は非常に向上してお

※ 羿 古代の伝説上の弓の名人。帝堯の時、交代で上る事になっていた10個の太陽が同時に現れ、地上は灼熱地獄となり人々はその熱に苦しんだ。当時の弓の名人羿は帝に依頼され10個の内9個の太陽を射落とした『淮南子』本経訓。羿は弟子逢蒙に弓術を教えた。逢蒙はスターした後天下の名人になるため師を殺した『孟子』離婁第八。「羿を殺す者は逢蒙」という言葉は身内に裏切られる事を意味する。

ります。一旦我々の隙に乘じてくれればわが国は支えきれない恐れがあります。もしお疑いでしたら誰かに探らせたら如何です」

夫差は言われた通り、人を遣つて越を探らせた。処女の事、陳音の事を調べ上げて夫差に報告した。夫差は伯嚭に言つた。

「越はすでに呉に服しているはずなのにどうして又兵を訓練する必要があるのだ」

「越は大王から封地を賜つていますから守らなければなりません。兵の訓練は国を守るためのごく当然の事です。どうしてお疑いになられるのでしょうか」

夫差は釈然とせず、出兵して越を討つ決意をした。

話変わつて、齊国に話を戻す。齊の陳氏は民心を取り込んでずっと国政を自分の物にしようと考えていた。陳恒の時代になってその考えは愈々激しくなり、高、国の与党がまだ多いのでこれらを除こうと簡公に進言した。

「魯は隣国でありながら呉と共謀してわが国を攻めてきた事がありますが、あの恨みは晴らさなければなりません」

簡公はその氣になつて、恒の薦めにより、国書を大將に、高無卮、宗樓を副將にして、大夫公孫夏、公孫揮、閭丘明らを従軍させた。戦車千乗を全て繰出し、魯を滅ぼさずば帰らじと誓つて汶水の河岸に駐屯した。

この頃、孔子は魯にいて『詩経』『書経』の改修を行つていた。ある日門人の琴牢字子張が齊から師に会いにやつて来た。彼から齊の事情を聞き齊軍が国境にいると聞いて驚き、

「魯は父母の国だ、攻められているとすれば救わざるを得ない」

と言ひ、弟子たちにたずねた。

「誰かわしのために齊へ行つて魯攻撃を止めさせられる者はいないか」

子張と子石が二人で行きたいと申し出たが許可しない。

「賜^しに往かせていただいてよろじゅうございましょうか」

と子貢が席を離れて申し出ると彼に許可を与えた。子貢は即日出発し汶水の岸の齊軍へ行き陳恒に謁見を求めた。恒は子貢が孔子の高弟だと知つていたので、きつと遊説に來たのだらうと色をなして待つていた。

子貢は平然と入つてきた。席が定まり恒がたずねた。

「先生がお見えになつたのは魯に頼まれ停戦を説得に來られたのですか」

「わたしが参つたのは魯のためではなく齊のためです。魯を落すのは大変難しい事です。相国は何のため魯を討とうとなさつておられるのですか」

「どうして魯が落ちないと言われるのか」

「魯は城壁は薄く粗末で濠は狭く浅いし、君主は脆弱大臣は無能で兵は戦争の経験がありません。ですから困難だと申し上げているのでございます。相国の能力を持つてすればむしろ呉を討つべきです。呉であれば城は高く濠は広く兵は精銳で良將がいます。これなれば攻める

賜^{たんぼくし} 端木賜 孔^{しんこう} 子の高弟 字子貢 ある時齊景公に「孔子は賢者か」と聞かれ「^よと答へ、更にどれ程賢者かとの問に「知らな」と答へた。不審に思う景公に三が高事は皆知っています。どの位高かは答へられなでしょう。私は仲尼様が賢者であることが知てますがその程度は知りませんが」と孔子の偉大さを天の高さになぞらえて答へたといふ「説苑 前漢劉向撰説話集」

のは容易でしょう」

「あなたの言っている事は難易が反対でわしにはよくわからないな」
「恐れ入りますが、相国に説明申し上げますのでお人払いをお願いいたします」

恒は左右の者を退けさせて子貢に近寄って教えを乞うた。

『外患は弱きを攻め、内患は強きを攻める』と申します。相国の様子
を窺った処では大臣方とうまく行っておられないようですね。ここで
弱い魯を破ったのでは大臣たち（將軍達）の功と見られ相国は蚊帳の
外で、大臣たちの勢いが日増しに強くなり相国の立場は危険になります。
軍を呉に向け大臣たちを強敵に合わせて苦しませれば相国は斉を牛耳
る事ができ、最もいい方法という事になりませんか」

陳恒ははっと気がつきにこにこして、

「先生のお言葉、わたしの気持ちにぴつたりです。しかし、わが軍隊
はすでに汶水まで来ております。もしこれを呉に移すとすれば皆疑うと
思いますがどうすればいいでしょう」

「兵は抑えて動かさないで下さい。わたしが南へ行つて呉王に会い、
斉を討つて魯を救つてやつて欲しいと頼みます。このようにして呉と戦
えばその心配はないでしょう」

陳恒は喜んで国書と呼んで言った。

「呉が斉討伐をねらっているようだ。わが軍はここに駐屯していて
軽々には動けないので、呉の動静を探り場合によっては先に呉を破つて
魯はその後にしたいと思うんだが」

国書は了解し、陳恒は斉に帰った。
子貢は昼夜兼行で呉へやってきて呉王夫差に会った。

「呉魯が連合して斉を攻めたことを斉は非常に恨んでおりまして、現
在斉軍はすでに汶水まで来ています。魯を討った後、必ず呉へ来ます。
斉を討つて魯を救援なさつては如何でしょうか。万乗の斉を破り千乗の
魯を収めて晋を威圧すれば、呉王はついに霸王になれましょう」

「前に斉が子々孫々呉に臣服すると言ったから軍を引き揚げたのだ
が今もつて朝見して来ていない。それを追及したいのだが、越が軍事に
力を入れて呉に背く動きが見られるのだ。だから先に越を討つてから斉
を攻めても遅くはないと考えている」

「それはだめです。越は弱小で斉は強大です。越を討つ利益は小さく、
斉を放つておく禍が大変大きくなる恐れがあります。弱き越を恐れ強
き斉を避けるはこれ勇にあらず。小利を追い大患を放置するはこれ智に
あらず。智勇を失うようではどうして覇を争う事ができましょうか。大
王が越が心配でしたらわたくしが大王のために越へ参りまして武器を
納めるよう話してまいります」

「そうしていただければ願つたり叶つたりです」

夫差は大変喜んでそう言った。

子貢は呉を辞して越へ行った。越王句踐は子貢が来ると聞き丁重に扱
い三十里外まで迎えにやつて、迎賓館に迎え丁重に挨拶をしてたずねた。
「東海の辺鄙なわが国へわざわざ高賢にお出ましいいただきました
が、如何なる用件でございましょう」

「主君のお用いに参つたのです」

句踐はもう一度丁寧に挨拶をしてそれに答えた。

『禍と福は隣合せ』ともうします。先生がわたしの用いにお見えに
なつたという事は逆にわたしにとつてはいい事です。お話をお聞き

しまししょう」

「わたしは呉王にお会いして参りました。斉を討つて魯を救うよう話しましたところ、呉王は越が呉を討とうとしているから先ず越を討つのだとおっしゃっておられました。報復の気持ちなくして人を疑わせるは『拙』^{こつぜん}報復の気持ちがあつて人に知られるは『危』であります」

句踐は愕然としてしばらく跪いてから口を開いた。

「先生にはわたくしを救う方法があたりでしようか」

「呉王は驕慢でおべつかが好きですし、太宰の伯嚭は讒言が得意です。ご主君は宝物で喜ばせへりくだった言葉で礼を尽くし、自ら一軍を率いて呉の斉討伐軍に従軍します。この戦いで呉が敗れば呉は今後大きく力が削がれるでしようし、もし勝てば、諸侯の霸主になろうと強国晋に兵を向けるでしよう。そうなれば呉には隙ができますからそこに乗じる事ができるのでしよう」

「先生がお見えになったの本当は天のお恵みです。正に死人が蘇えつたようなものです。お教えの通りにいたします」

と云つて句踐は子貢に黄金百鎰^{ひゃくいっ}、宝剑一振り、良馬二頭を贈つたが子貢は固辞して受取らず、呉へ帰つて呉王に報告した。

「越王は大王の不殺の恩に感謝しておりました。大王が疑つておられると聞くと非常に恐れていましたので、近いうちに謝りの使者が来るでしよう」

夫差は子貢を宿舎に五日留めた。越は子貢の言つたとおり文種^{ぶんしゅ}を使者として寄越した。

「東海の賤臣句踐^{こうせん}は大王の不殺の恩を蒙り先祖の祀りを赦され、まことに死をもつてしてもこの恩に報いる事はできません。大王が強者を誅し弱者を救う大義のために出兵されると聞き及びましたので、下臣文種^{ぶんしゅ}を使者と致しまして、王所蔵の甲冑二十領、屈盧の矛、歩光の劍をお届けに参りました。句踐は出陣の日取りをお聞きし、国中から精兵三千人を選び従軍させ、句踐自身も甲冑を着て従軍し、たとえ石矢を受け死することも怖れずと申しております」

夫差は非常に喜び、子貢を呼び出した。

「句踐^{こうせん}はやはり信義の男でした。精兵三千を率いて斉討伐に従軍すると言つています。先生はその可否どうお考えですか」

「それはなりません。軍を調達する場合君主まで使うのは行き過ぎです。軍隊の従軍だけを認め君主の従軍は断わるべきでしよう」

夫差はその意見に従つた。

子貢は呉を辞去し北へ向かい晋国へ行き晋定公に会つて進言しておいた。

「遠き慮^{おもひ}、無^なくば必ず近くに憂いあり」と申します。今呉と斉の戦争が始まろうとしています。呉が勝てばきつと貴国と覇を争う事になるでしよう。十分に軍備を行つて兵を休めてお待ち下さい」

「ありがとうございます。謹んでお言葉をお受けいたします」

子貢が魯に帰つて来た時には、斉はすでに呉に敗れていた。